

史跡高松城跡整備報告書第6冊

史跡高松城跡（天守台）

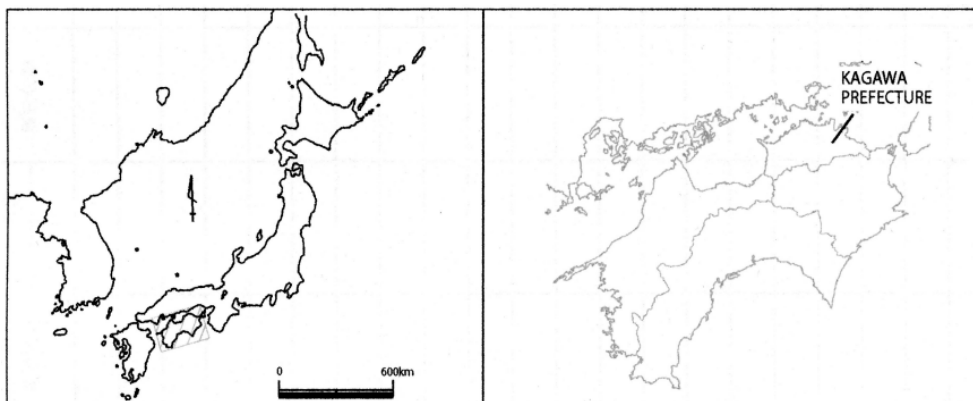
—発掘調査編—

2012年3月

高松市教育委員会

例 言

- 1 本書は、史跡高松城跡天守台石垣解体修理に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、史跡高松城跡（天守台）の報告を収録した。
- 2 発掘調査地および調査期間、調査面積は、次のとおりである。
調 査 地 高松市玉藻町2番1
調査期間 平成18年11月1日～平成23年6月6日
調査面積 918 m²
- 3 現地調査は、平成18年度から平成21年度までは高松市教育委員会教育部文化財課文化財専門員大嶋和則および同非常勤嘱託職員中西克也が担当し、平成22・23年度については同文化財専門員高上拓が担当した。
- 4 整理作業は大嶋・高上と同文化財専門員渡邊誠・中西が担当した。
- 5 本報告書の執筆・編集は第1・2・5章を大嶋が、第3章は渡邊・高上・中西が執筆し、第4章第1節は姫路市立城郭研究室 室長 上田耕三氏に依頼し、第2～4節は株式会社吉田生物研究所に委託した。
- 6 発掘調査から整理作業、報告書執筆を実施するにあたって、下記の関係諸機関ならびに方々から御教示および御協力を得た。記して厚く謝意を表すものである。
東信男 胡光 松田朝由 白杵市教育委員会 香川県教育委員会 香川県埋蔵文化財センター 香川県立ミュージアム 香川大学 神奈川大学 鎌田共済会郷土博物館 公益財団法人松平公益会 玉藻公園管理事務所
- 7 標高は東京湾平均海面高度を基準とし、図中方位は座標北を指す。なお、これらの数値は日本測地系第IV系にしたがった。
- 8 出土遺物の実測図は、土器は1/3、瓦は1/4、その他遺物の縮尺は図面ごとに記した。遺構の縮尺については図面ごとに示している。
- 9 発掘調査のうち、掘削業務を四国産業株式会社に、石垣計測・測量業務を株式会社四航コンサルタントならびにアジア航測株式会社に、樹種同定業務ならびに年代測定業務を株式会社吉田生物研究所に、遺物の写真撮影を西大寺フォトに委託した。
- 10 発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会にて保管している。



目次

第1章 調査の経緯と経過		第7節 本丸	249
第1節 調査に至る経緯	1	第8節 天守へ続く階段	266
第2節 調査の経過	4	第9節 本丸虎口	272
第2章 地理的・歴史的環境		第4章 自然科学的分析	
第1節 地理的環境	7	第1節 高松城天守台出土漆喰の所見	279
第2節 高松城築城以前の歴史的環境	8	第2節 放射性炭素年代測定	292
第3節 高松城の歴史的環境	10	第3節 高松城天守出土柱材の樹種調査結果	294
第4節 廃城後の歴史的環境	13	第4節 高松城天守出土木製品の樹種調査結果	296
第3章 発掘調査成果		第5章 考察	
第1節 発掘調査の概要	17	第1節 遺構の変遷について	298
第2節 玉藻廟と玉藻廟基礎	22	第2節 史跡から読み解く 天守の歴史的変遷	299
第3節 天守地下1階	182	第3節 天守の外観および内部構造	301
第4節 天守1階	203	第4節 天守の復元図	305
第5節 天守台前面	205	第5節 参考資料	306
第6節 中川槽台	244		

挿図目次

第1図 史跡高松城跡範囲図	2	第31図 地下1階出土層位不明土器類実測図(2)	53
第2図 史跡高松城跡と周辺の遺跡	12	第32図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図(1)	55
第3図 本章の節立て区分図	18	第33図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図(2)	56
第4図 天守台発掘調査後平面図	19	第34図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図(3)	57
第5図 石垣各面の名称図	21	第35図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図(4)	58
第6図 発掘調査以前の天守台と玉藻廟	23	第36図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図(5)	59
第7図 玉藻廟基礎平面図	24	第37図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図(6)	60
第8図 天守地下1階東西・南北断面図	25	第38図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図(7)	61
第9図 玉藻廟基礎石垣各面の名称	26	第39図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図(8)	62
第10図 玉藻廟基礎立面図(1)	29	第40図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図(9)	64
第11図 玉藻廟基礎立面図(2)	30	第41図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図(10)	65
第12図 玉藻廟基礎立面図(3)	31	第42図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図(11)	66
第13図 玉藻廟基礎立面図(4)	32	第43図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図(12)	68
第14図 玉藻廟基礎立面図(5)	33	第44図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図(13)	69
第15図 玉藻廟基礎立面図(6)	34	第45図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図(14)	70
第16図 玉藻廟基礎立面図(7)	35	第46図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図(15)	71
第17図 地下1階上層出土土器類実測図(1)	37	第47図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図(16)	72
第18図 地下1階上層出土土器類実測図(2)	38	第48図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図(17)	74
第19図 地下1階上層出土土器類実測図(3)	39	第49図 地下1階上層出土軒丸瓦実測図(1)	83
第20図 地下1階上層出土土器類実測図(4)	40	第50図 地下1階上層出土軒丸瓦実測図(2)	84
第21図 地下1階上層出土土器類実測図(5)	41	第51図 地下1階中層出土軒丸瓦実測図(1)	85
第22図 地下1階中層出土土器類実測図(1)	43	第52図 地下1階中層出土軒丸瓦実測図(2)	86
第23図 地下1階中層出土土器類実測図(2)	44	第53図 地下1階下層出土軒丸瓦実測図	87
第24図 地下1階中層出土土器類実測図(3)	45	第54図 玉藻廟基礎部出土軒丸瓦実測図(1)	88
第25図 地下1階中層出土土器類実測図(4)	46	第55図 玉藻廟基礎部出土軒丸瓦実測図(2)	89
第26図 地下1階中層出土土器類実測図(5)	48	第56図 玉藻廟基礎部出土軒丸瓦実測図(3)	92
第27図 地下1階中層出土土器類実測図(6)	49	第57図 適水瓦実測図(1)	94
第28図 地下1階下層出土土器類実測図	50	第58図 適水瓦実測図(2)	95
第29図 地下1階床面直上出土土器類実測図	51	第59図 地下1階上層出土軒平瓦実測図	97
第30図 地下1階出土層位不明土器類実測図(1)	52	第60図 地下1階中層出土軒平瓦実測図	98

第61図	地下1階下層出土軒平瓦実測図……………99	第114図	地下1階出土金属器実測図(1)……………162
第62図	玉藻廟基礎部出土軒平瓦実測図(1) 100	第115図	地下1階出土金属器実測図(2)……………163
第63図	玉藻廟基礎部出土軒平瓦実測図(2) 105	第116図	地下1階出土金属器実測図(3)……………164
第64図	地下1階出土軒棧瓦実測図……………106	第117図	地下1階出土金属器実測図(4)……………165
第65図	玉藻廟基礎部出土軒棧瓦実測図……………107	第118図	玉藻廟基礎部出土金属器実測図(1) 167
第66図	土塀瓦実測図……………108	第119図	玉藻廟基礎部出土金属器実測図(2) 168
第67図	烏衾瓦実測図(1)……………110	第120図	玉藻廟基礎部出土金属器実測図(3) 169
第68図	烏衾瓦実測図(2)……………111	第121図	玉藻廟基礎部出土金属器実測図(4) 170
第69図	地下1階出土菊丸瓦実測図……………112	第122図	天守地下1階入口の閉塞石垣立面図171
第70図	玉藻廟基礎部出土菊丸瓦実測図……………113	第123図	天守G面入口閉塞石垣立面図……………172
第71図	地下1階上層出土丸瓦実測図……………114	第124図	天守地下1階遺構検出図(近代以降)174
第72図	地下1階中層出土丸瓦実測図(1) ……115	第125図	天守地下1階S K 1平・断面図 及び出土遺物実測図……………176
第73図	地下1階中層出土丸瓦実測図(2) ……116	第126図	天守地下1階S K 2平・断面図 及び出土遺物実測図……………178
第74図	地下1階中層出土丸瓦実測図(3) ……117	第127図	天守地下1階S K 3平・断面図 及び出土遺物実測図……………179
第75図	地下1階下層出土丸瓦実測図(1) ……118	第128図	天守地下1階S K 8・S P 2・6・11・14・18 出土遺物実測図……………179
第76図	地下1階下層出土丸瓦実測図(2) ……119	第129図	天守地下1階石垣各面の名称……………182
第77図	玉藻廟基礎部出土丸瓦実測図(1) ……120	第130図	天守地下1階石垣立面図(1)……………184
第78図	玉藻廟基礎部出土丸瓦実測図(2) ……121	第131図	天守地下1階石垣立面図(2)……………185
第79図	玉藻廟基礎部出土丸瓦実測図(3) ……122	第132図	天守地下1階礎石平・断面図……………188
第80図	玉藻廟基礎部出土丸瓦実測図(4) ……123	第133図	天守地下1階礎石線刻・剥離 平面実測図……………189
第81図	玉藻廟基礎部出土丸瓦実測図(5) ……124	第134図	地下1階入口石垣に残る錆跡とホゾ穴 190
第82図	地下1階上層出土平瓦実測図(1) ……127	第135図	天守地下1階掘立柱跡平・断面図……………192
第83図	地下1階上層出土平瓦実測図(2) ……128	第136図	天守地下1階掘立柱跡平面図……………194
第84図	地下1階中層出土平瓦実測図(1) ……129	第137図	天守地下1階掘立柱跡内 礎石平・立面図……………195
第85図	地下1階中層出土平瓦実測図(2) ……130	第138図	天守地下1階掘立柱跡1平・断面図 及び出土遺物実測図……………196
第86図	地下1階出土層位不明平瓦実測図 ……131	第139図	天守地下1階掘立柱跡2平・断面図 及び出土遺物実測図……………198
第87図	玉藻廟基礎部出土平瓦実測図(1) ……132	第140図	天守地下1階掘立柱跡3平・断面図 及び出土遺物実測図……………200
第88図	玉藻廟基礎部出土平瓦実測図(2) ……133	第141図	天守地下1階掘立柱跡4平・断面図 及び出土遺物実測図……………201
第89図	地下1階出土棧瓦実測図……………134	第142図	天守1階 礎石・石材抜き取り痕……………204
第90図	隅切丸瓦実測図……………135	第143図	天守前面・中川櫓台平面図及び 断面図作成位置図……………206
第91図	隅切平瓦実測図……………137	第144図	天守台前面平面図……………207
第92図	地下1階中層出土熨斗瓦実測図……………138	第145図	天守台前面・本丸土層断面図(1) ……208
第93図	玉藻廟基礎部出土熨斗瓦実測図……………139	第146図	天守台前面・本丸土層断面図(2) ……209
第94図	地下1階上層出土輪違い瓦実測図 ……141	第147図	天守台前面・本丸土層断面図(3) ……210
第95図	地下1階中・下層出土輪違い瓦実測図 142	第148図	天守台前面・本丸土層断面図(4) ……211
第96図	地下1階出土層位不明輪違い瓦実測図143	第149図	天守台前面・本丸土層断面図(5) ……212
第97図	玉藻廟基礎部出土輪違い瓦実測図 ……144	第150図	天守台前面・本丸土層断面図(6) ……213
第98図	地下1階上層出土鬼瓦実測図……………145	第151図	天守台前面 段石垣平・立面図……………214
第99図	地下1階中層出土鬼瓦実測図(1) ……146	第152図	天守台前面S K 1・2平・断面図……………215
第100図	地下1階中層出土鬼瓦実測図(2) ……147	第153図	天守台前面S K 1 出土遺物実測図(1)……………217
第101図	地下1階下層出土鬼瓦実測図……………148	第154図	天守台前面S K 1
第102図	地下1階出土層位不明鬼瓦実測図…149		
第103図	玉藻廟基礎部出土鬼瓦実測図(1) ……150		
第104図	玉藻廟基礎部出土鬼瓦実測図(2) ……151		
第105図	土製品実測図(1)……………152		
第106図	土製品実測図(2)……………153		
第107図	木製品実測図……………154		
第108図	石製品実測図(1)……………155		
第109図	石製品実測図(2)……………156		
第110図	石製品実測図(3)……………157		
第111図	その他遺物実測図……………158		
第112図	地下1階上層出土金属器実測図(1) 160		
第113図	地下1階上層出土金属器実測図(2) 161		

第155図	出土遺物実測図(2)……………218 天守台前面 S K 2 出土遺物実測図(1)……………219	第176図	天守台前面包含層 出土遺物実測図(16)……………242
第156図	天守台前面 S K 2 出土遺物実測図(2)……………220	第177図	天守台前面包含層 出土遺物実測図(17)……………243
第157図	天守台前面瓦列・鬼瓦 出土状況平面図……………221	第178図	中川櫓台平面図……………245
第158図	天守台前面瓦列 出土遺物実測図(1)……………222	第179図	中川櫓台・本丸土層断面図……………246
第159図	天守台前面瓦列 出土遺物実測図(2)……………223	第180図	中川櫓台礎石平・断面図……………247
第160図	天守台前面瓦列 出土遺物実測図(3)……………224	第181図	中川櫓台出土遺物実測図……………248
第161図	天守台前面包含層 出土遺物実測図(1)……………226	第182図	本丸平面図……………250
第162図	天守台前面包含層 出土遺物実測図(2)……………228	第183図	本丸東端トレンチ西壁断面図……………251
第163図	天守台前面包含層 出土遺物実測図(3)……………229	第184図	水路遺構平・断・立面図……………251
第164図	天守台前面包含層 出土遺物実測図(4)……………230	第185図	石列平・断面図……………251
第165図	天守台前面包含層 出土遺物実測図(5)……………231	第186図	本丸包含層出土遺物実測図(1)……………253
第166図	天守台前面包含層 出土遺物実測図(6)……………232	第187図	本丸包含層出土遺物実測図(2)……………254
第167図	天守台前面包含層 出土遺物実測図(7)……………233	第188図	本丸包含層出土遺物実測図(3)……………255
第168図	天守台前面包含層 出土遺物実測図(8)……………234	第189図	中川櫓台南面トレンチ 水路遺構平・断面図……………257
第169図	天守台前面包含層 出土遺物実測図(9)……………235	第190図	中川櫓台南面トレンチ南壁断面図……………258
第170図	天守台前面包含層 出土遺物実測図(10)……………236	第191図	中川櫓台南面トレンチ 水路遺構と門の礎石……………261
第171図	天守台前面包含層 出土遺物実測図(11)……………237	第192図	中川櫓台南面トレンチ水路遺構 出土遺物実測図(1)……………262
第172図	天守台前面包含層 出土遺物実測図(12)……………238	第193図	中川櫓台南面トレンチ水路遺構 出土遺物実測図(2)……………263
第173図	天守台前面包含層 出土遺物実測図(13)……………239	第194図	天守へ続く石段平面図……………267
第174図	天守台前面包含層 出土遺物実測図(14)……………240	第195図	天守へ続く石段(上段) 平・断・立面図……………268
第175図	天守台前面包含層 出土遺物実測図(15)……………241	第196図	天守へ続く石段(下段) 平・断・立面図……………269
		第197図	玉藻廟階段解体に伴う 出土遺物実測図……………271
		第198図	本丸虎口平・断面図……………273
		第199図	本丸虎口段石段・S D 1 平・立面図……………274
		第200図	本丸虎口 S D 1 出土遺物実測図……………275
		第201図	本丸虎口包含層 出土遺物実測図(1)……………277
		第202図	本丸虎口包含層 出土遺物実測図(2)……………278

挿 表 目 次

表 1	史跡高松城跡整備検討委員会名簿…………… 5	表 5	高松城略年表…………… 9
表 2	史跡高松城跡石垣検討委員会名簿…………… 5	表 6	高松城周辺の調査履歴……………14
表 3	史跡高松城跡建造物検討委員会名簿…………… 5		
表 4	発掘調査作業工程表…………… 6		

写真図版目次

写真図版 1	高松城遠景(東から) 天守台遠景(東から)	A-1-5(東から) A-1-6・7・8(北西から)
写真図版 2	玉藻廟基礎完掘状況(上から) 玉藻廟基礎完掘状況(北から)	A-1-6・8(南西から) A-1-5(西から)
写真図版 3	天守地下1階完掘状況(上から) 天守地下1階完掘状況(北東から)	A-1-6(南から) A-1-7・8(北から)
写真図版 4	天守地下1階完掘状況(北東から) 天守地下1階完掘状況(北西から)	A-1-8(西から)
写真図版 5	天守閣 掘立柱跡 1 天守閣 掘立柱跡 2	写真図版21 A-1-8(西から) A-1-10(西から)
写真図版 6	天守閣掘立柱 柱材① 天守閣掘立柱 柱材②	A-1-12(東から) A-1-14(東から) A-1-9(南から)
写真図版 7	出土遺物	A-1-11(北から)
写真図版 8	出土遺物	A-1-13・14・15(西から)
写真図版 9	出土遺物	A-1-15(北東から)
写真図版10	出土遺物	写真図版22 A-1-16(東から)
写真図版11	出土遺物	玉藻廟基礎北西隅の石積み
写真図版12	出土遺物	A-1-25・27・28(西から)
写真図版13	高松城下図屏風を一部拡大 讃岐国高松城石垣破損堀浚之覚を一部拡大	玉藻廟基礎(西から) 玉藻廟基礎 (天守地下1階の入口から)
写真図版14	讃岐国名勝図会 高松城古図	写真図版23 玉藻廟基礎完掘状況(南東から) 玉藻廟基礎完掘状況(南西から)
写真図版15	旧高松御城全図 讃岐国高松城石垣破損堀浚之覚を一部拡大	写真図版24 玉藻廟階段・G面・T面 天守地下1階の閉塞石垣・T面
写真図版16	高松城下図屏風の天守 讃岐国高松城石垣破損堀浚之覚の天守 讃岐国名勝図会の天守 高松城古図の天守	写真図版25 G面で検出した墨書① G面で検出した墨書②
写真図版17	古写真 古写真	写真図版26 天守地下1階S K1・2検出状況(西から) 天守地下1階S K1完掘状況(西から)
写真図版18	天守調査以前(北西から) 玉藻廟基礎検出状況(北から) 玉藻廟基礎検出状況(南東から) 玉藻廟基礎検出状況(南から) 玉藻廟基礎検出状況(北から) 玉藻廟基礎検出状況(北から) 玉藻廟基礎検出状況(南から) 玉藻廟基礎検出状況(南から)	天守地下1階掘立柱1検出状況(北から) 天守地下1階S K2完掘状況(西から) 天守地下1階S K3階完掘状況(西から)
写真図版19	南北土層断面(中央) 東西土層断面(西側) 玉藻廟基礎(中央) A-1-2(東から) 南北土層断面(北側) 東西土層断面(中央) 玉藻廟基礎(中央) A-2-3(北から)	写真図版27 天守地下1階遺構検出状況(南西から) 天守地下1階完掘状況(南西から) 写真図版28 天守地下1階完掘状況(北から) 天守地下1階完掘状況(入口から)
写真図版20	A-1-3・4(北東から)	写真図版29 L面(南東から) N面(南から) P面(北から) R面(北東から) M面(東から) O面(西から) Q面(東から) M・Q・R面(北東から)

写真図版30	<p>天守地下1階完掘状況(南東から) 入口ホゾ穴・L面錆検出状況 (南から) 入口ホゾ穴・R面錆検出状況 (北から) 礎石変色・破損検出状況(北から) 天守地下1階完掘状況(東から) 入口ホゾ穴・錆検出状況 入口ホゾ穴・錆検出状況 礎石線刻検出状況(南から)</p>	<p>(北から) 本丸調査以前(南から) 本丸調査以前(東から) 本丸完掘状況(南から) 本丸完掘状況(南から) 本丸完掘状況(北から)</p>
写真図版31	<p>掘立柱跡1 柱痕 掘立柱跡1 土層断面図 掘立柱跡2 上面検出状況 掘立柱跡2 土層断面 掘立柱跡1 柱材 掘立柱跡1 礎石 掘立柱跡2 柱痕 掘立柱跡2 礎石</p>	<p>写真図版37 本丸中川櫓台前面の水路遺構 (西から) 本丸土層断面(東から) 本丸中川櫓台前面の水路遺構 (南から) 本丸中川櫓台前面の水路遺構 (東から) 本丸中川櫓台前面の水路遺構 (西から) 本丸門の礎石(西から)</p>
写真図版32	<p>掘立柱跡3 柱痕 掘立柱跡3 土層 掘立柱跡4 上面検出状況 掘立柱跡4 土層断面 掘立柱跡3 柱材 掘立柱跡3 礎石 掘立柱跡4 柱痕 掘立柱跡4 礎石</p>	<p>写真図版38 玉藻廟階段(西から) 玉藻廟階段・天守へ続く石段 (西から)</p>
写真図版33	<p>天守台前面調査以前(北から) 天守台前面断面A 天守台前面断面C・D(南から) 天守台前面断面E・H(南西から) 天守台前面・中川櫓台調査以前 (東から) 天守台前面断面B・C(北から) 天守台前面断面C・D・H (南西から) 天守台前面断面H(北西から)</p>	<p>写真図版39 玉藻廟階段撤去(西から) 天守へ続く石段(西から)</p>
写真図版34	<p>天守台前面断面F・H(北西から) 天守台前面完掘状況(北から) 天守台前面完掘状況(南から) 天守台前面瓦列出土状況(北から) 天守台前面断面H(西から) 天守台前面完掘状況(北から) 天守台前面漆喰出土状況(西から) 天守台前面鬼瓦出土状況(北から)</p>	<p>写真図版40 U面(南から) U面(南から) T面(西から) U面(南から) S面(北から) S面(北から) T面(東から) S面(北から)</p>
写真図版36	<p>中川櫓台完掘状況(東から) 中川櫓台断面I・J・K(東から) 中川櫓台礎石 中川櫓台断面J(西から) 中川櫓台礎石</p>	<p>写真図版41 W面(西から) V面(北から) X面(南から) V・W面(北西から) W面(西から)</p>
写真図版37	<p>本丸調査以前(西から) 本丸調査以前(西から) 本丸完掘状況(北から) 本丸多間櫓台前面の水路遺構</p>	<p>写真図版42 虎口A面排水口 虎口南北土層断面図(西から) 虎口東西土層断面図(南西から) 虎口SD1検出状況(北から) 虎口A面排水口 虎口東西土層断面図(北から) 虎口完掘状況(東から) 虎口SD1土器出土状況 虎口完掘状況(南西から) 虎口SD1検出状況(南西から)</p>
		<p>写真図版43 虎口完掘状況(南西から)</p>
		<p>写真図版44 出土遺物(土器類)</p>
		<p>写真図版45 出土遺物(土器類)</p>
		<p>写真図版46 出土遺物(土器類)</p>
		<p>写真図版47 出土遺物(土器類)</p>
		<p>写真図版48 出土遺物(土器類)</p>

写真図版49	出土遺物(土器類)	写真図版76	出土遺物(瓦)
写真図版50	出土遺物(土器類)	写真図版77	出土遺物(瓦)
写真図版51	出土遺物(土器類)	写真図版78	出土遺物(瓦)
写真図版52	出土遺物(土器類)	写真図版79	出土遺物(瓦)
写真図版53	出土遺物(土器類)	写真図版80	出土遺物(瓦)
写真図版54	出土遺物(土器類)	写真図版81	出土遺物(瓦)
写真図版55	出土遺物(土器類)	写真図版82	出土遺物(瓦・金属器・その他)
写真図版56	出土遺物(土器類)	写真図版83	出土遺物(石製品)
写真図版57	出土遺物(土器類)	写真図版84	出土遺物(石製品・貝・その他)
写真図版58	出土遺物(土器類)	写真図版85	出土遺物(石製品)
写真図版59	出土遺物(土器類)	写真図版86	出土遺物(土製品・金属器)
写真図版60	出土遺物(土器類)	写真図版87	出土遺物(金属器)
写真図版61	出土遺物(土器類)	写真図版88	出土遺物(金属器)
写真図版62	出土遺物(土器類)	写真図版89	出土遺物(金属器)
写真図版63	出土遺物(土器類)	写真図版90	出土遺物(その他)
写真図版64	出土遺物(土器類)		
写真図版65	出土遺物(土器類)		
写真図版66	出土遺物(土器類)		
写真図版67	出土遺物(土器類)		
写真図版68	出土遺物(土器類)		
写真図版69	出土遺物(土器類)		
写真図版70	出土遺物(土器類)		
写真図版71	出土遺物(土器類)		
写真図版72	出土遺物(土器類)		
写真図版73	出土遺物(瓦)		
写真図版74	出土遺物(瓦)		
写真図版75	出土遺物(瓦)		

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

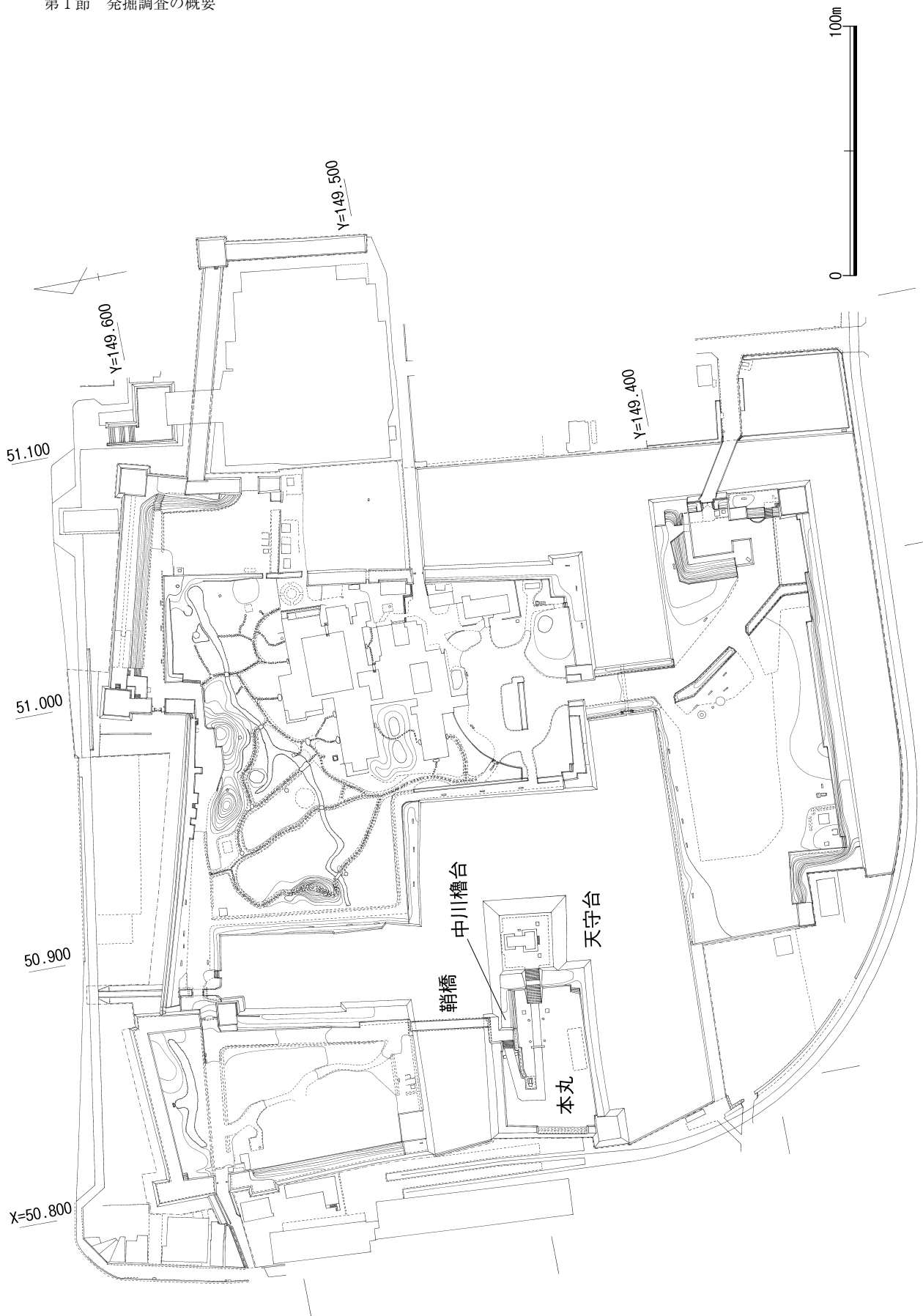
高松城は天正16年(1588)に築城が開始されており、既に400年余りが経過している城郭である。現在も残る石垣は、史跡高松城跡の構成要素として位置づけられており、江戸時代以降に修理されながら維持されてきたが、傷みが目立つようになっている。高松市教育委員会は、平成元年度に史跡高松城跡内において目視による判断で崩落の危険の高い石垣として天守台石垣など6箇所を把握しており、石垣の孕みの測定や石材間にガラス棒を設置してその挙動を確認する調査を実施するなど、危険石垣の把握に努めてきた。当時の調査では、特に危険な石垣として、地久櫓台、簾櫓台、天守台などがあげられていた。

その後、それらの調査を元に、平成6・7年度において高松市史跡高松城跡保存整備基本計画策定委員会の検討を元に、史跡高松城跡保存整備基本計画が策定され、それに基づき危険石垣の解体修理などの整備事業に取り組むこととした。石垣解体修理については平成10年度から電車軌道に隣接する地久櫓台石垣の解体修理事業に取り掛かり、その後も天守台等の危険石垣の修理を行う予定であった。

平成15年度には史跡高松城跡整備検討委員会（以下整備検討委員会と称）が組織され、平成16年3月2日に開催された第1回整備検討委員会において天守台石垣の解体修理を行う予定であることを報告した。さらに、翌年度にはその下部組織として史跡高松城跡石垣検討委員会（以下石垣検討委員会と称）および史跡高松城跡建造物検討委員会（以下建造物検討委員会と称）が組織され、これらの委員会の指導・助言を得ながら、整備計画を進めることとなった。

一方で、平成15年10月25日には、これまで危険石垣として認識していなかった鉄門石垣が、強風による松の揺れが原因で毀損するという事態が生じた。日常管理中の毀損であることから、史跡内の石垣の傷みが崩落寸前まで迫っている箇所が他にも存在する可能性が考えられた。このため、整備事業を進めていく上で、現存する石垣の分布、保存状況、編年、積み方、補修箇所および崩落等危険箇所等を調査するとともに、今後の石垣の保存整備に向けての基礎的判断の拠りどころとなるべき整備指針を作成する必要性が生じ、平成16年度に石垣の基礎調査を実施した。その後、石垣検討委員会からの指導・助言をいただきながら『史跡高松城跡石垣保存整備指針』を策定するに至った。この中で、石垣崩落の危険性と石垣が崩落した場合に受ける利用面からの危険性をそれぞれ3段階に分類し、その両者の組み合わせによって各石垣の危険度を4段階で示すとともに、それらの危険度別石垣に対する対応についてその指針を示した。

史跡高松城跡内に所在する『史跡高松城跡石垣保存整備指針』の中で、最も危険と位置づけられた危険度Aの石垣は天守台の北・東・南の3面をはじめ11面が確認された。その中でも天守台石垣は、堀の水面よりやや上部において全体的に大きく孕み出しており、特に東面ではその孕み出しの上部を人が歩いて通れるほどであった。また、東面において隅角部の下部の石材が南側にズレ、築石との間に約30cmの開きが認められた。さらに、天守台は入城者が必ず訪れる場所



第1図 史跡高松城跡範囲図

であることから、崩落した際の人的被害が懸念されるとともに、城内で最も高い石垣であることから景観に与える影響が大きいと判断した。平成17年6月7日の第2回整備検討委員会および平成17年9月29日の第2回石垣検討委員会においても、いつ崩落してもおかしくないという判断に至った。この結果、平成18年度に上部に所在する玉藻廟の解体および解体によって影響を受ける範囲の石垣天端の発掘調査を実施し、平成19年度に石垣解体を実施することを決定した。

しかしながら、本丸およびそれに付随する天守台は、北・東・南の3方向が堀に囲まれ、西側は私鉄の駅が接しており、車両等の進入が不可能であった。工事に際してクレーン等の重機が近づくことができないことから、その進入路および解体石材の仮置場として内堀の一部を仮設ヤードとして利用するため、平成17年度から18年度において内堀の仮埋立てを実施した。埋立て完了後の平成18年7月29日には第1回天守台見学会を開催し、作業ヤードとして埋立てた内堀から天守台石垣の危険な状況を見学していただくとともに、解体修理の必要性とスケジュールの説明を行ったところ、330人の参加を得た。

また、堀の埋立てにより、石垣をより間近で見ることができたことから、より詳細に石垣の破損状況の調査を実施し、平成18年8月8日に開催した第4回石垣検討委員会において、石垣の解体範囲について天守台の北・東・南の3面について根石部分を除きほぼ全解体する案を提示した。一方、委員からは、鞆橋付近まで破損があることや、鞆橋下の石垣が、明治17(1884)年の橋の付け替えの際に石垣の勾配が改変されていることから、鞆橋付近まで解体範囲を広げるようにという指導があった。この解体範囲の決定を受けて、天守台および天守台北面に続く本丸北側多聞部分（以後中川櫓台と呼称）や本丸東側部分（以後天守台前面と呼称）、鞆橋取り付け部分（以後本丸虎口と呼称）がほぼ全面影響を受けると想定されたことから、発掘調査箇所を平成18年度に実施することとなった。なお、発掘調査に先立ち、平成18年8月30日から11月10日に天守台上部に所在する玉藻廟の解体を実施するとともに、その記録保存調査を実施した。

その後、平成19年度の天守台石垣解体実施設計において、石垣解体に伴う掘削範囲については、築石を解体するためには栗石の撤去が最低限必要であることから、築石表面から盛土と栗石の境までを約2mと想定し、そこを基点に45度で掘削した範囲を調査対象とした。このため、想定した調査対象範囲よりさらに掘削が広がることが判明したため、天守台前面および中川櫓台の本丸側石垣裾部にも影響することも予想されたことから、同箇所についても調査対象範囲とし、平成19年度に実施することとした。

平成22年度は、中川櫓台の本丸石垣裾部の積直し工事実施中に、根石レベルを確認するための発掘調査を実施したところ、予想外に地中に埋没していた本丸石垣を検出したため、改めて平成22年6月10日から8月10日にかけて、約12㎡の調査を実施した。結果は第3章第7節にて詳述するが、中川櫓台の本丸石垣裾部の旧状が明らかになり、またその石垣に併走する水路遺構の構造についても明らかとなった。加えて中川櫓と中櫓の間に架設されていた門の礎石1石を検出することができた。

平成23年度は、22年度に検出した上記の水路遺構と門の礎石について、位置と構造を把握

するために追加の発掘調査を実施した。調査期間は平成23年4月18日～26日で、調査面積は約5㎡である。この結果、中川櫓前面に配置された水路の構造と、礎石の加工状況などが明らかになった。

第2節 調査の経過

高松市では、史跡高松城跡の整備に際し、都市整備部公園緑地課が工事の発注、施工時の土木・建築監督を担当し、教育委員会教育部文化財課が発掘調査、施工時の文化財監督を担当している。今回の発掘調査に関しても、文化財課が担当して発掘調査を実施した。

平成18年度は天守台、中川櫓台、天守台前面、本丸虎口を対象に平成18年11月1日から平成19年3月30日に約771㎡の調査を実施した。平成18年度調査については、古文書等の記載から天守台に地下1階が存在することが予想され、掘削土量が多く、残土搬出にクレーン等重機を使用することが予想されたことから、掘削業務については四国産業株式会社に委託して実施した。文化財課文化財専門員の指示監督のもと受託業者作業員が掘削を行い、文化財課で雇用した作業員が記録作成を実施した。

調査開始時の平成18年11月1日には玉藻廟解体工事期間中であったことから、中川櫓台より調査を開始し、玉藻廟解体完了後の11月15日から天守台の発掘調査を開始し、平成19年3月30日で終了した。天守台では、想定どおり地下1階を検出したことから、掘削土をモッコに入れクレーンにて移動し、最終的には城外処分を行った。

なお、地下1階の入口を検出し、墨書等が発見されたことから、平成19年1月7日に第2回天守台見学会を開催し、300人の参加を得た。さらに、地下1階を完掘し、全容がほぼ判明した平成19年3月4日に第3回の天守台見学会を開催し、600人の参加を得た。

平成19年度は、天守台前面および中川櫓台の本丸石垣裾部を対象に平成19年9月28日から10月26日に約130㎡の調査を実施した。平成19年度については、文化財課直営で作業員を雇用し、天守台石垣解体工事の準備工と並行しながら調査を実施した。

平成22年度は、中川櫓台の本丸石垣裾部の積直し工事実施中に、根石レベルを確認するための発掘調査を実施したところ、予想外に地中に埋没していた本丸石垣を検出したため、改めて平成22年6月10日から8月10日にかけて、約12㎡の調査を実施した。調査は文化財課直営で作業員を雇用し、天守台石垣修理工事と並行して実施した。

平成23年度は、22年度に検出した上記の水路遺構と門の礎石について、位置と構造を把握するために追加の発掘調査を実施した。調査期間は平成23年4月18日～26日で、調査面積は約5㎡である。文化財課直営で作業員を雇用し、天守台石垣修理工事と並行して実施した。

表1 史跡高松城跡整備検討委員会名簿

	氏名	所属	専門分野	備考
委員長	渡邊 定夫	東京大学名誉教授	都市計画	
副委員長	吉田 重幸	元香川大学農学部教授	緑地環境学	
委員	牛川 喜幸	京都橘大学文学部教授	日本庭園史	～H20.1
委員	尼崎 博正	京都造形芸術大学環境デザイン学科教授	日本庭園史	H20.1～
委員	木原 溥幸	元香川大学教育学部教授	日本史学	
委員	五味 盛重	元財文化財建造物保存技術協会参与	古建築	
委員	西 和夫	神奈川大学工学研究所客員教授	建築史, 意匠	

表2 史跡高松城跡石垣検討委員会名簿

	氏名	所属	専門分野	備考
委員長	内田 九州男	元愛媛大学法文学部教授	近世文化史	H20.5～ 委員長
委員	五味 盛重	元財文化財建造物保存技術協会参与	古建築	～H20.5 委員長
委員	西田 一彦	関西大学名誉教授	地盤工学	

表3 史跡高松城跡建造物検討委員会名簿

	氏名	所属	専門分野	備考
委員長	西 和夫	神奈川大学工学研究所客員教授	建築史, 意匠	
副委員長	谷 直樹	大阪市立大学大学院教授	建築史	
委員	小沢 朝江	東海大学工学部教授	建築史	～H21.2
委員	波多野 純	日本工業大学工学部教授	都市史, 建築設計	～H21.2
委員	増井 正哉	奈良女子大学生活環境学部教授	建築史	H21.2～
委員	三浦 要一	高知県立大学生活科学部准教授	建築史	H21.2～
委員	山田 由香里	長崎総合科学大学環境・建築学部准教授	建築史	

表4 発掘調査作業工程表

H18.11.1	発掘調査開始。機材搬入。	H19.3.19	柱材取上げ。
H18.11.6	本丸多聞部分樹木伐採。	H19.3.30	玉藻廟階段下部撤去。平成18年度調査終了。
H18.11.8	本丸多聞部分現況平板測量。	H19.9.28	平成19年度調査開始。平板測量。
H18.11.9	中川櫓台表土掘削開始。	H19.10.2	階段検出。
H18.11.14	中川櫓台において礎石検出。	H19.10.19	本丸南東部石列（南側多聞に伴う水路か？）検出。
H18.11.15	天守台前面部分掘削開始。	H19.10.22	中川櫓台裾部で水路検出。立面図作成。
H18.11.16	中川櫓台部分の断面図作成。	H19.10.23	写真測量。
H18.11.20	天守台前面南部で本丸南側多聞に伴う埋没石垣検出。	H19.10.26	平成19年度調査終了。
H18.11.22	天守台前面部分土層断面図作成。	H22.6.10	平成22年度調査開始。
H18.11.24	天守台調査開始。	H22.6.10	I面石垣の根石レベル検出中に埋没した石垣を検出。
H18.12.4	天守地下1階南西隅天端検出。	H22.6.16	新たに検出した石垣の平面形を確認。
H18.12.6	玉藻廟関連礎石等の平面図作成。	H22.6.30	石垣は埋没した中川櫓台南面の石垣である可能性が高い。
H18.12.18	玉藻廟階段撤去開始。	H22.6.30	石垣前面に水路遺構が伸びることを確認。
H18.12.20	玉藻廟上面精査。玉藻廟基礎礎石垣検出。	H22.7.5	水路遺構の底と石垣根石レベルを確認。
H18.12.21	玉藻廟階段撤去。天守地下1階入口検出。	H22.7.8	門の礎石を一部検出。
H18.12.25	天守地下1階入口において墨書を発見。	H22.8.10	図化および写真撮影完了。平成22年度調査完了。
H19.1.7	第2回天守台見学会。300人の参加を得た。	H23.4.18	平成23年度調査開始。
H19.1.12	天守地下1階部分掘削	H23.4.21	門の礎石の全形を検出。
H19.1.25	天守地下1階礎石検出。	H23.4.25	水路遺構の全形を確認。
H19.1.31	玉藻廟基礎礎石垣が床面から築造されていることを確認。	H23.4.26	図化・写真撮影完了。平成23年度調査完了。
H19.2.2	玉藻廟基礎礎石垣写真測量。		
H19.2.6	玉模廟基礎礎石垣解体。		
H19.2.15	天守地下1階最下層掘削。		
H19.2.16	天守地下1階床面精査。		
H19.2.19	天守地下1階検出土坑掘削。		
H19.2.22	第5回史跡高松城跡石垣検討委員会開催。		
H19.2.23	第3回史跡高松城跡整備検討委員会開催。		
H19.3.8	本丸虎口部分掘削。石垣立面写真測量。		
H19.3.13	調査地平面写真測量。		
H19.3.14	天守地下1階柱穴掘削。		

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

高松城跡は、香川県の瀬戸内海側を占める讃岐平野の東側にあつて、東を屋島・立石山・雲附山、南を日山・上佐山、西を五色台山塊に遮られた東西9 km、南北8 kmの扇状地性の海岸平野である高松平野の北端部に位置する。当地域を構成する地質は、基盤としての領家花崗岩類（深度100～200 m）と、その上位に層厚100 m以上で分布する三豊層群および層厚約10 mの段丘堆積物からなり、最上部の層厚10～20 mが沖積層である。また、侵食の容易な花崗岩層（三豊層群）が風化侵食に抵抗の強い安山岩層に覆われていたことによって侵食解析から取り残されて形成された台地状あるいは円錐状の小山塊が群立している。前者の台地群はメサと呼ばれ、後者の円錐状の小さい単体の山々はビュートと呼ばれ、讃岐ののどかな田園風景の象徴の一つである。両者は共に瀬戸内火山岩類に属し、今から約1,400～1,100万年前（中期中新世）の火山活動の産物である。

現在の高松城跡周辺の地形環境は、近世城下町や周辺の陸地造成（干拓）によって整えられたが、より本源的には高松平野を流れる諸河川と、潮流による海浜地形の形成を出発点としている。高松平野は大部分が讃岐山脈に源をもつ香東川が運ぶ土砂の堆積によって形成されたと考えられており、これまでの発掘調査や微地形分析により分ヶ池、下池、長池、大池を結ぶ流路等、数本の主流路が確認されている。これら主流路のうち東方の流路は弥生時代後期から古代にかけて次第に河川としての機能を喪失したのに対し、石清尾山塊東側の流路は近世初頭（寛永期）まで主要な流路群として存在した。現在、高松平野中央部に所在する石清尾山塊の西側を流れる香東川であるが、この流路は近世初頭に分流していた流路を一本化したものである。なお、石清尾山塊東側の旧流路は石清尾山麓を巡って西浜に至る流路群（現在の摺鉢谷川に並行）と石清尾山南麓から上福岡町に至る流路群（現在の御坊川に並行）に細別できる。高松城跡は、この2本の流路群に挟まれた地域である。

高松城跡周辺は高松城および城下の建設に始まる市街化により旧状を復元することは困難であるが、近世城下の大手筋とほぼ一致する旧河道分岐点から高松城跡本丸にかけては周辺より高いことから、微高地状を呈した比較的安定した土地の可能性はある。これまでの高松城周辺の調査では11世紀後半以降の遺構・遺物が検出されており、既に中世前半には安定した地盤が面的に形成されていたことがうかがえる（佐藤2003）。なお、松平大膳家上屋敷跡において弥生時代終末期と考えられるピット群、8世紀末～9世紀と考えられる溝が検出されており（小川ほか2004）、標高の高い大手筋では、微高地の形成がさらに遡る可能性がある。

この微高地の海浜部には、現在のJR軌道とほぼ同位置・同方向の砂堆がある。発掘成果を考慮すると、この砂堆は現・高松駅付近で最も海側に突出するとみられ、やや南に湾曲して東ノ丸北半へと連続するようである。高松城跡東ノ丸（渡部ほか1987）や浜ノ町遺跡（乗松2004）の発掘では、この砂堆は中世を通じて堆積が進んだことをうかがわせるデータが得られている。

第2節 高松城築城以前の歴史的環境

先述したように、高松城跡周辺では、古代に遡る遺構はほとんど見られず、松平大膳家上屋敷跡において弥生時代終末期と8世紀末～9世紀と考えられる遺構がわずかに検出されているのみである。ただし、高松城跡周辺での発掘調査において弥生土器や須恵器等の出土量は決して少なくなく、大手筋付近に遺跡が所在する可能性は否定できない。なお、古代では平安期の『和名抄』に見られる香川郡12郷の一つである笑原郷に属していたと考えられる。

中世の状況については、文献史料から読み取れる。築城直前の高松については、『南海通記』巻廿の記述が有名である。西側と東側に海が湾入しており、その間の砂州（陸地）が海に向かって突き出す様子が、あたかも一筋の矢のようであり、そのため「^{のほら}籠原」郷と称され、郷内には、「西浜」「東浜」という漁村があったと記載されている。これらから、「籠原」郷が後の高松城下に相当することがうかがえるが、「籠原」という郷名は『和名抄』や中世文書にもみえず、『南海通記』も他の巻では「野原」郷と呼称している。したがって、地域の呼称としては「野原」郷が一般的であったと考えられる。野原郷では、応徳3年（1086）、白河天皇の退位に伴い、郷内の勅旨田が立券されて野原庄が成立し、後に妙法院門跡領となっている。その庄域は康治2年（1143）の太政官牒案（『安楽寿院古文書』）によると、東西南北ともに条里坪付けで記されており、東・西・北は野原郷内で、南は坂田郷におよぶことが分かる。なお、『昭慶門院御領目録案』（嘉元4年：1306）には、野原郷が知行地としてみえるため、郷内全体が立庄されたのではないことが分かる。

野原郷・野原庄の状況についても、文献史料および発掘調査から判明しつつある。まず、応永19年（1412）に虚空蔵院の僧増範が願主となって勸進書写した『北野天満宮一切経』の奥書に野原の寺院として無量壽院・極楽寺・福成寺が見られることから、野原に寺院が多く所在していたことがうかがえる。これらの寺院のうち、無量壽院が発掘調査によって検出されている。「野原濱村无量壽院 天文（以下欠損）九月（以下欠損）」と刻まれた瓦が高松城西ノ丸の下層から出土している（中西ほか2005）。同寺は『無量壽院随願寺記』等によると、天平11年（739）に坂田郷室山の麓に建立された寺で、天文年間（1532～1555）に兵火にかかり野原郷八輪島に移転しており、高松城築城に際して、再度移転している。「天文」と刻まれた瓦や同地の出土遺物が16世紀後半を主体とすることは寺記の記載と一致する。なお、応永19年当時は寺記の記述からすると坂田郷内に所在しており、『安楽寿院古文書』に記載されている、坂田郷にまでおよぶ野原庄の範囲を裏付けるものである。

また、文安2年（1445）の『兵庫北関入船納帳』に「野原」を船籍地としたものがみられる。港の位置については、文献史料から読み取るのは難しいが、高松城跡（西の丸町地区）では、中世前半の港湾関連施設が検出されている（佐藤2003・松本2003b）。搬入された土器も高比率で出土しており、他地域との交易が活発であったことがうかがえる。

さらに、これまでの周辺の発掘調査において港湾施設以外にも11世紀後半以降の遺構が検出されている。浜ノ町遺跡では白磁四耳壺を埋納していた13世紀末～15世紀末の集落が検出され（乗松2004）、東ノ丸地区では16世紀後半以前の漁民の墓群が検出されている（渡部ほか1987）。

表5 高松城略年表

西暦	和暦	主な出来事
1588	天正 16	生駒親正が野原の海浜で高松城築城に着手する。
1600	慶長 5	関ヶ原の戦いに際し、生駒親正は西軍、子の一正は東軍に参陣する。
1601	慶長 6	生駒一正が徳川家康より讃岐 17 万 1800 石余を安堵される。
1602	慶長 7	生駒一正が丸亀城から高松城へ移る。
1610	慶長 15	生駒正俊が家督を継ぎ高松城に居住する。この時に丸亀の町人を高松城下に移し丸亀町と称す。
1627	寛永 4	幕府隠密が讃岐を探索し高松城について、修理が行われていないと報告される。
1636	寛永 13	石垣の修築を許される。
1640	寛永 17	生駒藩騒動の処分として、生駒高俊領地没収され、堪忍料として出羽国矢島 1 万石が与えられる。
1642	寛永 19	松平頼重が常陸下館から讃岐高松 12 万石へ転封を命じられる
1644	寛永 21	松平頼重が高松城修復に着手し、二ノ丸を整備して藩主の居館を建てる。
1646	正保 3	二ノ丸（＝西ノ丸・桜の馬場）・三ノ丸の石垣修築を許される
1647	正保 4	この年から多聞・天守・櫓の修復を行う。
1649	慶安 2	城内の倉庫・石垣が完成する。
1651	慶安 4	高松城の修築を許される。
1652	承応 1	高松城の修築を許される。
1662	寛文 2	落雷で本丸（＝二ノ丸）北西隅の櫓（簾櫓）焼失、多聞 56 間類焼、落雷で消失した多聞櫓の修繕を許される。
1664	寛文 4	城塁の修復を許される。
1667	寛文 7	城塁の修築を許される。
1669	寛文 9	天守の上棟式が行われる。
1670	寛文 10	天守修築完成。
1671	寛文 11	堀渡えが許される。朝比奈甚五兵衛と今泉八郎左衛門を普請奉行とし、城の普請を開始。（＝東ノ丸・北ノ丸の新造）
1672	寛文 12	城の修築が許される。
1676	延宝 4	北ノ丸櫓（＝月見櫓）の上棟をする。
1677	延宝 5	良矢倉が完成し、寛文 11 年からの普請が完了。
1700	元禄 13	御殿が完成。
1707	宝永 4	宝永南海地震で天守・多聞の屋根壁破損、石垣・堀崩壊、櫓崩壊 石垣の修築許される。
1721	享保 6	高松三ノ丸の石壁の修築許される。
1729	享保 14	乾櫓（＝簾櫓？）に落雷
1742	寛保 2	東ノ丸作事方大工小屋より出火、作事役所・米蔵の南 1 棟を焼く。
1743	寛保 3	高松城外濠を浚える。
1744	寛保 4	城下周辺で高潮となる。
1757	宝暦 7	風雨洪水により天守と北西隅櫓の屋根が落ちる。
1758	宝暦 8	天守の鯨を焼物から銚物にする。
1799	寛政 11	西ノ丸に学問所を建て、岡井赤城を総裁とする。
1813	文政 10	西ノ丸の学問所、財政難を理由に廃止される。
1832	天保 3	西ノ丸に史局を設け考信閣と名付ける。
1849	嘉永 2	破損した天守の鯨の鱗を作り直す。
1854	安政 1	安政南海地震で天守屋根壁破損、本丸一重櫓破損、石垣・堀破損、城内建物大破
1868	慶応 4	土佐藩兵を中心とする官軍に開城。松平頼聰が城を出て浄願寺に入り謹慎する。
1870	明治 3	高松城郭、楼、櫓の廃毀を弁官に伺い、許可。
1871	明治 4	高松城内に大坂鎮台第 2 分営を設置。これに伴い郭、楼、櫓の廃毀を中止。
1873	明治 6	鎮台 14 営所制が設置され、丸亀に第五軍管（広島鎮台）の営所を置く。これに伴い、高松の大坂鎮台第 2 分営は廃止。
1884	明治 17	天守解体。
1890	明治 23	高松城を高松松平家に払い下げ。
1902	明治 35	天守跡に玉藻廟完成。
1917	大正 6	披雲閣が完成。
1945	昭和 20	高松空襲により桜御門焼失。
1947	昭和 22	月見櫓、水手御門、渡櫓、良櫓が国宝（のち重要文化財）に指定される。
1954	昭和 29	高松市の所有となる。
1955	昭和 30	史跡指定を受け、高松市立玉藻公園として開放。
1967	昭和 42	良櫓を太鼓櫓台へ移築。
1984	昭和 59	東ノ丸跡石垣を史跡追加指定。

特に片原町遺跡（小川 2002）においては屋敷地（居館）を囲む 15～16 世紀の L 字形の大溝が検出されている。野原に基盤を置いた中世の領主層については、同時代の史料がほとんど存在しないが、『南海通記』に列記されている。永正 5 年（1508）の香西氏園山田郡三谷城記では、「土居構ノ小城持」として真部・楠川・雑賀、「塹セヲ構ヘタル者」として唐人弾正・片山玄蕃・仲備中・岡本（岡田の誤りか？）・藤井が挙げられている。また元亀 2 年（1571）の香西宗心備州兒嶋陣記では、「城持ノ旗下」として藤井・雑賀・岡田丹後・真部、「其村持タル者」として楠川太郎左衛門、「香西城下名アル村主」として唐人弾正・片山志摩・藤井太郎左衛門尉・仲飛驒守が挙げられる。

以上から、中世の高松城周辺は多くの寺院や多くの小領主を抱えることができるだけの経済的基盤を有した港町「野原」と考えられ、地域の中心機能を果たしていた可能性は高い。

第3節 高松城の歴史的環境

高松城は、天正 15 年（1587）に播磨赤穂から讃岐一国の領主に封ぜられた生駒親正によって天正 16 年（1588）に築城が開始された近世城郭である。なお、築城に際してそれまでの「野原」の地名を廃し、山田郡高松郷の名前をとり「高松」と称し、それまでの高松を「古高松」と称するようになった。築城に関する故事はほとんど伝えられておらず、詳細は不明である。築城当初の縄張りは『讃羽綴遺録』によると黒田孝高あるいは細川忠興によるとされており、『南海通記』では黒田孝高と藤堂高虎によるとされているが、いずれも根拠に乏しい。本丸を中心に右回りに二ノ丸・三ノ丸・桜ノ馬場・西ノ丸の 4 つの曲輪を配し、さらにその外側に外曲輪が巡る、いわゆる「連郭式+梯郭式」の曲輪配置である。本丸と二ノ丸を囲むのが内堀、三ノ丸と桜ノ馬場・西ノ丸を囲むのが中堀、その外側で武家屋敷の建ち並ぶ外曲輪全体を囲むものが外堀である。なお、外堀より外側と中堀より内側で地割の方位が異なっており、高松城の下層遺構の地割とそれぞれ一致することから築城前の地割を利用して築城されたと考えられる。

また、やや時代が下るが、17 世紀中葉に描かれたとされる『高松城下図屏風』によると、城下の南端として表現された寺町の外側（南側）に東西方向の堀状の水路が描かれている。これは、ほぼ同時期成立とみられる『讃岐高松丸亀両図 高松城下図』でも描写されており、19 世紀前半の絵図でも確認でき、城下東辺を画する仙場川に繋がっている。『高松城下図屏風』をより仔細に観察すると、堀状の水路は北半が埋め立てられて馬場（古馬場）となっており、17 世紀中葉には既に本来の形態から改変された状況であったことがうかがえる。つまり、本来の水路幅は外堀に匹敵する規模であったことが推測でき、しかも水路北側（城からみて内側）に寺町が展開すること、また大手筋の町名が水路より北側で「丸亀町」、南側で「南新町」となることが指摘できることから、この「水路」は城下を圍繞した総構えの名残である可能性が高い。さらに巨視的に見れば、平野の入り口に当たる国分寺町と鬼無町に関池と衣掛池を築くことで敵の侵入防ぎ、南西に据わる石清尾山塊を防御に利用し、城下の西側郊外を流れる香東川には橋を架けないなどあらゆる配慮がなされていた。

生駒期の城郭の変遷は不明な点が多いが、寛永4年(1627)の『讃岐伊豫土佐阿波探索書』によると、城郭が破損している状況や修復が行われていない様子が記述されており、『生駒家文書』によると寛永13年(1636)に石垣や船入を元のように修築することが許可されている他は修築の記録は無い。一方、『南海通記』によると大手前に位置する「丸亀町」は慶長15年(1610)に丸亀から店を移転させたとされており、城下の都市計画はこの頃まで続いていたことがうかがえる。

生駒親正は豊臣政権下では、中村一氏・堀尾可晴とともに「三中老」として五大老・五奉行の間を調整したとされる。慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いで親正は西軍に属したが、子の一正が東軍に属したことから、讃岐一国17万1800石余は一正に与えられることとなった。一正の後、正俊、高俊と4代続くが、家臣同士の争いから生じたお家騒動(生駒騒動)により、寛永17年(1640)に領地は没収され、堪忍料として出羽国矢島1万石が与えられた。

生駒家の後、一時的に讃岐一国は伊予3藩により分治され、高松城は大洲藩加藤泰興に預けられるが、寛永19年(1642)、徳川御三家の水戸藩主徳川頼房の長子松平頼重が東讃岐12万石の領主となった。水戸家を継いだ徳川光圀は兄を差し置いて藩主になったことを心苦しく思い、頼重の子綱條を水戸徳川家の後継とし、実子頼常を高松藩の2代藩主としている。その後も高松藩と水戸藩の間では養子縁組による相続が行われている。他の御三家の分家は3万石余が最高であることや、江戸城における高松藩主の詰所が溜間となるよう格式が設定されたことから、高松藩が重要視されていたことがうかがえる。このことは、頼重が讃岐入部の際に幕府より中・四国の監察の密命を受けたとされる『増補高松藩記』の記述に通じるものがある。この命を受けてか、慶安元年(1648)には中国地方の沿岸を西下し、小倉まで航海した記録も残っており、西国の状況を調査した可能性も考えられる。

『小神野筆帖』によると、頼重は、入部3年目の寛永21年(1644)から城の修築等を順次行い、正保4年(1647)から寛文10年(1670)にかけてそれまでの3重の天守を3重5階(3重4階+地下1階)に改築している。姫路城天守を模倣しようとしたが断念し、小倉城天守を模倣したとしており、現存する天守の写真や絵図から、南蛮造り(唐造り)であることがうかがえる。また、天守1階平面が天守台から張り出していることも特徴の一つである。天守台の発掘調査では、地下1階を検出し、出土した柱の伐採年が1630～1660年頃と推定されるなど記載を裏付けるものである。さらに『小神野筆帖』には天守の規模も記載されているが、土台痕跡から地下1階の規模は「東西六間 南北五間」との記載どおりであることも判明しており、天守の高さは「高十七間半内石垣四間」の記載からすると13間半(約26.6m)と推定される。

天守改築後も頼重と2代藩主頼常は、寛文11年(1671)から延宝5年(1677)に北ノ丸(新曲輪)・東ノ丸の造営を行い、月見櫓や長櫓を建築した。北ノ丸は、三ノ丸北東部を拡張し、石垣で三ノ丸と分離させることで造営された。また東ノ丸は、旧「いほのたな町」(魚棚町)東辺に堀を掘削して造営された。これに伴い、桜ノ馬場南面に所在した大手の木橋が撤去され、新たに桜ノ馬場東面に造営された太鼓門が大手門としての機能を担うようになった。そして新曲輪の

造営後、三ノ丸に御殿（披雲閣）が造営され、元禄13年（1700）に完成させた。披雲閣の造営により、それまでの御殿（本丸→本丸・二ノ丸）と対面所（桜ノ馬場）に分掌されていた政庁機能が一本化された。同時に、それまで西ノ丸には、生駒期に生駒隼人、松平期には肥田和泉といった大身の家臣ないし身内の屋敷があったが、これら屋敷地も外曲輪へ移動し、内曲輪と外曲輪との機能分化が明確化しており、縄張りにも藩主権力の確立過程が示されていると言える。

その後、宝永および安政の南海地震や、落雷、火事、そして海城ゆえの高潮被害等の災害記録が見え、また、石垣修理や堀浚え等の許可の記録は見られるが、大幅な縄張りの改変もなく、松平氏の治世は明治維新まで続くことになる。

また、近年、外曲輪において多くの発掘調査が行われ、絵図や文献との整合が確認されている。内曲輪の旧大手前面に所在した藩主連枝松平大膳家屋敷跡では『高松市街古図』に描かれた位置で門を検出した他、同家の家紋をあしらった理兵衛焼や瓦が出土している（大嶋2002・小川2004）。同様の事例は、西の丸町地区の発掘調査において、『高松城下図屏風』に描かれた鍵型の道路を検出され、生駒期には上坂勘解由、松平期には大久保家の屋敷地であり、そのことを示す木簡や家紋瓦が出土している（佐藤2003）。また、外曲輪南辺では『高松城下屋敷割図』に「井戸址」という標記が見え、同位置で生駒家の家紋が刻印された石材を使用した大型井戸が検出されている（小川2006）。

一方、城下については、『高松城下図屏風』によると、早くも1640年代半ばには総構えラインを超えて城下が拡大している様子が描かれている。18世紀代には、南に延伸された大手筋と、西



第2図 史跡高松城跡と周辺の遺跡

浜村方面の丸亀街道沿いを中心に町屋が広がり、南端は石清尾山八幡門前（旅籠町・岩清尾馬場町）、西端は摺鉢谷川（西浜町）にまで達するようになる。また、これらの町家に挟まれるように、城下南西側に武家屋敷が広がるようになる。さらに拡大した城下の南辺に、新たな寺町が形成されている。その結果、東は仙場川、南は旅籠町から仙場川に架る高橋に延びる三十郎土手と呼ばれた堤と水路、西は摺鉢谷川より内側が一部に田畑を含むものの新たな城下の範囲となった。頼重入部後の慶安・明暦期には、多くの町触が出されており、この時期に町方支配のための都市法が整備されたものとみられる。城下では亀井戸跡、紺屋町遺跡において発掘調査が行われているのみで、詳細は不明である。紺屋町遺跡は絵図によると江戸時代には紺屋町と鍛冶屋町があった場所に比定され、鍛冶屋町に相当する場所からふいご羽口や鉄滓が出土している（末光 2003）。なお、城下町の支配機能としては、町奉行（当初1名で後2名）と町与力が置かれていた。奉行所は絵図では高松城の南東隅に位置し、発掘調査でも奉行所の堀跡と考えられる遺構が検出されている（小川 2005）。

第4節 廃城後の歴史的環境

慶応4年（1868）、朝廷は高松藩を朝敵として征討することを命じた。これに対して高松藩は、城下に陣を構えた土佐藩を中心とした官軍に開城した。維新後も内曲輪の管理は高松藩が行っていたが、『公文録』等によると、明治3年（1870）に建物の老朽化および修繕管理費用が多額におよぶことを理由に政府（弁官）に廃城願を出し、許可されている。明治4年（1871）、藩は領民に城内の見物をさせ、藩庁を内町の松平操邸に移して準備を行っていたが、城跡に大阪鎮台第2分営が置かれることが決定し、建物の破局が中止され、兵部省（のち陸軍省）の管理となった。その後、鎮台の配置を改め、明治6年（1873）に丸亀に広島鎮台の営所が置かれることとなり、明治7年（1874）丸亀営所の新築により、高松営所が閉じられることとなった。その後も陸軍省の管理下にあり、城郭建物は老朽化を理由にそのほとんどが取り壊され、明治17年（1884）には天守も取り壊しとなった。その後、内曲輪は明治23年（1890）に松平家に払下げとなった。『建物拂下登記願』によると太鼓門・桜御門（および多聞）・鳥櫓（および多聞）・武櫓（および鉄門・黒櫓）・簾櫓・文櫓・多聞・月見櫓（および多聞）・鹿櫓（および多聞）・長櫓が残存していたが、明治35年（1902）の第8回関西府県聯合共進会の会場となった際の高松城の絵図『共進会場平面図』では、建物のほとんどが無くなっていることがうかがえる。明治34～35年（1901～1902）には天守台に藩主頼重を祀る玉藻廟が、大正3～6年（1914～1917）には三ノ丸に松平家の別邸として披雲閣が各々建築され、内苑が整備されている。

外曲輪の変貌はさらに激しく、外堀が早くから埋められ城下と一体となった。さらに、明治19年（1886）に尋常小学校、明治23年（1890）に裁判所、明治24年（1891）に郵便局、明治28年（1895）に県庁等公共施設が建築された。明治30～33年（1897～1900）には外堀の北西端の堀川港を埋め、高松築港工事が行われ、明治34～37年（1901～1904）および大正10～昭和3年（1922～1928）には拡張工事が行われ、城の北側海域が埋立てられ、海城としての景観が失われること

表6 高松城周辺の調査履歴

地図 番号	遺跡名	回数	調査地区名	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
1	高松城跡	1	東ノ丸跡	1985.04.15～1986.05.31	6047	県民ホール建設
2	高松城跡	2	水手御門	1990.05.14～1990.06.05	2000	公園整備
3	高松城跡	3	県民小ホール地区	1995.02.07～1995.03.31	1000	県民小ホール建設
4	高松城跡	4	県立歴史博物館地区	1995.04.01～1996.03.31	5000	県立歴史博物館建設
5	高松城跡	5	西の丸町地区Ⅱ	1995.12.01～1997.03.31	4539	サンボート高松総合整備事業
6	高松城跡	6	西の丸町地区Ⅲ	1997.06.01～2000.12.31	10052	サンボート高松総合整備事業
7	高松城跡	7	作事丸	1997.11.20～1997.12.25	300	事務所建設
8	高松城跡	8	西内町	1997.07.10	47	P T A 会館建設
9	高松城跡	9	地久櫓	1997.12.03	4	史跡整備
10	高松城跡	10	高松北署地区	1998.04.01～1998.06.30	900	高松北警察署建設
11	高松城跡	11	内町	1998.04.16	65	店舗建設
12	高松城跡	12	三の丸	1998.07.08～1998.08.11	14	史跡整備
13	高松城跡	13	西の丸町地区Ⅰ	1999.04.01～2000.12.22	390	サンボート高松総合整備事業
14	高松城跡	14	地久櫓台	1999.10.25～2004.03.23	170	史跡整備
15	高松城跡	15	丸の内地区	2001.04.01～2001.09.30	488	家庭裁判所建設
16	高松城跡	16	松平大膳家中屋敷跡	2002.02.01～2002.03.25	99	弁護士会館建設
17	高松城跡	17	松平大膳家上屋敷跡	2002.04.15～2002.09.01	970	ビル建設
18	高松城跡	18	三の丸、竜櫓台北側	2002.10.07～2002.10.10	8	公園整備
19	高松城跡	19	西の丸町D地区	2002.10.10～2002.10.30	131	サンボート高松総合整備事業
20	高松城跡	20	丸の内	2002.11.28～2002.11.29	10	ビル建設
21	高松城跡	21	寿町一丁目（無量壽院跡）	2002.11.28～2003.03.14	490	都市計画道路高松駅南線建設
22	高松城跡	22	中堀、北浜町	2003.05.13	14	共同住宅建設
23	高松城跡	23	丸の内、都市計画道路高松海岸線街路事業	2003.06.11	23	都市計画道路高松海岸線建設
24	高松城跡	24	丸の内、再生水管布設工事	2003.08.18～2003.09.22	296	再生水管布設
25	高松城跡	25	丸の内、個人住宅建設	2003.08.25～2003.08.26	22	個人住宅建設
26	高松城跡	26	二の丸、玉藻公園西門料金所整備工事	2003.08.26～2003.09.04	10	公園整備
27	高松城跡	27	外堀、西内町、共同住宅建設	2003.10.08～2003.10.09	30	共同住宅建設
28	高松城跡	28	丸の内、共同住宅	2003.11.12～2003.11.19	50	共同住宅建設
29	高松城跡	29	東町奉行所跡	2003.12.08～2004.03.15	511	共同住宅建設
30	高松城跡	30	西の丸町	2004.07.13～2004.07.19	6	ビル建設
31	高松城跡	31	丸の内	2004.07.21	19	ビル建設
32	高松城跡	32	丸の内	2004.11.09	48	個人住宅建設
33	高松城跡	33	鉄門	2005.01.24～2005.08.19	62	史跡整備
34	高松城跡	34	厩跡	2005.02.21～2005.05.12	511	立体駐車場建設
35	高松城跡	35	外堀、兵庫町	2005.05.11～2005.05.12	320	ビル建設
36	高松城跡	36	寿町二丁目地区	2006.01.12～2006.03.28	550	ビル建設
37	高松城跡	37	天守台	2006.11.01～2008.08.31	1530	史跡整備
38	高松城跡	38	江戸長屋跡Ⅰ	2007.06.18～2007.07.31	84	都市計画道路高松海岸線建設
39	高松城跡	39	江戸長屋跡Ⅱ	2008.04.01～2008.04.28	70	都市計画道路高松海岸線建設
40	高松城跡	40	丸の内	2008.11.19	4	共同住宅建設（試掘）
41	高松城跡	41	丸の内	2009.03.02～2009.03.19	45	共同住宅建設
42	高松城跡	42	城内中学校	2009.04.09～2009.07.13	230	シールド掘進機発進立坑掘削
43	高松城跡	43	中堀南岸石垣	2009.10.16	3	石積復旧工事
44	高松城跡	44	本町	2010.02.16	32	事務所建設
45	浜ノ町遺跡		—	2000.02.15～2002.03.31	4992	サンボート高松総合整備事業
46	片原町遺跡		—	2000.06.15～2005.06.22	120	ビル建設
47	紺屋町遺跡		—	1985.01.16～1986.01.07	200	市立美術館建設
48	生駒親正夫妻 墓所		—	—	—	—
49	扇町一丁目遺跡		—	2005.10.26～2005.11.10	88	都市計画道路
50	亀井戸跡		—	2010.07.26～2010.09.30	890	高松丸亀町商店街G街区 第一種市街地再開発事業
51	大井戸		—	—	—	—
52	雑賀城跡		—	—	—	—
53	二番丁小学校遺跡		—	2009.05.01～2009.06.30	467	新設統合第二小学校建設

本表は、渡邊（2011）を一部改変して使用した。

となった。明治末～昭和初期にかけては、西ノ丸および内堀の一部が高松市に譲渡され、その一部に皇太子殿下（昭和天皇）御成婚記念道路（現在の中央道路の根幹）が建設された。

昭和20年（1945）の高松空襲では、桜御門が焼失し、市街地の大部分が空襲に遭い、松平家の文庫や藩政期の文書・記録を引継ぎ保管していた香川県庁も焼失した。高松城内の残存建物のうち月見櫓（含続櫓）・水手御門・渡櫓・長櫓が昭和22年（1947）に旧国宝に指定され、昭和25年（1950）に重要文化財指定された。この後、東ノ丸は運輸省や裁判所の所有地となったが、昭和29年（1954）に本丸・二ノ丸・三ノ丸・北ノ丸・桜ノ馬場および残存する堀が高松市の所有となり、昭和30年に国史跡に指定された。昭和32年（1957）には月見櫓・水手御門・渡櫓の修理が行われた。しかし、長櫓が所在する東ノ丸北部は日本国有鉄道の所有地で、史跡指定地外となっており、その修理および修理後の管理ができないことから、昭和42年（1967）に史跡指定地内の太鼓櫓台に移築復元された。その後、東ノ丸が県有地になり、昭和59年（1984）には長櫓台を含む東ノ丸北辺の石垣が史跡の追加指定を受け、現在に至っている。

外曲輪や城下については、戦後の復興で大きく変貌したが、現在も地割や町名に名残が見える。

引用文献・主要参考文献

- 胡光 2007 「「高松城下図屏風」の歴史的前提」『調査研究報告 第3号』香川県歴史博物館
- 大嶋和則ほか 1999a 『史跡高松城跡（地久櫓跡・三ノ丸跡）史跡高松城跡整備に伴う埋蔵文化財調査報告書』高松市教育委員会
- 大嶋和則 1999b 『財公平公益会事務所改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 高松城跡（作事丸）』高松市教育委員会ほか
- 大嶋和則 2002 『香川県弁護士会会館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡（松平大膳家中屋敷跡）』高松市教育委員会ほか
- 大嶋和則 2004 「高松城跡（外堀、西内町、共同住宅建設）」『高松市内遺跡発掘調査概報 一平成15年度国庫補助事業一』高松市教育委員会
- 大嶋和則 2006 「高松城跡（外堀、兵庫町）」『高松市内遺跡発掘調査概報 一平成17年度国庫補助事業一』高松市教育委員会
- 大嶋和則 2007a 『史跡高松城跡整備報告書 第1冊 鉄門石垣調査・保存整備工事報告書』高松市・高松市教育委員会
- 大嶋和則 2007b 「高松城の発掘成果から」『四国村落研究会シンポジウム 港町の原像 一中世港町・野原と讃岐の港町一』四国村落遺跡研究会
- 大嶋和則 2008a 『史跡高松城跡整備報告書 第2冊 石垣基礎調査報告書』高松市・高松市教育委員会
- 大嶋和則 2008b 「高松城」『季刊考古学 第103号 特集 近世城郭と城下町』優山閣
- 大嶋和則 2008c 『史跡高松城跡整備報告書 第3冊 玉藻廟解体・記録保存調査報告書』高松市・高松市教育委員会
- 小川賢 2002 「片原町遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 平成12年度』香川県教育委員会
- 小川賢ほか 2004 「新ヨンデンビル別館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡（松平大膳家上屋敷跡）」高松市教育委員会ほか
- 小川賢ほか 2005 『共同住宅建設（コトデン片原町パーキング跡地）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡（東町奉行所跡）』高松市教育委員会
ほか
- 小川賢 2006a 「高松城跡（寿町二丁目）」『高松市内遺跡発掘調査概報 一平成17年度国庫補助事業一』高松市教育委員会
- 小川賢ほか 2006b 『丸亀町商店街A街区第一種市街地再開発事業に係る隔地駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡（既跡）』高松市教育委員会ほか
- 小川賢ほか 2007 『寿町二丁目テナントビル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡（寿町二丁目地区）』
- 小川賢ほか 2008 『高松海岸線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第1冊 高松城跡（江戸長屋跡Ⅰ）』
- 川畑聡 2003a 『史跡高松城跡地久櫓台発掘調査概報 平成11～13年度調査』高松市教育委員会
- 川畑聡 2003b 『史跡高松城跡（三ノ丸、竜櫓台北側）』『高松市内遺跡発掘調査概報 一平成14年度国庫補助事業一』高松市教育委員会
- 川畑聡 2003c 「高松城跡（丸の内）」『高松市内遺跡発掘調査概報 一平成14年度国庫補助事業一』高松市教育委員会
- 川畑聡 2004a 『史跡高松城跡地久櫓台発掘調査概報 平成14・15年度調査』高松市教育委員会
- 川畑聡ほか 2004b 「高松城跡（中掘、北浜町）」『高松市内遺跡発掘調査概報 一平成15年度国庫補助事業一』高松市教育委員会
- 川畑聡ほか 2004c 「高松城跡（丸の内、都市計画道路高松海岸線街路事業）」『高松市内遺跡発掘調査概報 一平成15年度国庫補助事業一』高松市教育委員会
- 川畑聡ほか 2004d 「高松城跡（丸の内、個人住宅建設）」『高松市内遺跡発掘調査概報 一平成15年度国庫補助事業一』高松市教育委員会
- 川畑聡ほか 2004e 「史跡高松城跡（二ノ丸、玉藻公園西門料金所整備工事）」『高松市内遺跡発掘調査概報 一平成15年度国庫補助事業一』高松市教育委員会
- 川畑聡 2004f 「高松城跡（丸の内、再生水管布設工事）」『高松市内遺跡発掘調査概報 一平成15年度国庫補助事業一』高松市教育委員会
- 川畑聡ほか 2004g 「高松城跡（鶴屋町、共同住宅建設）」『高松市内遺跡発掘調査概報 一平成15年度国庫補助事業一』高松市教育委員会
- 川畑聡 2005a 「高松城跡（西の丸町）」『高松市内遺跡発掘調査概報 一平成16年度国庫補助事業一』高松市教育委員会
- 川畑聡ほか 2005b 「高松城跡（内町）」『高松市内遺跡発掘調査概報 一平成16年度国庫補助事業一』高松市教育委員会
- 川畑聡ほか 2005c 「高松城跡（丸の内）」『高松市内遺跡発掘調査概報 一平成16年度国庫補助事業一』高松市教育委員会
- 川畑聡 2005d 「高松城跡（丸の内）」『高松市内遺跡発掘調査概報 一平成16年度国庫補助事業一』高松市教育委員会
- 北山健一郎 1999 『香川県歴史博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡』香川県教育委員会ほか
- 小山勝 2005 『ケンブリッジ大学秘蔵明治古写真 マーケーザ号の日本旅行』平凡社
- 佐藤竜馬ほか 2003a 『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 高松城跡（西の丸町地区）Ⅱ』香川県教育委員会ほか
- 佐藤竜馬 2003b 『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡（西の丸町D地区）』香川県教育委員会
- 佐藤竜馬 2007a 「考古学の視点から見た「高松城下図屏風」」『調査研究報告 第3号』香川県歴史博物館
- 佐藤竜馬 2007b 「初期高松城下町の在地的要素」『四国村落研究会シンポジウム 港町の原像 一中世港町・野原と讃岐の港町一』四国村落遺跡研究会
- 佐藤竜馬 2007c 「戦国期 伊勢御師の軌跡をたどる」『四国村落研究会シンポジウム 港町の原像 一中世港町・野原と讃岐の港町一』四国村落遺跡研究会
- 末光甲正 2003 『紺屋町遺跡』高松市教育委員会
- 高橋学 1992 「高松平野の地形環境 一弘福寺領山田郡田図比定地付近の微地形環境を中心に一」『讃岐国弘福寺領の調査 弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書』高松市教育委員会
- 高松市 1971 『史跡高松城保存修理工事報告書 鞘橋解体復元工事報告書』
- 中西克也 2005 『市街地再開発関連街路事業（高松駅南線）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第1冊 高松城跡（無量壽院跡）』高松市教育委員会
- 中西克也 2007 『市街地再開発関連街路事業（高松駅南線）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第2冊 高松城跡（寿町一丁目）』高松市教育委員会
- 乗松真也 2004 『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第6冊 浜ノ町遺跡』香川県教育委員会ほか
- 古野徳久 2001 『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 高松城跡（西の丸町地区）Ⅰ』香川県教育委員会ほか
- 松本和彦 2003a 『高松家庭裁判所移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡（丸の内地区）』香川県教育委員会ほか
- 松本和彦ほか 2003b 『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第5冊 高松城跡（西の丸町地区）Ⅲ』香川県教育委員会ほか
- 松本和彦 2007 「野原の景観と地域構造 一発掘成果を中心に一」『四国村落研究会シンポジウム 港町の原像 一中世港町・野原と讃岐の港町一』四国村落遺跡研究会
- 森下英治 1995 「高松城跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 平成6年度』香川県教育委員会
- 森下友子 1996 「高松城下の絵図と城下の変遷」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 研究紀要Ⅳ』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
- 山元敏裕ほか 1991 「史跡高松城発掘調査報告書 一玉藻公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査一」『高松市文化財調査報告書』高松市教育委員会
- 山元敏裕ほか 2004 「高松城跡（丸の内、共同住宅建設）」『高松市内遺跡発掘調査概報 一平成15年度国庫補助事業一』高松市教育委員会
- 山元素子ほか 1999 『高松北警察署建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成10年度 高松城跡』香川県教育委員会ほか
- 渡部明夫ほか 1987 『高松城東ノ丸跡発掘調査報告書』香川県教育委員会

第3章 発掘調査成果

第1節 発掘調査の概要

高松城は天正16年(1588)に生駒親正が築城を開始した城郭であり、その縄張りは本丸を中心に右回りに二ノ丸・三ノ丸・桜ノ馬場・西ノ丸を配し、その外側に外曲輪が巡る、いわゆる「連郭式+梯郭式」の曲輪配置である。生駒期の城郭の変遷は不明な点が多いが、文献等の検討により大幅な改修はなされていないと考えられる。天守に関しては絵図から3重4階であった可能性がある。寛永17年(1640)に生駒氏が出羽国矢島に転封となり、代わって寛永19年(1642)に松平頼重が領主として高松に入った。頼重は正保3年(1646)以降石垣の改修を順次行い、寛文10年(1670)に天守を3重5階に改築したとされる。さらに頼重と2代藩主頼常は大規模な曲輪の改修を行った。

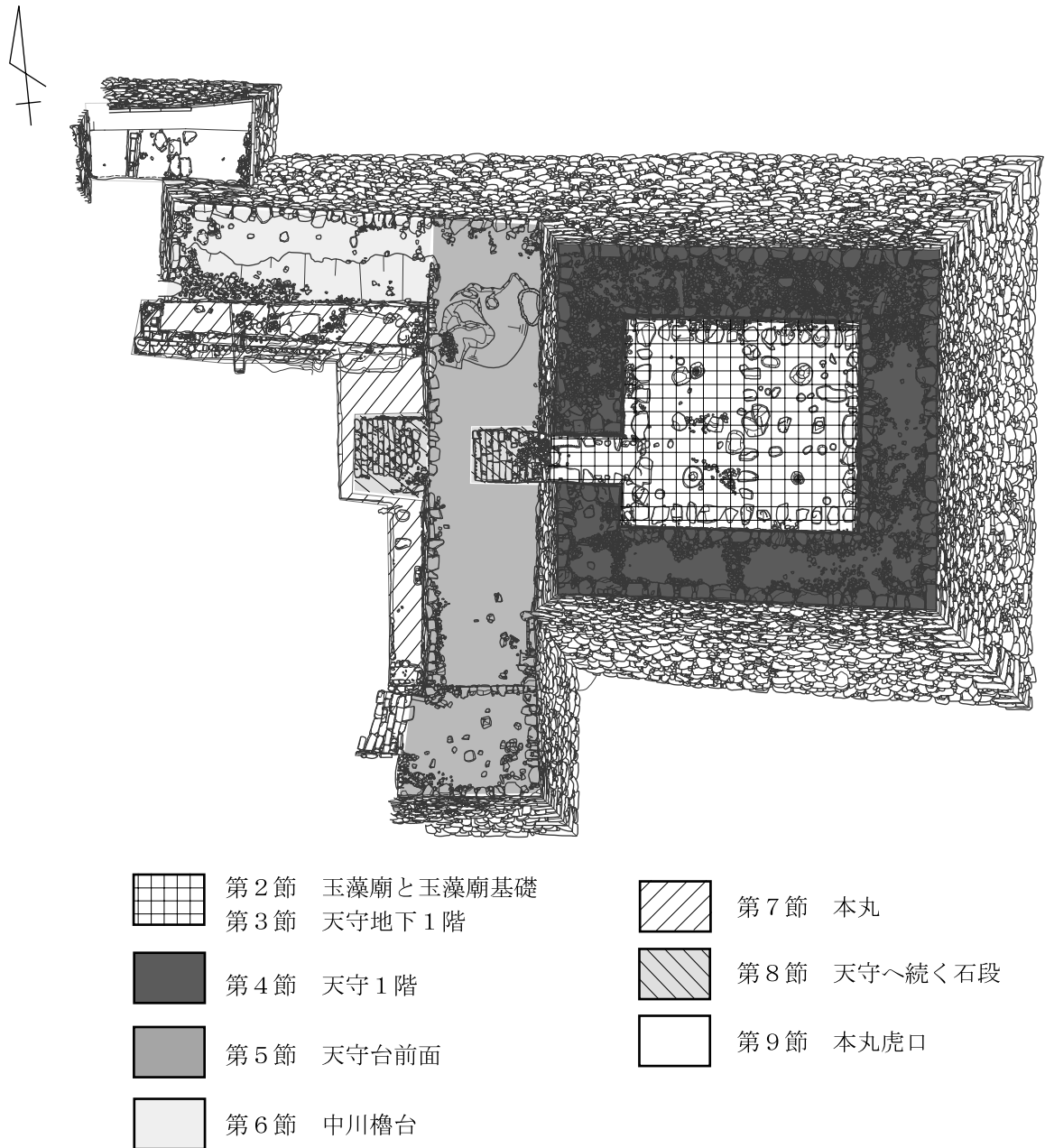
今回の発掘調査は、平成18年度、19年度、22年度、23年度の4ヵ年にわたって実施した。平成18年度には天守台、天守台前面、中川櫓台、本丸虎口を対象に調査を実施した。天守地下1階においては、玉藻廟基礎の石垣や灯籠基礎の石垣を検出し、その石垣の積上げと同時に地下1階を埋立てていた土砂より多量の陶磁器・瓦・鉄製品・土製品・石製品等が出土した。また、地下1階入口を閉塞する石垣を検出した際には「柵天守九尺五寸下水」や「○」「ー」などの墨書を発見した。さらに、玉藻廟基礎の石垣を取り除いた天守地下1階床面では、明治時代の遺構とともに、礎石や掘立柱跡など江戸時代の遺構を検出した。後者の遺構は、「田」の字状に並んだ礎石、礎石の空白部分の4箇所にある掘立柱跡であり、さらに礎石上には土台の設置位置を示す可能性がある線刻や変色・剥離、入口礎石にあるホゾ穴と筋金の錆の痕跡が確認できた。この遺構は天守の内部構造を解明する上で重要である。天守1階部分では、礎石と礎石抜き取り痕を検出した。天守台前面では本丸南側の多聞櫓に伴う段石垣、地下1階入口に繋がる上部の石段を検出した。中川櫓台では櫓の礎石、本丸虎口では段石垣と石組みの排水溝を検出した。

平成19年度の調査は天守台前面、本丸を対象に実施した。本丸では南側の多聞櫓の前面と中川櫓台の前面に排水溝を検出し、中央に天守地下1階入口に繋がる石段の下部を検出した。

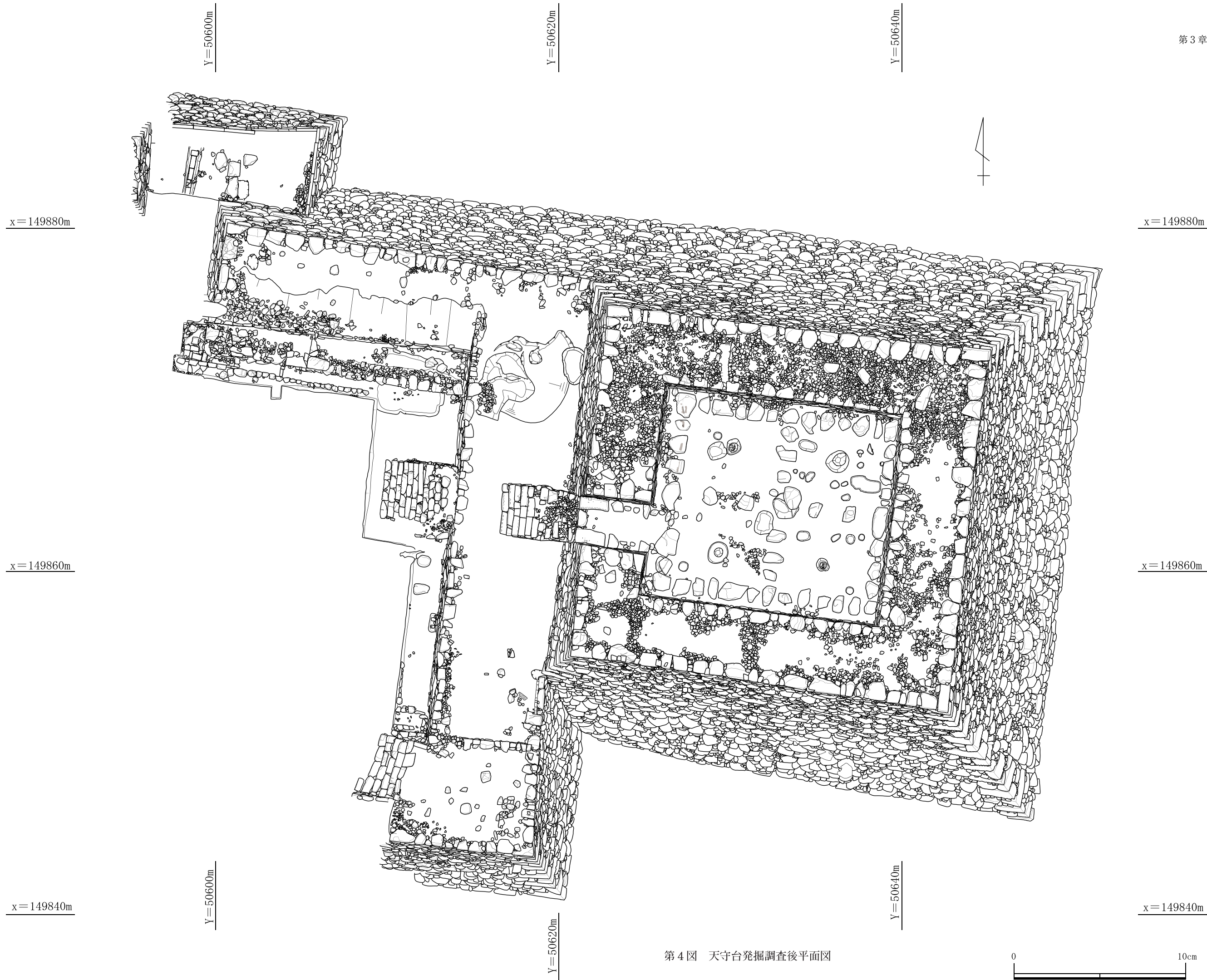
平成22年度の調査は中川櫓台の南面石垣の裾部を調査し、埋没していた櫓台の石垣を検出するとともに、併走する排水溝と中川櫓と中櫓の間に架設されていた門の礎石を検出した。

平成23年度は22年度に検出した排水溝と門の礎石の追加調査を実施した。

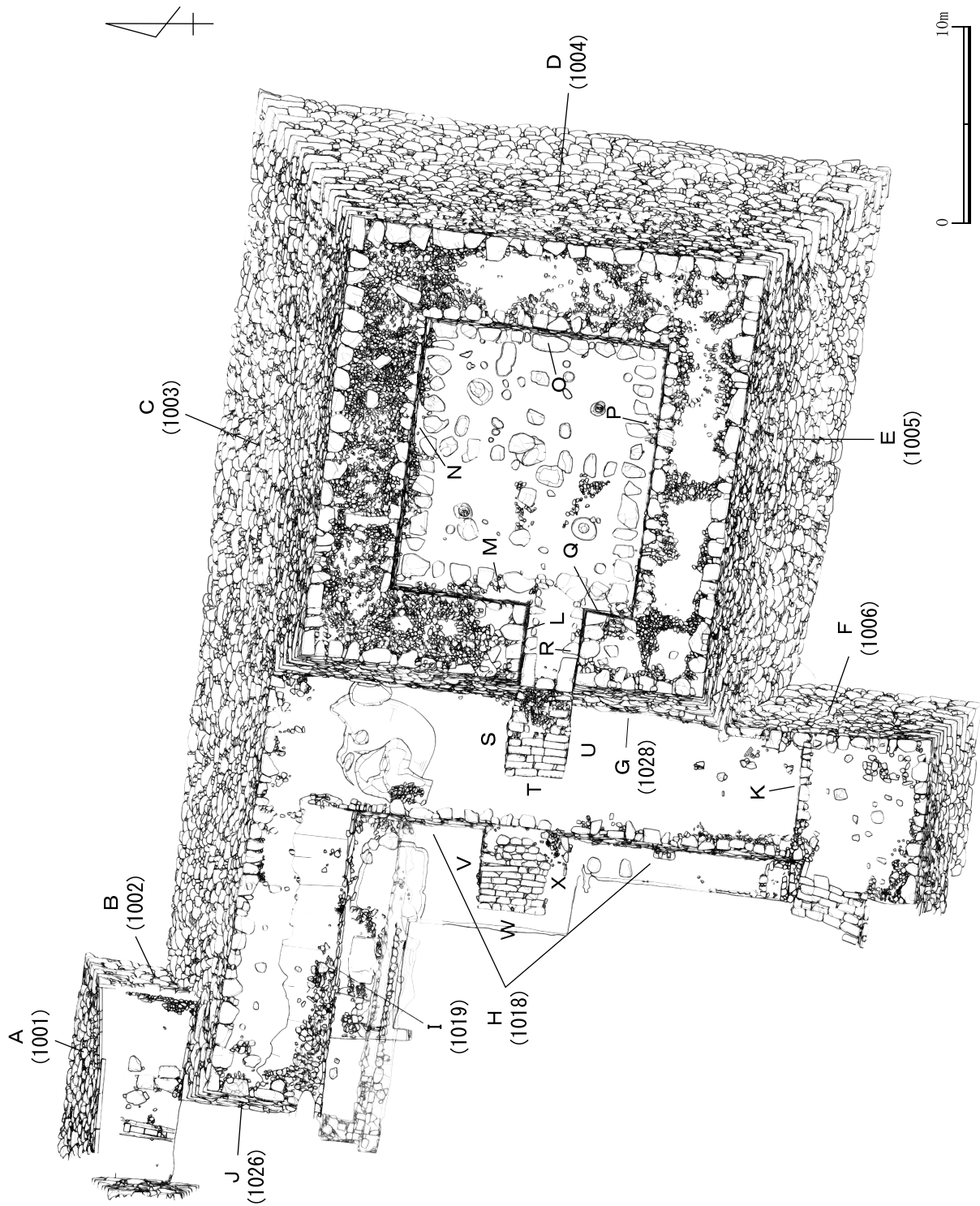
本書では、以下に示す地区別に調査成果を報告することとする(第3図)。第2節は玉藻廟と玉藻廟基礎、第3節は天守地下1階、第4節は天守1階、第5節は天守台前面、第6節は中川櫓台、第7節は本丸、第8節は天守へ続く階段、第9節は本丸虎口についてそれぞれ記す。第2節と第3節に関しては、調査を実施した地区は同一であるが、検出した遺構の性格や時期が全く異なるために節を分けて報告する。おおむね明治時代以降の遺構を第2節、江戸時代の遺構を第3節にて報告する。また第8節では、天守へ続く石段について報告する。この階段は上段と下段の二つの石段から成り立っており、上段の石段は天守台前面で検出し、下段は本丸において検出された。



第3図 本章の節立て区分図



第4図 天守台発掘調査後平面図



第5図 石垣各面の名称図

検出位置は上記の地区区分では2地区に分かれてしまうものの、本丸から天守地下1階に登るための一連の石段であることから第8節にまとめる。

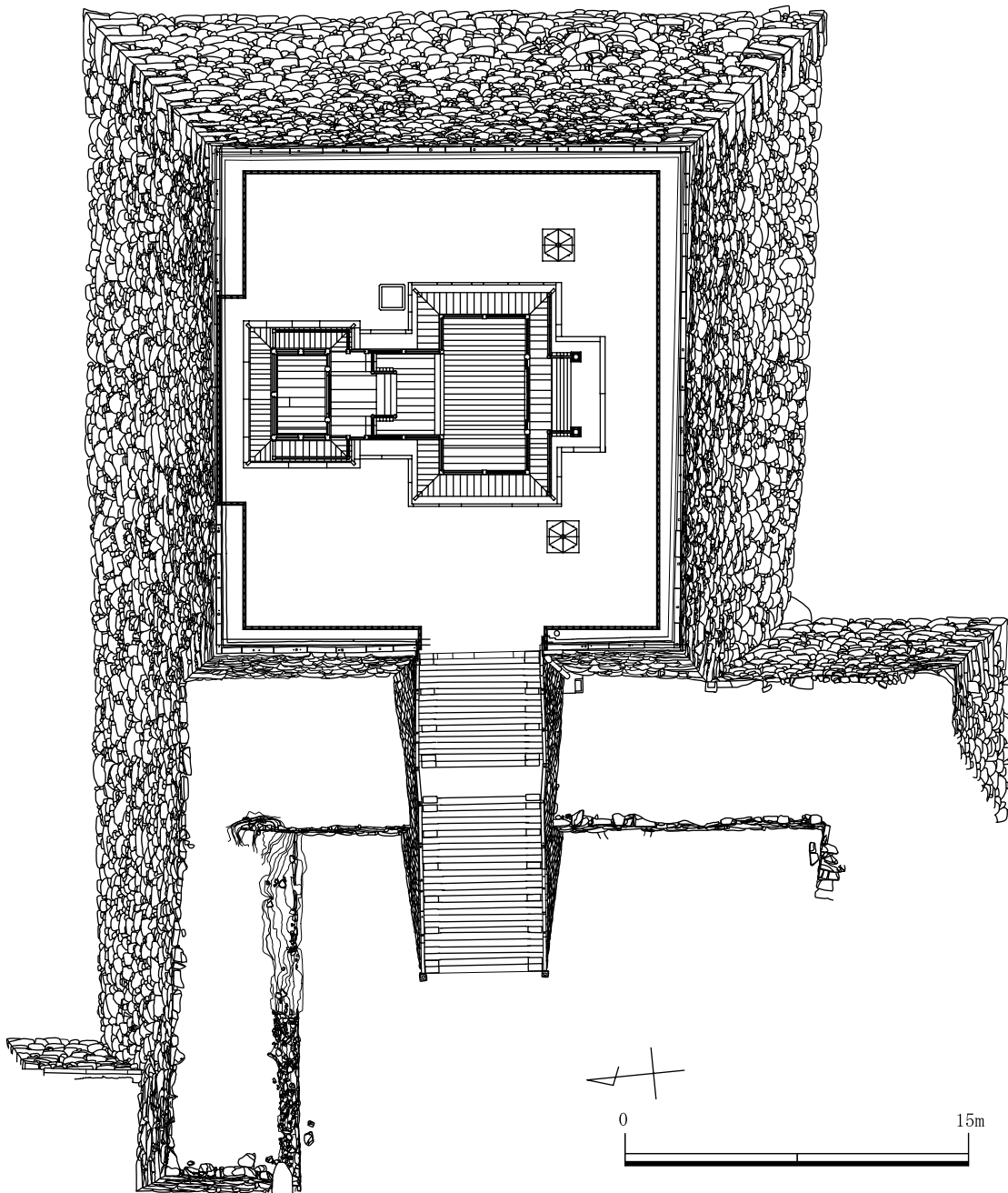
史跡高松城内に現存する石垣に関しては、2008年に刊行された『史跡高松城整備報告書 第2冊 石垣基礎調査報告書』において詳細な報告を行っている。その報告書の中で現在史跡に指定されている地域を本丸、二ノ丸、三ノ丸、北ノ丸、桜ノ馬場、その他地区に区分し、その地区ごとに4桁の石垣番号を付している。石垣の折れから折れを1面として捉え、石段は全体で1面としている。今回調査を実施した本丸では1001から番号を付し始めており、1049まで付けている。本報告書の刊行にあたり、その石垣番号を踏襲すべきであるが、発掘調査時と整理調査時の混乱を回避することと石段についてより詳しく説明するために、発掘調査により新たに検出した石垣を含む本報告書に係る全ての石垣は第5図に示すように発掘調査で使用していたアルファベットで表記することとする。石垣の1面が折れから折れの範囲を示すことは『石垣基礎調査報告書』と同様であるが、石段は全体で1面とはせず、踏み面と側面に区分して番号を付す。本丸の石垣はA面・B面・C面・・・V面・W面・X面と表記する。

第2節 玉藻廟と玉藻廟基礎 (第6～128図)

1 玉藻廟と調査の概要 (第6・7図)

高松城は建物の老朽化と修繕管理費用が多額に及ぶことを理由に、陸軍省所管時の明治17年(1884)に天守が取り壊された。その後、明治23年(1890)に高松松平家へ払下げられ、第11代当主の松平頼聰が高松松平家の鎮守の廟として藩祖松平頼重を祀る玉藻廟を明治35年(1902)に建設した。その際に天守地下1階の床面から玉藻廟の平面形に合わせて石垣を積上げて基礎としており(第7・8図)、石垣の積上げと同時に土砂を搬入して地下1階部分を埋立てている。こうして造成された平坦面上に玉藻廟が建てられた。同時に本丸から天守台上部の玉藻廟へ上がるための階段が天守台西面に設置された。2008年に刊行した『玉藻廟解体・記録保存調査報告書』に玉藻廟の詳細を掲載しているが、概要は以下のとおりである。玉藻廟は南から拝殿・幣殿・本殿の三つの建物から構成され、社殿は権現造である。拝殿の平面は桁行3間、梁間2間で、背面中央間にて幣殿と接続し、正面に5段の木階を設ける。幣殿は桁行1間、梁間2間で、本殿との境に3段の木階、拝殿との境に1段の木階を設ける。本殿は桁行3間、梁間2間である。平成18年(2006)に天守台石垣の解体修理工事に伴って玉藻廟を解体した。

玉藻廟解体後の天守台石垣の最上段の標高は12.80～13.00mである。天守台の最上部は玉藻廟建設によって改変を受けており、特に天守台の南東隅を中心とする東側と南側は改変の影響が大きく、石・礫やコンクリートを含む第1層が最深部で最上段の石垣より約1.00mの深さまで入り込んでいる。天守台最上位に堆積する第2層である淡黄色粘質土を取り除くと、天守1階と玉藻廟基礎の石垣の天端を検出した。天守地下1階に堆積する土は、玉藻廟建設に伴い基礎の石垣を積上げると同時に埋立てられた土である。埋土は人為的に埋立てられ、非常に複雑な堆積状態を呈す。さらに玉藻廟基礎の石垣に囲まれた部分は非常に狭い空間であり、厳密に分層すること

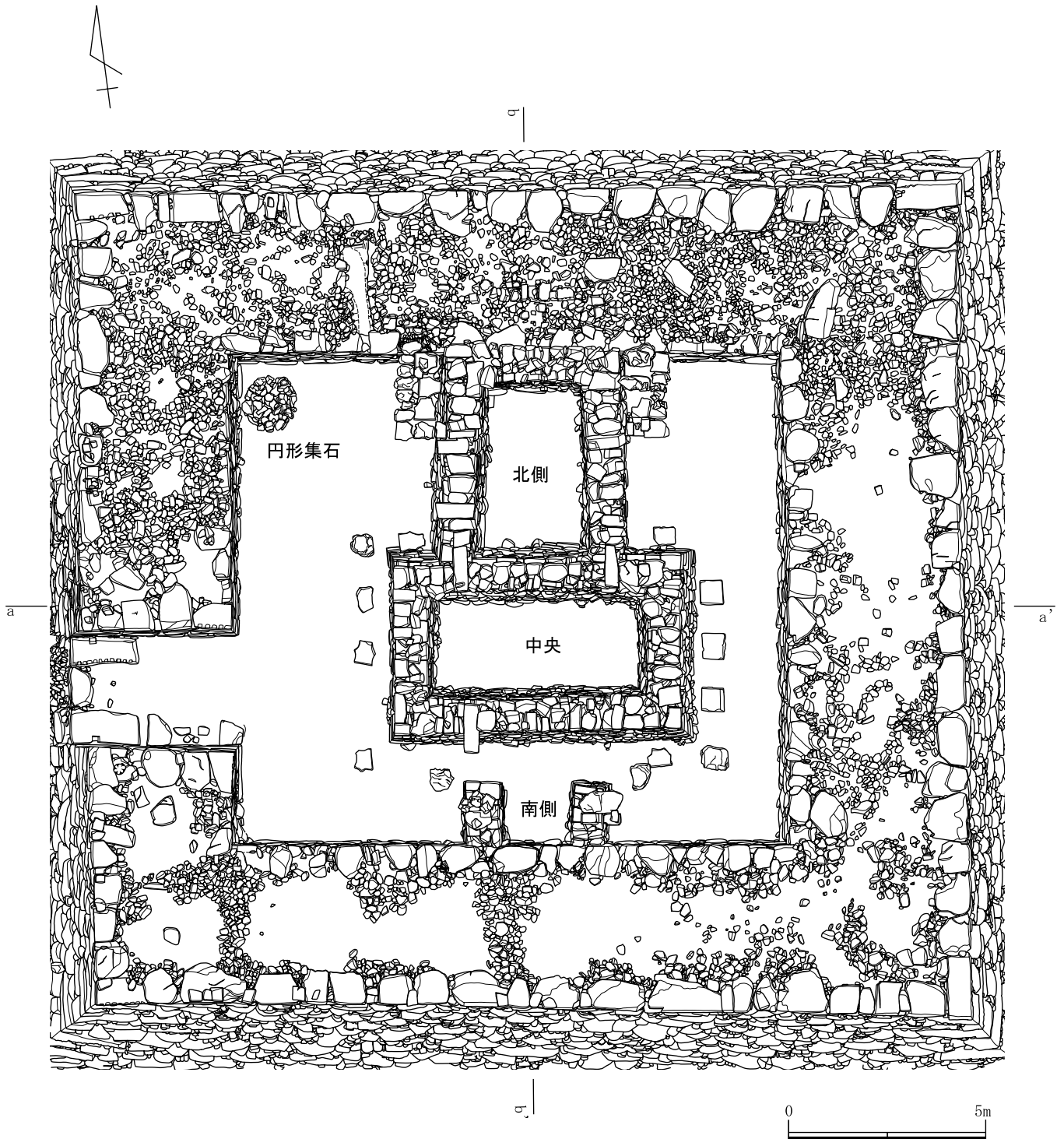


第6図 発掘調査以前の天守台と玉藻廟

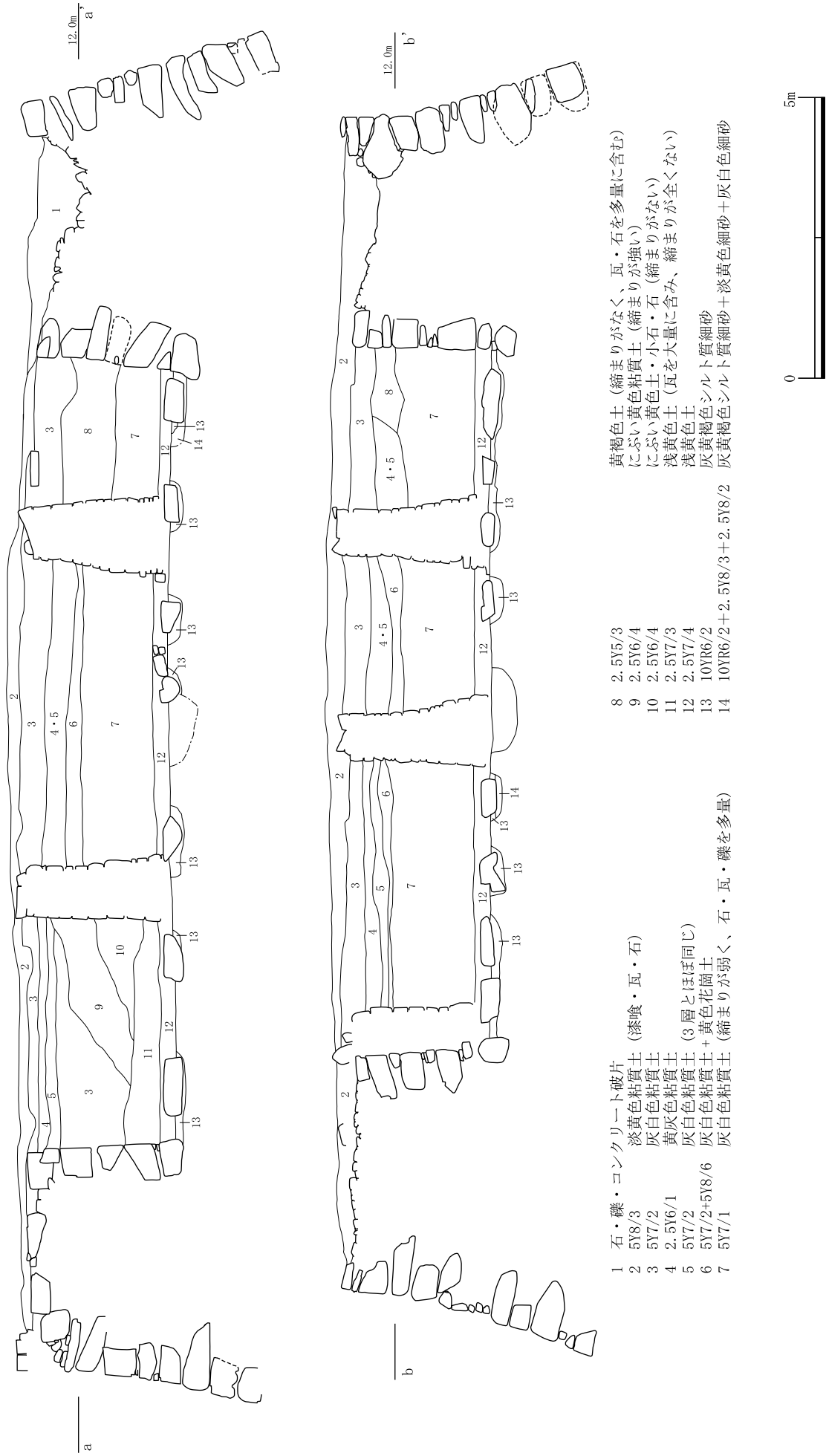
は困難であったが、土の色や締まり具合の違いにより大まかに上位から3～12層に分層した。ほとんどの土層は土器や瓦、石や礫を多量に含み、締りが弱い。第3～6層は天守地下1階の上部～中位に堆積し、第7～11層は天守地下1階の中位～下部に堆積し、第12層は天守地下1階の床面直上に堆積していた。ただし、第7層は細かな土層の違いが複雑に見られる。

2 玉藻廟基礎 (第9～16図)

発掘調査では、玉藻廟の基礎である石垣を天守地下1階の中央部において検出した。検出状況は第7図のとおりである。基礎は地下1階の床面直上から石を積上げた石垣であり、石垣を築き



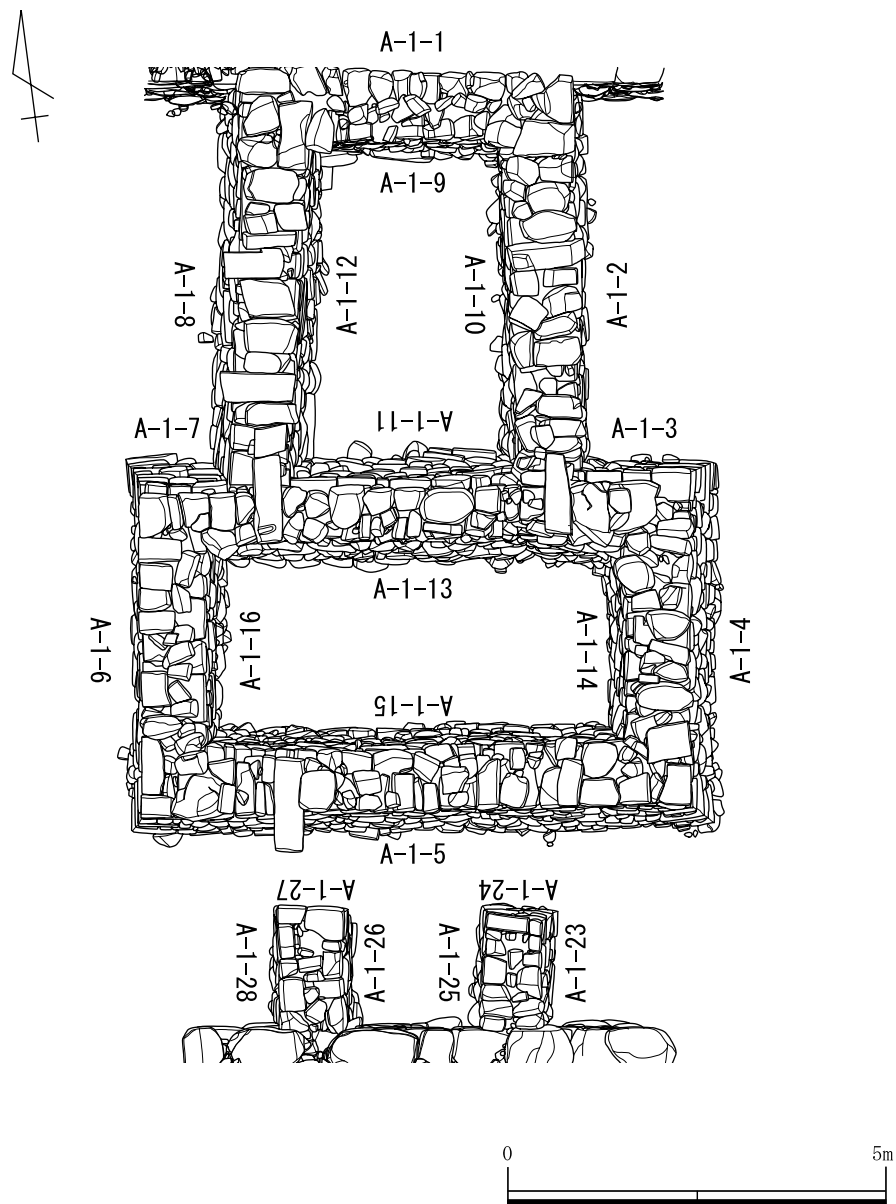
第7図 玉藻廟基礎平面図



- | | | | | |
|---|--------------------------------|----|-------------------------|----------------------------|
| 1 | 石・礫・コンクリート破片 | 8 | 2.5Y5/3 | 黄褐色土 (縮まりがなく、瓦・石を多量に含む) |
| 2 | 5Y8/3 淡黄色粘質土 | 9 | 2.5Y6/4 | にぶい黄色粘質土 (縮まりが強い) |
| 3 | 5Y7/2 灰白色粘質土 | 10 | 2.5Y6/4 | にぶい黄色土 (縮まりがない) |
| 4 | 2.5Y6/1 黄灰色粘質土 | 11 | 2.5Y7/3 | 浅黄色土 (瓦を大量に含み、縮まりが全くない) |
| 5 | 5Y7/2 灰白色粘質土 | 12 | 2.5Y7/4 | 浅黄色土 |
| 6 | 5Y7/2+5Y8/6 灰白色粘質土 + 黄色花崗土 | 13 | 10YR6/2 | 灰黄褐色シルト質細砂 |
| 7 | 5Y7/1 灰白色粘質土 (縮まりが弱く、石・瓦・礫を多量) | 14 | 10YR6/2+2.5Y8/3+2.5Y8/2 | 灰黄褐色シルト質細砂 + 淡黄色細砂 + 灰白色細砂 |

第8図 天守地下1階東西・南北断面図

ながら同時に内部を土で埋立てていたものと考えられる。基礎の石垣は5部分からなっており、北側には南北方向に長軸を有する長方形に囲む石垣、中央には東西方向に長軸を有する長方形に囲む石垣、南側には長方形を呈する二つの石垣、南東側と南西側には正方形を呈する二つの石垣がある。さらに北側の石垣の東側と西側には長方形を呈する石垣が玉藻廟基礎の石垣と接する位置に検出され、中央の石垣の周囲では方形の石が規則的に囲むように検出される。また、北西側に円形を呈する集石が検出される。しかし、北側の石垣（A-1-2、A-1-8）に接する石垣と南東側と南西側にある正方形の石垣は崩落の危険性があるため記録化を断念して調査の途中で取り除い



第9図 玉藻廟基礎石垣各面の名称

た。そのために第7図等にはこの石垣は図化できていない。中央の石垣の周囲にある石と円形の集石は一石ないし二石積みであるので、平面図作成後に取り除いた。

これらの石垣と玉藻廟を対応させると、北側の石垣は幣殿と本殿の基礎、中央の石垣は拝殿の基礎、南側の石垣は5段の木階の基礎、南東側と南西側の石垣は灯笼の基礎と考えられる。北側の石垣の東側と西側に検出した石積みは本殿の縁束の基礎、中央の石垣天端の周囲に等間隔に置かれた石は拝殿の縁束の基礎と考えられる。

玉藻廟基礎に使用された石材と埋立てに使用された土砂は非常に膨大な量であり、周囲を堀に囲まれた天守台に城外から搬入されたとは考えにくい。第6節と第7節で後述するように中川櫓台や、今回の調査対象地外であるが、本丸の南多聞櫓台などが大きく崩れて土砂や石材が失われていることから、これらを崩して石材と土砂をまかなったと考えられる。中川櫓台は調査前では南北約5.50 mの幅であるが、平成22年度調査において中川櫓台の本丸石垣裾部の旧状が明らかになり、櫓台本来の幅は約7.50 mであることが判明した。玉藻廟建設に際し幅約2.00 m、高さ約1.60 mの規模で中川櫓台が削平されたと考えられる。南多聞櫓台は現状では約2.50 mの幅であるが、平成18・19年度の調査により櫓台本来の幅は約6.50 mであると推測される。玉藻廟建設に際し幅約4.00 m、高さ約1.60 mの規模で南多聞櫓台が削平されたと考えられる。さらにこれも今回の調査対象ではないが、本丸の西側にある地久櫓と矩櫓に繋がる多聞櫓台でも現状の幅は約2.50 mと狭く、同様に削平を受けた可能性が考えられる。

北側の基礎(A-1-1, A-1-2, A-1-8, A-1-9, A-1-10, A-1-12)は地下1階の北側石垣の上面に一部重なるように築かれ、南端は中央の基礎と接し、地下1階の床面直上から石を積上げた石垣である。その規模は天端で南北約5.50 m、東西約4.30 m、高さは約2.70 mを測り、内法は天端で南北約4.50 m、東西約2.70 mで、勾配は85度である。石垣の幅は天端約0.90 m、基底部で1.20～1.40 mである。石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石と切石の乱積であり、角張った石が多い。石垣の東側と西側には全長約2.40 m、幅約1.30 mを測る石垣を基礎の石垣と接して検出され、地下1階の床面からやや不安定な状態で積み上げている。北側には全長約3.70 m、幅約0.50 mを測る1段の石列を検出した。石材は花崗岩、安山岩の野面石と切石である。北側の基礎は玉藻廟の本殿と幣殿の礎石を支える石垣であり、その上に礎石として花崗岩延石を並べ、礎石上には土台を置いている。石垣の周囲にある床面直上から積上げた石垣は本殿の縁束が立つ花崗岩延石の基礎である。

中央の基礎(A-1-3, A-1-4, A-1-5, A-1-6, A-1-7, A-1-11, A-1-13, A-1-14, A-1-15, A-1-16)は地下1階の床面直上から石を積上げた石垣であり、天端で東西約7.20 m、南北約4.30 m、高さは約2.70 mを測り、内法は天端で東西約5.50 m、南北約2.70 mである。勾配は80～85度である。石垣の幅は天端約0.90 m、基底部で1.30～1.50 mである。石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石と切石の乱積であり、角張った石が多い。四隅の隅角部は切石によって積上げられている。北側の基礎との接合部分には1.10×0.35 mを測る長方形の花崗岩切石が置かれている。この石垣天端の周囲ではほぼ等間隔に花崗岩・凝灰岩の切石と安山岩の野面石を検出した。中央

の基礎としての石垣は拝殿の礎石を支える基礎であり、その上に礎石として花崗岩延石を並べ、礎石上には土台を置いている。石垣天端の周囲に等間隔に置かれる花崗岩の切石や安山岩の野面石は拝殿縁束の礎石の基礎であり、この上に拝殿縁束の礎石である花崗岩切石が設置される。

南側の基礎（A-1-23, A-1-24, A-1-25, A-1-26, A-1-27, A-1-28）は地下1階の南側石垣と接続して築かれた二つの長方形の石垣であり、地下1階の床面直上から石を積上げた石垣である。全長は1.50 m、幅0.85 m、高さ2.20 mを測る。勾配は85～90度である。石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石と切石の乱積であり、角張った石が多い。隅角部は上半部が切石、下半部が野面石によって積上げられている。南側の2箇所の石垣は拝殿正面中央間の縁に設置される5段の木階の基礎である。

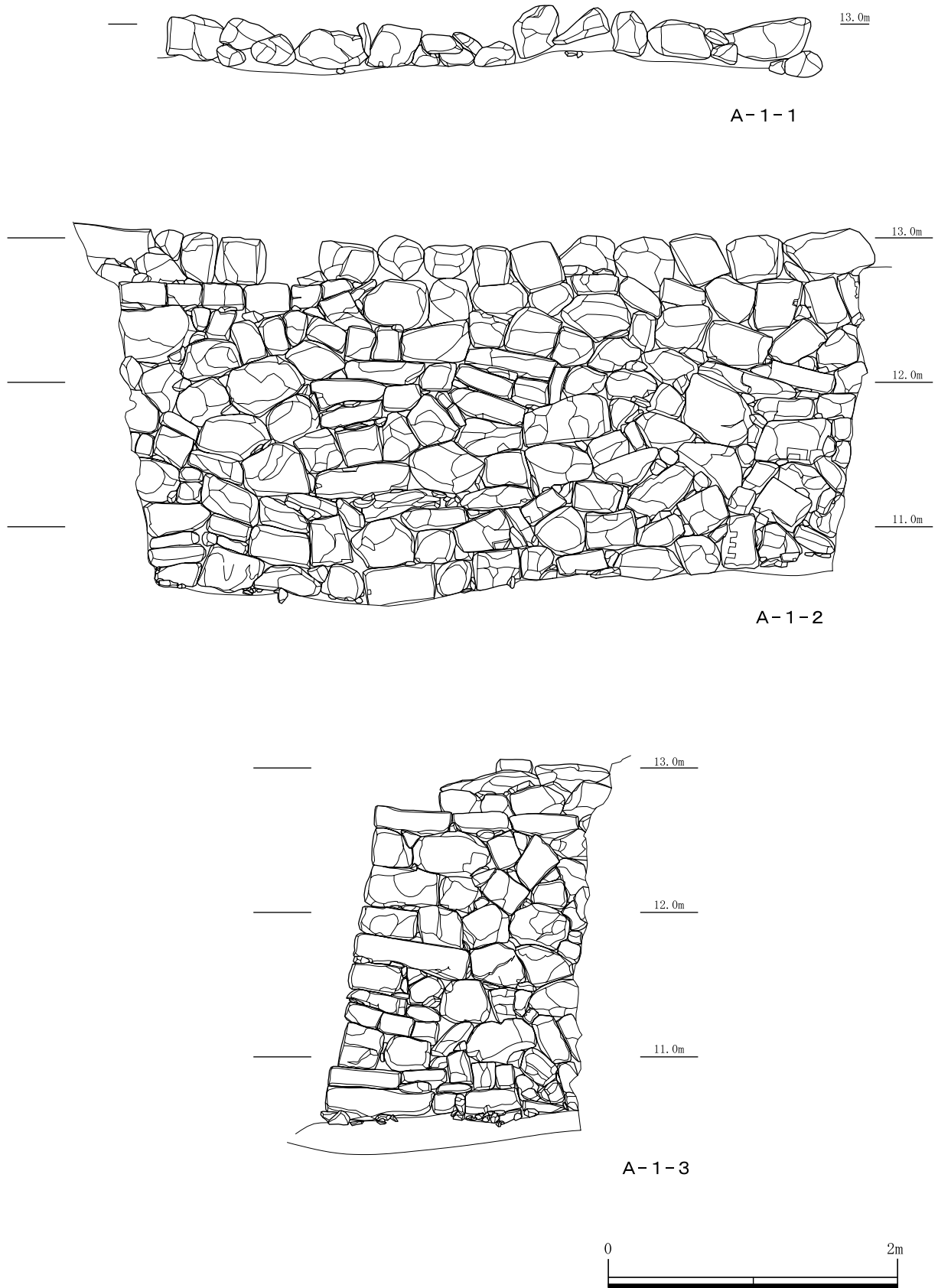
南側の基礎から東側へ約4 mと西側へ約4 mの2箇所の位置に天端の平面形が正方形を呈する石垣を検出した。地下1階の床面直上から石を積上げた石垣であり、天端の一辺は約1.40 m、高さは約2.70 mである。東側の石垣は地下1階の東側石垣に半分以上重なっている。石の積み方は花崗岩、安山岩の野面石と切石の乱積であり、角張った石が多い。この正方形の石垣は灯籠の基礎である。しかし、他の石垣と比較すると石の積み方がやや雑であり、さらに雨水の影響により調査中に一部が崩落した。調査の安全性のため、二つの石垣は凶化作業を行う前に取り除いた。

玉藻廟本殿基礎の西側で拳～人頭大の石を円形に積み重ねた集石を検出した。集石の直径は約1.40 mであり、上面の高さは玉藻廟基礎石垣の天端とほぼ同一である。石材は花崗岩と安山岩の野面石であり、1段ないし2段積みである。この円形集石のある位置は玉藻廟解体直前には何も建っていなかったが、何らかの基礎であったと考えられる。

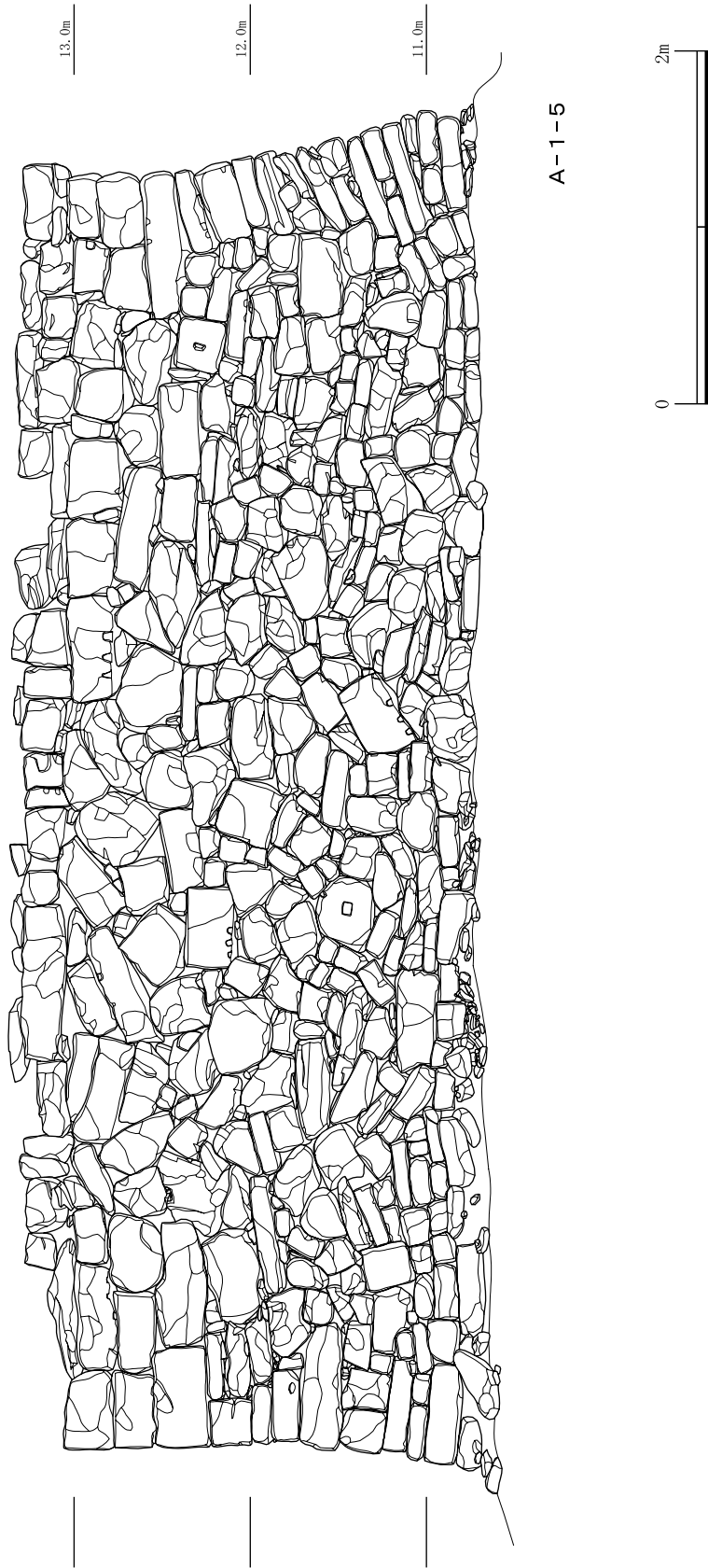
以上のように調査で検出した基礎石垣と玉藻廟の平面形を比較すると、上屋の建造物の平面形と基礎石垣の位置がほぼ一致することがわかる。すなわち、北側の石垣は玉藻廟の本殿と幣殿の基礎であり、北側の石垣天端の周囲に検出した石積みは本殿の縁束の基礎である。中央の石垣は拝殿の基礎であり、石垣天端の周囲に等間隔に置かれる花崗岩の切石や安山岩の野面石は拝殿縁束の礎石の基礎である。南側の2箇所の石垣は拝殿正面中央間の縁に設置される5段の木階の基礎である。南東側と南西側の石垣は灯籠の基礎である。

3 出土遺物

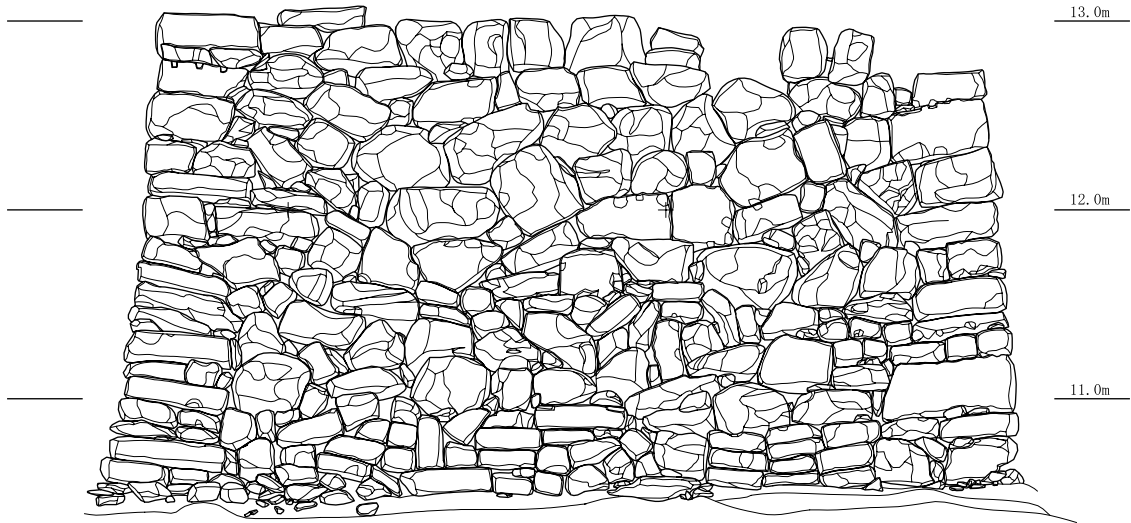
玉藻廟の基礎中から、多数の遺物を検出した。玉藻廟自体の建設年代が上記のとおり明治34～35年（1901～1902）という事が判明しており、遺物の廃棄年代が明らかである。以下では、玉藻廟基礎より検出した遺物について報告する。なお、以下で報告する遺物は整理作業で任意に抽出したものであり、遺物の組成比を正確に反映したものではない。本来であれば検出した遺物の出土量と組成比を提示することが必要であるが、筆者の力量不足から行えていない。高松城跡から出土する陶磁器類の編年については、香川県教育委員会が実施した西の丸の発掘調査報告書にてまとめられているが（香川県教育委員会編2003）、20世紀初頭という本遺構の形成年代から、西の丸編年における最新段階である様相9（19世紀末）よりもさらに後出することが明らかであ



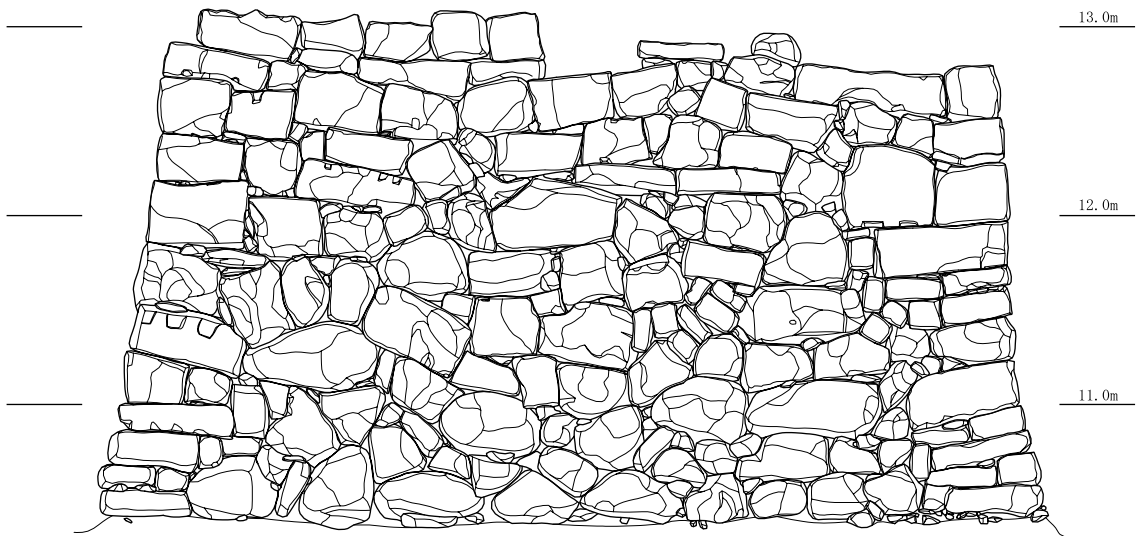
第10図 玉藻廟基礎立面図(1)



第11図 玉藻廟基礎立面図(2)



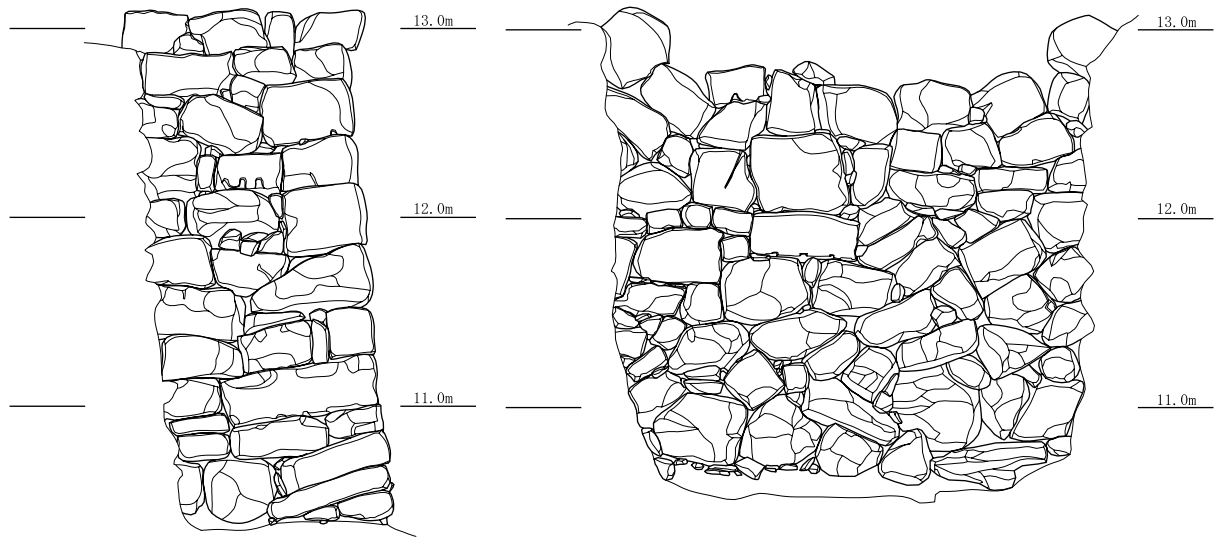
A-1-4



A-1-6

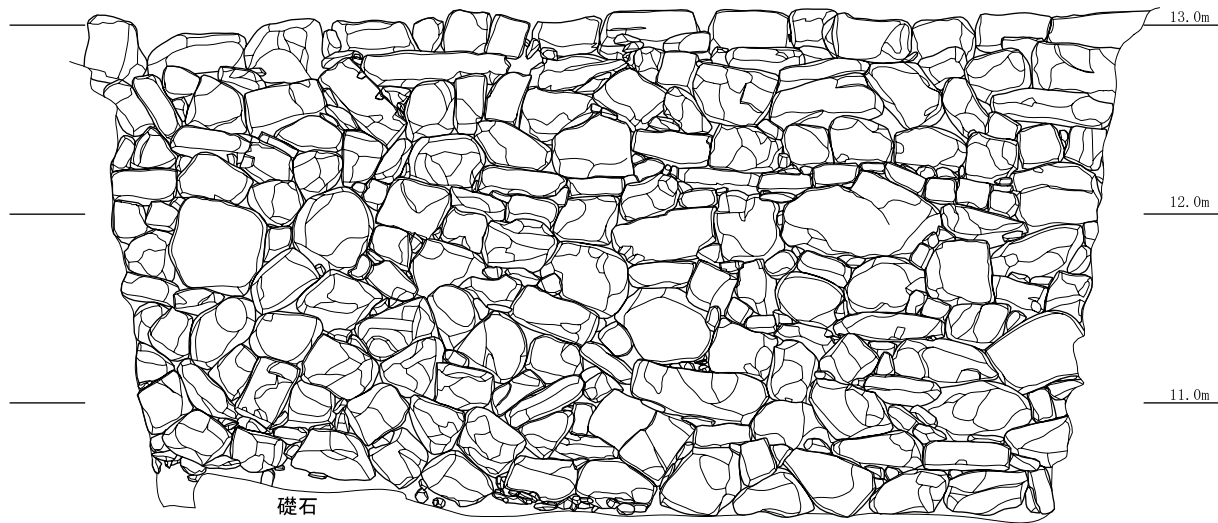


第12図 玉藻廟基礎立面図(3)



A-1-7

A-1-9

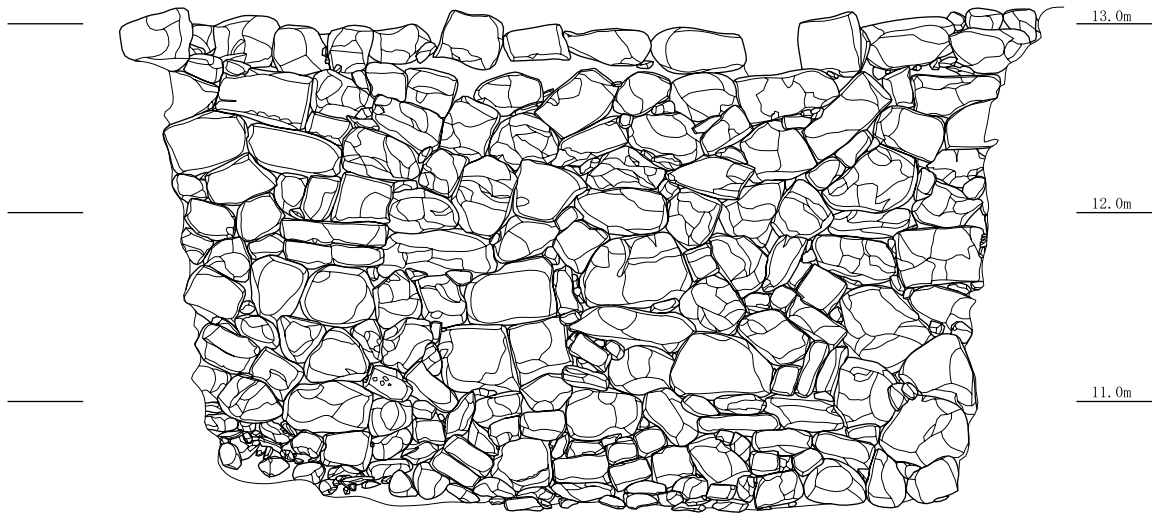


礎石

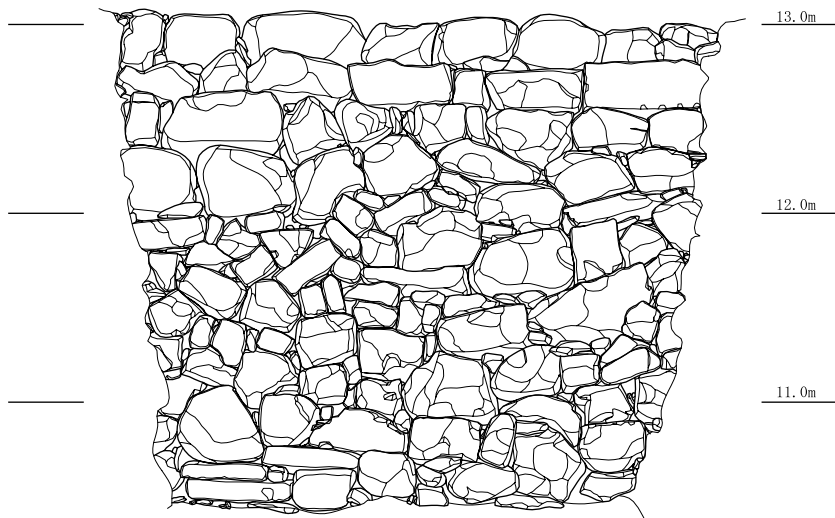
A-1-8



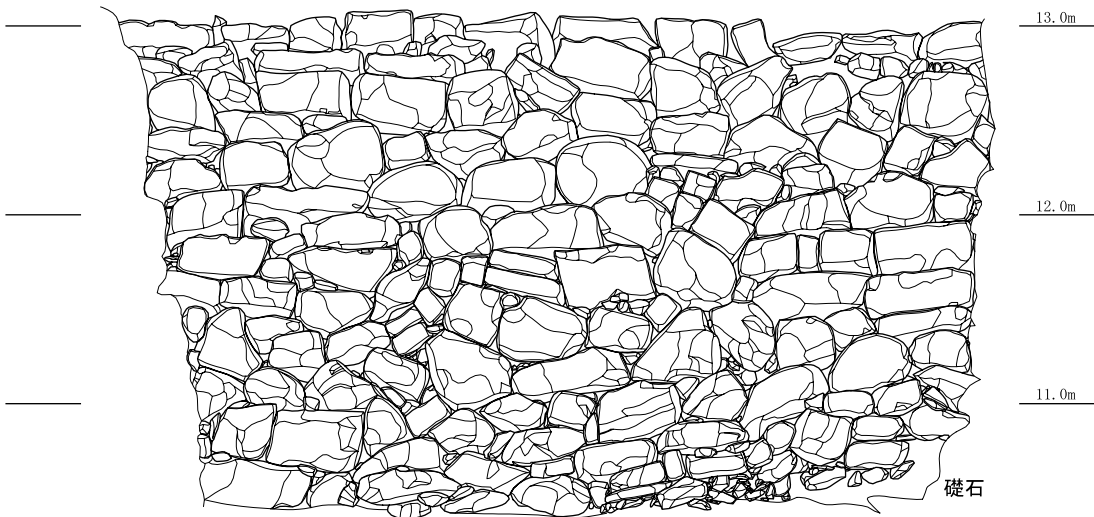
第13図 玉藻廟基礎立面図(4)



A-1-10



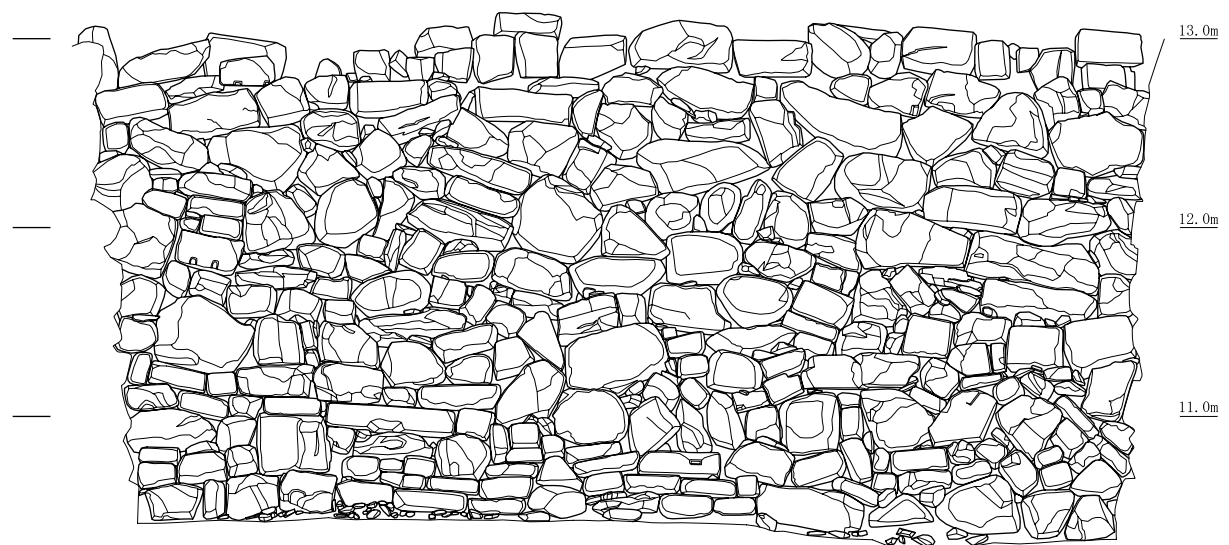
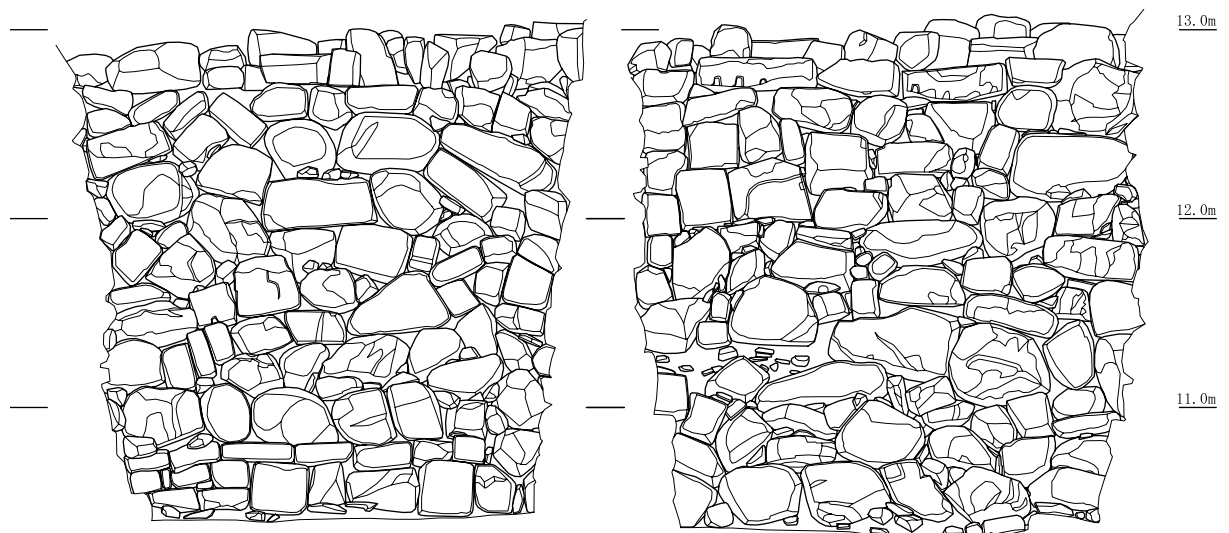
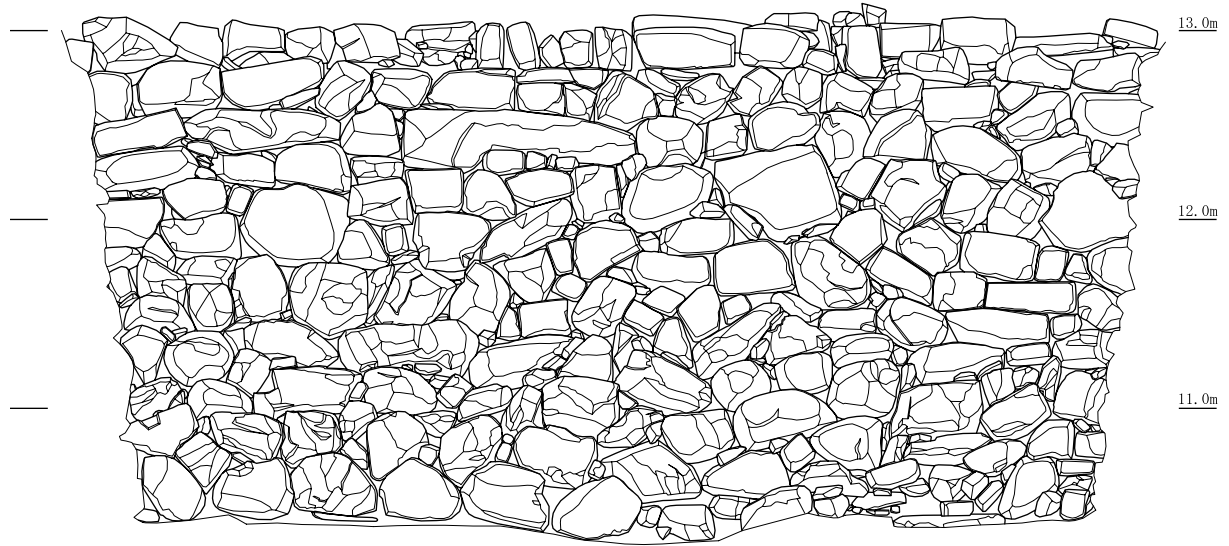
A-1-11



A-1-12

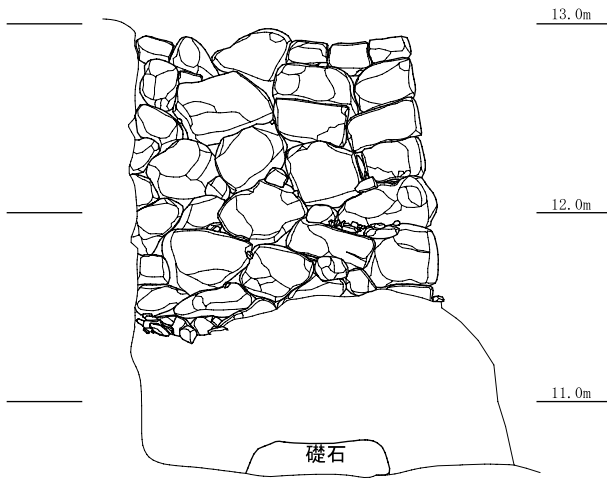


第14図 玉藻廟基礎立面図(5)

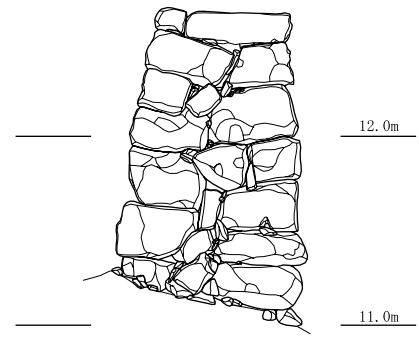


第15図 玉藻廟基礎立面図(6)

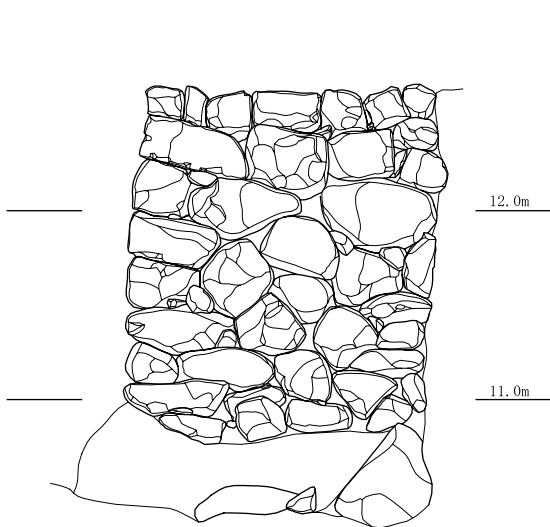




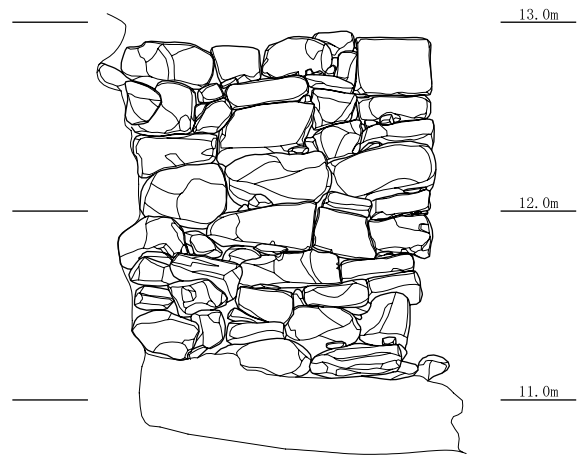
A-1-23



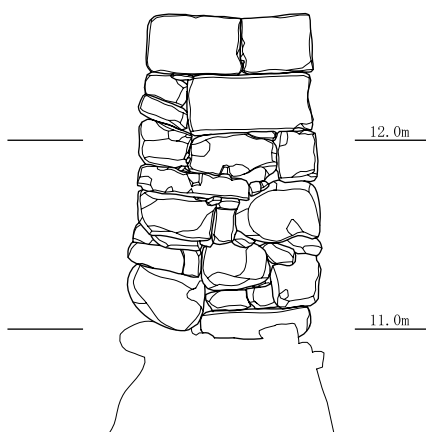
A-1-24



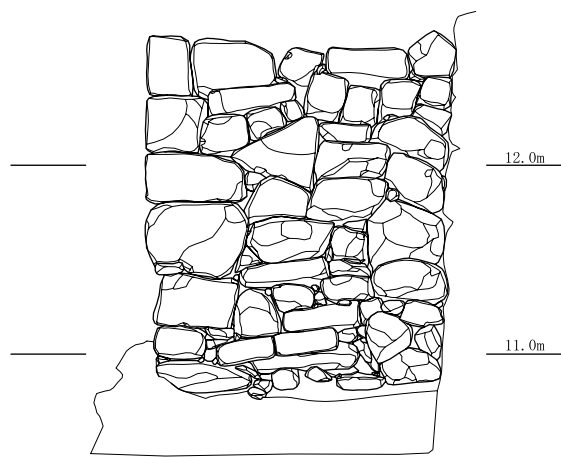
A-1-25



A-1-26



A-1-27



A-1-28



第16図 玉藻廟基礎立面図(7)

り、編年の空白部分を埋める資料となりうる一群である。今後の整理作業における課題とし、以下では事実関係の報告を行う。

(1) 遺物の取り上げ層序

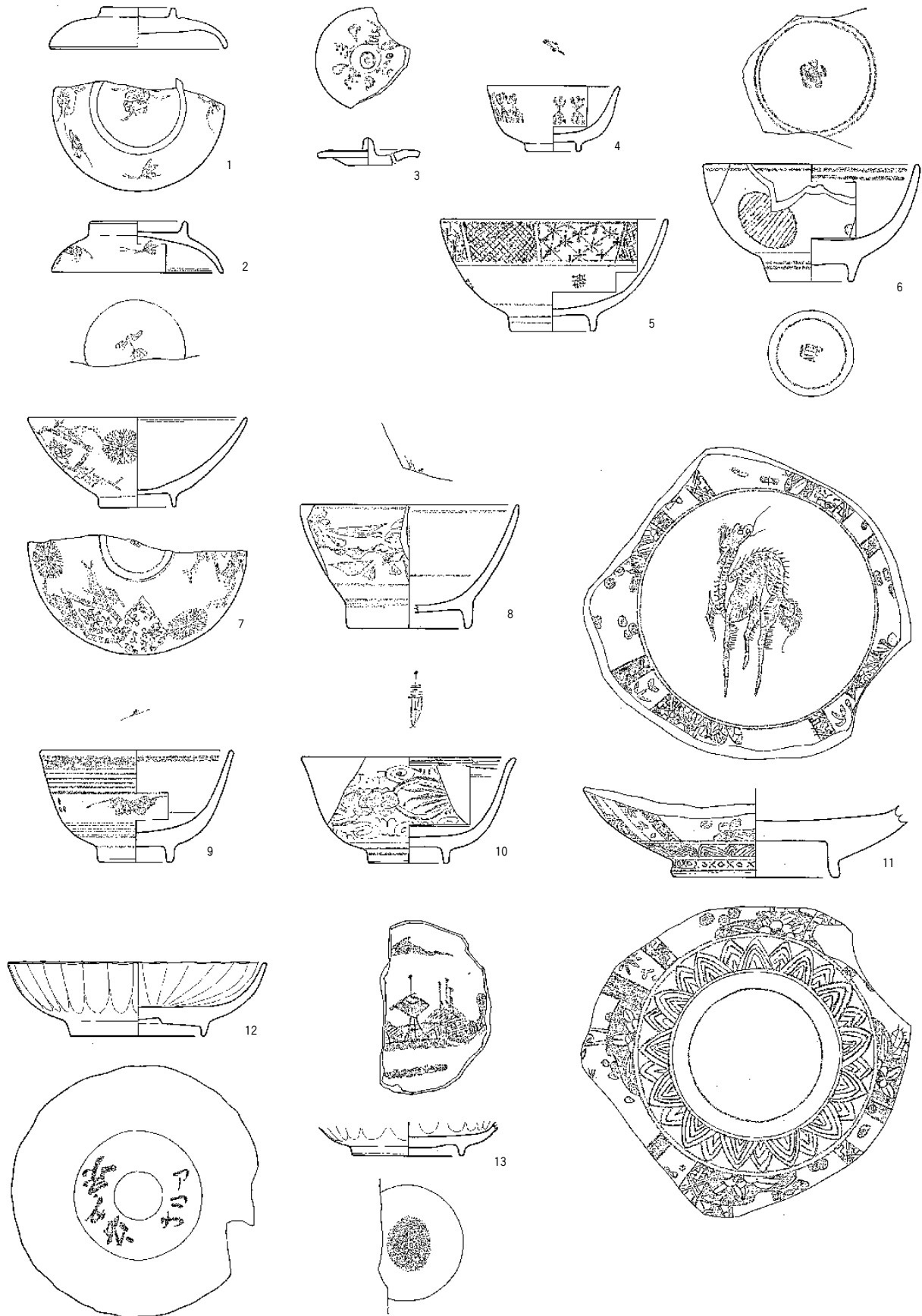
天守地下1階での遺物の取り上げについて、玉藻廟基礎の石垣内部から出土したものを玉藻廟基礎部、玉藻廟基礎の石垣よりも外側で検出したものを地下1階内部と、出土位置による区分を行った。玉藻廟基礎部については石垣に囲まれた狭小な範囲での調査であったため、層序別の取り上げは行えなかったが、地下1階内部で検出した遺物は検出時の任意のレベルに応じて上・中・下・床面直上の4者に大別して取上げを実施した。おおむね上層は第8図の3～6層、中層は、6～7層、下層は7層、床面直上は12層に対応する。調査時の区分は、土層図との明確な対応関係を提示しえないが、地下1階内部の埋没時期や玉藻廟基礎石垣の構築課程を検討する上で重要な情報になると考えられたため、以下でもこの区分を踏襲して報告を行うこととする。

(2) 土器類

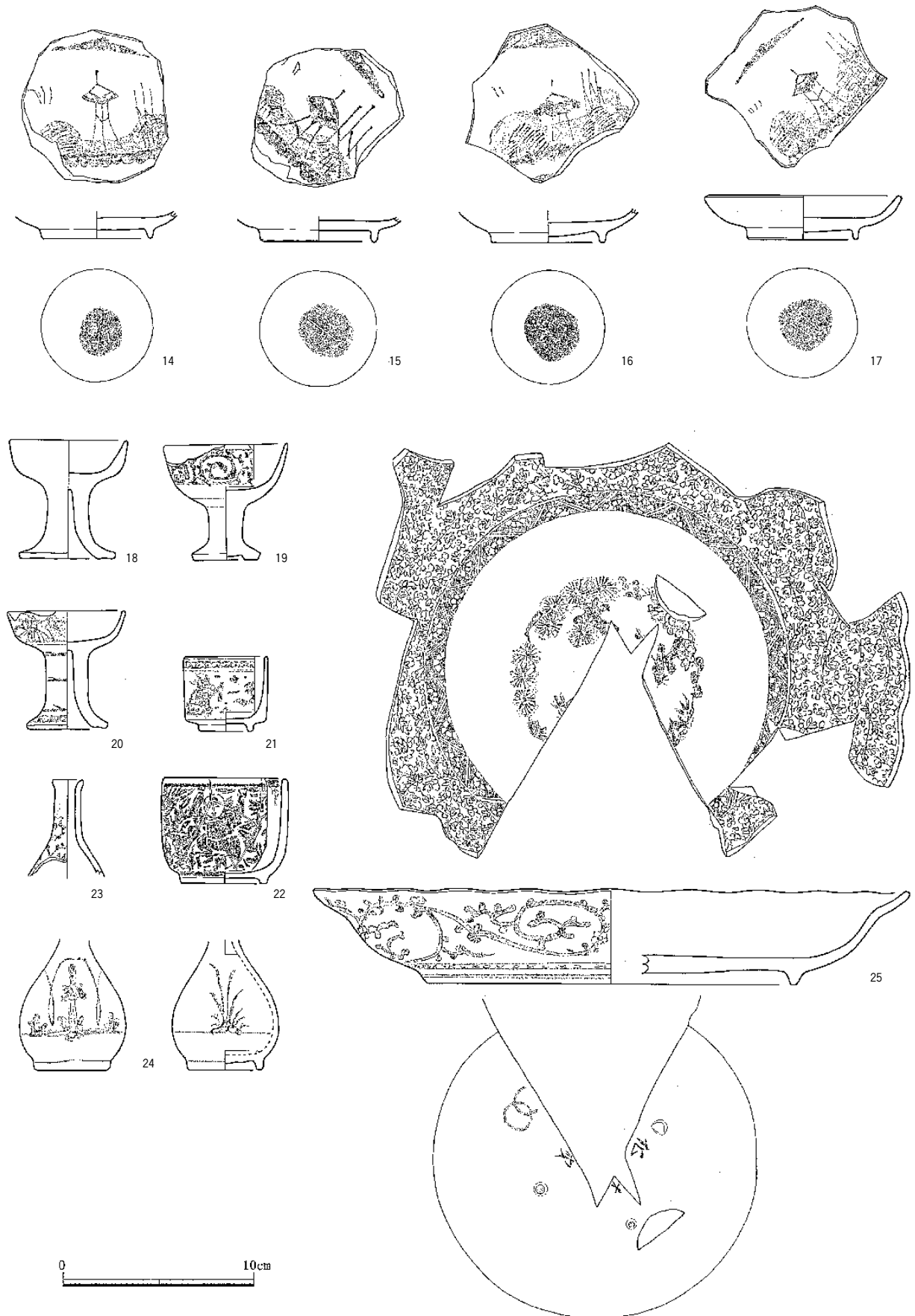
ア 地下1階上層出土土器(1～64)

1～25は磁器である。1・2は肥前系の蓋であり、高台状の摘みをもつ。1は内面の見込みに蛇の目状釉剥ぎ、畳付も釉剥ぎを行う。3は円孔が1箇所穿たれており、急須の蓋であろう。4は肥前系の小型丸椀である。5・6は丸椀で、6は高台底面に砂粒の付着が顕著である。8は広東椀、9・10は端反椀である。9は畳付けのみ釉剥ぎされる。11は肥前系の色絵鉢。内面中央に麒麟を描き周縁に文様を巡らせる。麒麟と見込みの圏線、区画の直線は呉須で描き、花文は黒色の縁取りに赤・淡緑・紫色が認められる。畳付のみ釉剥ぎを行う。12～17は皿である。12は肥前系で型打ち成形され、蛇の目凹型高台を有す。見込みにトチン痕を残す。底面に「アコヤ」「安五家」の墨書が認められる。13～17は丸形皿で、いずれも文様構成が共通する。底面には釉剥ぎによる「中」の字がみられる。同規格のセット品である可能性が高い。18～20は仏飯器で、18・20は台底挟り込み、19は肥前系の台底輪高台である。18は外面全面に呉須が塗られる。20は色絵である。赤で圏線を含めた文様の大半が描かれ、一部青・淡緑色が見られる。21・22は猪口である。21は小型で後円部が直立する。22はやや大振り、高台付近の屈曲がやや緩やかである。呉須の滲みが顕著である。23・24は肥前系の小瓶である。23の口縁部は端反である。25は肥前系大皿である。唐草文を巡らせ、底面には「大」「成」「化」の銘がみられる。本来は「大明成化年製」か。加えて釉剥ぎによる輪違い文が確認できる。また、ハリ支えの痕跡が3箇所以上で認められる。

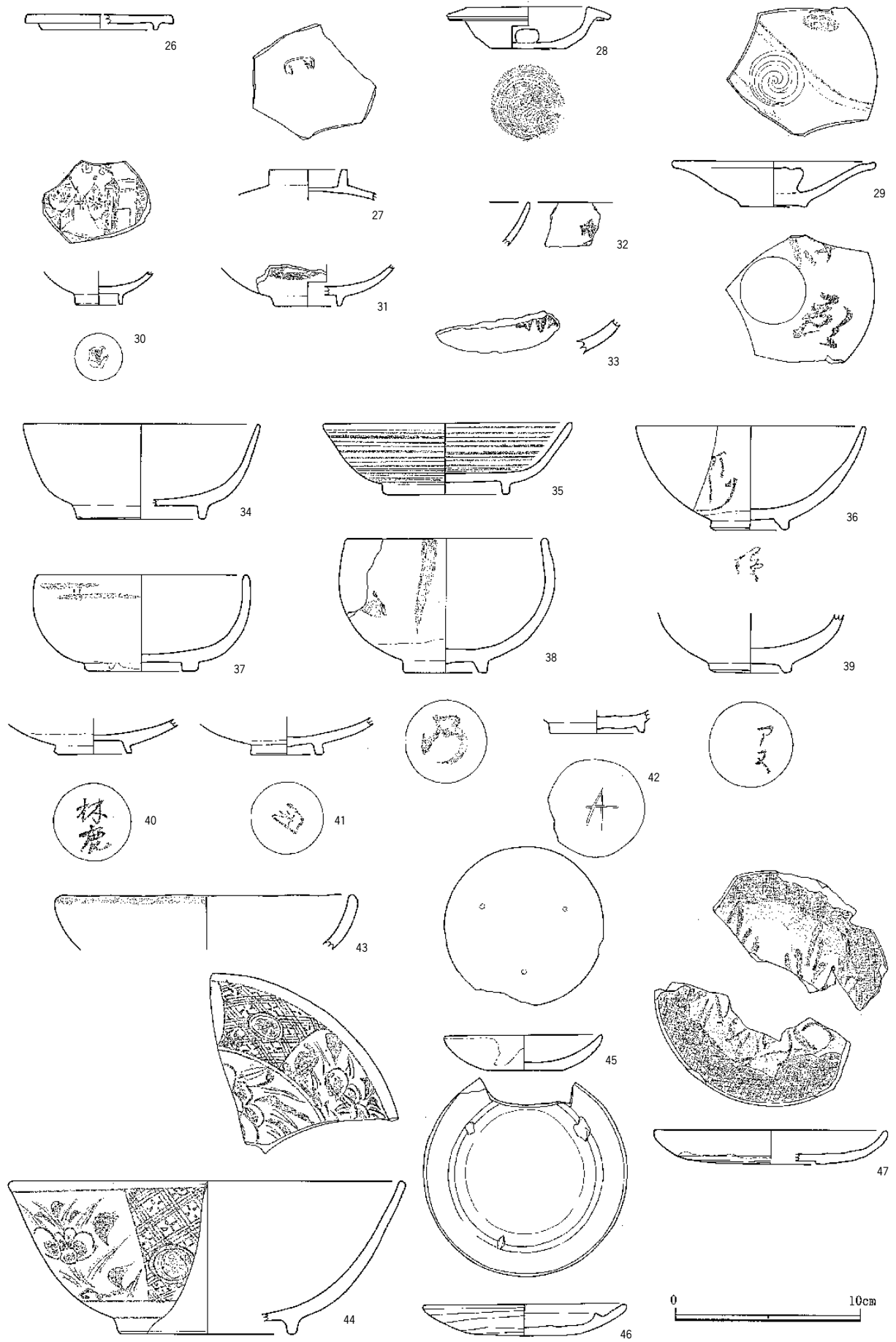
26～58・60は陶器である。26は蓋で、全面に濃緑の釉薬を掛ける。27は屋島焼の蓋である。内面に「屋島」の刻印を施す。28・29は土瓶蓋である。29は瀬戸美濃系で、底部に糸切痕を明瞭に残す。摘みは時計回りの螺旋を描き中心が高くなる。底面に墨書「□預」で「伊預」と考えられる。30～33・43・60は理平焼である。30は小椀の底部で、高台内に「破風高」の刻印を打つ。内面に描かれた図柄には建築物と交差する旗があり、建築物に「香川□□□署？」の字が見え、「香川県監獄署」と考えられる。監獄焼との関連が示唆される。31には葵の紋が描かれる。



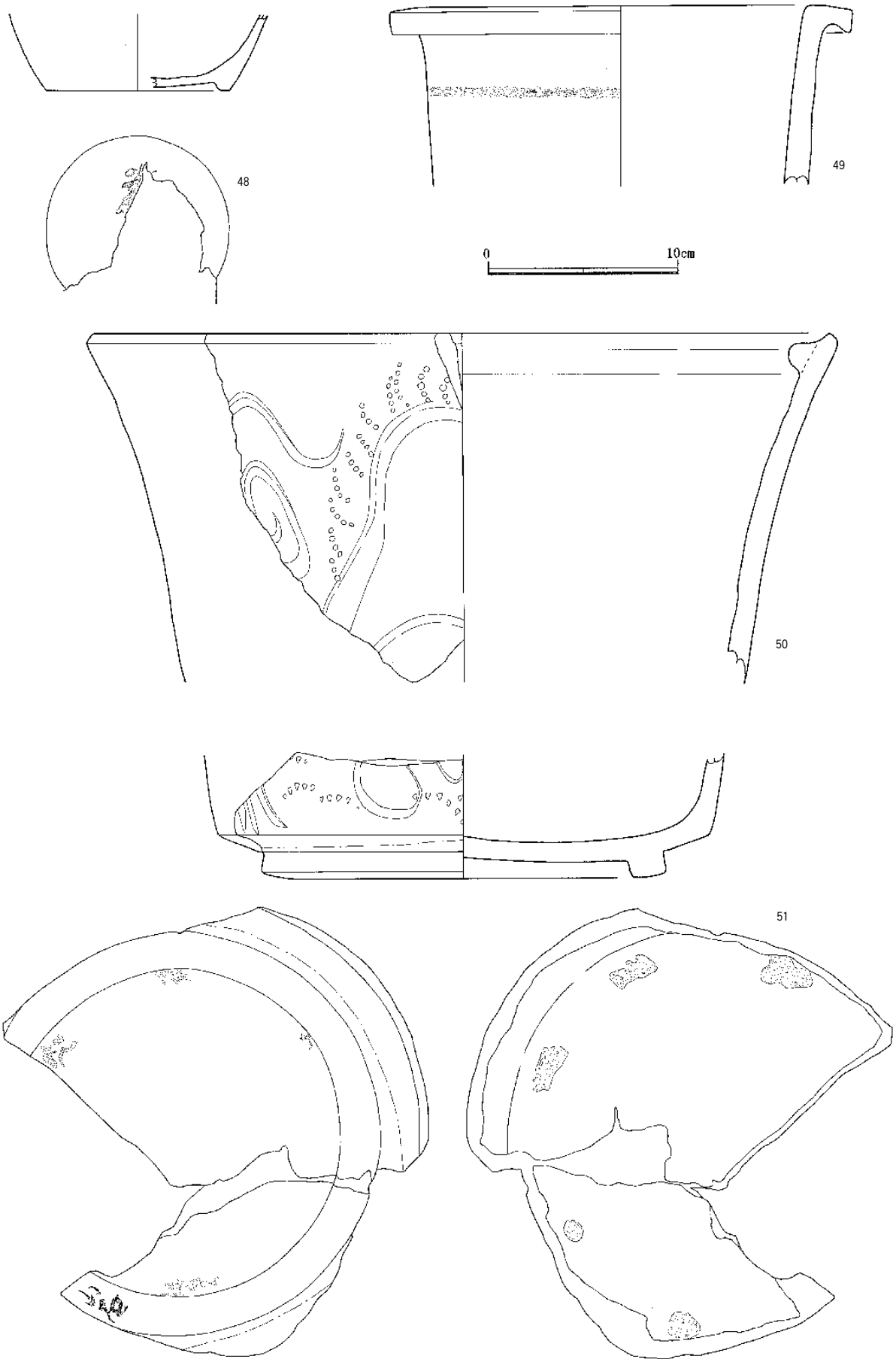
第17図 地下1階上層出土土器類実測図(1)



第18図 地下1階上層出土土器類実測図(2)

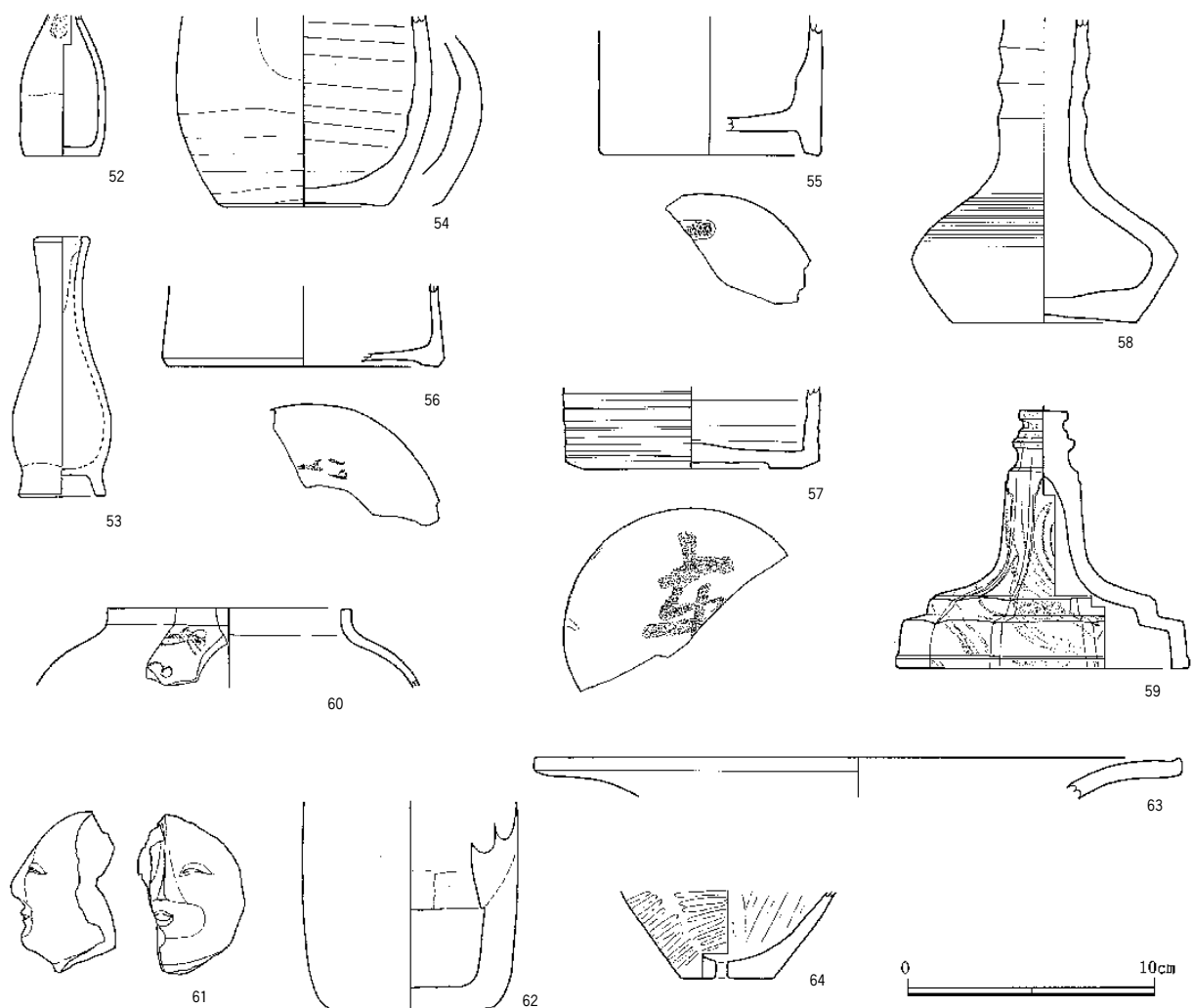


第19図 地下1階上層出土土器類実測図(3)



第20図 地下1階上層出土土器類実測図(4)

32・33には紅葉文が見られる。34は珉平焼の丸椀で黄色の釉薬が施される。35は瀬戸美濃系の底広形椀である。36は丸椀で底面付近は無釉で、墨書が見られる。37は腰張形椀で高台内外面は無釉である。38は瀬戸美濃系の甕形椀で外面下半と底面は無釉である。底面には「乃」の墨書が見られる。39は瀬戸美濃系の底部である。白色の釉薬で高台内は無釉である。底面に「アヌ」の墨書が見られる。40・41は京・信楽系の底部である。外面下半と高台内外は無釉である。高台内面に40は「林鹿」の墨書、41は「閑」の墨書が認められる。42は備前焼の底部である。内面に轆轤痕を明瞭に残す。底面に「A」字状の線刻を施す。43は理平焼の鉢である。陶胎磁器で、口縁部に呉須を塗布する。44は大型の鉢である。色絵が施され、赤・緑色が見られる。45は京・信楽系の灯明皿で、内面のみ施釉する。内面に3箇所窯道具痕が残る。46は備前焼の灯明受け皿である。内面にかえりを持ち、油溝は3箇所を削り作り出す。47は瀬戸美濃系の平形無高台皿である。織部焼風で、内面には布痕を明瞭に残し、底面のケズリ痕も顕著である。緑・褐色の釉に加えて薄赤色もやや見られる。48は植木鉢である。胎土が桃色と白色が縞状にグラデーションを描く。底面に墨書が見られる。49～51は水鉢である。49は外面に白色混じりの青色で1条の



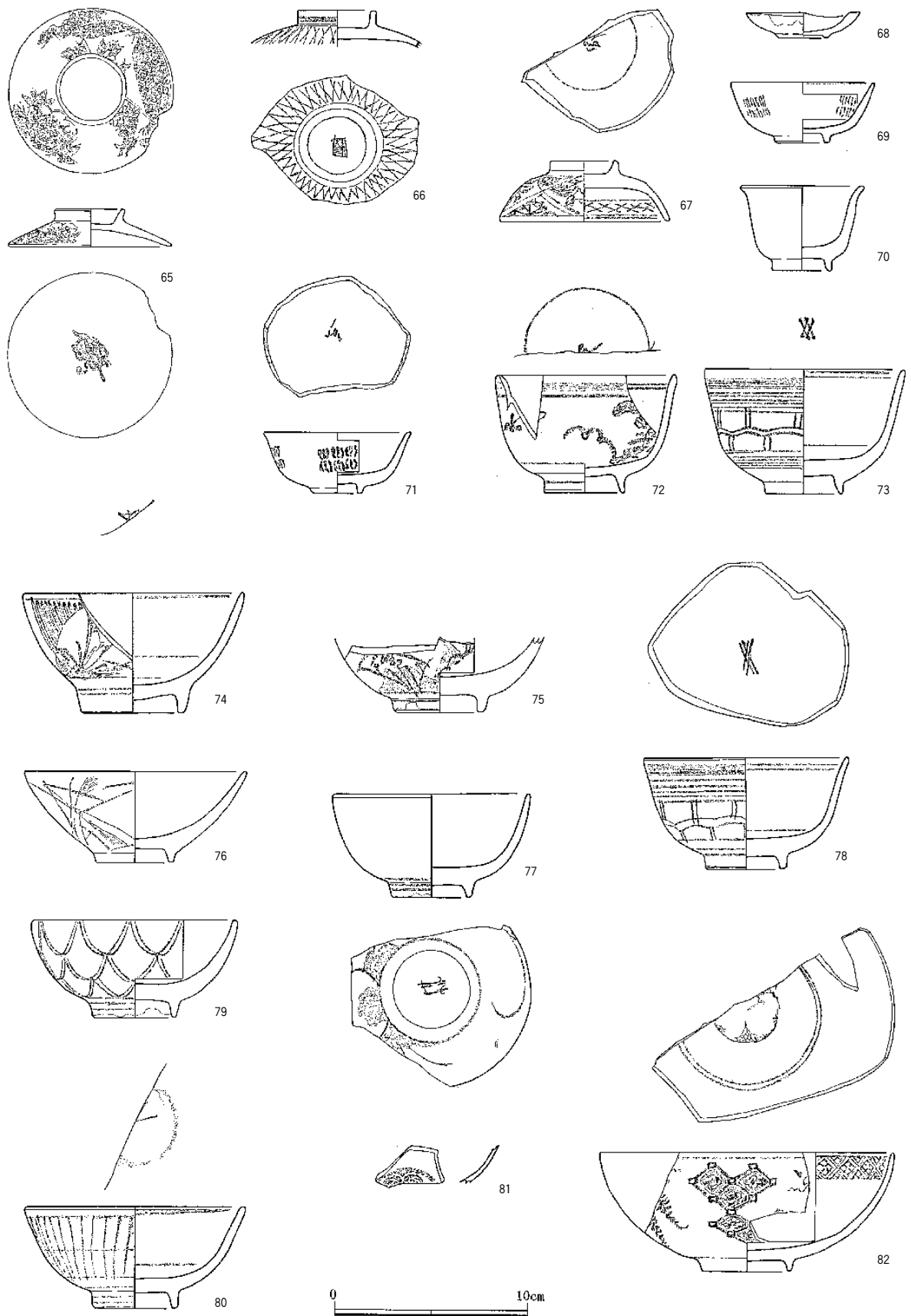
第21図 地下1階上層出土土器類実測図(5)

圈線が巡る。50・51は瀬戸美濃系の水鉢で、同一個体の可能性がある。内面には明瞭な轆轤痕を残し、外面には刺突文と線刻による文様が巡る。釉は薄緑色を基調とし、部分的に濃緑色釉が垂れかかる。高台内面には光沢のない褐色釉が掛かり、畳付と高台外面は無釉である。畳付には「小(山?)石」の墨書が認められる。内外面共に融着防止の長石混じり粘土塊の痕跡が明瞭である。52は小瓶である。底面に回転糸切痕が残る。透明釉の上に緑色の釉で施文する。53は小型の瓶である。端反辣蕪形で、内面に轆轤成形の痕跡を良く残す。高台の内外面は無釉である。54は備前焼の中瓶である。底面は回転ヘラケズリで、外面には自然釉の付着が認められる。体部中位に指掛けの窪みを作り出す。55は屋島焼のちろり底部である。底面に「屋島」の刻印を打つ。「島」の字の上半にはやまかんむり様の痕跡がみられる。高台も含めて外面全面に白色の釉薬、内面は褐色の釉薬を施す。56は京信楽系の底部で、底面に墨書が見られる。57は大谷焼の大瓶である。轆轤痕を明瞭に残し、底面は削り出しによる蛇の目凹型高台である。底面は無釉である。底面に「東」の墨書が見られる。58は備前焼の仏花瓶である。59はガラス質の燭台である。赤～紫の彩色を呈する。60は理平焼の急須である。外面のみ施釉で、黒色の線描に、白色混じりの青色を塗布し蝶文を描く。

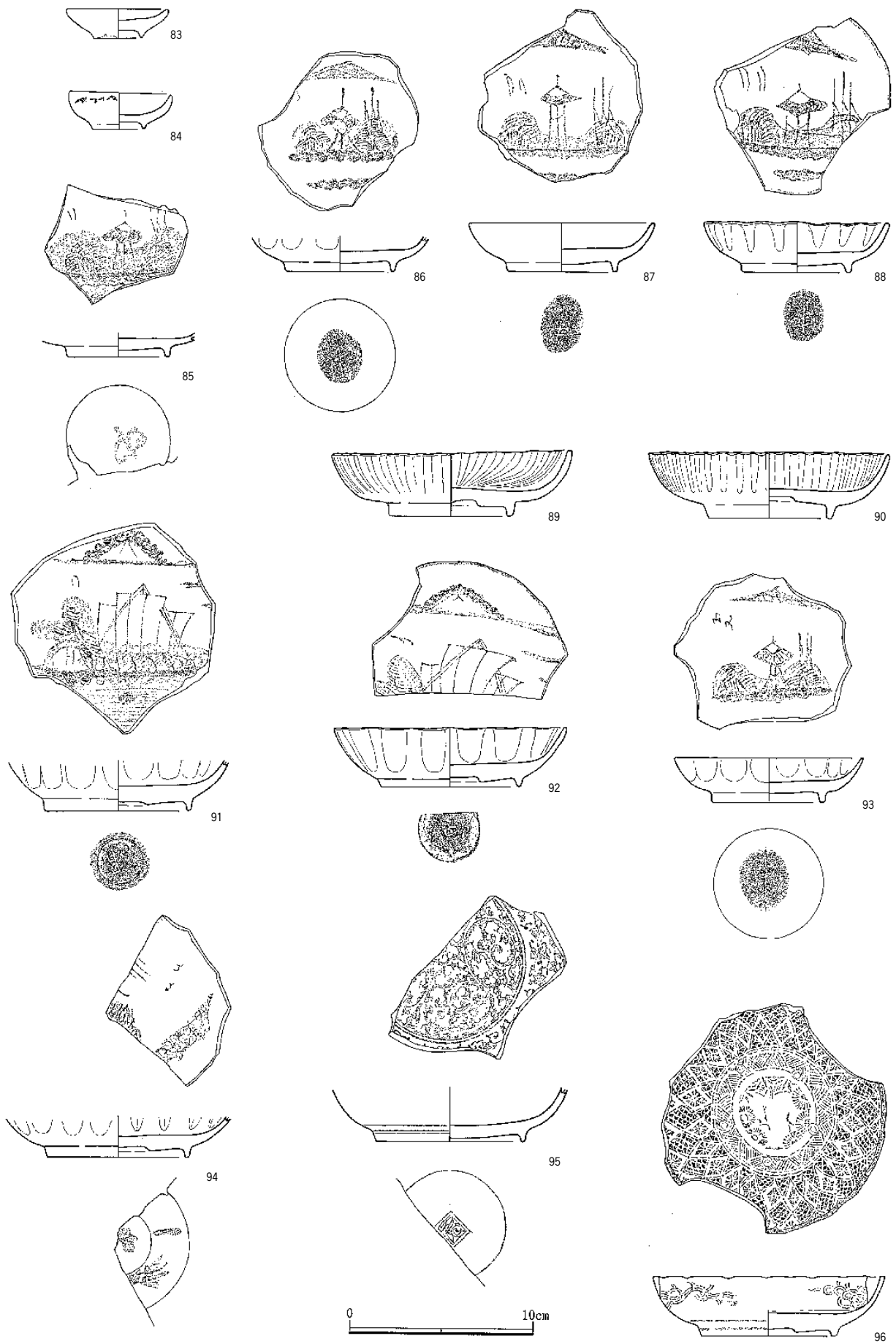
61・62は土師質土器である。61は土人形の顔面部である。内面は中空である。62は焼塩壺である。粗製の胎土で、外面にハケ目状の痕跡が残る。63・64は弥生土器である。63は壺の口縁部。64は甌で、底面に1箇所円孔を穿つ。外面にはタタキの痕跡が明瞭である。

イ 地下1階中層出土土器 (65～169)

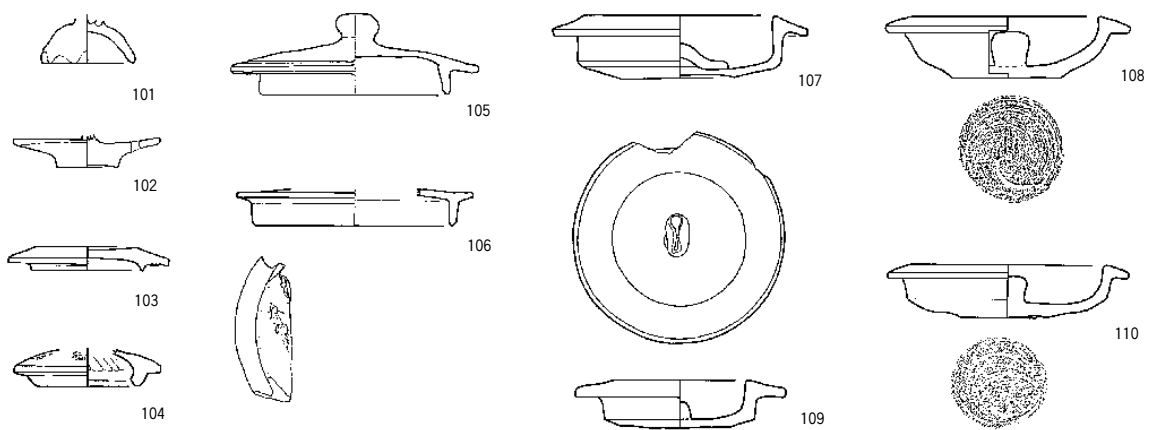
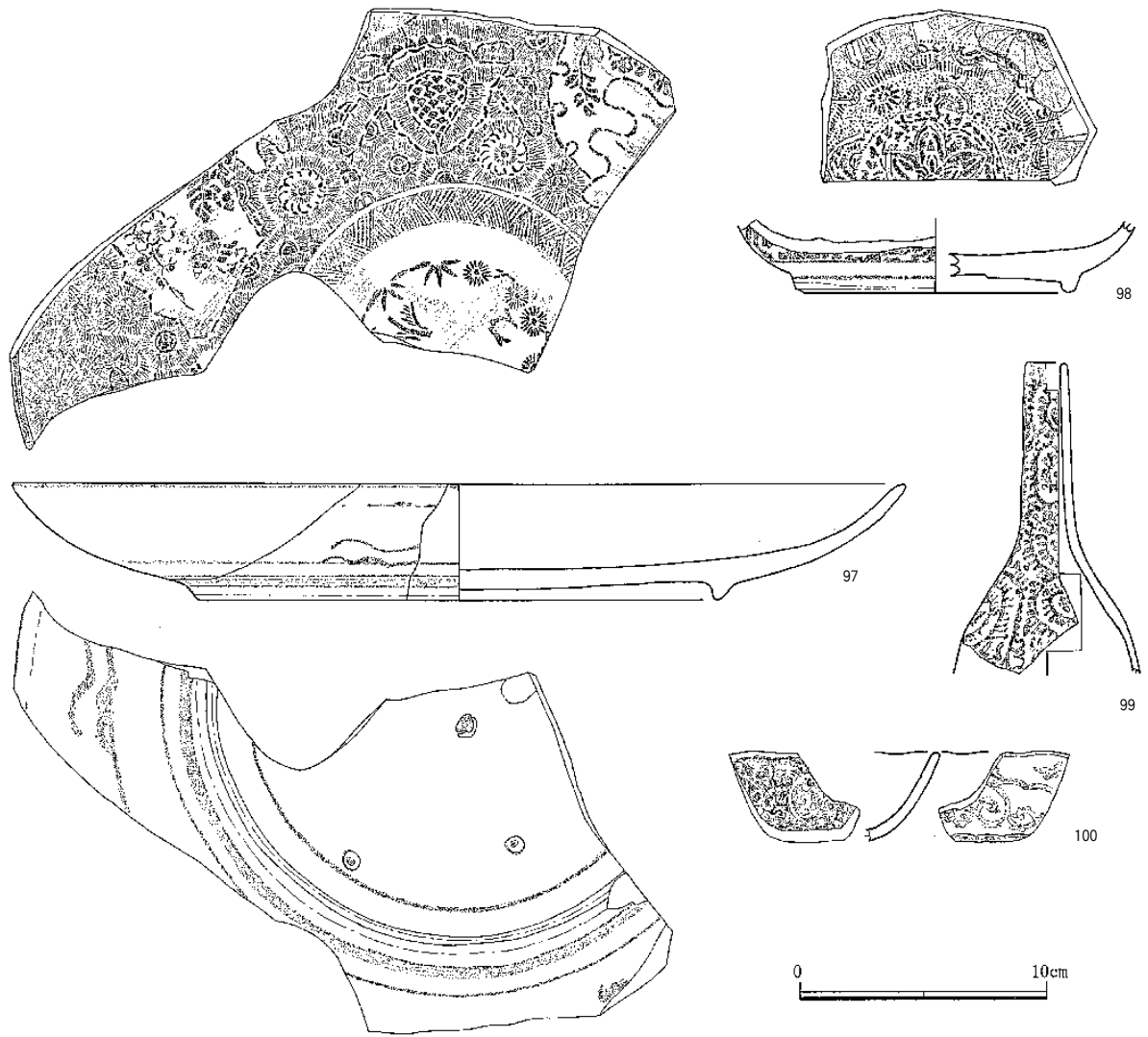
65～100は磁器である。65・66は瀬戸美濃系の蓋である。65は呉須の他に、外面には緑色と黄色が見られる。66は内面に褐色の付着物が見え、顔料の類である可能性が考えられる。67は肥前系の蓋である。68は肥前系の紅猪口である。内面に施釉し、外面にも一部垂れる。69は瀬戸美濃系の小杯である。口縁端部に褐色の縁取りが見られる。70は端反形の猪口である。畳付以外の全面に施釉する。ややくすんだ釉調を呈す。71は端反形小椀である。口縁端部に褐色の釉を掛ける。72・73は肥前系の端反椀である。73の口縁部は屈曲がやや緩やかである。ともに畳付の釉は削り取る。74は肥前系の広東椀である。75は椀底部で、器壁が厚く重厚である。畳付付近に粘土が多量に付着する。76は平形の椀である。内面は透明釉、外面は薄緑釉を掛け、釉薬の上に緑色と褐色で絵付けを行う。77は肥前系の丸椀で、畳付は無釉である。78は肥前系の端反椀である。畳付は釉を削り取る。79は肥前系の腰張形椀である。80は肥前系の端反椀である。見込みと畳付に砂目積みの痕跡が残る。畳付は釉を削り取っていない。81は三葉葵の紋が濃青色で描かれる。82は肥前系の浅半球型大椀である。83・84は極小皿である。85～98は肥前系の皿である。型打ち成形で製作されており、文様構成が共通し、底面の釉剥ぎによる「中」字も共通する。86～88・93は輪高台、90～92・94・96は蛇の目凹形高台である。87・92には口紅が施される。94には底面に墨書が見られる。89・90は肥前系の型打ち菊花形皿である。高台は蛇の目凹形を呈す。95は肥前系の底部である。96は肥前系の皿である。型打ち成形で製作される。内面に5箇所の陶胎詰め跡が残る。底面は蛇の目凹形高台で、畳付を中心として多量の砂粒が付



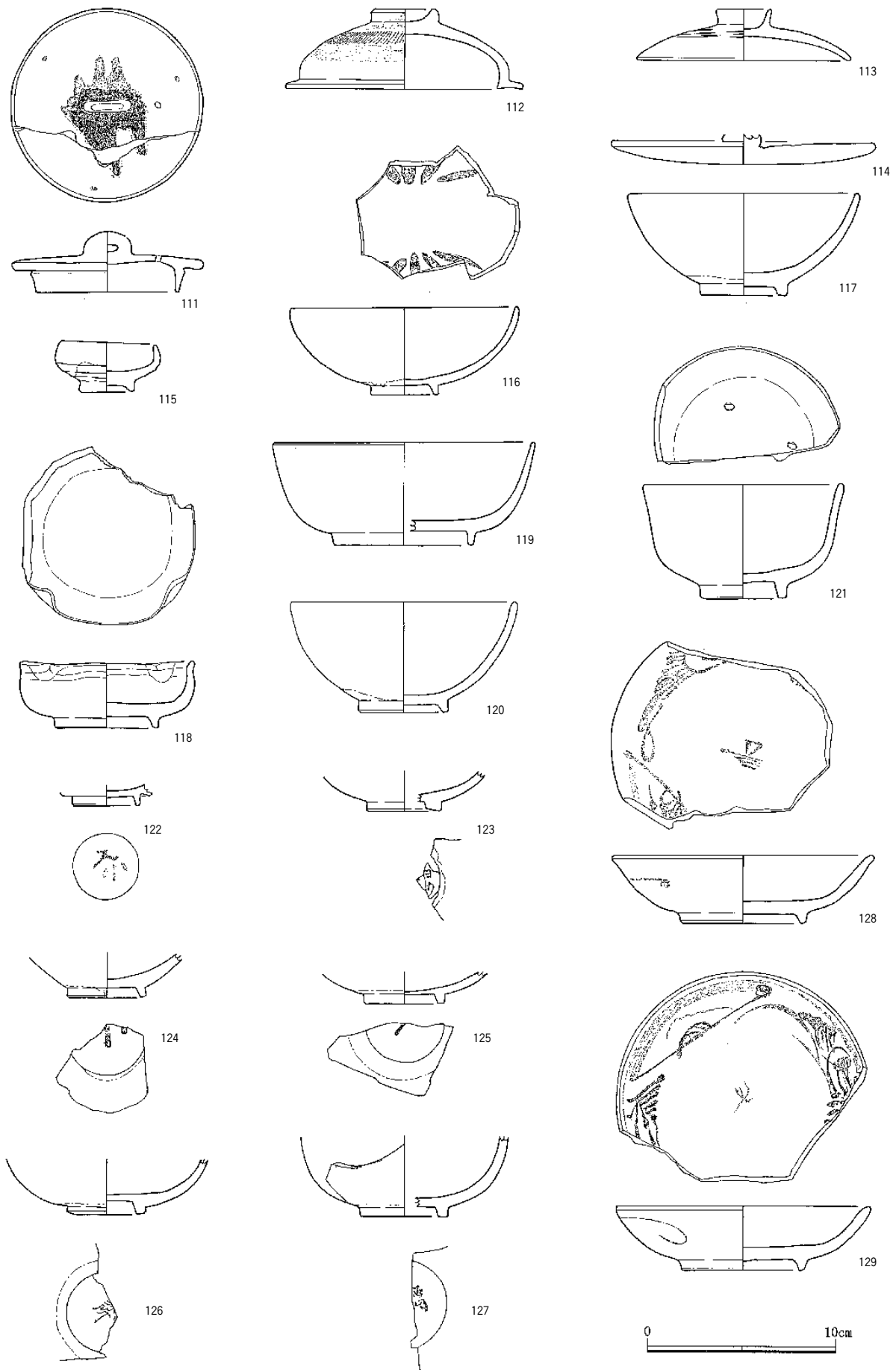
第22図 地下1階中層出土土器類実測図(1)



第23図 地下1階中層出土土器類実測図(2)



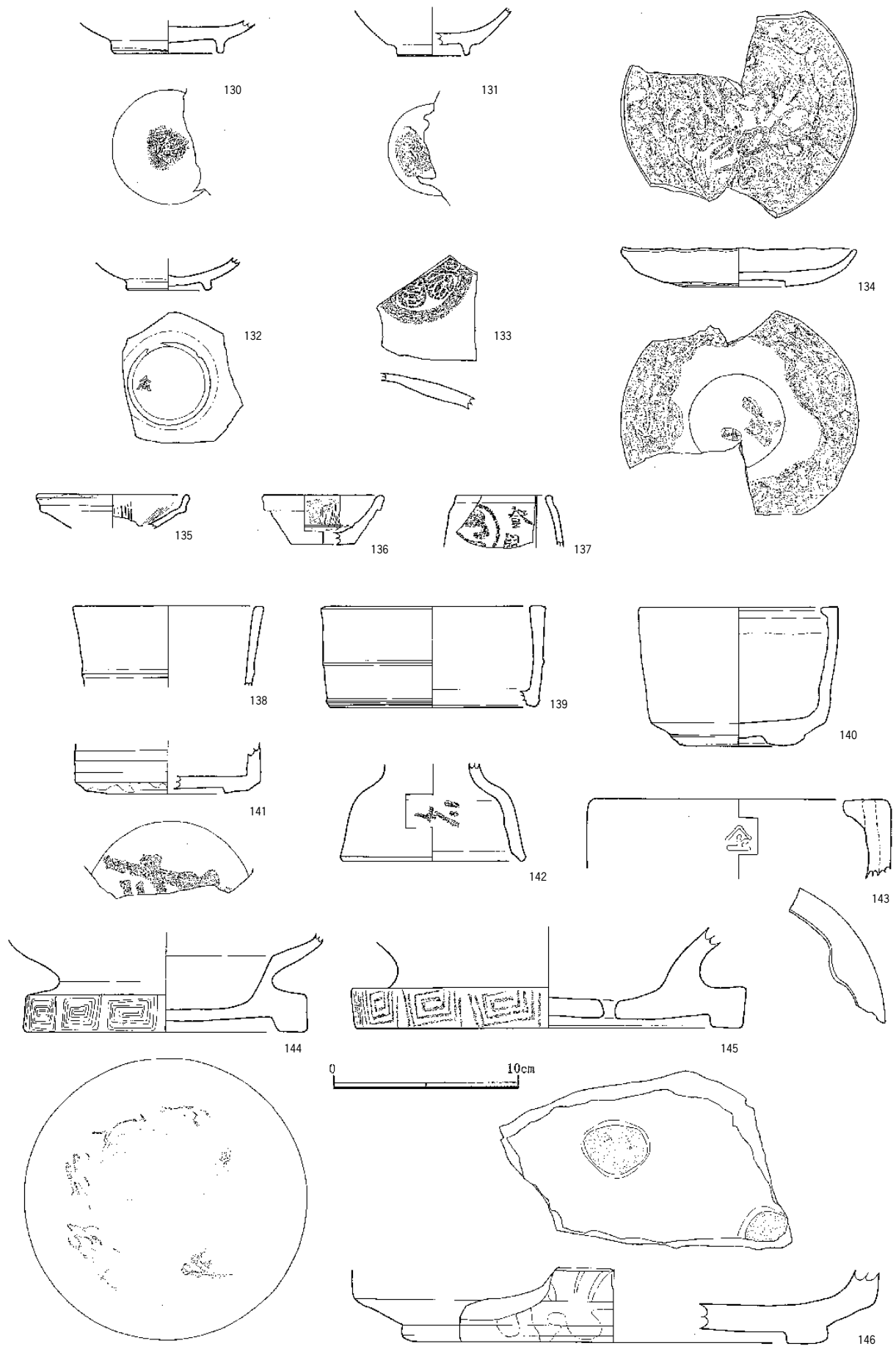
第24図 地下1階中層出土土器類実測図(3)



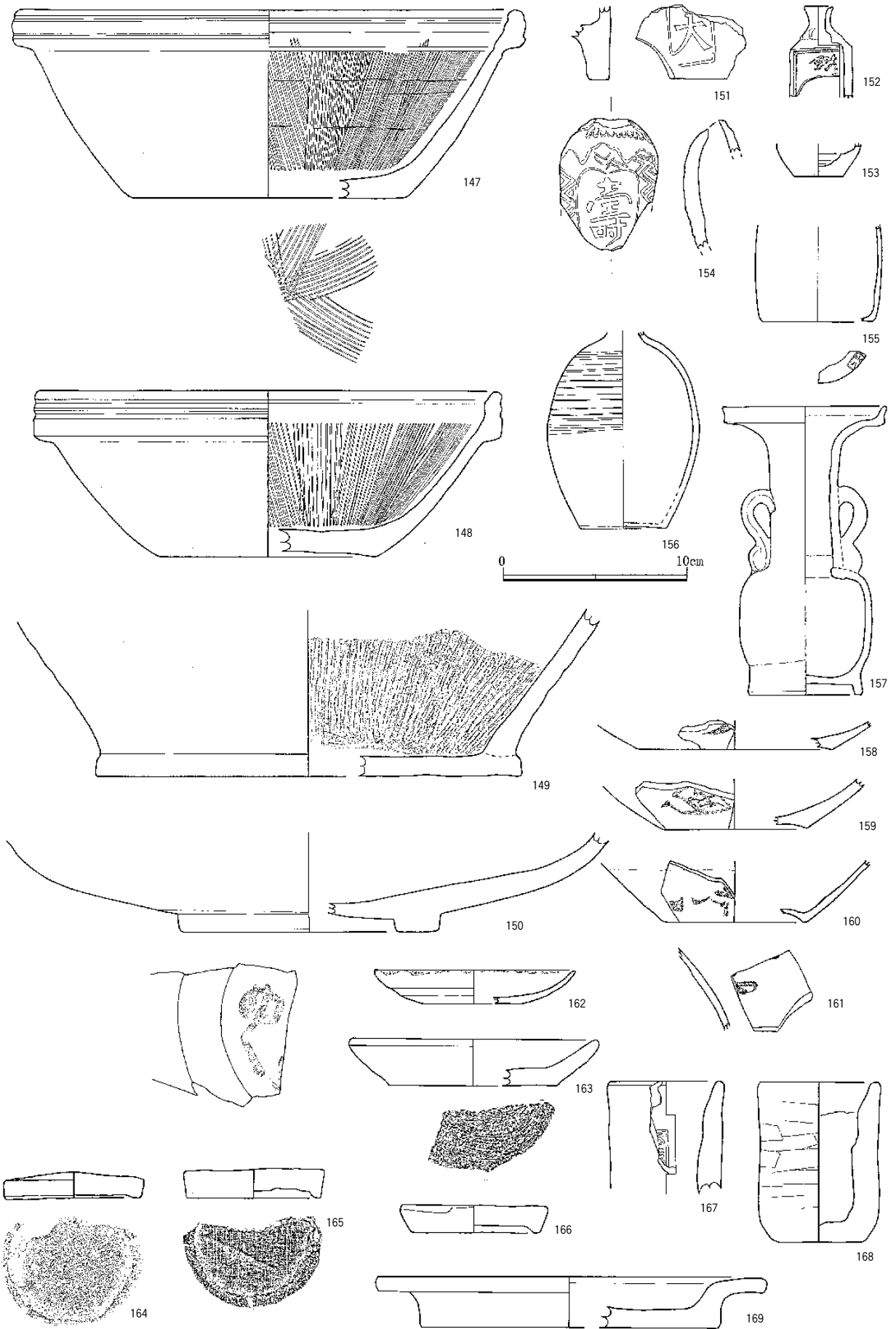
第25図 地下1階中層出土土器類実測図(4)

着する。97は肥前系の大皿である。底部に3箇所以上のハリ目跡が残る。畳付は釉を削り取る。98は肥前系の色絵である。施釉後の表面に赤色、金色、緑色で描く。蛇の目凹形高台で、畳付は釉を削り取る。99は肥前系の瓶の口縁部である。口縁部が直線的に伸びる。100は肥前系の色絵口縁部である。型打ち成形で、内面は施釉後の表面に赤色、金色で色絵を描く。口紅は金色。外面は呉須のみである。

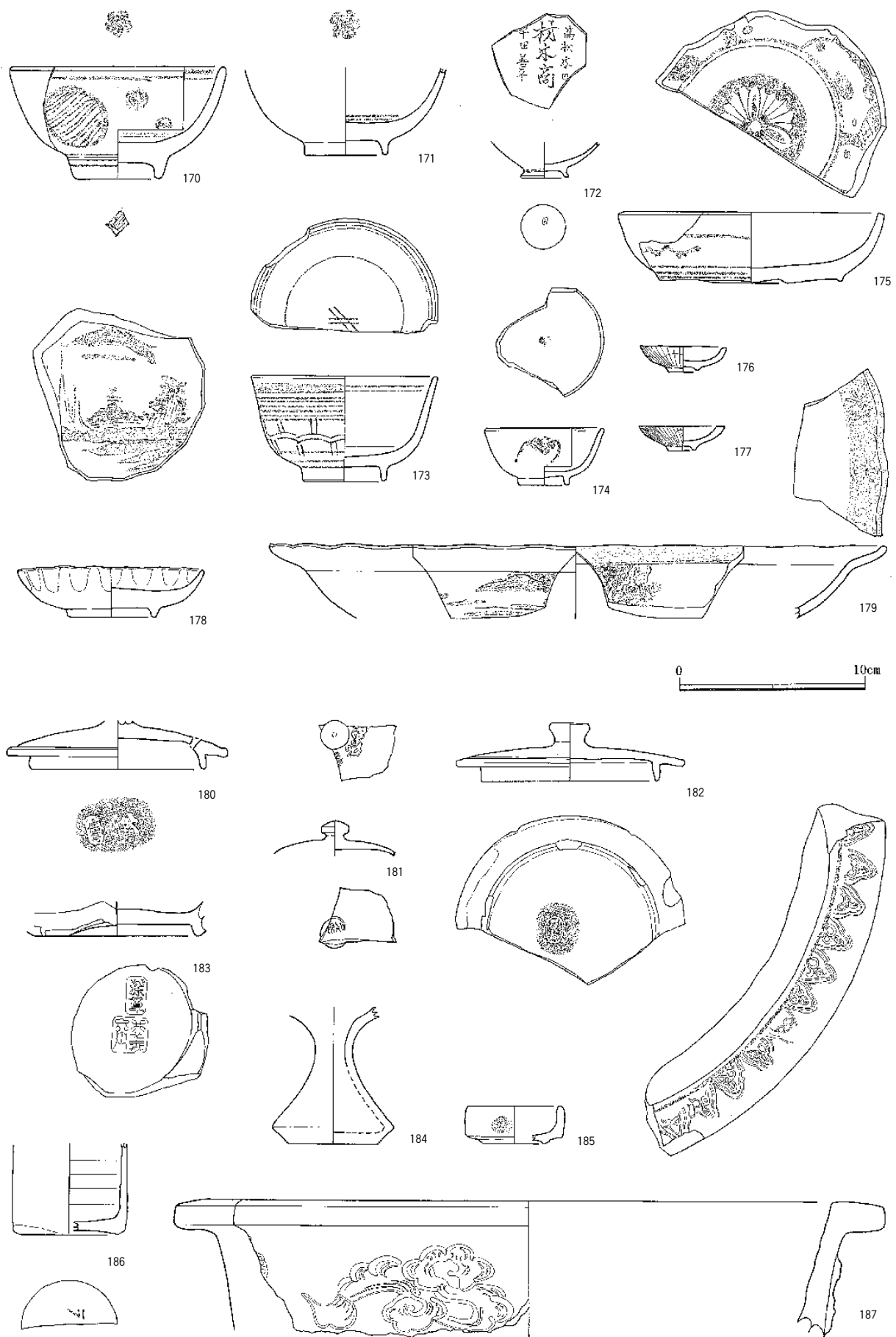
101～157は陶器である。101はミニチュア土製品の蓋である。外面に褐色、内面に白色の施釉を行う。102は急須蓋である。底面に回転糸切の痕跡を明瞭に残す。穿孔は1箇所、外面から内面に向い穿つ。外面にのみ施釉する。103・104は蓋物蓋である。ともに外面のみ褐色釉を掛ける。104は釉の上から緑色と白色を塗布する。105・108・110は屋島焼の蓋である。105は蓋物蓋で、108・110は土瓶蓋である。108・110は底面に回転糸切痕が残る。106は蓋である。内面に「かの」の墨書が見られる。字の線は細く、小筆で書かれたものと考えられる。107は土瓶蓋でアーチ状の摘まみを貼り付ける。外面のみ施釉する。内面はヘラケズリによる整形である。109は大谷焼の土瓶蓋である。小豆状の摘まみを貼り付ける。外面のみ施釉する。内面はヘラケズリにより仕上げる。111は土瓶等の蓋である。外面に3箇所の胎土目積の痕跡が認められる。摘まみ部中心に鉄釉を施す。円孔は1箇所、外から内へ穿つ。外面のみ施釉する。112は中壺蓋である。内面には薄緑色釉、外面には帯状に褐色釉をそれぞれ施す。113は京信楽系の蓋である。6条の凹線が巡り、全面施釉である。114は備前焼の中水注蓋である。外面に火襷が見られる。底面は削り調整により仕上げる。115は小型の杯である。ミニチュア製品の可能性も考えられる。内面に施釉するが、粗雑で釉が付着しない範囲も認められる。外面はケズリで整形する。削り出しの輪高台である。116は京信楽系の平形椀である。釉葉の上から赤色で施文する。高台付近は施釉せず。117は浅半球形の椀である。高台周辺は無釉である。118は方形皿である。四隅は内側へ屈曲する。畳付は施釉後に削る。119は珉平焼の腰張形椀である。畳付は施釉後に削る。120は瀬戸美濃系の丸椀である。高台は貼り付けのちケズリで整形する。高台周辺は無釉である。121は端反椀である。須恵質の胎土に透明釉を掛ける。内面に2箇所の胎土目積みが残る。122～127は底部である。底面に墨書が見られる。123は畳付に「ヨリ」か。126は底面に「□所」と書く。128・129は瀬戸美濃系の皿である。畳付は施釉後に削る。129は屈曲が弱い、蛇の目凹形高台である。内面に漆喰やセメント状の付着物が多量に付着する。130～133は理兵衛焼である。130～132は底部である。底面に「破風高」の刻印を打つ。130は硬質な胎土に透明釉を施す。全面に施釉し、畳付は削り取る。131は杉形の椀か。高台内は無釉である。132は軟質で褐色を呈す胎土に粘度の高い釉葉を掛ける。高台付近は無釉である。130・132の「破風高」は「高」の字の下半が両側に開くのに対し、131の「高」の字は下半が直線的に降りる。133は体部片である。青色で三葉葵を描く。134は瀬戸美濃系の皿である。織部焼風で、緑・褐・赤色系の釉葉を用いる。内面には布目痕が明瞭で、底面は凹字状に削り出す。底面に「多」の墨書と、丸囲いに「春逸」の刻印が見られる。135・136はミニチュアの播鉢である。136は透明釉の上に緑・黄・白色の釉を施す。137は陶胎染付である。「登録」、丸囲いに「さ」?の銘。138・139は珉平焼の火入であ



第26図 地下1階中層出土土器類実測図(5)



第27図 地下1階中層出土土器類実測図(6)



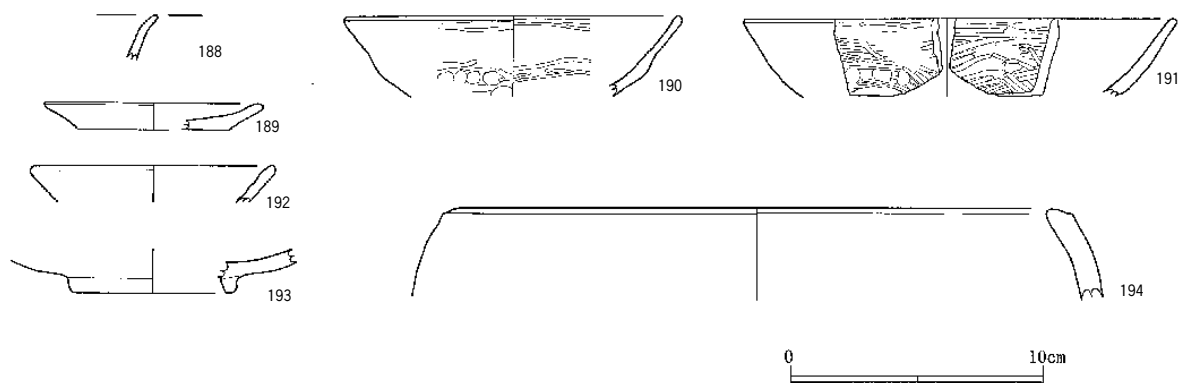
第28図 地下1階下層出土土器類実測図

る。140は火入である。内面に白色の付着物あり。外面は全面施釉で幅広の畳付は施釉後に削り取る。下半を中心に釉薬に発泡が見られる。141は鉢底部か。底面に墨書がみられる。142は器種不明施釉陶器である。外面にのみ緑釉を掛ける。内面に「ツナ」の墨書が見られる。143は火鉢である。「上」字に笠の刻印を施す。144は火鉢である。内面・底面は無釉で、底面に墨書が見られる。145は植木鉢である。内面・高台内に鉄釉、外面に深緑色釉を掛ける。深緑色釉は底面と畳付の一部にも付着する。底面に2箇所以上の穿孔を施す。146は瀬戸美濃系の水鉢底部である。内面に2箇所以上、畳付に3箇所以上の砂目積が見られる。底面は無釉で、ケズリ調整で仕上げる。147・148は備前焼の播鉢である。148の見込み部分は放射状の条痕が残る。149は播鉢である。胎土は粗く、見込みには格子状の条痕が残る。150は鉢の底部である。底面に「火カ」の墨書が見られる。151は屋島焼の火鉢である。四角囲いに「大」、もしくは「因」の刻印を打つ。152は方形の髪油壺か。型打ち成形である。153は小瓶の底部である。底面はヘラ切痕が残る。154は水滴である。型合わせ成形で製作する。表面に「壽」の陽刻が見られる。155は備前焼の瓶である。底面に四角囲いに「山八」の刻印を打つ。156は大谷焼の徳利である。底面ヘラ切りか。157は京・信楽系の盤口形仏花瓶である。濃緑色釉で、外面下半～高台内面と、内面下半は無釉である。158～160は土瓶の底部か。外面に墨書が見られる。159は「奥」か。内面に陶胎積の痕跡1箇所が残る。161は備前焼体部である。外面に墨書。

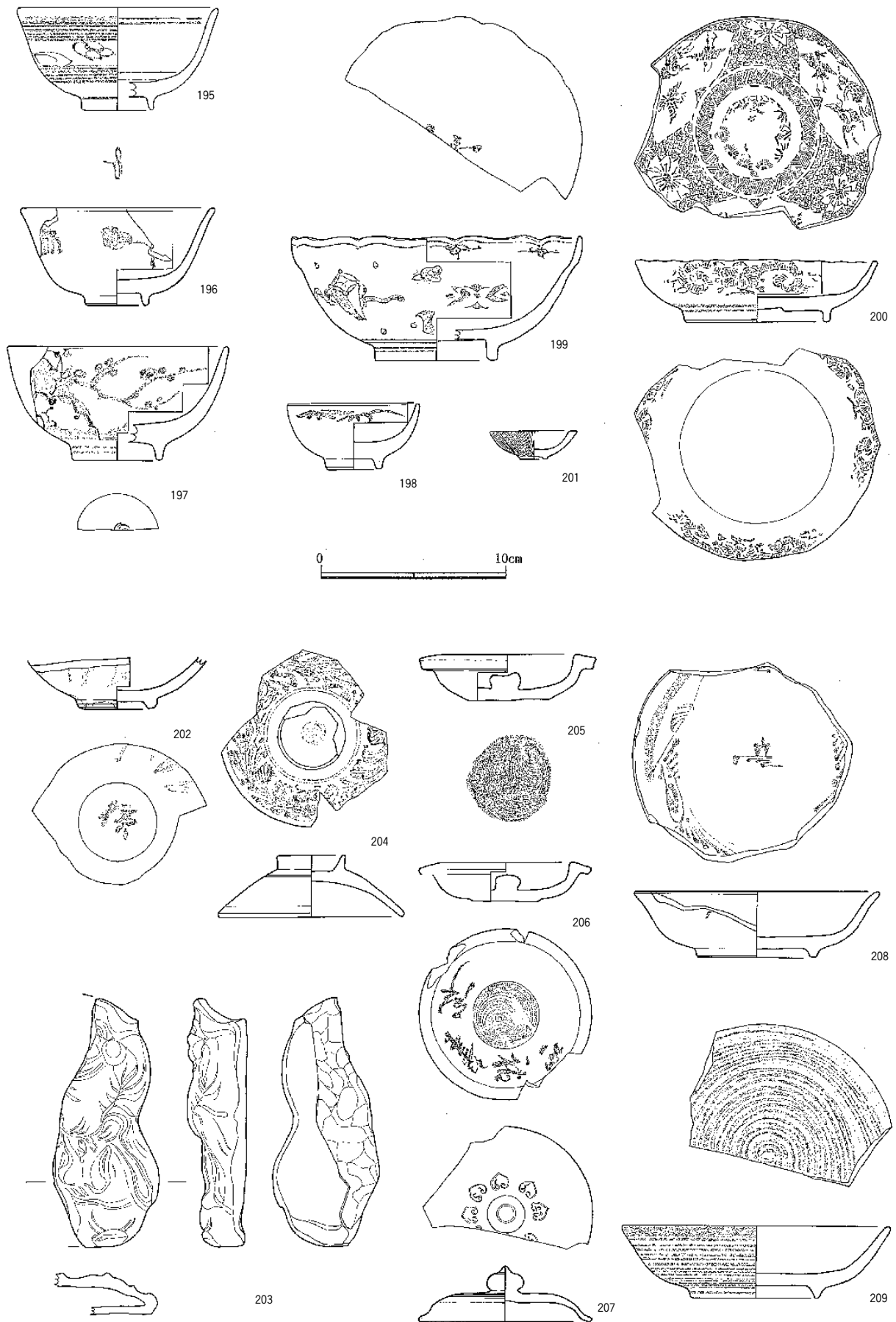
162～169は土師質土器である。162は灯明皿である。口縁端部と見込みに被熱による黒変が見られる。163は土師質土器皿である。底面は回転糸切痕が残る。164～166は焼塩壺蓋である。164は中央部が高く、165・166は頂部が平坦である。いずれも内面に布目痕が残る。167・168は焼塩壺である。167には四角囲いに「□□」の刻印をうつ。168は輪積み成形である。口縁端部をなでて丸く仕上げる。169は火消し壺の蓋である。底面は型押しによるものか、非常に平坦で精緻である。底面に被熱によると考えられる黒変がみられる。

ウ 地下1階下層出土土器(170～187)

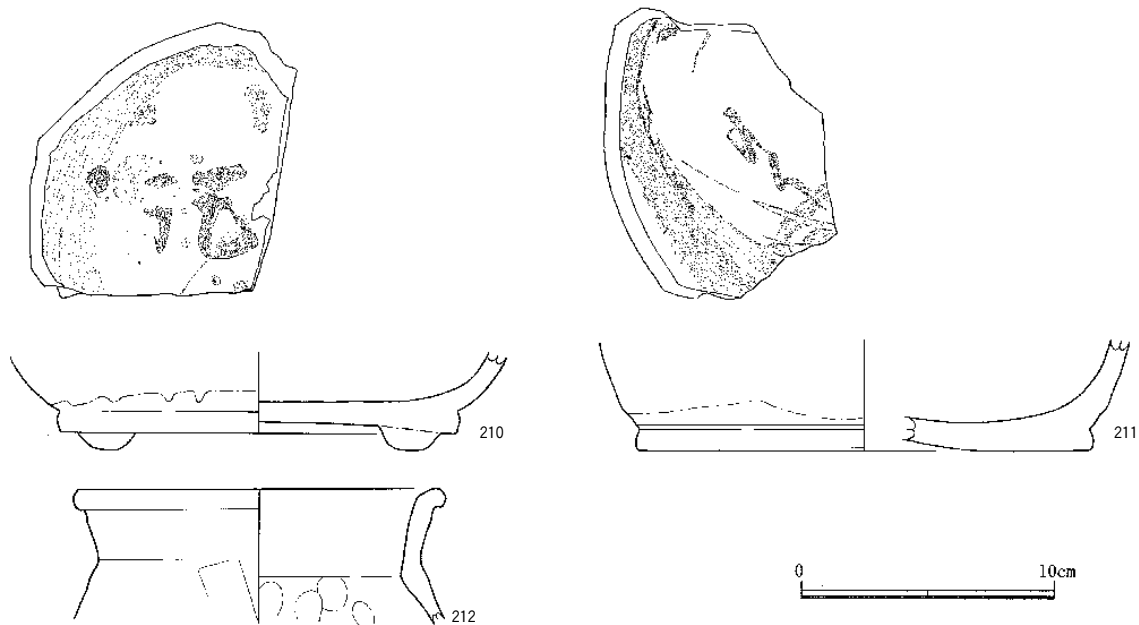
170～179は磁器である。170は肥前系の丸椀である。畳付と見込みに砂粒多量に付着する。171は肥前系の椀である。外面に青磁釉、内面は透明釉を掛ける。畳付に砂粒が付着する。172は小杯である。内面に金字で「高松本町」「材木商」「半田善平」の銘。173は肥前系の端反椀で



第29図 地下1階床面直上出土土器類実測図



第30図 地下1階出土層位不明土器類実測図(1)



第31図 地下1階出土層位不明土器類実測図(2)

ある。174は小型の端反碗である。外面に漆喰状の付着物多量に残る。175は肥前系の皿である。蛇の目凹形高台で、高台高が極めて低い。176・177は肥前系の紅猪口である。型打ち成形で、177の方が176よりも条痕の本数が多い。内面と外面上半にのみ施釉する。178は肥前系の菊花皿で、型打ち成形である。口紅が見られる。畳付に融着防止の砂粒が付着する。同様の文様構成を採る他の皿に多く見受けられる、底面の「中」字は認められない。179は肥前系の大鉢である。口縁部が波形を呈す。「波水」銘を白抜きする。180～182は屋島焼の土瓶蓋である。180は内面に「大」と「屋□(島にやまかんむり)」の刻印を打つ。1箇所を円孔を外側から内側へ向かって穿つ。外面のみ施釉する。182は内面に「屋島」の刻印が見られる。印影が不明瞭だが、180と同様やまかんむりの「島」であると思われる。183は京・信楽系の底部である。底面に隅丸方形囲いに「深草」と同じく隅丸方形に「井義齋」の刻印がある。高台には面取りがなされており、2・3箇所を接地するものと考えられる。184は大谷焼の小瓶で、底面に糸切痕が認められる。185はミニチュアの碗である。屋島焼か。透明釉の上に緑色と白色で色付けする。186は京・信楽系の灰吹である。内面に褐色釉、外面に白色釉を掛ける。底面は無釉で、「ラ」字状の墨書が見られる。187は瀬戸美濃系の水鉢である。口縁部内面のL字に屈曲する部分のみ釉が剥がれる。

エ 地下1階床面直上出土土器(188～194)

188は陶器端反碗の口縁部である。189は土師質土器皿である。190・191は瓦器碗である。192は土師質土器杯口縁部である。193は土師質土器碗・杯底部である。194は土師質土器足釜である。

オ 地下1階出土層位不明土器(195～212)

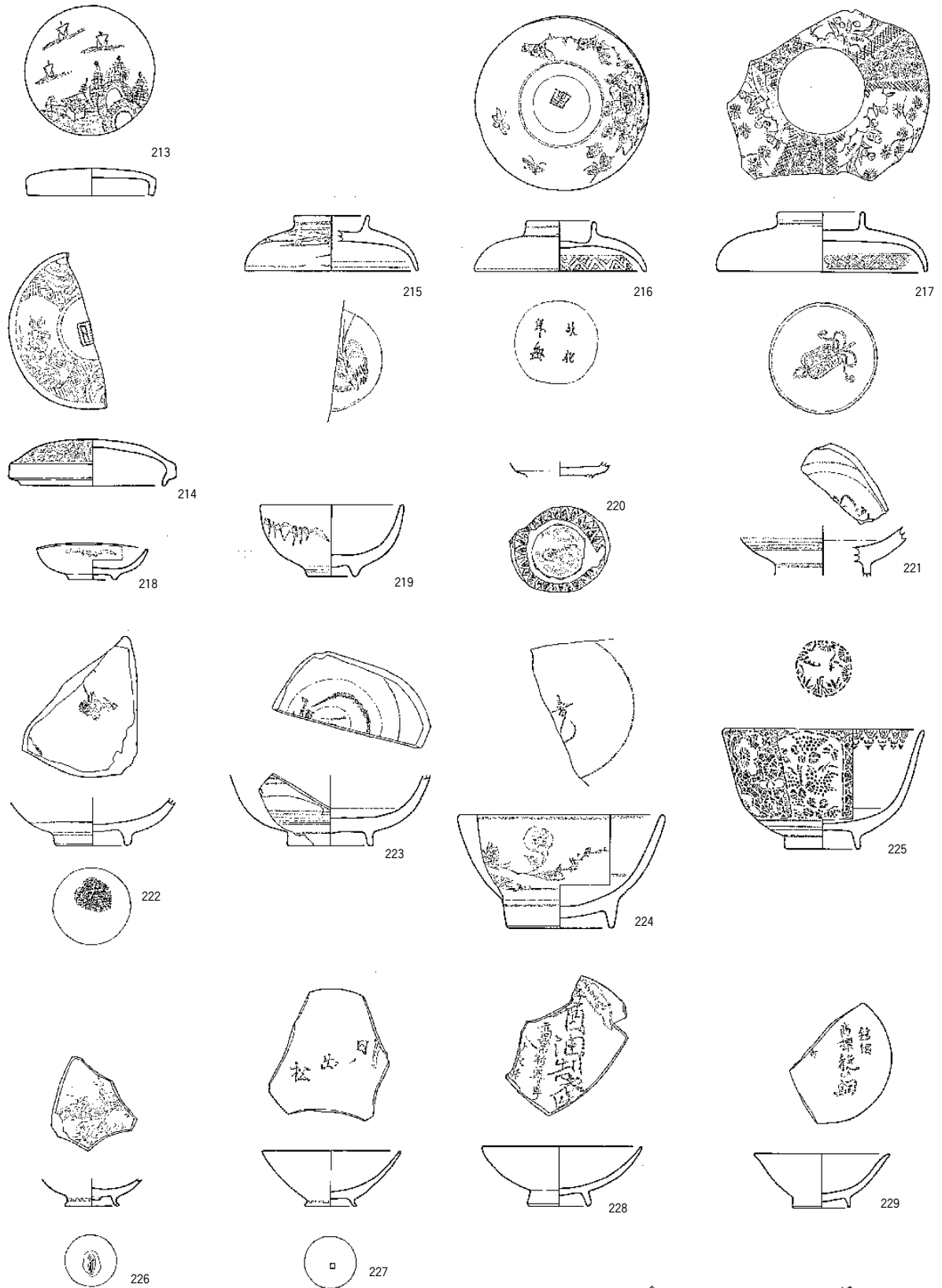
195～201は磁器である。195は肥前系の端反碗である。内面に蛇の目釉剥ぎ。畳付も施釉後に削る。196は瀬戸美濃系の端反碗である。畳付は施釉後削る。197は肥前系の端反碗である。畳付に砂粒が付着する。198は小杯である。畳付に融着防止の砂粒が見られる。199は鉢である。

型打ち成形で、畳付は施釉後に削る。200は肥前系の皿である。内面に5箇所の融着防止の痕跡が残る。うち一箇所に長石粒が残存していることから、石目積か。高台は蛇の目凹形高台である。畳付まで施釉する。201は型成形の紅猪口である。

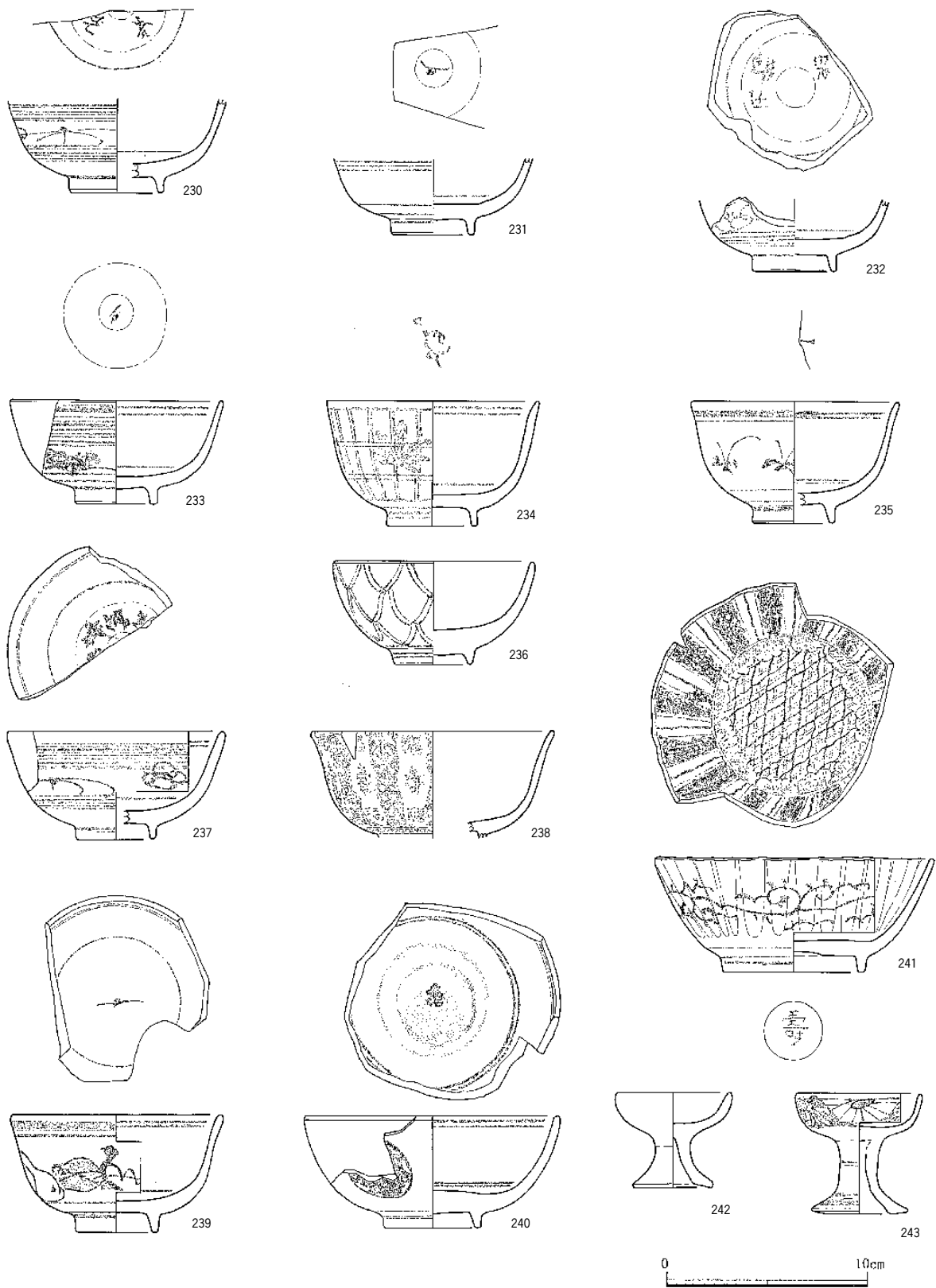
202～211は陶器である。202は瀬戸美濃系の底部である。底面に「横」の墨書が見られる。203は備前焼の花入である。大黒天を象り、頂部に楕円形の孔を穿つ。型成形で、内面には指押さえの痕跡が明瞭である。背面がやや窪んでおり、乾燥前に一部変形したものと考えられる。204は京信楽系の蓋である。摘まみ部の端部は施釉後削り取る。205・206は屋島焼の土瓶蓋である。ともに底面に糸切痕を残す。205は端部厚く、摘まみが潰れた形状を呈す。206は「御祐筆所」の墨書が見られる。207は蓋物蓋である。屋島焼か。宝珠形の摘まみを持つ。208・209は瀬戸美濃系の皿である。畳付は施釉後釉を削り取る。210・211は風炉である。同一個体の可能性がある。大谷焼か。脚は半球形を呈す。210は内面に「記」の墨書が見られる。211も墨書が確認できる。212は土師質土器の蛸壺口縁部である。法量から真ダコ壺か。

カ 玉藻廟基礎部出土土器 (213～455)

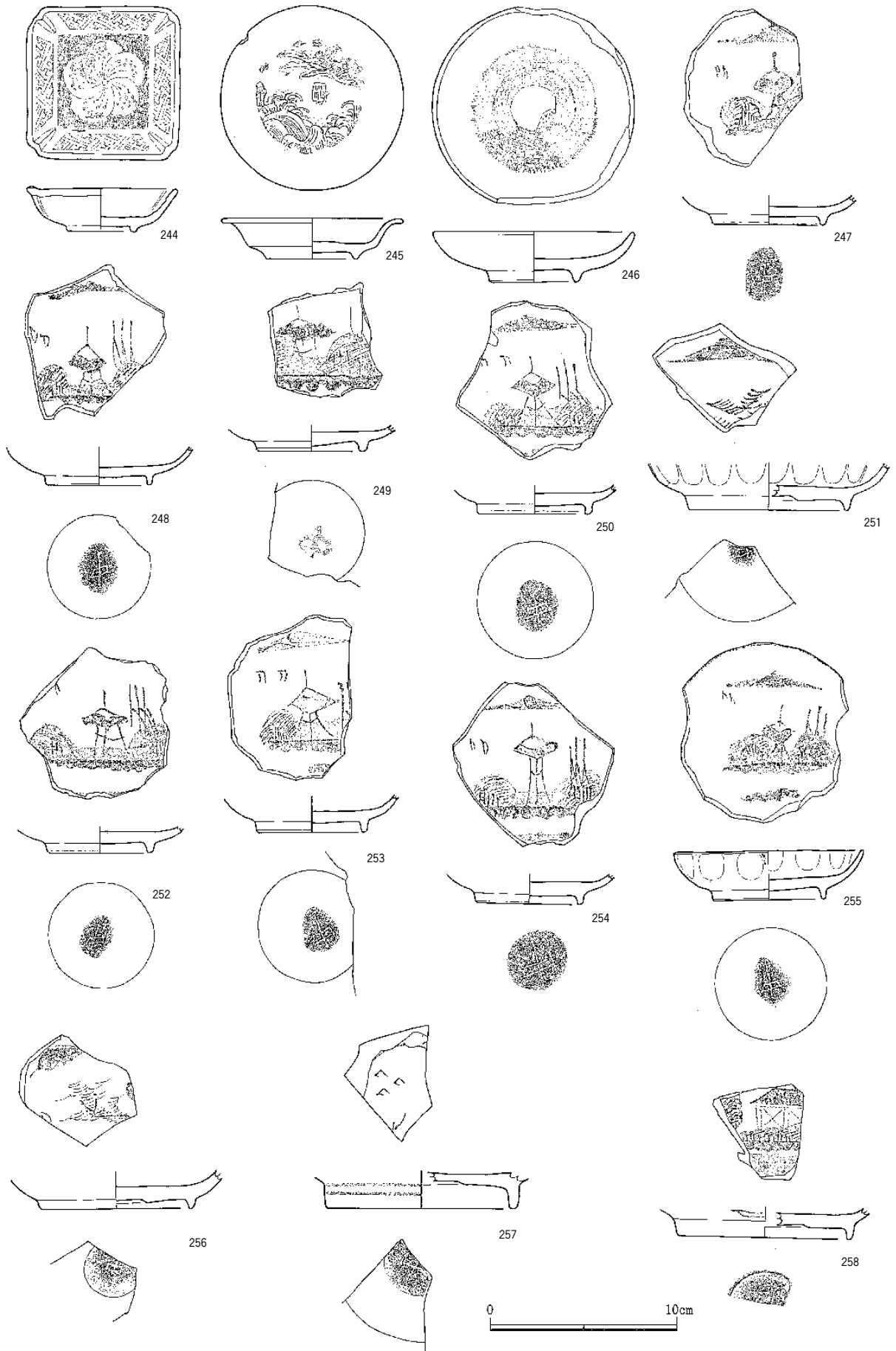
213～299は磁器である。213は肥前系の蓋である。合子蓋か。口縁端部は施釉後に削る。214は肥前系の色絵蓋である。釉薬の上に文様を縁取りし、赤・緑色で描く。215・216は肥前系の椀蓋である。216は見込みに「成化年製」の銘が残る。畳付は施釉後に削る。217は色絵蓋である。釉の上に赤・薄緑色で絵付けを行う。219は肥前系の小杯である。高台付近の釉に気泡が顕著である。畳付に砂粒が付着する。220は色絵である。蓋の可能性もある。施釉後に赤色と薄緑色で描く。内面には褐色の付着物が残る。顔料であろうか。底面に赤色で「□(与カ)三造」の銘を描く。222は肥前系の底部である。底面に点刻状の釉剥ぎにより「大」の字を書き出す。釉剥ぎ後の「大」に茶褐色の塗料を塗布した可能性がある。223は肥前系の底部である。見込みは蛇の目釉剥ぎで、釉剥ぎ部分に墨書を施す。畳付は無釉である。224は肥前系の広東椀である。225は肥前系の端反椀である。型紙染めである。呉須の滲む箇所が複数見られる。畳付は施釉後に削る。226～229は酒杯である。226は平形鉤高台で内面に青色と金色の色絵を描く。青色絵は粘度が高く、絵付け部分が盛り上がるのに対し、金色絵は平滑である。底面に花卉状の陽刻が見られる。畳付は施釉後に削る。227は平形鉤高台で、内面に施釉後、金字で「日ノ出松」銘を描く。228は釉の上に赤(褐色)字で「小豆嶋」、黒字で「醤油製□」、金字で「高松市新通り田丁(町カ)」、傘に「□□(坂カ)井」銘。229は呉須無く、施釉後内面に青字で「銘酒」「商標」「祝ひ鯛」「町」銘を描く。焼成不良によるものか、銘は全て黒色に変じる。230は肥前系の椀である。見込みは蛇の目釉剥ぎで、「光香」の墨書が見られる。破断面にも墨が付着しており、墨書は破損後になされた可能性も考えられる。231・232は肥前系の底部である。見込みは蛇の目釉剥ぎで、墨書が見られる。231は墨が薄くなり、判読不能である。233は肥前系の端反椀である。見込みは蛇の目釉剥ぎである。畳付は施釉後削る。234・235は肥前系端反椀である。畳付に砂粒が少量付着する。236は肥前系の丸椀である。底部が非常に厚手である。237は肥前系の端反椀である。見込みは蛇の目釉剥ぎに墨書を施す。畳付は無釉である。238は端反椀である。型紙刷りで、「福」「壽」



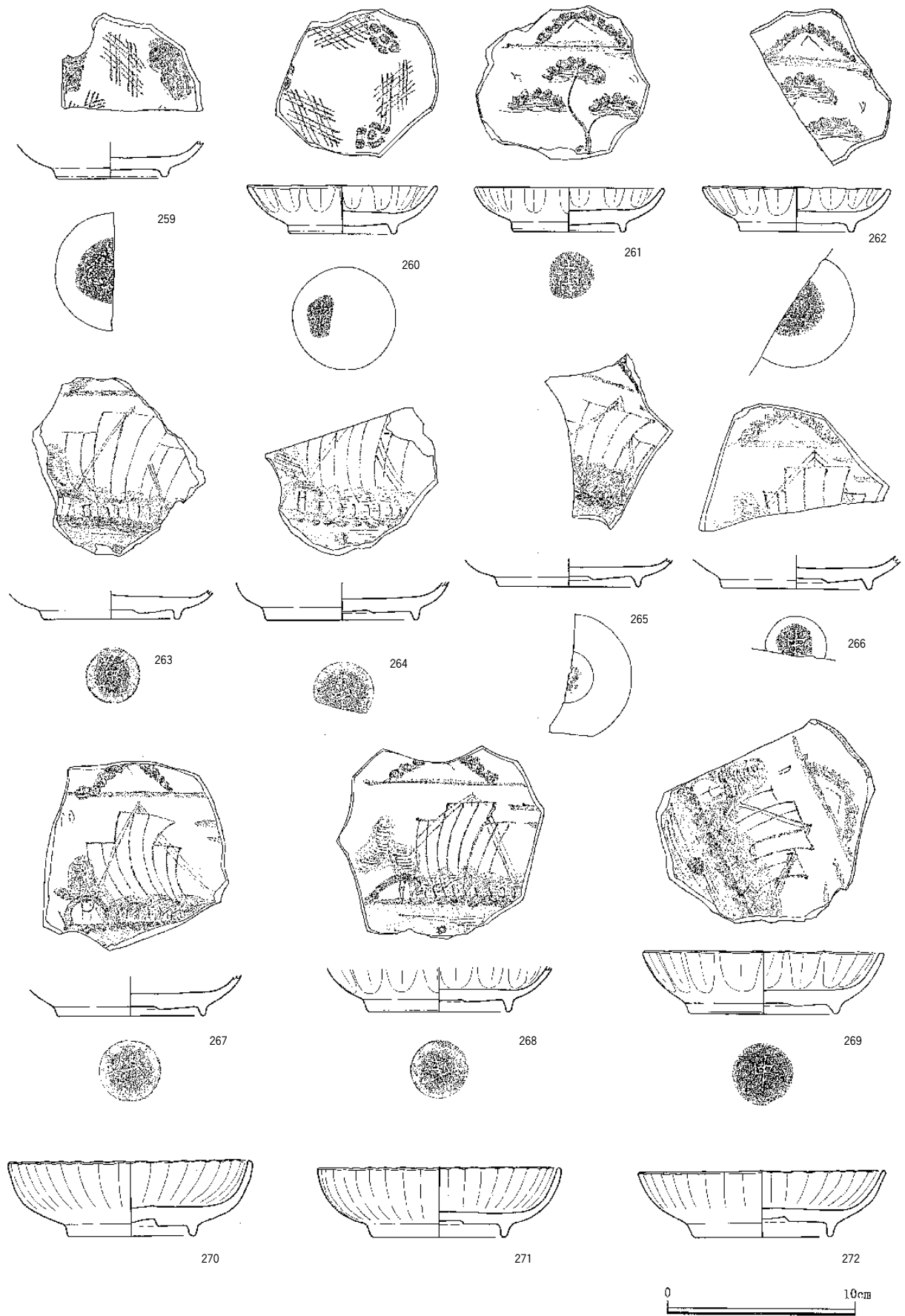
第32図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図(1)



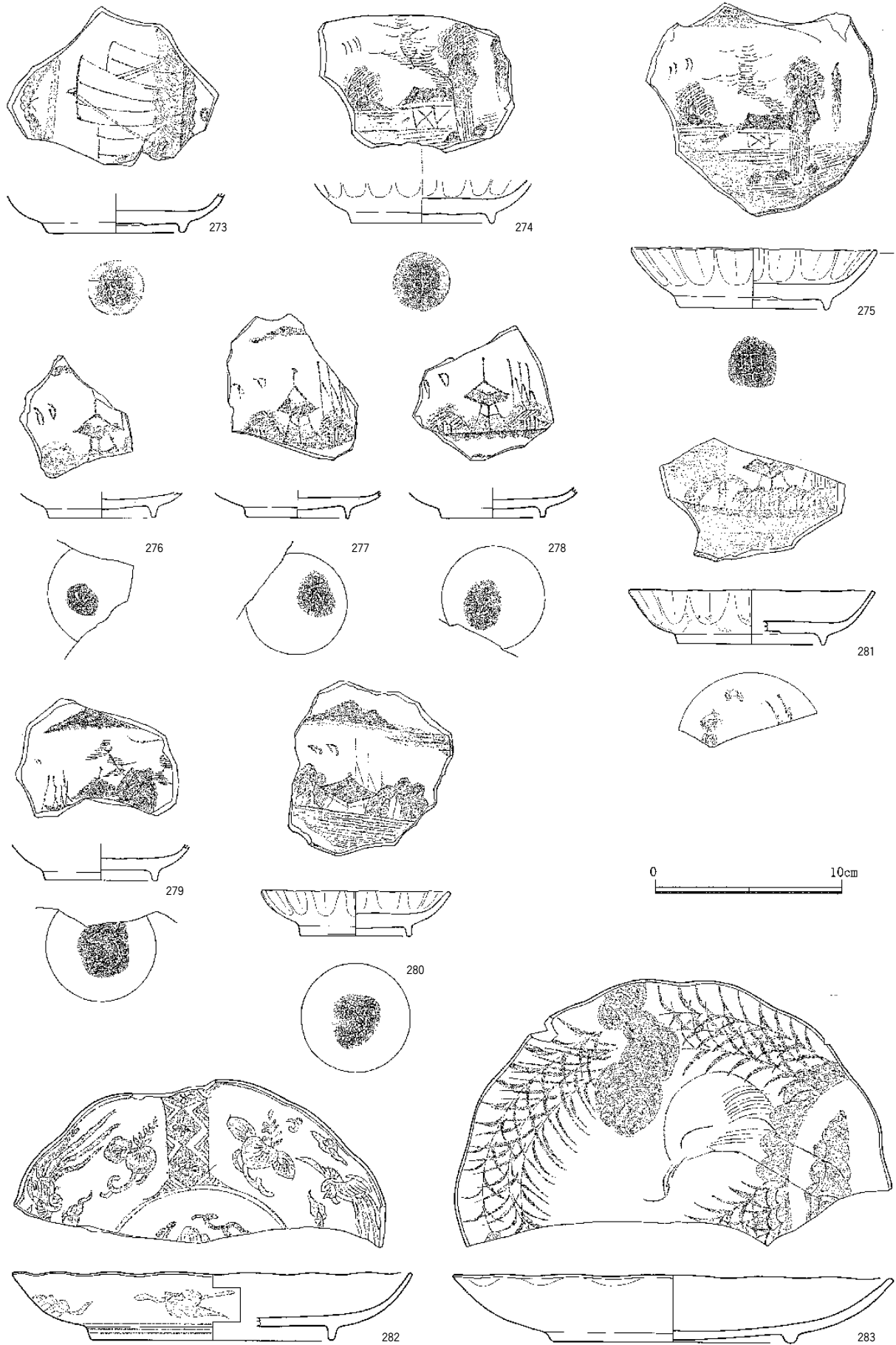
第33図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図（2）



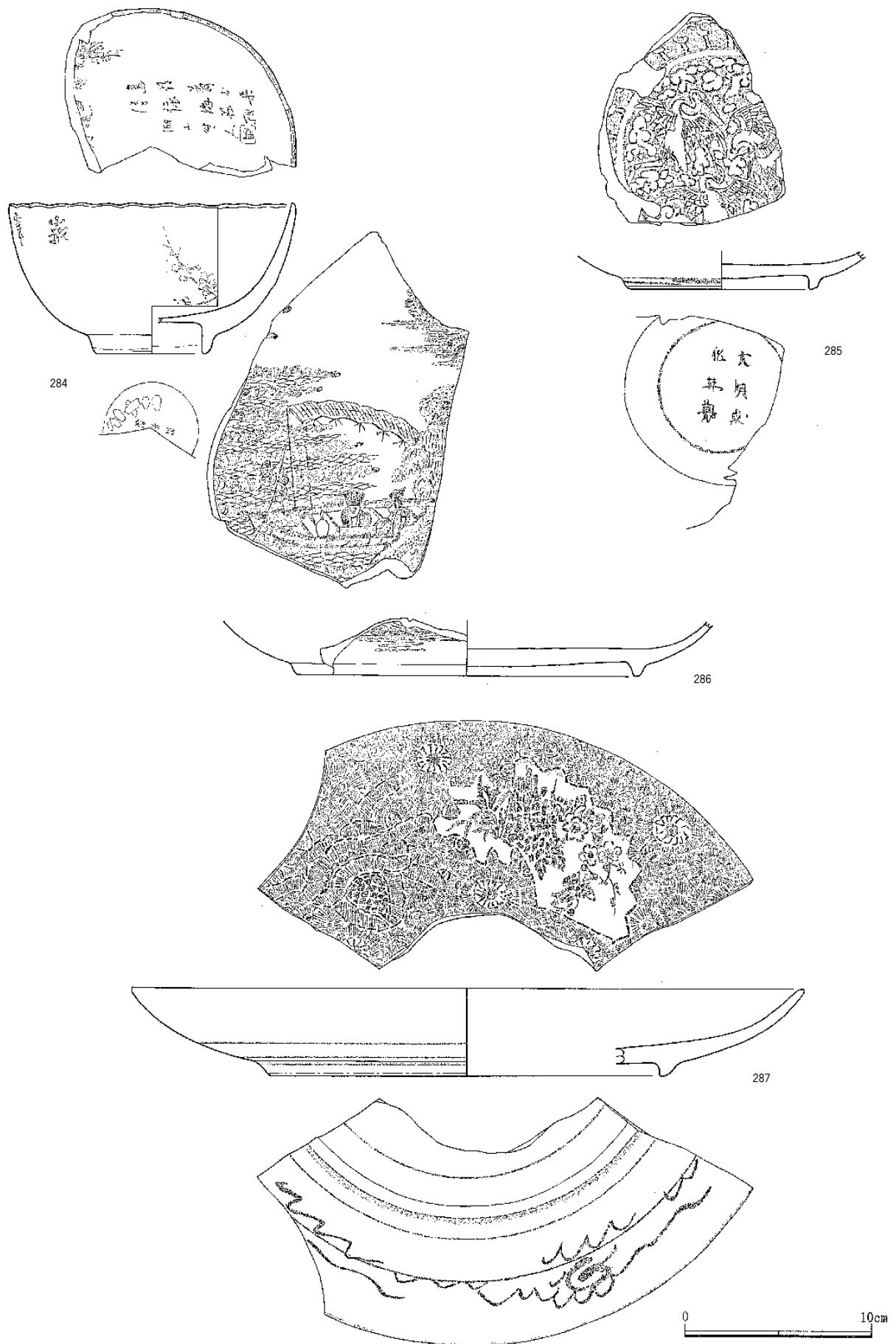
第34図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図(3)



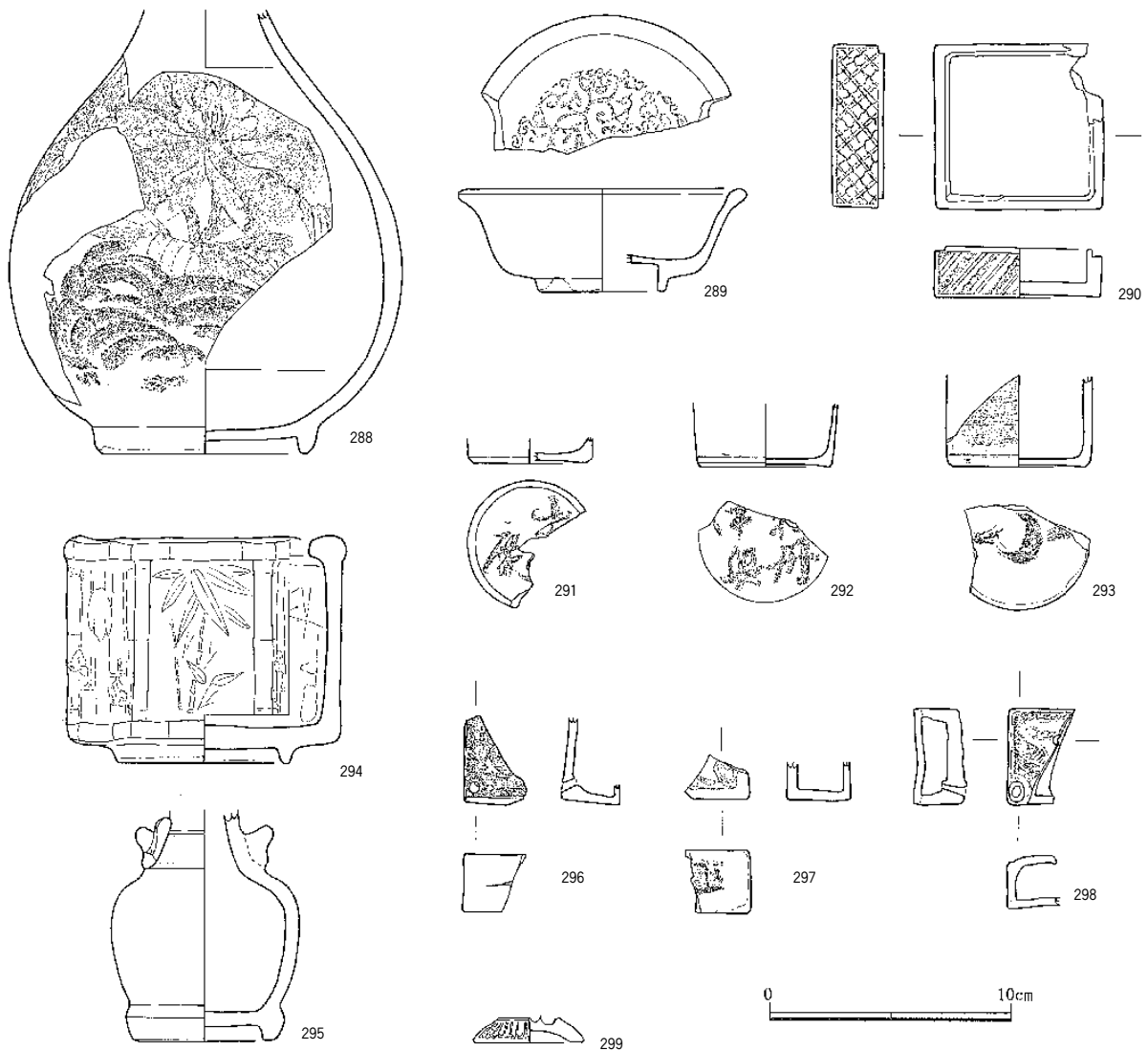
第35図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図(4)



第36図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図(5)

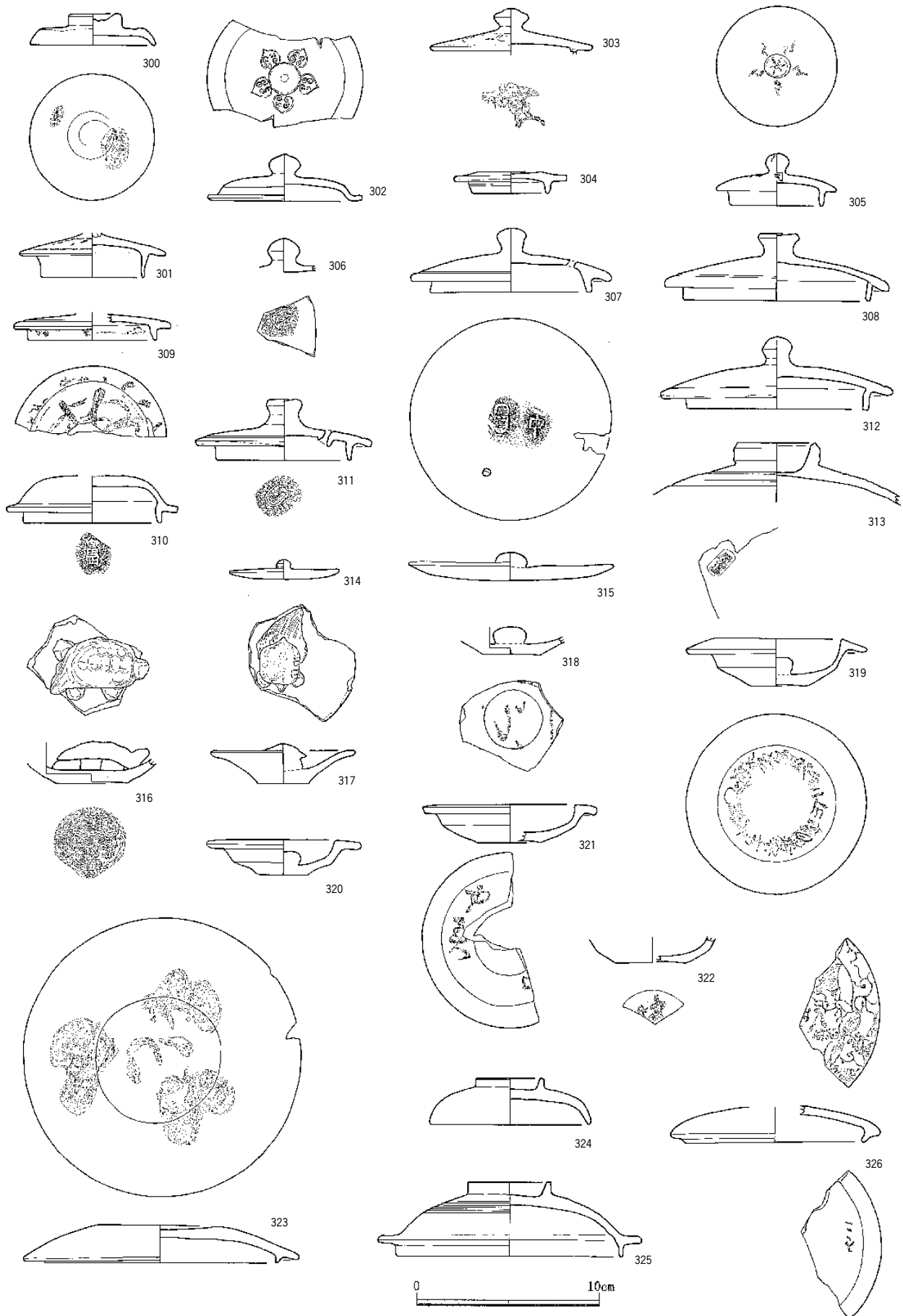


第37図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図(6)



第38図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図（7）

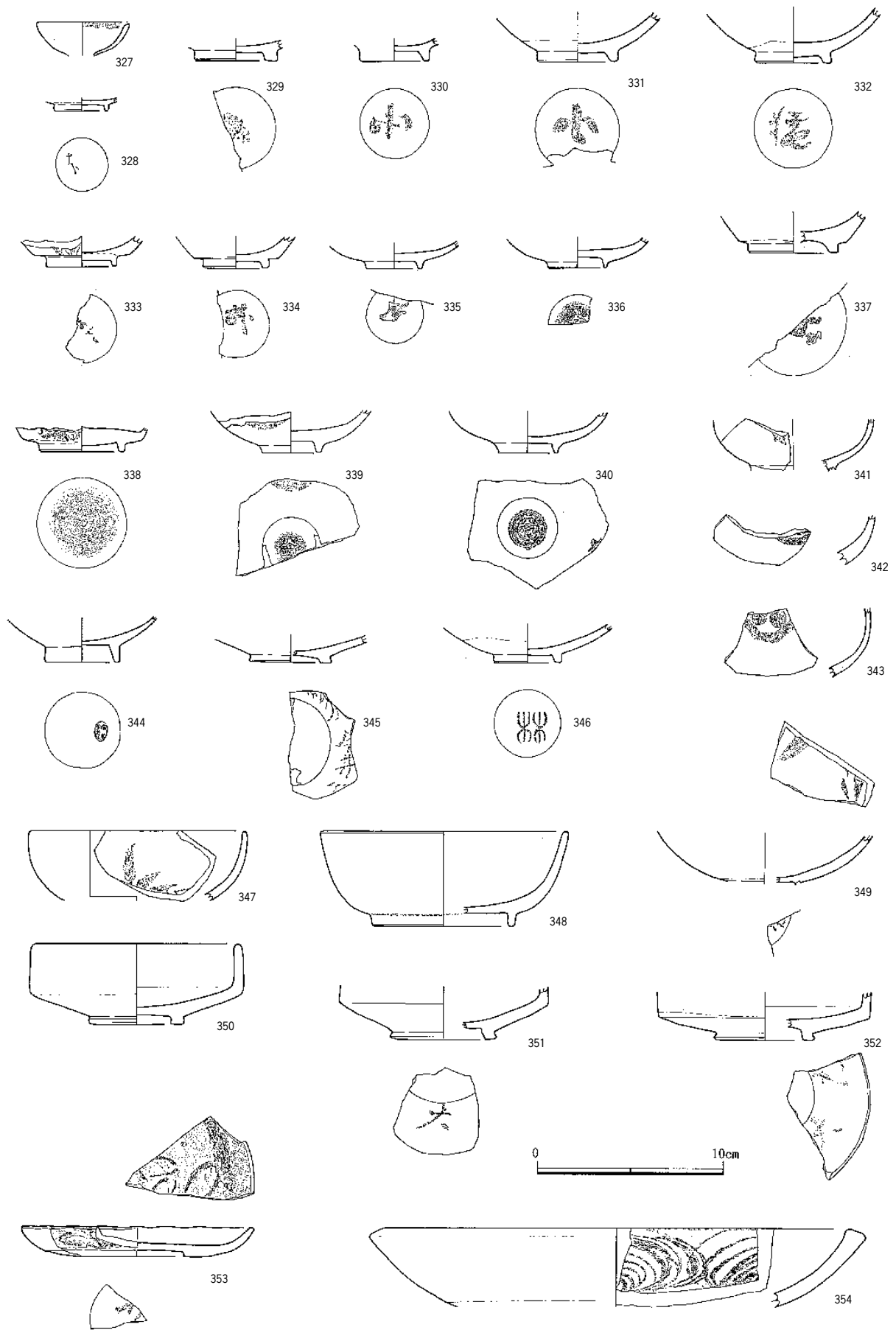
を連続して刷る。呉須が滲む箇所が複数見られる。内面には朱色の顔料が付着する。239は肥前系の端反碗である。畳付は施釉後削る。240は肥前系の丸碗である。見込みに不製形な円形に融着防止の砂粒が付着する。畳付にも同様の砂粒が付着する。241は型打ち成形の碗である。蛇の目凹形高台で、底面に点刻状の釉剥ぎで「壽」銘を施す。242・243は仏飯器である。242は瀬戸美濃系で外面全面に呉須が見られる。台底は抉り込みである。243は色絵で、釉の上に赤・薄緑・青色で絵付けする。244は型打ち製形の方形皿である。呉須が見込みの花文の一部にはみ出しており、粗雑な印象を受ける。高台も方形で、型合わせによる製形か。245は稜皿形皿である。陽刻した文様の上に呉須を塗布する。はみ出しも多く、粗雑な印象を受ける。内面に漆喰状の付着物が多量に残る。246は肥前系の小皿である。見込みは幅広の蛇の目釉剥ぎを行う。施文はないが、呉須が極小の斑紋状に付着する。畳付は施釉後に削る。247～255は肥前系の皿である。文様構成が共通し、字体は様々であるが、底面の点刻状の釉剥ぎによる「中」銘も共通する。251は型



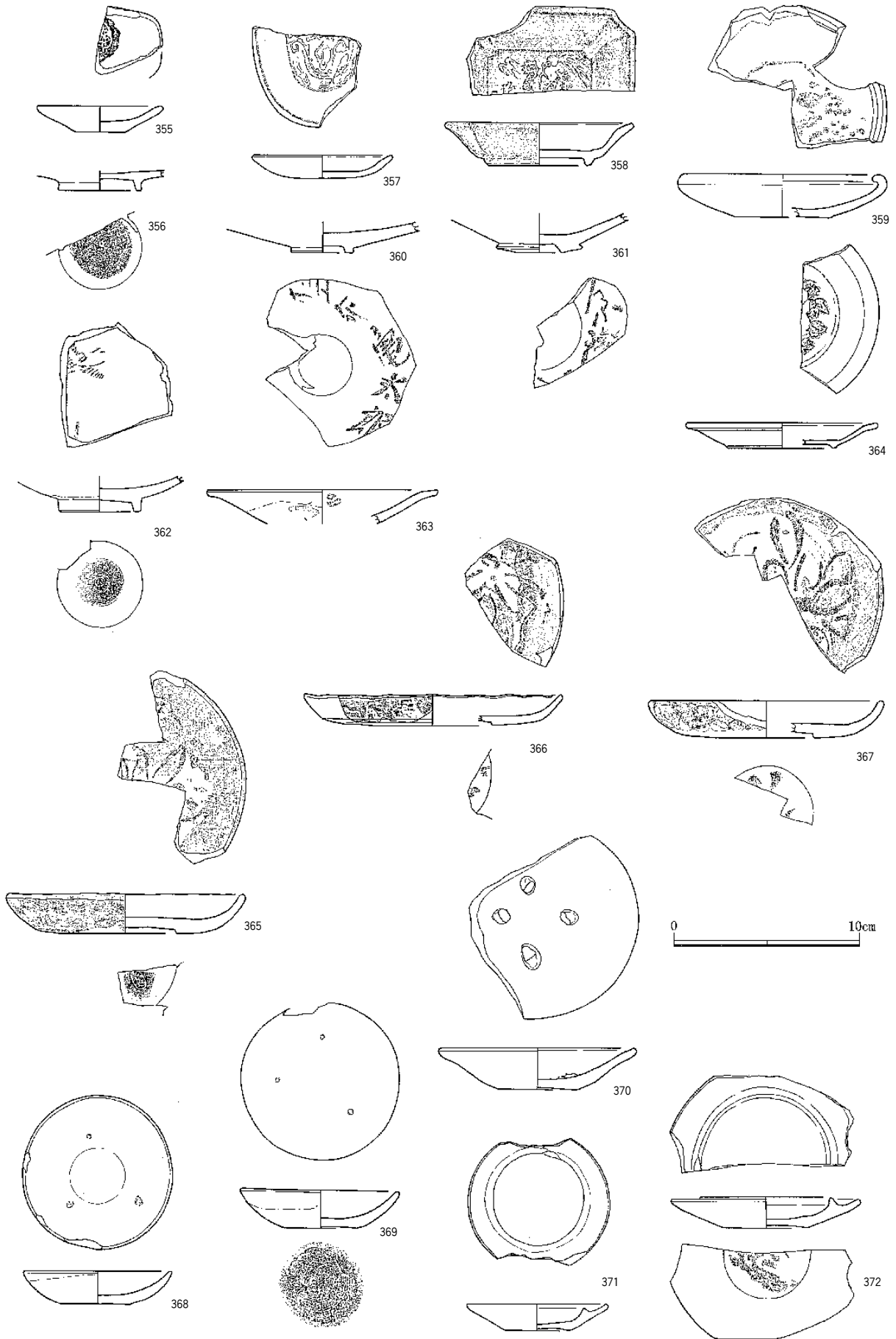
第39図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図(8)

打ち製形の蛇の目凹形高台である。255は型打ち製形で口紅を施す。256・257は蛇の目凹形高台で、釉剥ぎによる「中」銘が見られる。257は247～255と共通の文様か。258は蛇の目凹形高台で、底面に釉剥ぎによる「小」と見られる銘が見られる。274・275と文様構成が類似するが、274・275は底面に釉剥ぎによる「中」銘である点が異なる。275は口紅を施す。259・260は肥前系の皿で、文様構成が類似する。底部にはいずれも釉剥ぎによる「中」銘が見られる。259は粗雑な印象を受ける。260は口紅を施す。261・262も文様構成が類似する。型打ち製形の肥前系皿で、法量もほぼ同じである。底面に釉剥ぎによる「中」字を描く。263～269・273は肥前系の皿で、文様構成が類似する。いずれも蛇の目凹形高台で、底面に釉剥ぎによる「中」が見られる。270～272は型打ち製形による肥前系皿である。蛇の目凹形高台で、法量もほぼ同じである。施文は見られない。276～278は、247～255と文様構成が類似するが、底面に釉剥ぎによる「ス」字状の銘である点が異なる。279・280は底面に釉剥ぎによる「丁」字状の銘が残る。281も247～255と文様構成が類似するが、底面に釉剥ぎによる銘は無い。蛇の目凹形高台で、底面に「□年」「□年」「八」「六」の墨書が見られる。282は肥前系の色絵皿である。型打ち製形で、内面は釉の上に赤・金・薄緑・青・朱色で絵付けを行う。底面は施釉後削る。283は肥前系の大皿である。底面に2箇所のハリ支えが見られる。畳付は施釉後削る。284は瀬戸美濃系の鉢である。外面は青磁、内面は透明釉を施す。口紅が見られる。外面の梅花は白色釉を肉厚に施釉し、赤色で弁を描く。外面に「寒□」、内面に「書好□」、底部に「三十二」の墨書が見られる。285は肥前系大型器種の底部である。底面に「大明成化年製」の銘が見える。畳付は施釉後削る。砂粒が付着する。286は肥前系大型器種の底部である。底面に4箇所以上のハリ支え跡が残る。287は肥前系の大皿である。型紙刷りで、口縁部付近は滲みが著しい。畳付には砂粒が多量に付着。外面に石膏状の付着物多量に残る。廃棄後に付着したものか。288は肥前系の大瓶である。畳付・内面は無釉である。289・294・295は青磁。289は香炉で、見込みに呉須で施文する。294は六角形香炉である。青磁釉は内面上半と外面に施釉され、高台内は透明釉である。型押しで成形した板状の6枚の部材と底部を組み合わせて製作しており、内面に接合部が明瞭で、接合部を接着する肉厚の陶土が観察できる。口縁部は釉が砂粒により粒状に剥がれる。295は仏花瓶である。内面は無釉で、畳付は施釉後削る。畳付に砂粒が付着する。290は方形の合子である。底面は無釉で、幅0.5mm程度の直線的な痕跡が格子状に見える。融着防止か、乾燥時に底部に敷いた部材の痕跡の可能性が考えられる。口縁部の突起は施釉後削り出して形成する。291～293は徳利である。底面は無釉で、墨書が残る。291は「出」「戻」か。292は「□丹」「□奥」。293は「小」か。296～298は水滴である。296は色絵である。赤色と薄緑が見られる。内面裏側に布目痕が残る。板状の部材を接着して成形する。297は底面に墨書が見られる。298は内面に布目痕が明瞭に残る。外面裏側にも釉薬の下に布目痕が見える。穿孔は外側から内側に向かって行われる。板状の部材を接着して成形している。299は白磁の土人形である。石塔の基部であろうか。底面は無釉である。

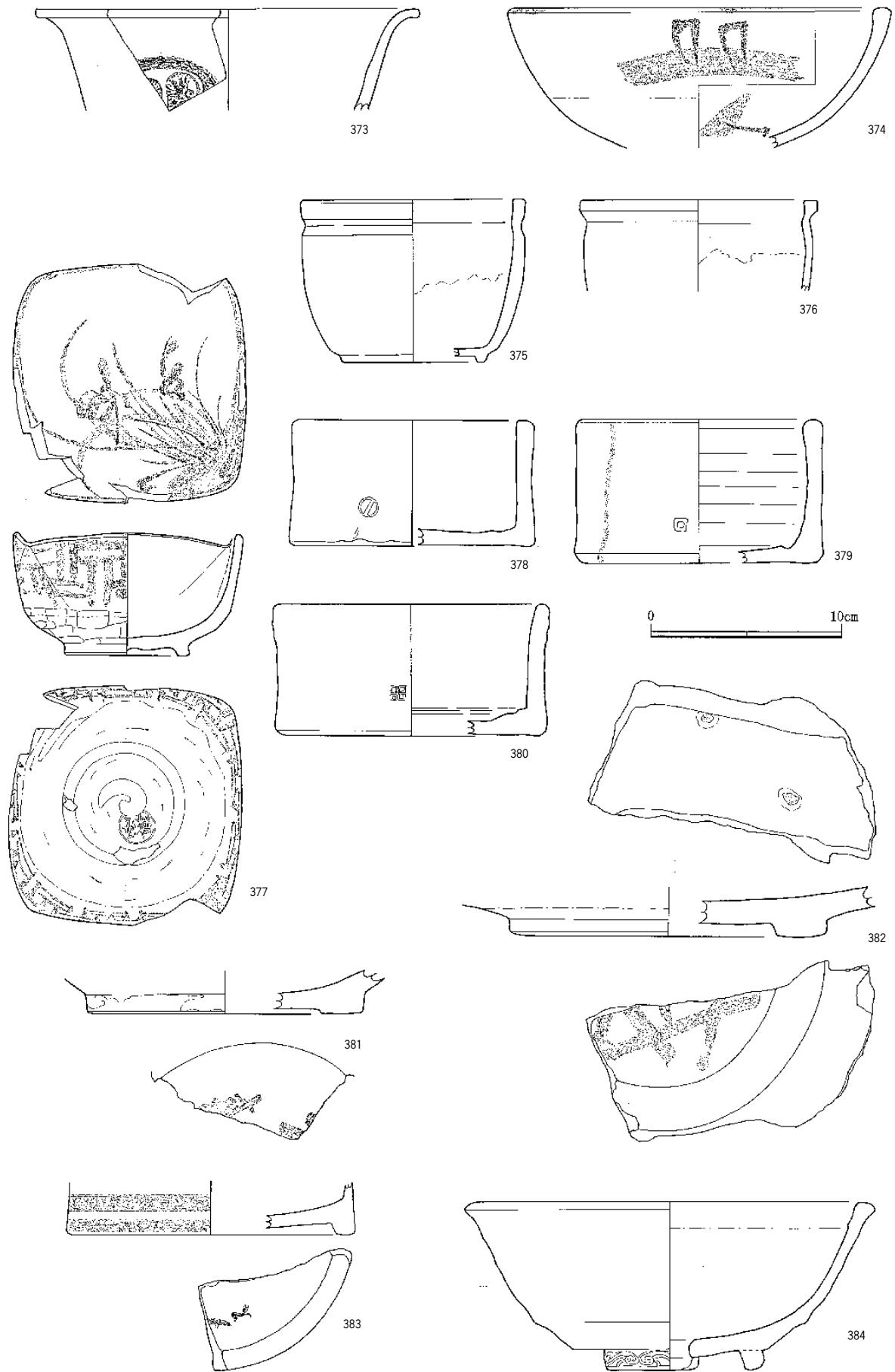
300～420は陶器である。300は蓋である。内面と外面下半のみ施釉する。頂部は削り出しである。301・303は京信楽系の蓋である。内面は無釉である。301は褐色の線描に青色の釉で円を描く。



第40図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図(9)

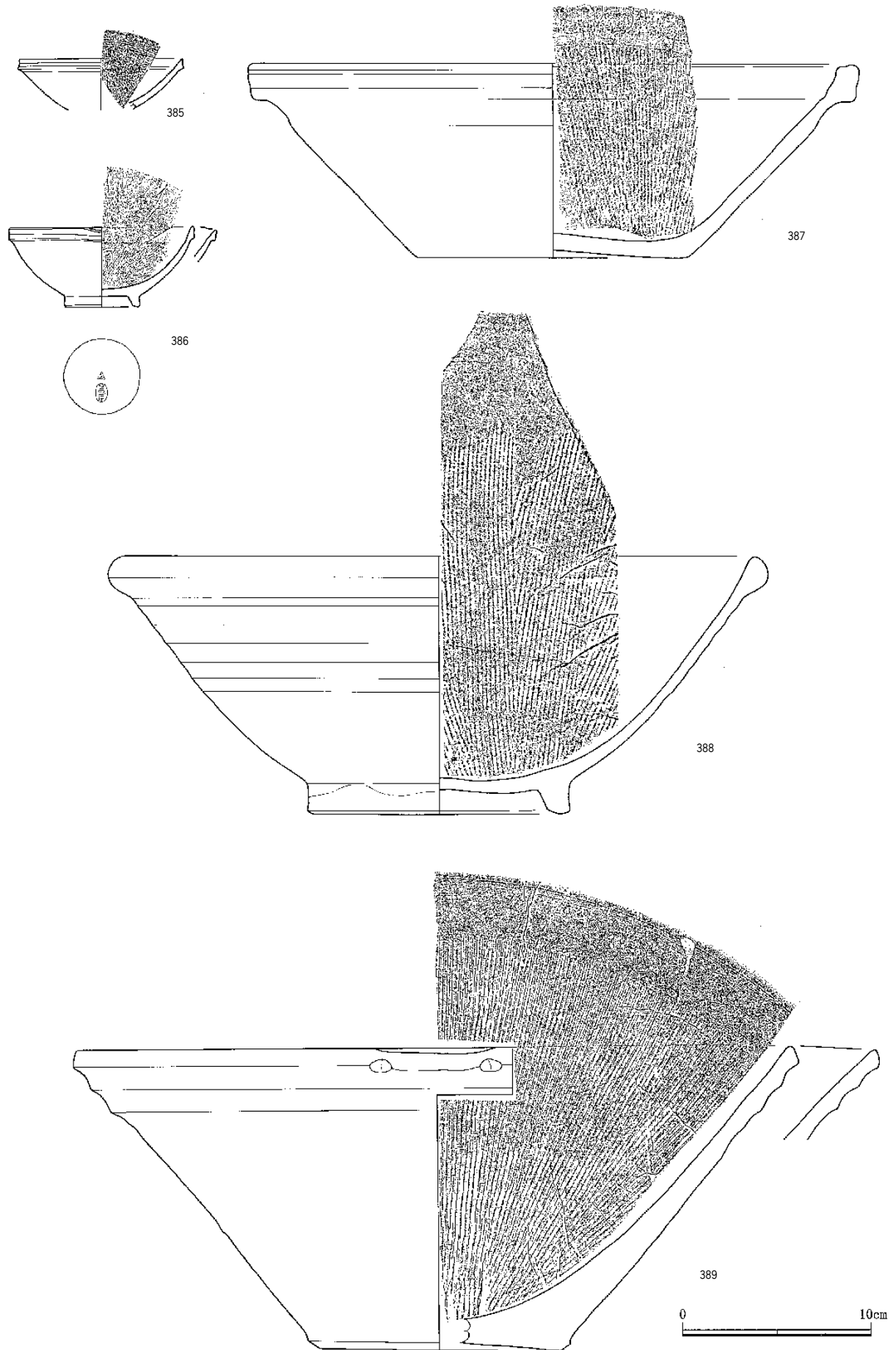


第41図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図(10)

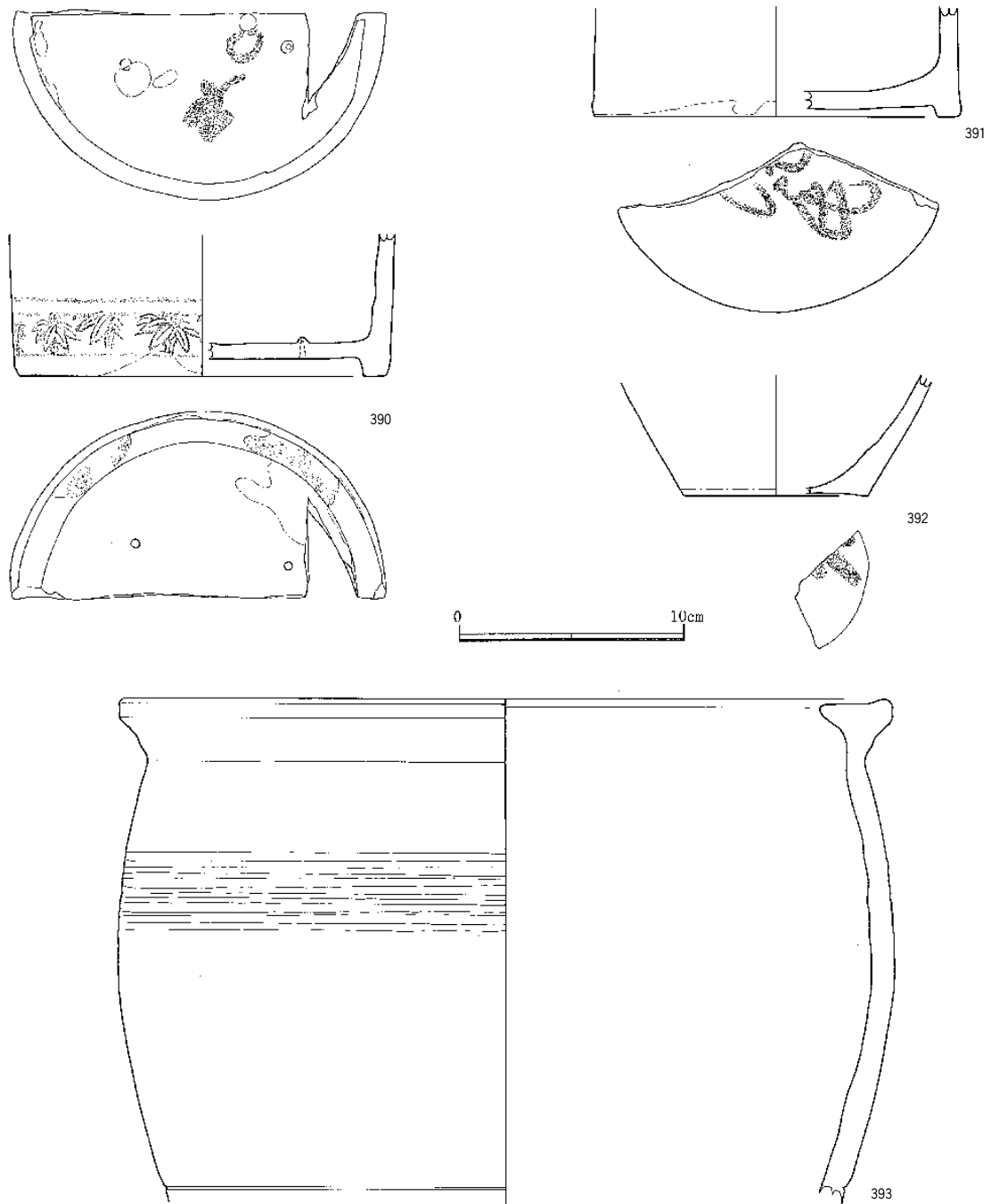


第42図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図 (11)

303も同様の文様で、円は緑色である。内面に墨書が見られる。302は屋島焼の蓋である。304は蓋である。合子蓋か。下面は無釉である。306～309は屋島焼の土瓶蓋である。306は底面に丸囲いに「屋嶋」の刻印を打つ。307は内面に隅丸方形囲いに「屋□（やまかんむりに島）」の刻印、「中」の刻印が見られる。1箇所の円孔を外面から内面へ向かって穿つ。309は内面に墨書が見られる。文字でなく文様か。310は冨田焼の蓋である。内面に「冨田」の刻印を打つ。内面は無釉である。311・312は屋島焼の土瓶蓋である。311は内面に隅丸方形囲いに「屋□（やまかんむりに島）」の刻印を打つ。円孔は外側から内側へ穿たれる。円孔を伝い内面にも一部釉薬が垂れていることから、穿孔後に施釉したものと考えられる。313は屋島焼の土鍋蓋である。内面に隅丸方形囲いに「屋□（やまかんむりに島）」の刻印が見られる。外面に4条の凹線が巡る。314は備前焼の蓋である。上面に火襷が見られる。底面は糸切り後回転ケズリを施す。315は備前焼の水注蓋である。底面はケズリが施される。316・317は京・信楽系の蓋で、摘まみに亀を象る。ともに底面に明瞭な糸切り痕を残す。底面は無釉である。318～322は屋島焼の土瓶蓋である。318は底面に「ふ」の墨書がみられる。319は底面に「□（殿カ） □所兼□□□大□□□片二分□田米」の墨書。320は底面に糸切り痕が残る。底面は施釉せず。321は底面に「中五つ」の墨書が見られる。底面に糸切り痕が残る。322は底面に糸切り痕と墨書が見られる。323は施釉陶器の蓋である。内面は白色、外面は灰緑色を呈す。内面の端部付近は無釉である。頂部に他個体が付着する。325は大谷焼の壺蓋である。内面は無釉である。326は陶胎染付の蓋である。内面に「たこ」の字を顔料で描く。外面には細かな砂粒が多量に付着し、粗雑な印象を受ける。327はミニチュアの椀である。型成形で、口縁端部に緑色の釉を施す。328・329は小型器種の底部である。328は底面に「ナト」の墨書が見られる。329は「裏カ」の墨書が見られる。330は京・信楽系の底部である。高台内は無釉で、「小」の墨書が見られる。331は瀬戸美濃系の底部である。外面下半～高台内は無釉である。底面に「小」の墨書が見られる。332は施釉陶器底部である。底面に「滝カ」の墨書が見られる。外面下半～高台内は施釉せず。333・334は杉形椀底部である。外面屈曲部より下は施釉されず。333は高台内に「□さ」の墨書が見られる。334は高台内に「式」の墨書が確認できる。335～343は理兵衛焼である。335・338～340は底面に「破風高」の刻印を打つ。高の字の破風部分の反り、下半の反りなど、字体がやや異なる。335は底面に刻印後に墨書を行う。340は刻印後高台内に褐色の釉を施す。337は「梯子高」の刻印が見られる。底面に墨書を施す。「小」か。340～343は文様を青色の釉で描く。342は三つ葉葵である。344は備前焼の椀である。底面に丸囲いに「備前金重製」の刻印を打つ。345・346は施釉陶器の底部である。345は内面のみ施釉する。底部に「今井」の墨書が見られる。346は底面に墨書が見られる。347は京・信楽系の丸椀である。348は珉平焼丸椀である。349は京・信楽系の椀である。底面に墨書が見られる。350～352は腰折形椀である。屈曲より下半は無釉である。351は底面に「大」の墨書が見られる。352は底面に墨書がみられる。353・365～367は瀬戸美濃系の皿である。蛇の目凹形高台で、底面のケズリが顕著である。織部焼風で、内面には布目痕残す。褐・濃緑・赤（紫）色の釉薬を掛ける。354は瀬戸美濃系の馬目皿である。355は耳皿である。理平焼か。内面に青色で三

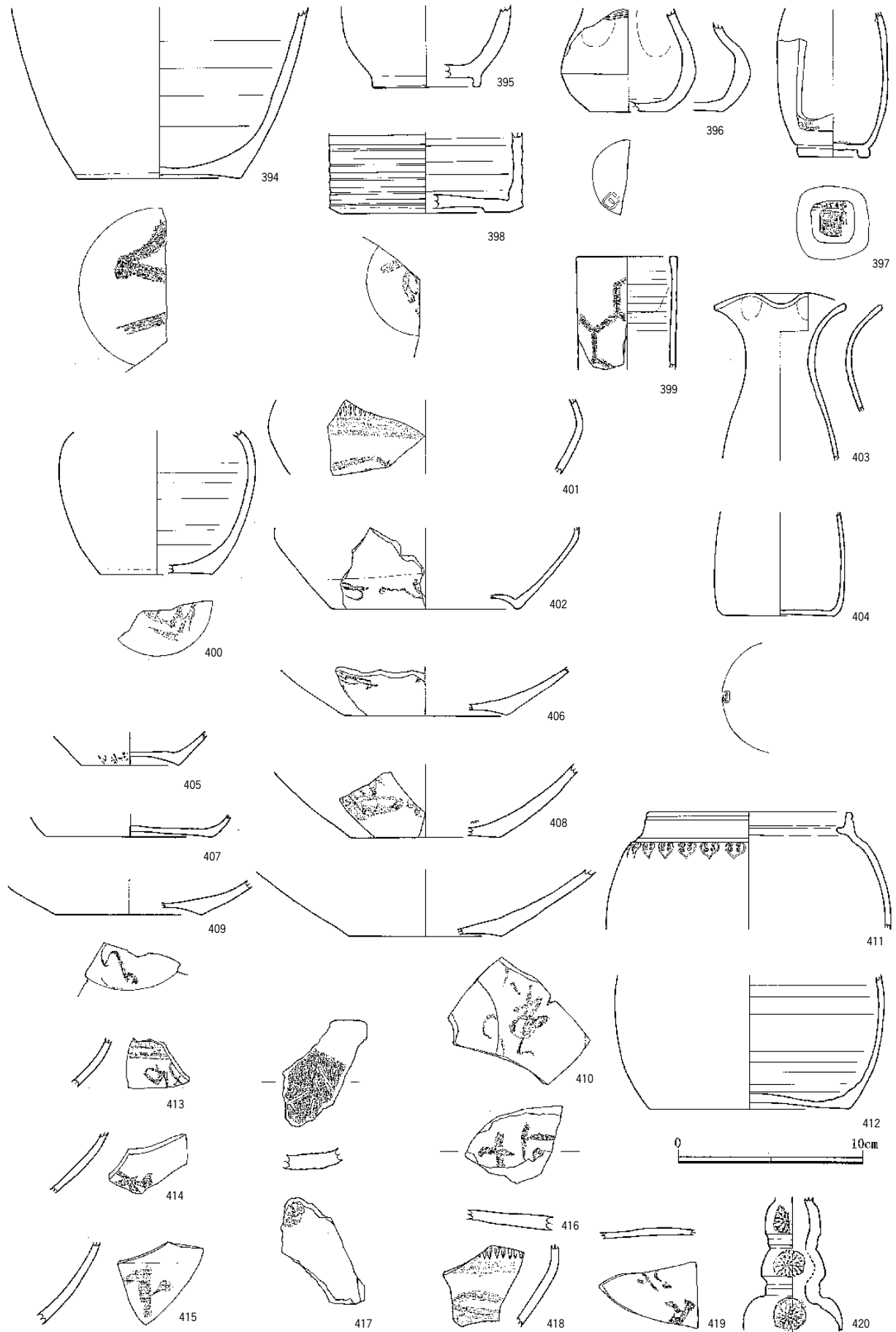


第43図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図 (12)

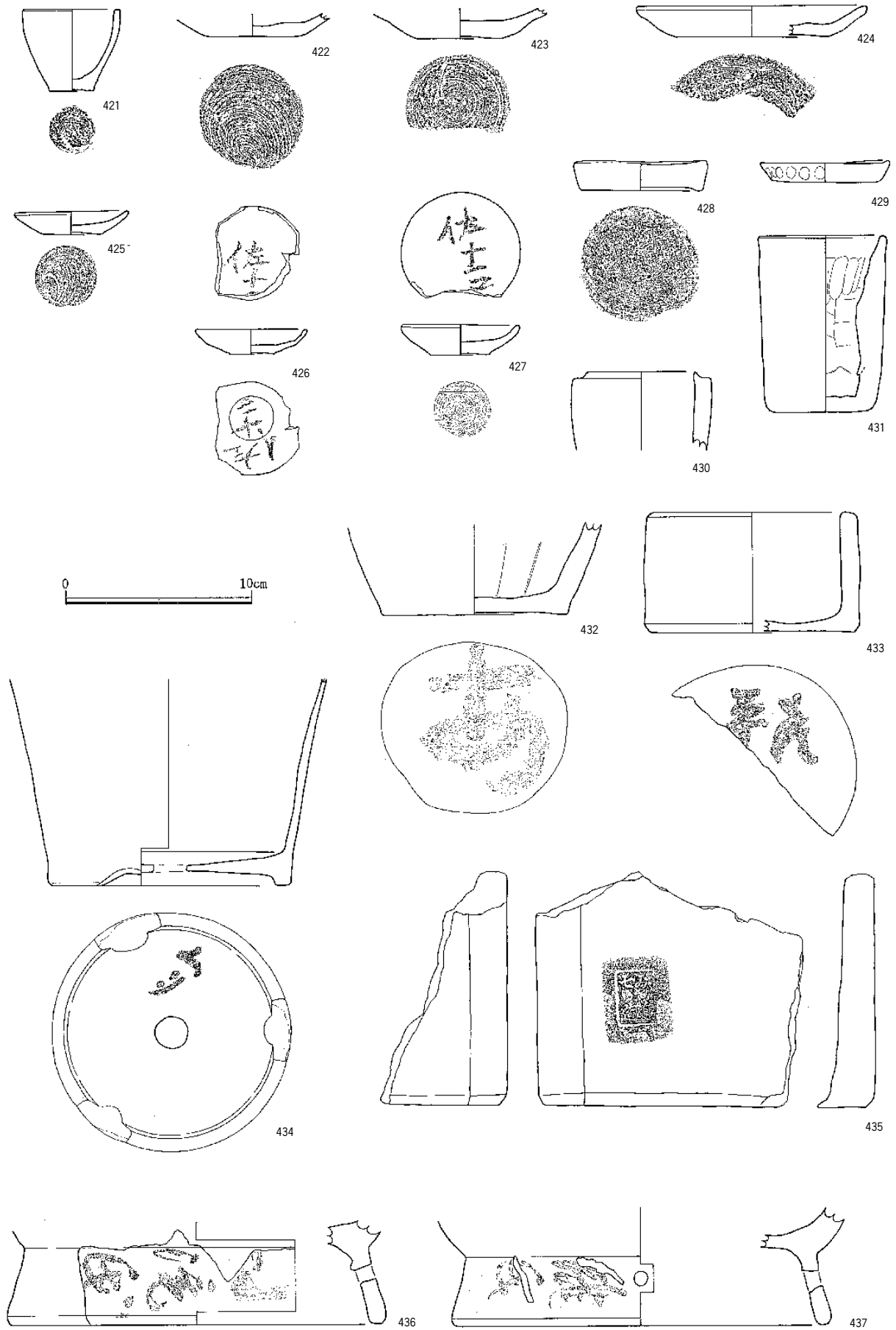


第44図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図(13)

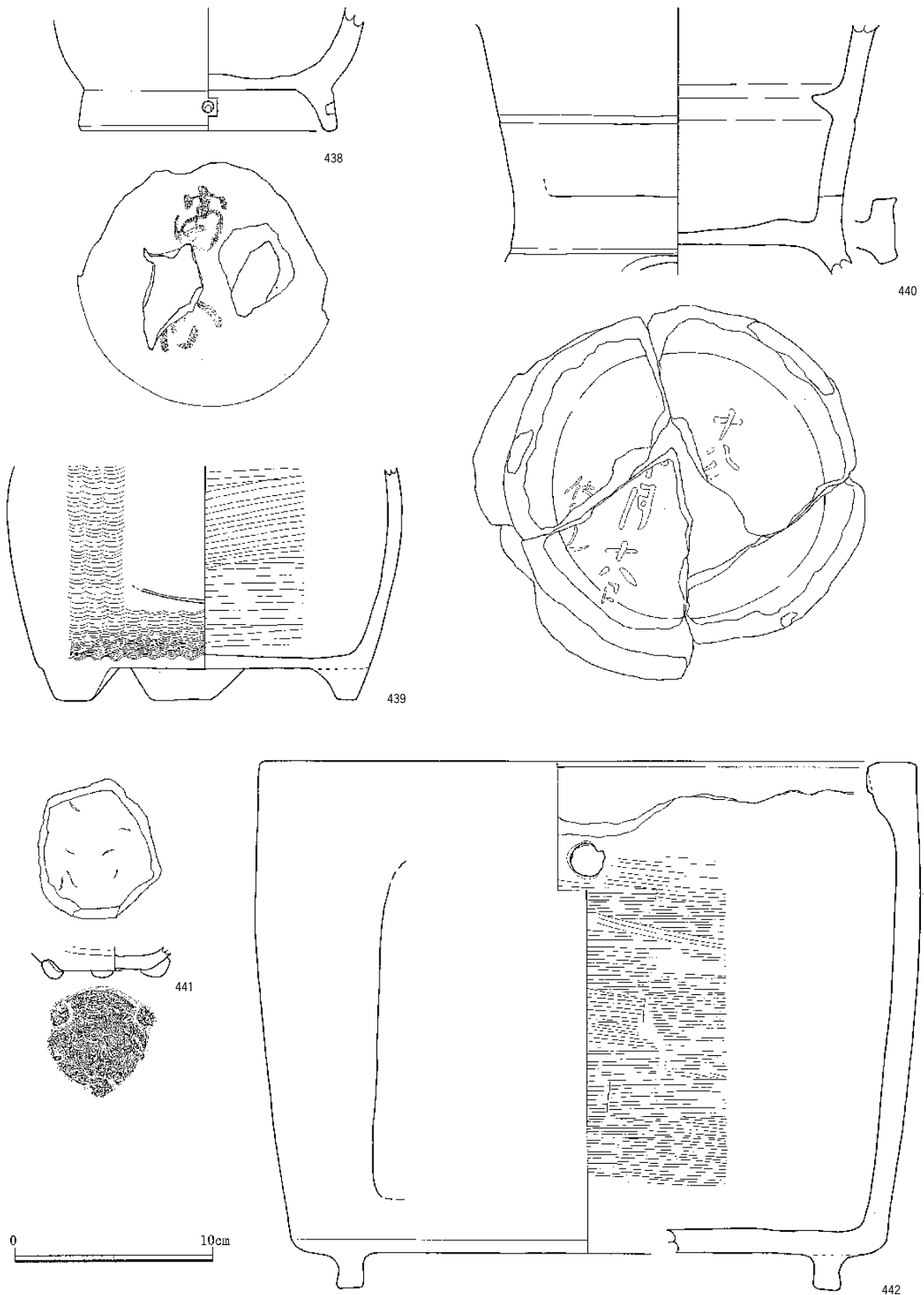
葉葵を描く。356は理平焼の皿底部である。高台内面には無釉で、底面に「梯子高」の刻印を打つ。357は珉平焼の皿である。平面楕円形を呈すか。全面に施釉する。358は珉平焼の方形皿である。四隅は内側に屈曲する。畳付は無釉である。359は皿である。土師質胎土に白色の釉を内面のみに施釉する。緑と青の施文が見られる。底面は糸切りである。360・361は施釉陶器の底部である。内面のみに黒色のガラス質釉を厚く掛ける。360は底部に「□陸□亀太郎」の墨書が見られる。361は底部に「□原□□」の墨書が見られる。362は底部である。高台は無釉である。底面に「新」の刻印を打つ。363は皿の口縁部である。外面に「小」の墨書が見られる。364は珉平焼皿である。



第45図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図 (14)



第46図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図 (15)

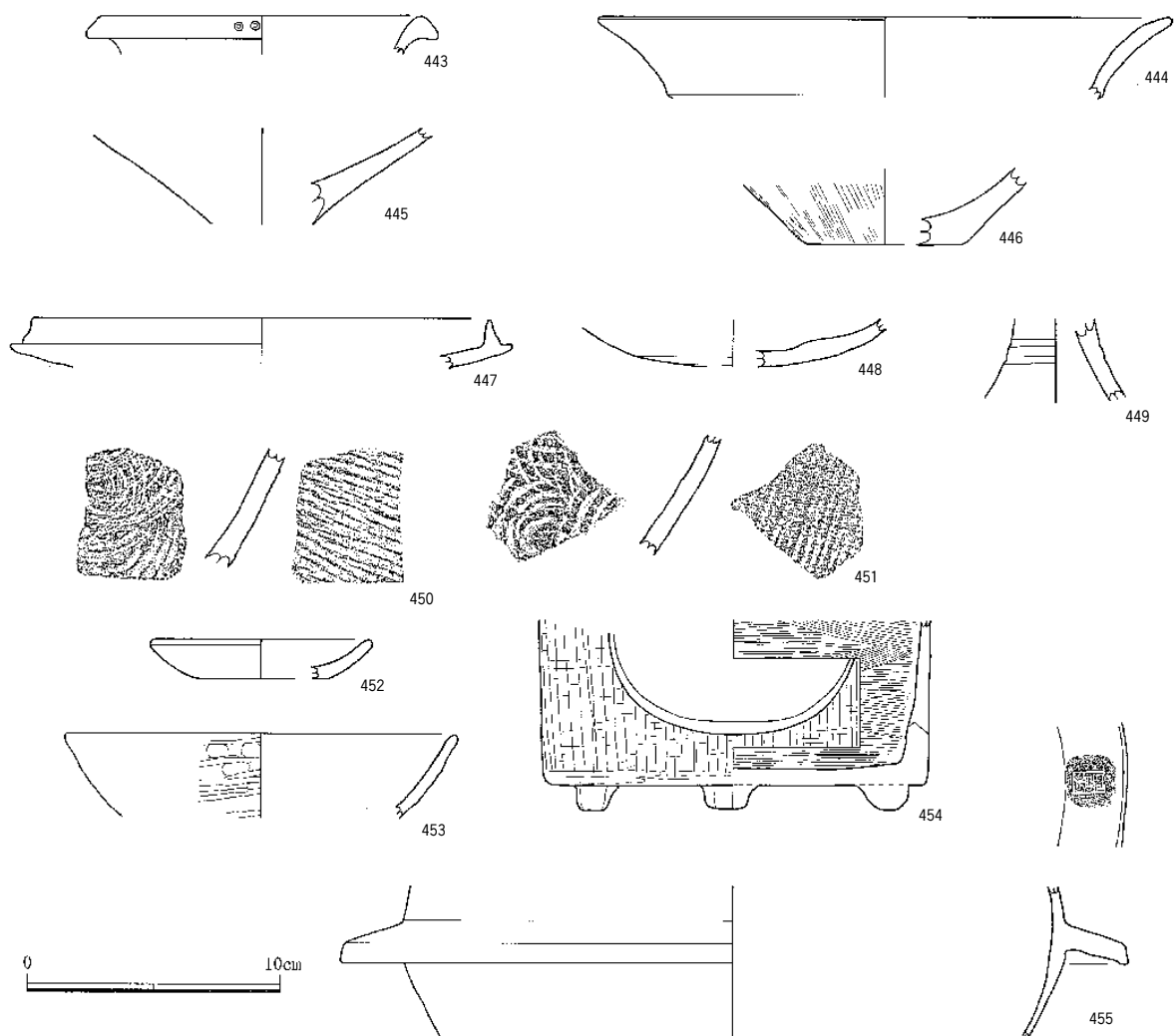


第47図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図(16)

陰刻の文様に濃緑色の施釉を行う。外面は全面に施釉する。365は底面に丸囲いに「春逸」の刻印がみられる。366・367は底面に墨書が見られる。368・369は灯明皿である。内面に3箇所胎土目積が残る。369は底面に被熱によると思われる黒変が認められる。370は蓋である。上面のみ施釉する。上面に装飾的な摘まみの痕跡が残る。底面に糸切り痕が認められる。371・372は灯明受皿である。上面のみ施釉する。371は底面糸切りである。372は底面に墨書が見られる。373は理兵衛焼の鉢である。外面に三葉葵が見られる。内面は無釉である。374は陶胎染付の鉢である。375・376は施釉陶器の火入れである。外面は全面に施釉する。377は陶胎染付の方形碗である。外面下半は施釉せず、ヘラケズリ痕を明瞭に残す。底面に丸囲いに「樂亭」の刻印が見られる。378～380はさや形鉢である。胎土が粗い。378は外面に「○に／」の刻印が見られる。379は外面に「口」字状の刻印が見られる。380は外面に「田」字状の刻印を打つ。381・382は瀬戸美濃系の水鉢底部である。体部下半は無釉である。底面に墨書が見られる。383も水鉢である。底面は無釉で、「ノカス」の墨書が見られる。384は瀬戸美濃系の植木鉢である。高台は3箇所に分割して貼り付け、うち1箇所が剥がれる。高台貼り付け後に施釉する。底面と内面下半は無釉である。底部中央に大きな円孔を内側から外側へ穿孔する。385・386はミニチュアの播鉢である。386は底面に丸囲いに「蔦カ尾」の刻印と、花卉状の刻印を打つ。387～389は播鉢である。387は備前焼である。底部内面には波状に2条の条痕を施すのみである。388は施釉陶器である。高台周辺を除く外面に施釉する。高台端部にはハケ目が残る。見込みに重ね焼による凹みが残る。底部内面は放射状に条痕が重複する。390・391は瀬戸美濃系の火鉢である。390は底部内面に「×カ○」の墨書が見られる。底面に外側から内側へ穿つ小円孔が2箇所認められるが、いずれも貫通していない。畳み付けに砂目地が残る。391は底面に「□氏」の墨書が見られる。底面と内面は無釉である。392は小甕である。底面に墨書が見られる。「小」か。393は中甕である。口縁部上面に砂粒が付着する。394は大谷焼の甕である。底面に墨書が見られる。395は珉平焼の壺。底面に胎土目積の痕跡1箇所残る。外面全面に施釉する。396は備前焼の小瓶である。2箇所以上の指掛け用の凹みあり。底面に「日」字状の刻印が残る。397は小型の方形瓶である。萬古焼か。底面に布目痕が見られる。「萬古有節」の刻印を打つ。内面には墨と思われる黒色の付着物が多量に付着する。398は大谷焼の瓶である。蛇の目高台で底面に墨書が見られる。内面と底面は無釉である。399は花入である。理平焼か。400は大谷焼の瓶である。底面は無釉で、墨書が見られる。401・402・405～410は土瓶である。401は京・信楽系である。体部下半に墨書が見られる。402は京・信楽系である。外面に「□し(じか)の」の墨書が見られる。403・404は爛徳利である。備前焼か。404は底面に四角囲いに「忠光」の刻印が残る。405は外面に「マキツ」の墨書が見られる。406・408は体部外面に墨書が見られる。409は底面に「□八日」の墨書が見られる。410は外面下半に「奥□」の墨書が残る。411・412は土瓶である。屋島焼か。413～419は体部片である。413は401と同一個体か。外面に墨書が見られる。414・415は外面に墨書が見られる。416は「十河」の墨書が見られる。417は屋島焼である。「□ニ」の線刻が施される。419は「四式カ」の墨書が見られる。420は瓢箪形の仏花瓶である。花卉状の刻印を各段に押し、文様部を

緑色で施釉する。

421～442は土師質土器である。421は小型の容器である。ミニチュアの甕か。底面は糸切りである。底部内面に被熱痕あり。422～424は土師質土器杯である。425～427は土師質土器小皿である。ともに底部糸切りが残る。426は内外面ともに「佐吉」の墨書が見られる。427は内面に「佐吉」の墨書が見られる。底面に糸切り痕が残る。428・429は焼塩壺蓋である。428は下面に布目痕が顕著に認められる。430・431は焼塩壺である。430は口縁端部が小さく上方へ張り出す。型造りか。431は輪積み成形で内面の布目痕が明瞭である。432は蛸壺である。法量から真だこ壺か。底面に「あ」の墨書が残る。内外面に貝殻が付着する。433はさや形鉢である。底面に「平□」の墨書が見られる。434は植木鉢である。高台に3箇所の円窓を設ける。底面に「ムリ（タカ）」の墨書が見られる。435は御厩焼の竈である。外面に四角囲いに「みまや七□造」の刻印を打つ。内面にハケ目が明瞭に残る。436～438は火鉢である。高台の円孔は外から内へ穿孔する。436は高台外面に「□滝氏」、437は「瀧氏」の墨書が見られる。438は底面に「當カ□」



第48図 玉藻廟基礎部出土土器類実測図(17)

の墨書が見られる。高台に1箇所残る円孔は貫通していない。440は七輪である。底面に「十八年」「十カ月十八日」「仕カ□レ」の線刻を施す。441・442は焜炉である。441は3足で底面に糸切り痕が見られる。内面には爪の痕跡が多数残る。442は大型で、外面に乳白色の陶土を塗布か。高台は逆台形の高台を3箇所に貼り付ける。底部内面は同心円状にハケ調整を施す。

443～446は弥生土器である。443は壺口縁部である。444・445は高杯である。446は底部である。447は須恵器杯身である。448は須恵器杯底部である。449は須恵器高杯脚部である。450・451は須恵器甕体部である。452は瓦器皿である。453は瓦器碗である。454は瓦質土器の焜炉である。逆台形の高台を3箇所接合する。455は瓦質土器の羽釜である。受部の上面に四角囲いに「香西」の刻印が残る。

キ 小結

はじめに述べた通り、取り上げ層位は位意のレベルに応じたものであり、なおかつ出土遺物の数量比を提示することも出来ないため、様相が異なるものか断定はできない。しかし、内面に帆船を描き、底面に釉剥ぎで「中」「ス」と記す磁器皿など、セット関係が認定できる資料が、上～下層まで確認できる点など、堆積に大きな時期差は認められない可能性が高い。

玉藻廟基礎石垣の構築手法からも、地下1階の床面上から天端まで、土砂を埋めながら石垣を築いたと考えられるため、地下1階内に堆積した上記の遺物がほぼ同時期に堆積したものと考えられる。

最下層出土遺物については、近世陶磁器が1点含まれているものの、小片でありその堆積時期を詳細に絞り込むことはできない。むしろ陶磁器以外の土師器類は、高松城の築城以前の中世段階に属する資料が多く認められる。これらの資料の取り扱いには注意が必要であるが、調査時に最下層として認識した層の中に、天守台盛土が含まれていた可能性が想定できる。天守台に限らず、城内の盛土中に弥生時代～中世にかけての遺物が混和されることが少なくないためである。

(3) 瓦類 (第49～104図)

土器と同様に、地下1階内部(上, 中, 下), 玉藻廟基礎部という取りあげを行っている。そのため、図面も各瓦で取り上げ位置別としている。ただし、後述するように、各取り上げ箇所別に選別を実施したことから、型式学的に重複するものも存在する。

ア 軒丸瓦 (第49～56図)

ここでの瓦の記述はまず、巴文軒丸瓦とその他で分類し、その後、巴文軒丸瓦については高松城跡西ノ丸町地区で提示された佐藤竜馬氏の分類基準(佐藤2003)として挙げられている珠文・圏線の有無、巴部の頭部および尾部形状を指標属性として記述を行う。具体的には三巴文の周囲に珠文をもつものと持たないものに区別し、巴頭部の形状(鉤型, 不整形な円形を呈するもの, 定型化し, 丸く肥厚するもの), 巴尾部の長さ(巴尾部は巴自体の大きさ, 巻き方にも左右されるので, 以下の基準をもとに長短を述べる。長い: 隣の巴頭部より長くなる。やや長い: 隣の巴頭部を覆う, 短い: 隣の巴頭部までわずかに及ぶもしくは及ばない), 巴部全体の形状(巴の巻

具合：円形を作る、外側に広がる) という属性である。

加えて観察可能なものは瓦当と丸瓦の接合方法、瓦当裏面の調整方法、瓦当面の剥離剤、丸瓦部の素材切り出し方法等について記述する。これらの諸特徴の記述に際しては必要に応じて先の佐藤分類に加え、佐川正敏分類（佐川 1989, 1992）を使用する。

(ア) 巴文軒丸瓦

a 珠文をもつもの

【界線をもつもしくは巴尾部が接続するもの】

T 1～T 2, T 26, T 58～T 61 は巴の周辺に圏線をもつもしくは巴尾部が隣接する巴部に接続するものである。T 1, T 2, T 26, T 58, T 60, T 61 は左巻き, T 59 は右巻きである。T 2 が佐藤分類 27 に, T 26 が佐藤分類 7 に, T 60 が佐藤分類 23 に, T 61 が佐藤分類 32 に類似する。

T 1 は巴頭部が肥厚し, 細く長く伸びた尾部が隣接する巴に僅かに接続するような形態をとる。巴文および珠文ともに立体的である。珠文数は不明。瓦当面径および外縁幅は 2.5 cm である。

T 2 は巴頭部が円形を呈し, やや長く伸びた巴尾部が界線にとりつく。巴文は立体的で, 上面は平坦になる。外縁幅は 2.2 cm である。瓦当裏面調整は佐川分類 C である。

T 26 は巴頭部が小さく肥厚し, 細く長く伸びた巴尾部が僅かに隣接する巴に接続するような形態をとる。巴文および珠文は非常に立体的で, 瓦当外縁幅は約 2.5 cm である。瓦当接合技法は佐川分類の C もしくは D と考えられる。燻されていない。

T 58 は巴頭部が鉤型を呈し, 長く伸びた巴尾部が接続し, 界線を形成する。瓦当面径は不明, 外縁幅は 1.7 cm。瓦当接合法は佐川分類 A である。瓦当裏面調整は不明瞭であるが佐川分類 C と考えられる。

T 59 は巴頭部が肥厚し, 長く伸びた巴尾部が隣接する巴文に僅かに接続するような形態をとる。巴文は立体的で, 珠文はつぶれている。瓦当面径は不明, 外縁幅は 2.2 cm である。瓦当裏面は佐川分類 C である。

T 60 は巴頭部が大きく肥厚し, 長く伸びた巴尾部が隣接する巴文に接続し, 界線を形成する。巴文および珠文は立体的で, 巴文は上面が平坦面になり, 珠文は小さく, 数は 11 個である。瓦当面径は 13.2 cm, 外縁幅は 1.9 cm。瓦当裏面調整は佐川分類 C である。一か所范傷がある。

T 61 は巴の周辺に界線を配置するもので, 巴頭部が肥厚し, 細く, やや長い尾部が円形に展開する。巴文および珠文は立体的で上面は平端である。珠文は大きい。瓦当面径は 13.2 cm, 外縁幅は 2.0 cm。瓦当裏面は佐川分類 C である。

【界線をもたないもしくは尾部が接続しないもの】

次に, 界線をもたない一群で, 下記のとおり, 巴頭部の形状によって次の三つに分類し, 個別の記述を行う。

①巴頭部が鉤状を呈するもの

巴頭部が鉤型を呈するものはT 3, T 4, T 25, T 27, T 31, T 47, T 56, T 57である。

その中でT 25, T 47, T 56は小さな珠文を多数配置するタイプで、巴頭部が鉤型を呈するものなかでも、型式学的に古相を示す一群である。いずれも巴尾が長い。T 25が佐藤分類2, T 47が歴博527, T 56が佐藤分類41に類似する。

T 25は残存状況がよくないが、左巻で細く伸びた巴尾部の周囲に小さな珠文を配している。文様表現はやや平面的である。瓦当面径は不明、外縁幅は1.7 cm。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

T 47は左巻きで巴頭部が鉤型を呈し、巴尾部が長く、円形に展開する。筒部長28.0 cm, 筒部幅15.0 cm, 玉縁長3.8 cmで、玉縁部は台形を呈する。丸瓦部凸面は非常に丁寧な縦方向のナデ調整によって仕上げ、凹面には布目で、コビキBである。筒部半分から玉縁側の2箇所に釘穴が穿たれている。瓦当裏面調整は佐川分類Bである。

T 56は左巻きで鉤状を呈する巴頭部で、巴尾部が長く、円形に展開する。珠文も小さく、数が多い。剥離材にハナレ砂を使用する。筒部長27.4 cm, 筒部幅13.2 cm, 玉縁長2.5 cmで、扁平な台形を呈する。丸瓦部の凸面は縦方向の丁寧な磨き調整によって仕上げ、凹面にはいわゆるゴザ目が残し、吊り紐痕跡は佐川分類C型で、コビキBである。筒部の玉縁側3分の1の位置に釘穴が穿たれている。燻されていない。

次のT 3, T 4, T 27, T 31, T 57はそれ以外の一群である。T 3, T 4, T 27, T 31は左巻き、T 57は右巻きである。T 3が佐藤分類37, T 4が佐藤分類36, T 31が佐藤分類131に類似する。

T 3は巴尾部がやや長く、円形に展開する。巴文はやや笈抜けがよくないが、珠文は立体的で、数は13個と考えられる。瓦当面径は13.7 cmで、外縁幅は1.9 cmである。剥離材はハナレ砂を使用していると考えられ、瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

T 4は巴尾部が長く、円形に展開する。巴文および珠文は立体的で、珠文数は不明。瓦当面径は不明で、外縁幅は2.8 cmである。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。丸瓦部の凸面は縦方向の丁寧なナデ調整で仕上げ、凹面には布目残り、綴じ紐痕跡も認められる。

T 27は巴尾部が細く長く、円形に展開する。巴文および珠文は立体的で、珠文は14個。瓦当面径は12.3 cm, 外縁幅は1.7 cmである。瓦当接合技法は佐川分類Cと考えられる。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

T 31は巴尾部が細く長く、円形に展開する。巴文および珠文ともに上面が平坦になる。珠文数は不明。瓦当面径は不明、外縁幅は2.4 cm。

T 57は巴頭部がやや先の丸い鉤状を呈し、その間隔が広く、中央部に空間が認められ、尾部が細く、短い。珠文は小さく、珠文数は12個。瓦当面径は14.6 cm, 外縁部幅は2.2 cm。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。燻されていない。

②巴頭部が不整形な円形を呈するもの

T 6～T 7, T 9, T 28～T 29, T 33, T 49, T 62, T 63は巴頭部がやや不整形な円形を

呈する一群である。T 6, T 9, T 33, T 62～T 63が左巻き, T 7, T 28～T 29, T 49が右巻きである。

T 6は巴尾部がやや長く, 円形に展開する。巴文および珠文は平坦面を形成し, 珠文は9個である。佐藤分類71に類似する。瓦当面径は13.0 cm, 外縁幅は1.7 cm。剥離材はハナレ砂で, 瓦当裏面調整は佐川分類Cである。残存する丸瓦部凸面は丁寧な縦方向のナデ調整が施される。凹面はいわゆるゴザ目が残し, コビキBである。

T 7は巴尾部がやや長く, やや外側に広がるように展開する。巴文および珠文はやや平面的で, 珠文は12個。瓦当面径は14.4 cm, 外縁幅は2.8 cm。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。珠文と外縁部の間に3か所範傷が認められる。

T 9は大型品で, 巴尾部がやや長く, 円形に展開する。巴文および珠文は立体的で上面に平坦面を形成する。珠文は12個。瓦当面径は17.5 cm, 外縁幅は2.6 cm。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

T 28は巴尾部が太くやや長く, やや外側に広がる。巴文は範抜けが悪く, 巴文および珠文は上面が平坦面を形成する。珠文は12個。佐藤分類132に類似する。瓦当面径は12.3 cm, 外縁幅は1.8 cm。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。残存する丸瓦部凸面は縦方向の磨き調整によって仕上げられ, 釘穴が穿たれる。凹面はいわゆるゴザ目が残し, コビキBである。側縁部に漆喰が付着している。

T 29は巴尾部が細く長く, やや円形に展開する。巴文および珠文ともに立体的で, 珠文は大きく, 数は12個。瓦当面径は13.0 cm, 外縁幅は1.5 cmである。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

T 33は巴尾部が長く, やや外側に広がる。巴文および珠文ともに立体的で, 珠文数は12個と考えられる。外縁と珠文の間に範傷が認められる。佐藤分類43に類似する。瓦当面径は不明, 外縁幅は1.9 cm。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

T 49は巴頭が円形を呈し, 尾部はやや長く, やや外側に広がる。巴文は立体的で上面を平坦にする。珠文はつぶれており, 数は13個。佐藤分類133に類似する。瓦当面径は13.3 cm, 外縁幅は2.2 cmである。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

T 62の巴尾部は細く長く, 円形に展開する。珠文は小さく, 数は17個。佐藤分類35に類似する。瓦当面径は13.2 cm, 外縁幅は2.0 cm。剥離材はハナレ砂である。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

T 63は巴尾部が細く長く, 円形に展開する。巴文および珠文は立体的で, 珠文は大きさにばらつきが認められる。佐藤分類38に類似する。瓦当面径は不明, 外縁幅は2.1 cmである。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

③定型化し, 丸く肥厚するもの

T 5, T 8, T 10～T 24, T 30, T 32, T 34～T 45, T 48, T 50～T 55, T 64～T 94は円形もしくは丸く肥厚させる巴頭部である。T 5, T 10, T 12～T 16, T 19～T 21, T 24, T 30, T 34, T 36～T 37, T 39～T 40, T 42, T 44～T 45, T 48, T 64～T 65, T 68～T 77, T 79～T 81, T 85～T 87, T 89～T 91が左巻きで, T 11, T 17～T 18,

T 22 ~ T 23, T 35, T 38, T 41, T 43, T 50 ~ T 54, T 66 ~ T 67, T 78, T 82 ~ T 84, T 88, T 92 ~ T 94 が右巻きである。巴頭部および巴尾部の形状およびその組み合わせにバリエーションが豊富である。

T 5は巴頭部が肥厚し、巴尾部がやや長く細く、やや広がりながら円形に展開する。巴文および珠文は立体的で、珠文数は12個。佐藤分類61に類似する。瓦当面径は13.5 cm、外縁幅は2.3 cmである。瓦当裏面調整は佐川分類Cで、指押さえが顕著である。

T 8は巴頭部が肥厚し、巴尾部は太く短く、やや外側に広がる。巴文および珠文は立体的で上面は平坦面を形成する。珠文は小振りで12個。佐藤分類157に類似する。瓦当面径は12.7 cm、外縁幅は2.0 cmである。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。残存する丸瓦部凸面は横方向の丁寧なナデ調整で仕上げる。

T 10は大型品で、佐藤分類202 ~ 205に類似する。巴頭部が大きく肥厚し、巴尾部が短く、円形に展開する。巴文および珠文ともに立体的で、上面を平坦にする。珠文数は不明。瓦当面径は17.3 cmで、外縁幅は2.1 cmである。瓦当接合法は佐川分類Dで、瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

T 11は巴頭部が肥厚し、巴尾部が短くやや外側に広がる。佐藤分類175に類似する。巴文および珠文は立体的で、珠文は11個。佐藤分類175に類似する。瓦当面径は13.2 cm、外縁幅は2.2 cmである。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

T 12は巴頭部が小さく肥厚し、巴尾部がやや長く、円形に展開する。巴文は立体的で、上面を平坦に仕上げる。珠文は小さく、つぶれており、数は12個。佐藤分類136に類似する。瓦当面径は12.4 cm、外縁幅は1.4 cmである。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。焼成が軟質である。

T 13は巴頭部が小さな円形を呈し、巴尾部が細く短く、やや外側に広がる。巴文はやや平坦で、珠文は立体的で数は10個。瓦当面径は13.5 cm、外縁幅は1.8 cmである。瓦当面には珠文と外縁部の間に1か所範傷が認められる。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

T 14は巴頭部が肥厚し、巴尾部はやや長い。巴文および珠文は立体的で、上面が平坦になる。珠文数は不明。瓦当面径は不明で、外縁幅は1.9 cmである。剥離材はキラ粉を使用する。丸瓦部の凸面は丁寧な縦方向のナデ調整によって仕上げ、ほぼ中央部に釘穴が穿たれており、その周辺には固定材の漆喰と考えられる痕跡が残る。凹面にはゴザ目が残る、漆喰も付着している。コビキBである。

T 15は巴頭部がやや肥厚し、巴尾部がやや長く、円形に展開する。巴文は立体的で、上面を平端に仕上げる。珠文は大きく、ややつぶれている。珠文数は11個。佐藤分類137に類似する。瓦当面径は13.8 cm、外縁幅は2.2 cmである。剥離材はキラ粉を使用し、接合技法は佐川分類Dである。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

T 16は巴頭部が大きく肥厚し、巴尾部が細くやや長く伸び、円形に展開する。巴文は立体的で、上面を平端に仕上げる。珠文は小さく、立体的で数は不明。佐藤分類201に類似する。瓦当面径は不明で、外縁幅は1.6 cmである。剥離材にキラ粉を使用し、調整時のかき目状の痕跡が各所に

認められる。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

T 17 は巴頭部が大きく肥厚し、巴尾部は短い。巴文および珠文は立体的で、珠文は小さい。佐藤分類 202 ~ 205 に類似する。瓦当面径は不明で、外縁幅は 3.0 cm である。丸瓦部も剥落が著しいが、凹面にいわゆるゴザ目が認められる。

T 18 は巴頭部が肥厚し、巴尾部が太く短く、円形に展開する。巴文および珠文は立体的で、上面をやや平坦に仕上げる。珠文は 13 個。佐藤分類 220 に類似する。瓦当面径は 12.0 cm、外縁幅は 1.3 cm である。剥離材にキラ粉を使用。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。丸瓦部の凸面は丁寧な縦方向のナデ調整で仕上げ、凹面は布目が残り、棒状の補足叩きを施す。コビキBと考えられる。

T 19 は巴頭部が肥厚し、巴尾部が非常に細く長くのび、円形に展開する。巴文および珠文はともに立体的で、巴文は明確な稜がある。珠文は 15 個。瓦当面径は 12.8 cm、外縁幅は 2.2 cm である。剥離材はキラ粉を使用し、瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

T 20 は巴頭部が肥厚し、巴尾部が太く短く、円形に展開する。巴文は立体的で上面が平坦になる。珠文は大きく、ややつぶれている。数は 12 個。佐藤分類 124 に類似する。瓦当面径は 12.2 cm、外縁幅は 1.8 cm である。剥離材はキラ粉を使用し、瓦当裏面調整は佐川分類Cである。丸瓦部の凸面は縦方向の丁寧なナデ調整によって仕上げる。コビキBである。

T 21 は巴頭部が大きく肥厚し、巴尾部が太く短く、やや外側に開く。巴文および珠文は立体的で、珠文は大きく、13 個。佐藤分類 250 に類似する。瓦当面径は 13.0 cm、外縁幅は 2.1 cm である。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。丸瓦部の凸面は横方向の板状工具によるナデ調整と縦方向のナデ調整によって仕上げている。釘穴が穿たれ、その周辺には固定材の痕跡が認められる。凹面は布目で、補足の棒状叩きが施されている。コビキBである。側縁部には漆喰が付着している。

T 22 は巴頭部が大きく肥厚し、巴尾部が短く円形に展開する。巴文および珠文は立体的で、珠文は大きく、数は 12 個。珠文部に 2 箇所、巴部に 2 箇所範傷が認められる。佐藤分類 226 に類似する。瓦当面径は 13.3 cm、外縁幅は 1.5 cm である。剥離材はキラ粉を使用し、瓦当裏面調整は佐川分類Cである。丸瓦部の凸面は横方向の丁寧なナデ調整と縦方向のナデ調整によって仕上げる。釘穴が穿たれ、その周辺には漆喰痕跡が認められる。凹面は布目が残り、補足の棒状叩きが施される。コビキBである。側縁部に漆喰が付着する。

T 23 は巴頭部が大きく肥厚し、巴尾部が非常に短く、円形に展開する。巴文および珠文は非常に立体的で、珠文は大きい。佐藤分類 263・264 に類似する。瓦当面径は不明で、外縁幅は 2.3 cm である。剥離材にキラ粉を使用する。

T 24 は巴頭部が大きく肥厚し、巴尾部が長く、珠文をもたない。巴文は立体的で、瓦当面径は不明で、外縁幅は 1.7 cm である。丸瓦部の凸面は磨滅しているが、凹面は粗いナデ調整によって仕上げる。燻されていない。

T 30 は巴頭部が肥厚し、巴尾部が細く長く、円形に展開する。巴文および珠文はやや平面的で、珠文は小さく、数は 12 個。佐藤分類 138 に類似する。瓦当面径は 12.4 cm、外縁幅は 1.8 cm である。

瓦当裏面調整は佐川分類Cである。丸瓦部の凸面は縦方向の丁寧なナデ調整によって仕上げ、凹面は布目が残る、コビキBである。

T 32 は巴頭部が肥厚し、巴尾部が短く、円形に展開する。巴文および珠文はやや平坦で、珠文は16個。佐藤分類174に類似する。瓦当面径は13.7 cm、外縁幅は2.1 cmである。剥離材としてキラ粉を使用し、瓦当接合技法は佐川分類Dと考えられる。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

T 34 は巴頭部が肥厚し、巴尾部がやや長く、やや外側に広がる。巴文および珠文は立体的で、珠文は12個。佐藤分類107に類似する。瓦当面径は12.8 cm、外縁幅は1.9 cmである。瓦当面外端を面取りする。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。丸瓦部の凸面は縦方向の丁寧な磨き調整で仕上げられ、釘穴が穿たれている。釘穴周辺には固定材としての漆喰が付着している。凹面は付着物で詳細は不明。コビキBである。

T 35 は大型品で、巴頭部は肥厚し、巴尾部が長く、円形に展開する。巴文は立体的で上面が平坦になる。珠文はややつぶれており、珠文は12個。佐藤分類202～205に類似する。瓦当面径は15.4 cm、外縁幅は2.3 cmである。剥離材はキラ粉を使用し、瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

T 36 は大型品で、佐藤分類202～205に類似する。巴頭部が大きく肥厚し、巴尾部がやや長く、円形に展開する。巴文および珠文ともに立体的で、上面が平坦になり、珠文は12個。瓦当面径は17.3 cm、外縁幅は2.2 cmである。剥離材としてキラ粉を使用し、瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

T 37 は大型品で、佐藤分類202～205に類似する。巴頭部が大きく肥厚し、巴尾部がやや長く、円形に展開する。巴文は立体的で上面が平坦になる。珠文はつぶれている。瓦当面径は不明で、外縁幅は2.8 cmである。瓦当裏面調整は佐川分類Cで、指押さえの痕跡が顕著である。

T 38 は巴頭部が肥厚し、巴尾部は短く、円形に展開する。巴文および珠文は立体的で、珠文は大きく、数は12個。佐藤分類240に類似する。瓦当面径は13.2 cm、外縁幅は2.2 cmである。剥離材はキラ粉を使用し、瓦当裏面調整は佐川分類Cである。丸瓦部の凸面は縦方向の丁寧な磨き調整によって仕上げる。

T 39 は巴頭部が非常に大きく肥厚し、巴尾部が細く短く、円形に展開する。巴頭ともに珠文は立体的で、巴文は上面が平坦になり、珠文は小さく、数は12個。佐藤分類202に類似する。巴尾部と珠文の間に筈傷が1か所認められる。瓦当面径は12.6 cm、外縁幅は1.7 cmである。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。丸瓦部の凸面は縦方向の磨き調整で仕上げる。コビキBである。

T 40 は巴頭部が大きく肥厚し、巴尾部が細く短く、やや外側に広がる。巴文および珠文は立体的で、珠文は大きく、数は12個。佐藤分類235に類似する。瓦当面径は12.9 cm、外縁幅は1.8 cmである。剥離材はキラ粉を使用し、瓦当接合技法は佐川分類Dである。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

T 41 は巴頭部が肥厚し、巴尾部は短く、やや外側に広がる。巴文および珠文は立体的で、上面が平坦になる。珠文は9個。佐藤分類202～205に類似する。瓦当面径は15.4 cm、外縁幅は2.6 cmである。瓦当面に指紋が残る。剥離材はキラ粉を使用し、瓦当接合技法は佐川分類Dと考えら

れる。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

T 42 は外縁部に○の中央に斜線を配置した刻印がある。巴頭部は肥厚し、巴尾部は細くなり、やや長く、やや外側に広がる。巴文および珠文ともに立体的で、巴は明確な稜線が入る。珠文数は不明である。佐藤分類 183 に類似する。瓦当面径は不明、外縁幅は約 2.7 cm である。瓦当接続は佐川分類Dである。剥離材はキラ粉を使用している。

T 43 は巴頭部が肥厚し、巴尾部が細く長く、破片のため不明であるが、円形を呈し、隣接する巴と接続する可能性がある。巴文および珠文が立体的で、珠文数は不明。瓦当面径は不明、外縁幅は約 2.8 cm である。丸瓦部は凸面が丁寧な縦方向の磨き調整で仕上げ、凹面はいわゆるゴザ目が残る、コビキBである。

T 44 は巴尾部が細く長く、やや外側に広がるものである。巴文および珠文は立体的で、巴は明確な稜線が入る。珠文は大きく、数は 15 個。佐藤分類 180 に類似する。瓦当面径は 13.7 cm、外縁幅は 2.7 cm である。剥離材はキラ粉を使用し、瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

T 45 は巴頭部が肥厚し、巴尾部がしだいに細く短く、やや外側に広がる。巴文および珠文は立体的で、珠文数は 13 個。佐藤分類 181 に類似する。瓦当面径は 13.2 cm、外縁幅は 2.5 cm である。瓦当外縁の外端を面取りする。剥離材はキラ粉を使用し、瓦当裏面調整は佐川分類Cである。丸瓦部の凸面は丁寧なナデ調整で仕上げ、凹面は棒状工具による補足叩きが施される。

T 48 は巴頭部が大きく肥厚し、巴尾部は細くやや長く、円形に展開する。巴文および珠文は立体的で、巴文は上面が平坦になる。珠文は小さく、数は 12 個。佐藤分類 201 に類似する。瓦当面径は不明であるが、外縁幅は 1.5 cm である。瓦当裏面は佐川分類Cで、残存する丸瓦部の凸面は縦方向の丁寧なナデ調整、凹面はいわゆるゴザ目が残る。

T 50 は巴文の中央に円天をもつ。巴頭部が肥厚し、巴尾部は短く、外側に広がる。巴文は上面を平坦にし、珠文はややつぶれている。佐藤分類 101 に類似する。瓦当面径は 13.1 cm で、外縁幅は 1.9 cm である。瓦当裏面は佐川分類Cである。

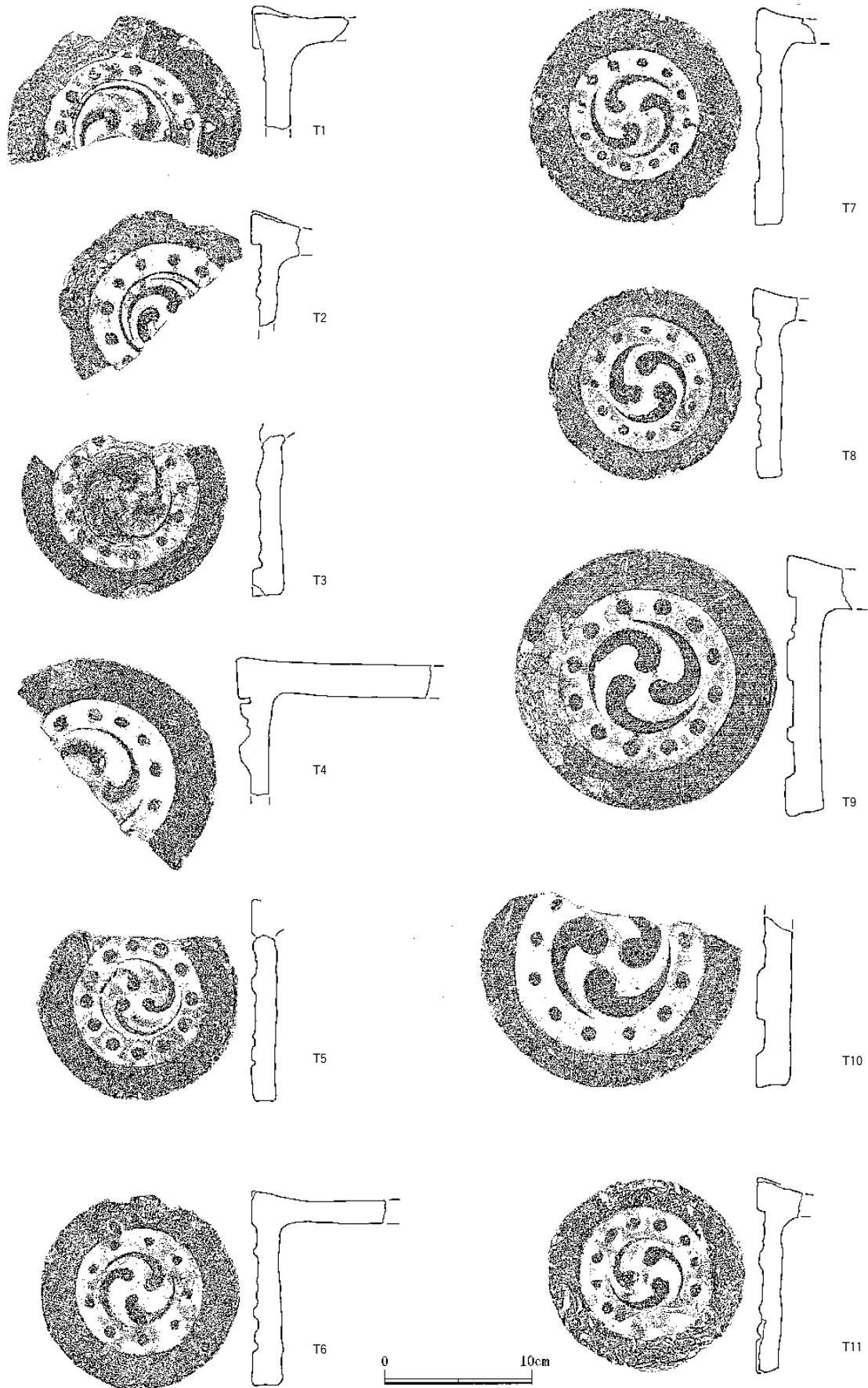
T 51 は巴頭部が肥厚し、巴尾部は短く、やや外側に広がる。巴文および珠文は立体的で、珠文は 12 個と考えられる。瓦当面径は不明であるが、外縁幅は 2.1 cm である。剥離材はキラ粉を使用し、瓦当裏面は佐川分類Cである。

T 52 は巴頭部が肥厚し、巴尾部は太く短くやや外側に広がる。巴文は立体的で、珠文は大きく、ややつぶれている。数は 12 個。佐藤分類 219 に類似する。瓦当面径は 12.3 cm で、外縁幅は 1.7 cm である。剥離材はキラ粉を使用し、瓦当裏面は佐川分類Cである。

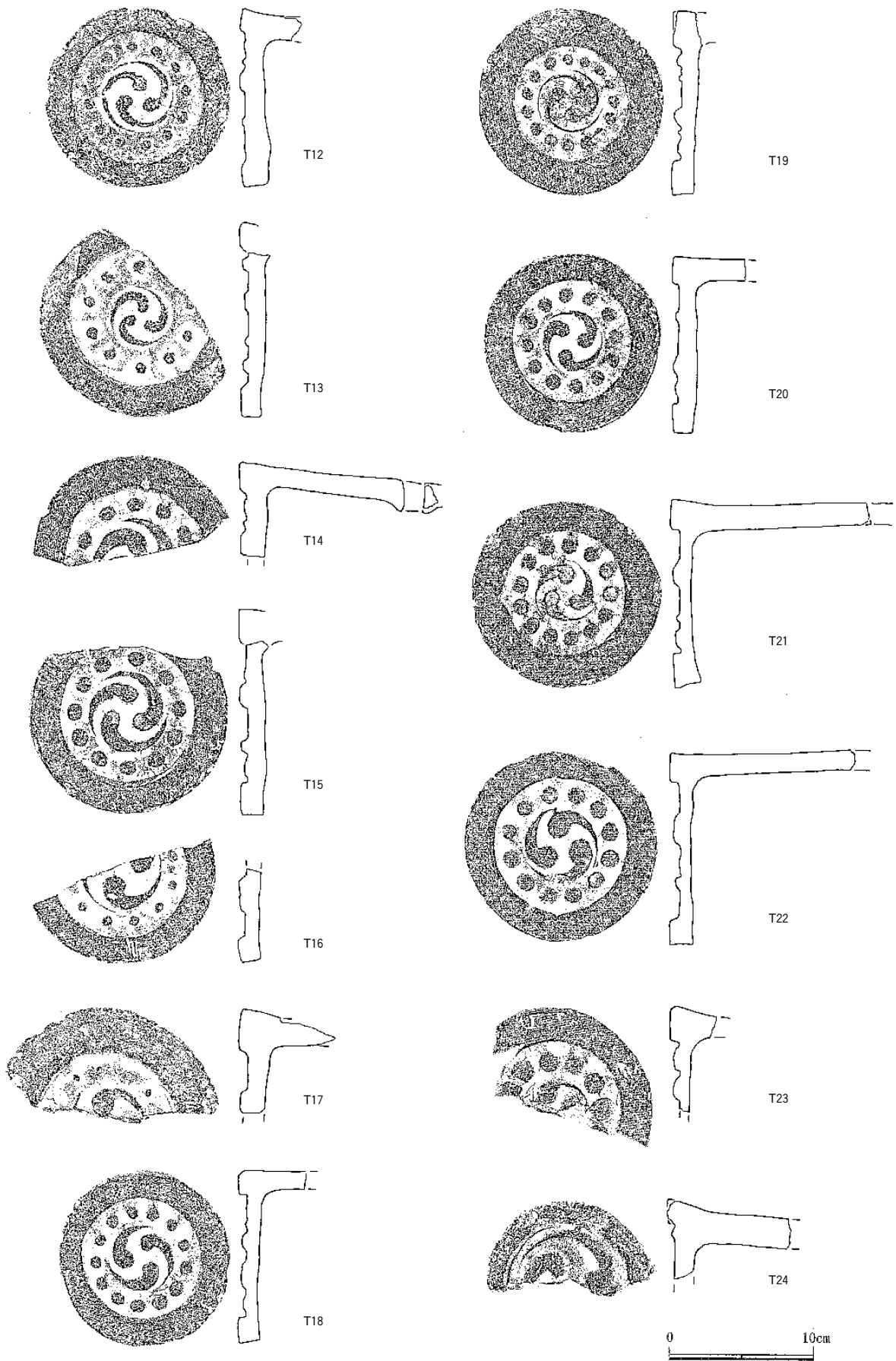
T 53 は巴頭部が肥厚し、巴尾部は急激に細くなり短く、外に広がる。巴文および珠文は立体的で、珠文は大きい。瓦当面径は 12 cm、外縁幅は 2.2 cm である。剥離材はキラ粉を使用し、瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

T 54 は残存状況がよくないが、巴頭部は肥厚し、巴尾部は短い。巴文および珠文は立体的で、外縁幅も 3.0 cm と幅広い。

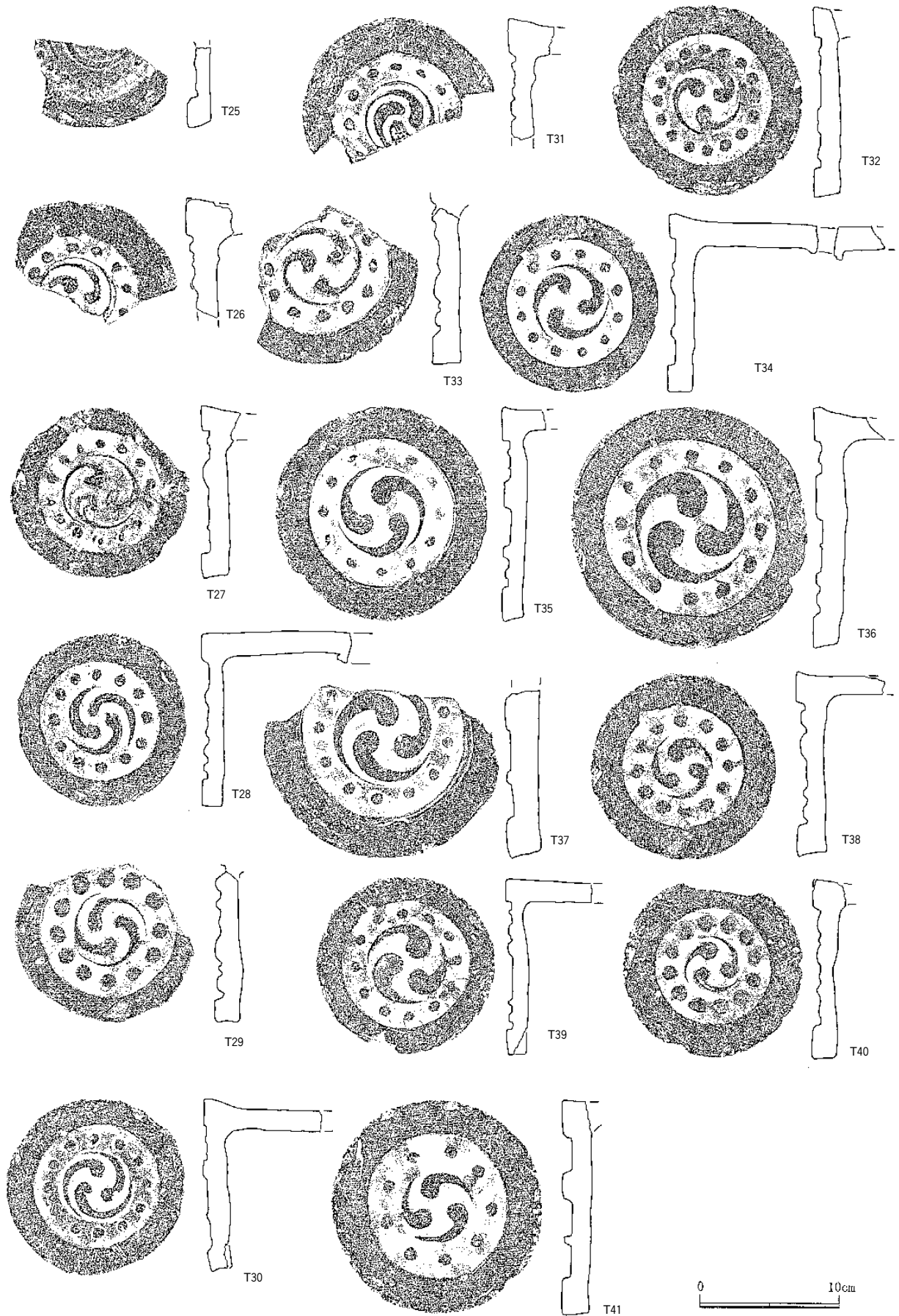
T 55 は珠文のみが残存し、丸く立体的な珠文である。丸瓦部の筒部長 22.3 cm、筒部径 13.8 cm、



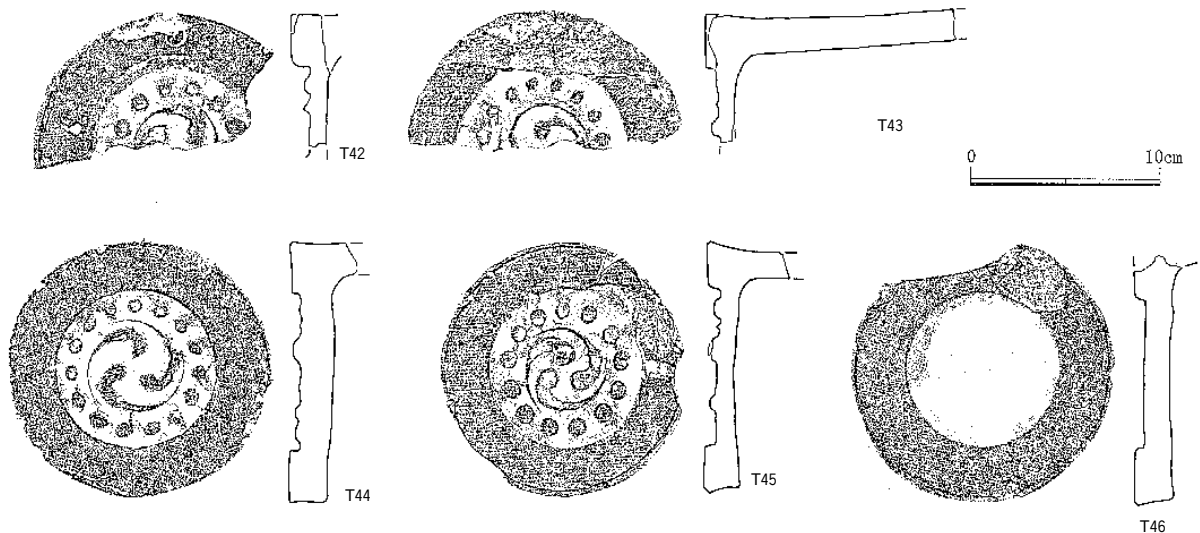
第49図 地下1階上層出土軒丸瓦実測図(1)



第50図 地下1階上層出土軒丸瓦実測図(2)



第51図 地下1階中層出土軒瓦実測図(1)



第52図 地下1階中層出土軒丸瓦実測図(2)

玉縁長2.5 cmでやや不整形で扁平な台形を呈する。丸瓦部凸面は縦方向の丁寧なナデ調整によって仕上げ、凹面はいわゆるゴザ目で、棒状工具による補足叩き痕とは異なる縦方向の沈線が認められる。コビキBである。筒部半分から玉縁側の2箇所釘穴が穿たれている。

T 64は大型品で、巴頭部が大きく肥厚し、巴尾部は細くなりやや長く、やや外側に広がる。巴文および珠文は立体的で上面が平端になる。数は不明。瓦当面径は不明、外縁幅は2.4 cmである。瓦当面には筈抜き後、文様の一部を指ナデした状況が認められる。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。漆喰が残る。

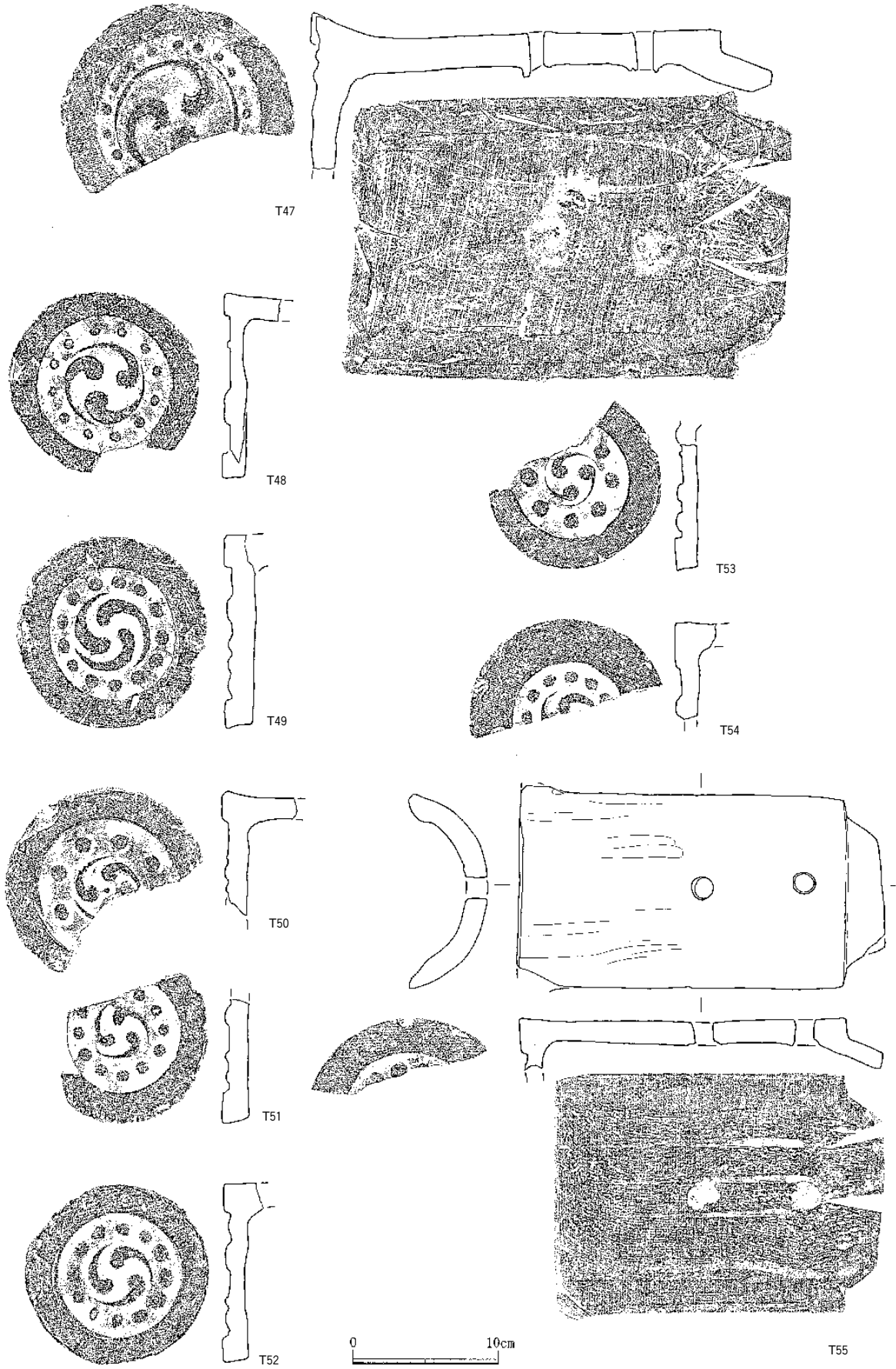
T 65は巴頭部が肥厚し、巴尾部が細く長く、円形に展開する。巴文および珠文はやや立体的で、数珠文は大きく、数は12個。佐藤分類61に類似する。瓦当面径は13.1 cm、外縁幅は1.9 cmである。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。残存する丸瓦部の凸面は縦方向のナデ調整で仕上げ、釘穴が設けられる。凹面は布目が残る、補足叩きが認められる。コビキBである。

T 66は巴頭部が丸く、巴尾部が細く長く、円形に展開する。珠文数は12個。佐藤分類64に類似する。瓦当面径は13.4 cm、外縁幅は1.9 cmである。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。燻されていない。

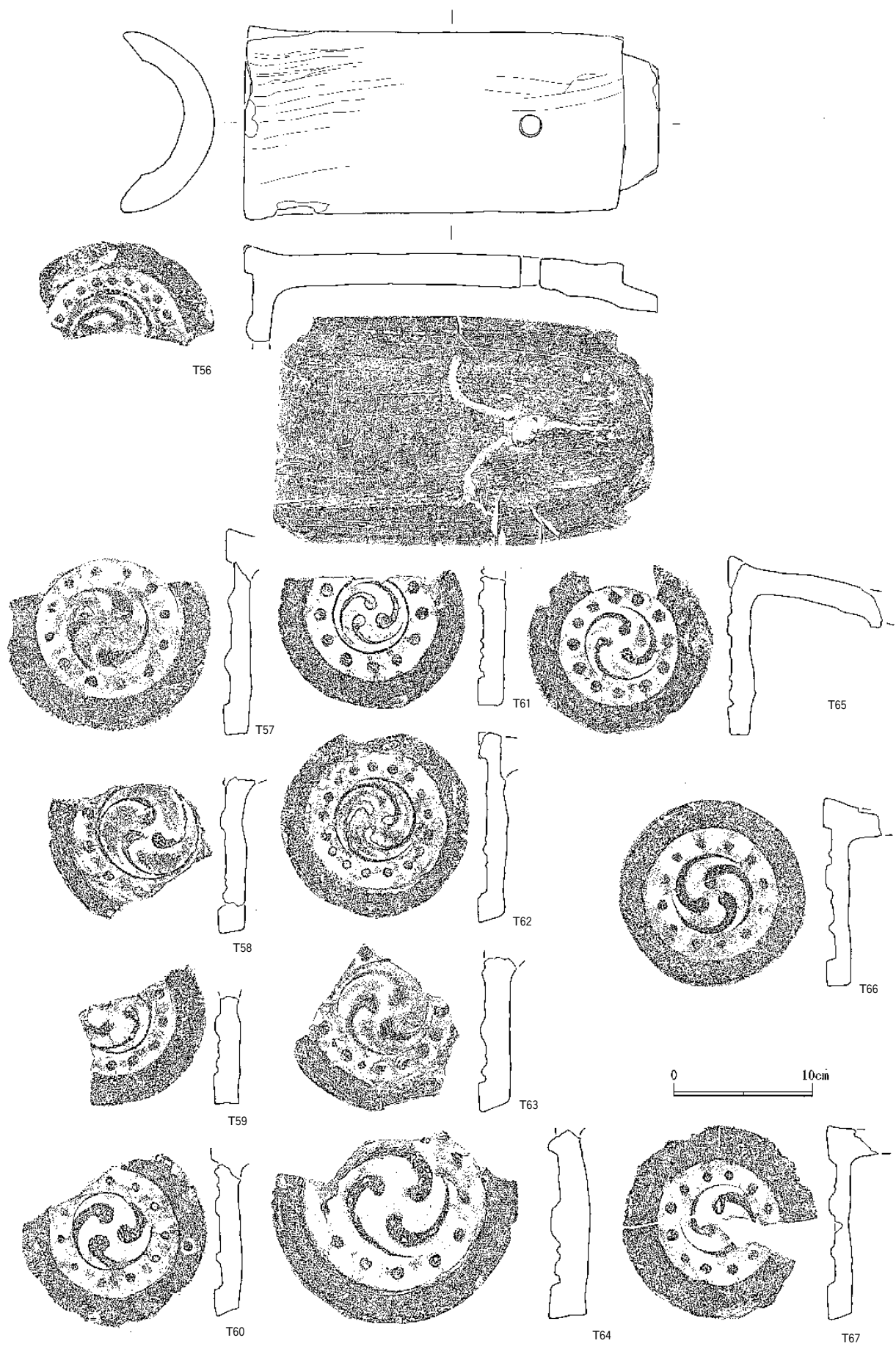
T 67の巴頭部は肥厚し、巴尾部が細くやや長く、やや外側に広がる。巴文および珠文は立体的で、珠文数は12個。佐藤分類134に類似する。珠文と外縁の間に筈傷が認められる。瓦当面径は13.9 cm、外縁幅は2.4 cmである。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。丸瓦部は凸面を縦方向に丁寧なナデ調整で仕上げる。燻されていない。

T 68は巴頭部がやや大きく、巴尾部が細くやや長く、円形に展開する。珠文は小さく、数は不明。瓦当面径は不明で、外縁幅は2.0 cmである。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

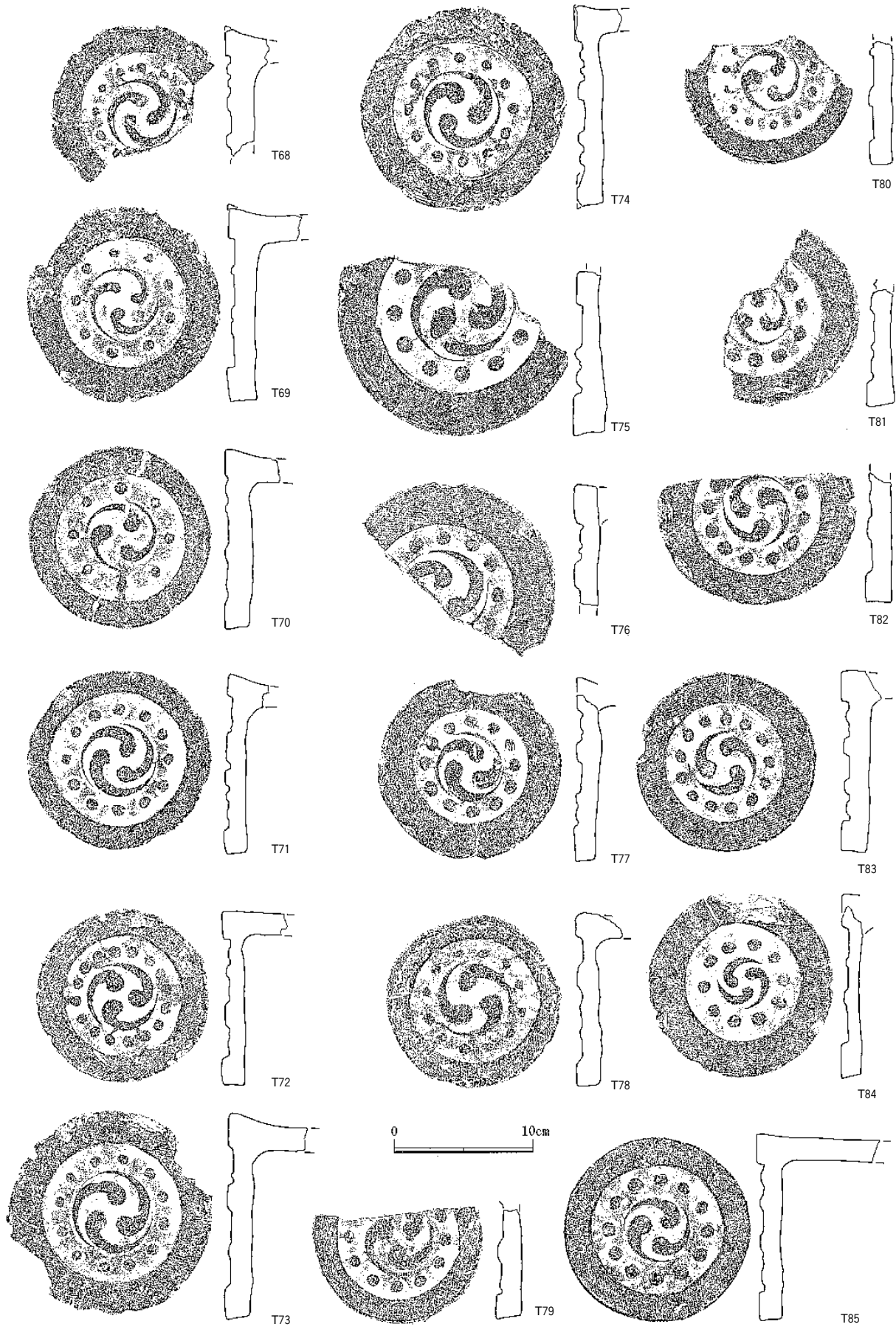
T 69は巴頭部が小さく肥厚し、巴尾部が細くやや長く、やや外側に広がる。巴の上面は平坦で、珠文は小さく立体的で、数は9個。瓦当面径は14.0 cm、外縁幅は2.3 cmである。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。



第53図 地下1階下層出土軒丸瓦実測図(1)



第54図 玉藻廟基礎部出土軒丸瓦実測図（1）



第55図 玉藻廟基礎部出土軒丸瓦実測図(2)

T 70 は巴頭部が大きく肥厚し、巴尾部は細く短く、やや外側に広がる。巴文および珠文は平面的で範抜けが非常に悪い。珠文数は8個。佐藤分類71に類似する。瓦当面径は12.9 cm、外縁幅は1.9 cmである。剥離材はハナレ砂と考えられ、瓦当裏面調整は佐川分類Cである。燻されていない。

T 71 は巴頭部が小さく、巴尾部がやや長く、円形に展開する。巴文は上面が平坦で、珠文はやや押しつぶれており、珠文は12個。佐藤分類164に類似する。瓦当面径は22.9 cm、外縁幅は1.7 cmである。剥離材はハナレ砂と考えられ、瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

T 72 は巴頭部が大きく肥厚し、巴尾部は短く、円形に展開する。巴文および珠文は上面を平坦に仕上げ、珠文数は16個。瓦当面径は12.4 cm、外縁幅は1.8 cmである。11か所に範傷が認められる。剥離材にキラ粉を使用し、瓦当裏面調整は佐川分類Cである。丸瓦部の凸面は丁寧な縦方向のナデ調整で仕上げ、凹面はコビキBが認められる。

T 73 は巴頭部が大きく、巴尾部がやや長く、円形に展開する。珠文はややつぶれており、数は12個。佐藤分類164に類似する。瓦当面径は14.6 cm、外縁幅は2.1 cmである。剥離材はハナレ砂と考えられ、瓦当裏面調整は佐川分類Cである。丸瓦部の凸面は縦方向のナデ調整、凹面にはいわゆるゴザ目が残る。燻されていない。

T 74 は巴尾部がやや長く、円形に展開する。巴文および珠文ともに立体的かつ上面を平坦にするもので、珠文数は12個。佐藤分類164に類似する。瓦当面径は14.4 cm、外縁幅は2.2 cmである。剥離材はハナレ砂を使用し、瓦当裏面調整は佐川分類Cである。丸瓦部の凸面は粗いナデ調整で仕上げる。

T 75 は巴頭部が大きく肥厚し、巴尾部はやや長く、円形に展開する。巴文および珠文ともに立体的で上面を平坦に仕上げる。佐藤分類164に類似する。瓦当面径は不明で、外縁幅は2.7 cmである。外端部を面取りし、剥離材としてキラ粉を使用し、瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

T 76 は巴頭部が大きく、巴尾部は長く、途中で細くなり、円形に展開する。巴文および珠文は立体的で、珠文は大きい。佐藤分類117に類似する。瓦当面径は不明で、外縁幅は2.3 cmである。剥離材はキラ粉を使用し、外端部を面取りする。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。瓦当接合法は佐川分類D面である。

T 77 は巴頭部が大きく肥厚し、巴尾部がやや長く、円形に展開する。巴文および珠文ともに立体的で、珠文は大きく、数は12個。佐藤分類117に類似する。瓦当面径は13.2 cm、外縁幅は2.3 cmである。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。範傷が1か所認められる。

T 78 は巴頭部が大きく肥厚し、巴尾部が短く、やや外側に広がる。巴文は立面的で、珠文はややつぶれており、数は12個。佐藤分類154に類似する。瓦当面径は12.3 cm、外縁幅は1.6 cmである。剥離材はハナレ砂と考えられ、瓦当裏面調整は佐川分類Cである。範抜けが悪く、不明確であるが2箇所に範傷があると考えられる

T 79 は巴頭部が大きく、巴尾部は短く、円形に展開する。巴文および珠文は立体的で、珠文数は不明。佐藤分類171に類似する。瓦当面径は12 cm、外縁幅は1.7 cmである。外端部を面取

りする。剥離材にキラ粉を使用し、瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

T 80 は巴頭部が小さく肥厚し、巴尾部は短く、円形に展開する。珠文は小さく立体的で、数は不明。佐藤分類 83 に類似する。瓦当面径は不明で、外縁幅は 1.6 cm である。剥離材はハナレ砂で、瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

T 81 は巴頭部が大きく、巴尾部が細くやや長い。珠文は大きく、数は不明。瓦当面径は不明で、外縁幅は 1.7 cm である。剥離材はハナレ砂を使用し、外縁部を面取りする。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

T 82 は巴頭部が大きく肥厚し、巴尾部が短く、円形に展開する。巴文は立体的で珠文はややつぶれた感がある。佐藤分類 154 に類似する。瓦当面径は 13.8 cm、外縁幅は 1.9 cm である。剥離材はキラ粉を使用し、瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

T 83 は巴頭部が大きく肥厚し、巴尾部が短く、やや外側に広がる。巴文および珠文ともに立体的で、珠文は 13 個。佐藤分類 110 に類似する。瓦当面径は 12.8 cm、外縁幅は 2.1 cm である。外端部を面取りする。剥離材はキラ粉を使用し、瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

T 84 は巴頭部が小さく肥厚し、巴尾部は短く、やや外側へ広がる。珠文は大きく立体的で、数は 10 個。瓦当面径は 13.2 cm、外縁幅は 2.5 cm である。瓦当接合法は佐川分類D面である。剥離材はキラ粉を使用し、瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

T 85 は巴頭部が大きく、巴尾部が短く、円形を呈する。巴文および珠文ともに立体的で、珠文数は 12 個。佐藤分類 124 に類似する。瓦当面径は 13.4 cm、外縁幅は 2.0 cm である。外端部を面取りする。剥離材にキラ粉を使用。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。丸瓦部の凸面は非常に丁寧な縦方向のナデ調整によって仕上げ、凹面はいわゆるゴザ目が残し、補足叩きを施す。コビキBである。

T 86 は巴頭部が肥厚し、巴尾部は短い。巴文および珠文は立体的である。瓦当面径は不明、外縁幅は 2.2 cm である。丸瓦部の凸面はナデ調整で仕上げ、凹面は棒状の補足叩きを施す。

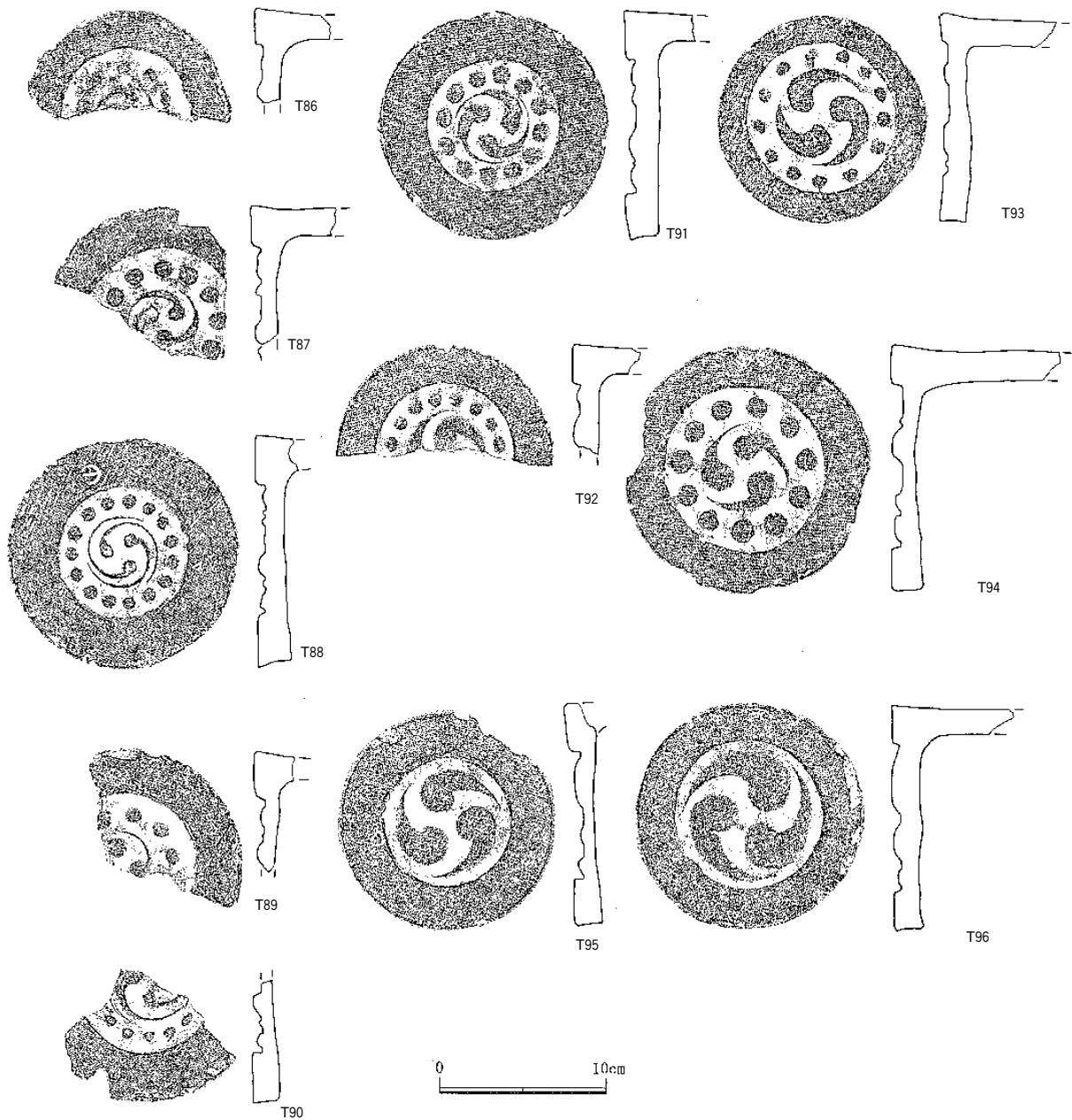
T 87 は巴頭部が肥厚し、巴尾部は細くやや長く、円形に展開する。巴文および珠文ともに立体的で珠文は大きい。佐藤分類 212 に類似する。瓦当面径は不明で、外縁幅は 2.3 cm である。丸瓦部の凸面は横方向の丁寧なナデ調整を行い、凹面にはいわゆるゴザ目が残る。

T 88 は巴頭部が肥厚し、巴尾部は細く長く、円形に展開する。巴文および珠文ともに非常に立体的で、珠文は 15 個。佐藤分類 180 に類似する。瓦当面径は 14.7 cm、外縁幅は 2.4 cm である。外縁部には○の中に横線を施した刻印がある。剥離材はキラ粉を使用し、瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

T 89 は巴頭部が肥厚し、巴尾部が線状に細く短い。巴文および珠文ともに立体的。佐藤分類 259 に類似する。瓦当面径は不明で、外縁幅は 2.7 cm である。剥離材にキラ粉を使用。

T 90 は巴頭部が肥厚し、巴尾部が線状に長い。巴文および珠文ともに立体的。瓦当面径は不明で、外縁幅は 3.0 cm である。剥離材にキラ粉を使用。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

T 91 は巴頭部が大きく肥厚し、巴尾部が急激に細くなり、長い。円形に展開する。巴文およ



第56図 玉藻廟基礎部出土軒丸瓦実測図(3)

び珠文は立体的で、珠文が大きく、数は12個。瓦当面径は13.6 cm、外縁幅は2.8 cmである。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。丸瓦部の凸面は縦方向の丁寧なナデ調整で仕上げる。

T 92は巴頭部が大きく肥厚し、巴尾部は短く、円形に展開する。巴文および珠文ともに立体的。佐藤分類251に類似する。瓦当面径は不明で、外縁幅は2.3 cmである。剥離材はキラ粉を使用し、外端部を面取りする。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。丸瓦部の凸面は横方向の丁寧なナデ調整である。

T 93は巴頭部が大きくやや不整形な円形を呈する。巴尾部が短く、円形に展開する。巴文および珠文ともに立体的で上面は平坦になる。珠文は13個。佐藤分類154に類似する。瓦当面径は12.4 cm、外縁幅は1.7 cmである。瓦当面には2箇所範傷が認められる。剥離材はキラ粉を使用し、外端部を面取りする。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。丸瓦部の凸面は縦方向の丁寧な

ナデ調整で、凹面はコビキBが残る。

T 94 は巴頭部が大きく肥厚し、巴尾部が太く短く、外側に広がる。巴文および珠文ともに非常に立体的で、珠文は大きく11個。佐藤分類226に類似する。瓦当面径は14.6 cm、外縁幅は2.5 cmである。外端部は面取りし、剥離材はキラ粉を使用する。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。丸瓦部の凸面は横方向の丁寧なナデ調整で仕上げ、凹面は棒状の補足叩きを施す。吊り紐もしくは綴じ紐痕跡が残る。

b 珠文をもたないもの

T 95, T 96 は珠文をもたない一群で、佐藤分類V群(271～275)と同文である。いずれも大きな巴頭部に短い巴尾部が展開するもので、立体的で、T 95が右巻、T 96が左巻きである。瓦当面径の95は13.2 cm、96は13.7 cm、外縁幅は2.8 cm、2.6 cmである。いずれも外端部を面取りし、剥離材にキラ粉を使用する。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。T 95の瓦当接合法は佐川分類Dである。T 96は丸瓦部の凸面は横方向の丁寧なナデ調整で仕上げ、固定材の漆喰が付着している。

(イ) 巴文軒丸瓦以外の一群

T 46 は蛇の目(無文)瓦である。瓦当面径は14.0 cm、外縁幅は3.0 cmである。剥離材はキラ粉を使用し、外縁部外端を面取りする。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。西の丸の調査成果によれば明治期以降のもので、玉藻廟形成時期に合うものと考えられる。

イ 軒平瓦

(ア) 滴水瓦(第57・58図)

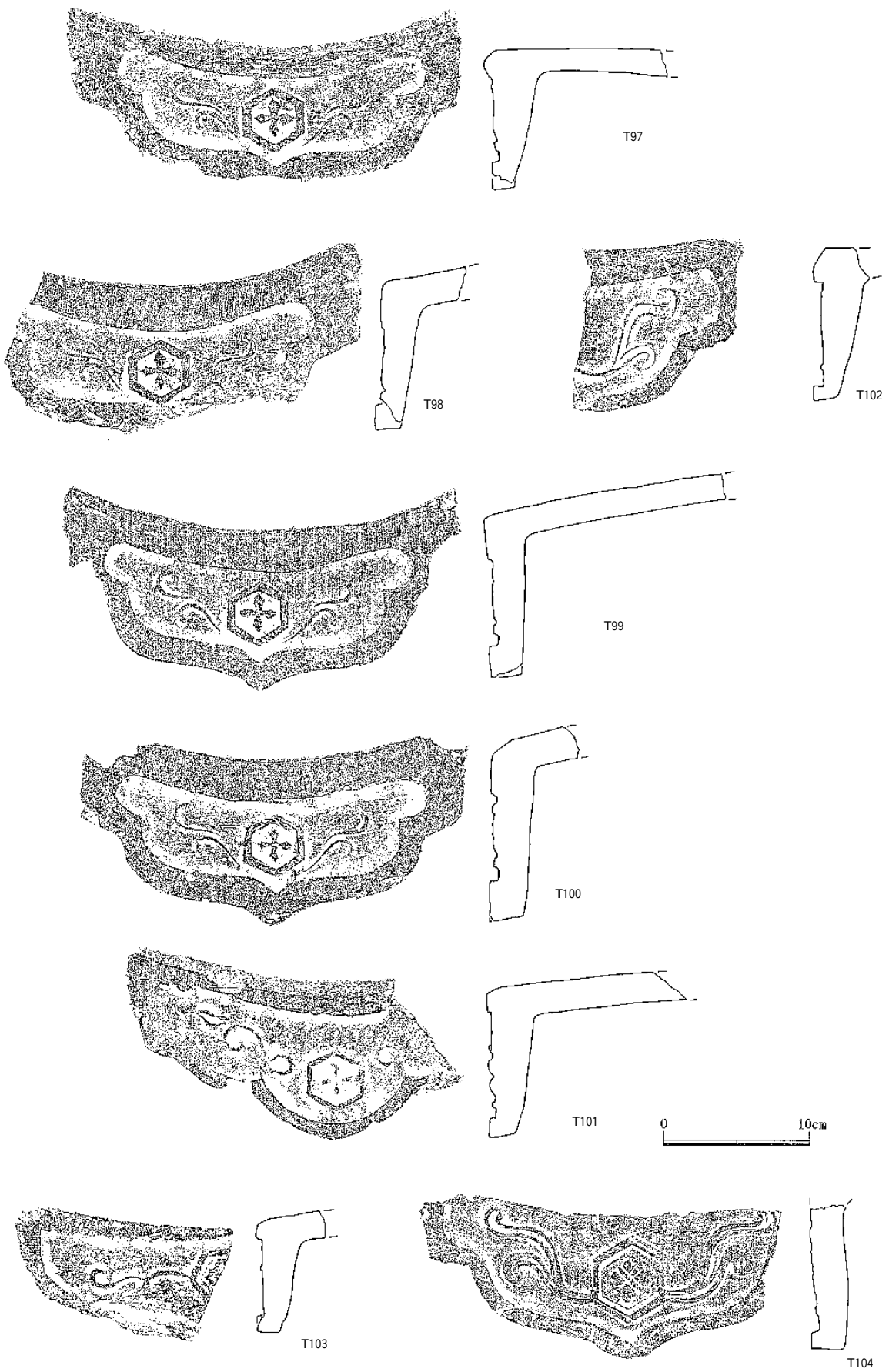
瓦当文様によって大きく6つに分類(1～6群)できる。瓦当面の形状は1, 4～6は共通し, 2, 3群の3つに大きく分類できる。いずれも瓦当外縁部, 瓦当裏面に丁寧なナデ調整で仕上げる。

T 97～T 100 は、中心飾りは太い線で表現された亀甲文の中に菱形の四葉が配置され、唐草が左右対称に2回転反転するものである(1群)。T 97～T 99の中心飾りが平面的表現になっているのに対し、T 100は非常に立体的な表現となっている。瓦当面が完存しているものはT 99, T 100で瓦当面径は10.8 cm, 11.3 cmである。T 99は固定材である漆喰の痕跡が多量に認められる。いずれもハナレ砂を剥離材としていると考えられ、范拔けが非常によい。

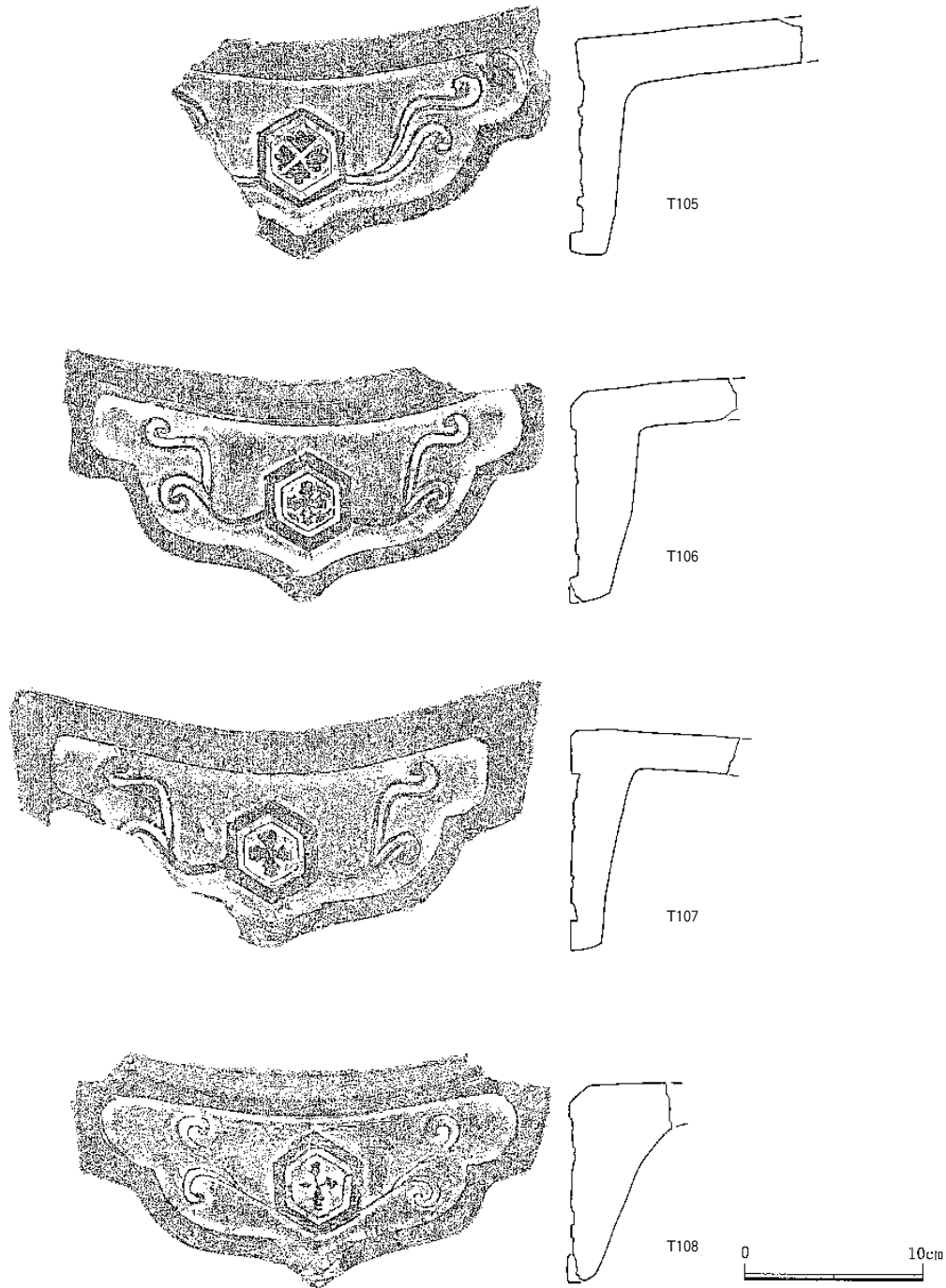
T 101は瓦当面の剥落が著しく、中心飾り等が明瞭でないものの、唐草文が異なるとともに瓦当面の形状も異なる(2群)。瓦当面の平面形状は、1群は水切り部が尖るのに対し、2群は丸く収める。瓦当面の幅は9.8 cmである。T 101の剥離材はハナレ砂で、瓦当裏面および平瓦部は丁寧なナデ調整で仕上げる。

T 103は90度回転させた亀甲文を中心飾りとするが破片かつ表面の剥落が著しいため、亀甲文内部の文様は不明である(3群)。唐草が左右対称に展開し、中央部で一ひねりする。

T 102, T 106～T 108は太線, 細線の二重に表現された亀甲文の中にやや不整形な四葉を配



第57図 滴水瓦実測図(1)



第58図 滴水瓦実測図(2)

する中心飾をもつ一群である。左右に展開する唐草文に差異があり、T 102, T 106, T 107 と T 108 に分類できる(4・5群)。前者は左右に展開する輪郭線で表現された唐草が、水平方向に展開した後上下に分岐し、上へと大きく延びた後外側へ展開した後内側へと屈曲する。後者は亀甲文下部の外形線に沿って斜め方向へと伸び、輪郭線で表現された2つの蕨手が上下に展開する。この文様の違いは断面形状とも対応している。ただし、いずれも平瓦部との接合は鈍角を形成している。T 106 と T 107 は同文であるが、同範ではない。T 102 と T 106 は同範の可能

性がある。ただし、T 102 および T 106 にはそれぞれ異なる刻印が施されている。T 106 は剥離材にハナレ砂を使用し、非常に筈抜けがよい。いずれも、瓦当裏面および平瓦部凹凸面は丁寧なナデ調整によって仕上げる。T 108 の瓦当文様は非常に平面的で、剥離材にはハナレ砂を使用。瓦当裏面および平瓦部は丁寧なナデ調整で仕上げる。

T 104, T 105 は太線、細線の二重に表現された亀甲文の中にやや一辺を波状に表現する三角形を呈する四葉を配する中心飾をもつ一群で、左右に展開する唐草は亀甲文下部から上下に分かれて展開する（6群）。瓦当文様は中心飾りなどに違いがあり、T 104 は非常に平坦で、T 105 は立体的である。T 104 は瓦当上端破面が平瓦接合部となっており、刻み目を施す。T 105 は剥離材が不明であるが、T 104 は剥離材にキラ粉を使用する。

(イ) その他の軒平瓦（第59～63図）

中心飾の形態を主な分類基準とし、さらに唐草文の形態などについて記述を行う。顎部断面形態および瓦当面のサイズについても重要な属性となることが予想されるが、本資料は破片資料が多く、一定の傾向を掴むことができないと考えられ、ここでは特に取り上げていない。

T 109 は中心飾が欠損しており、唐草文のみが残る。上の唐草は右から上、下、下という形で3回反転し、下の唐草は左右に延びる途中に小さな子葉の群が4つ認められる。以上の中心飾から展開する上下二つの唐草の特徴から1は佐藤分類の10、歴博532、533と同文と考えられ、三つの菱形を配置する中心飾の軒平瓦である。瓦当部周辺は磨滅が著しい。胎土が金雲母を多量に含む非常に特徴的である。

T 110～T 113, T 124～T 125, T 143～T 150, T 168, T 170 は三葉文を中心飾とする軒平瓦である。

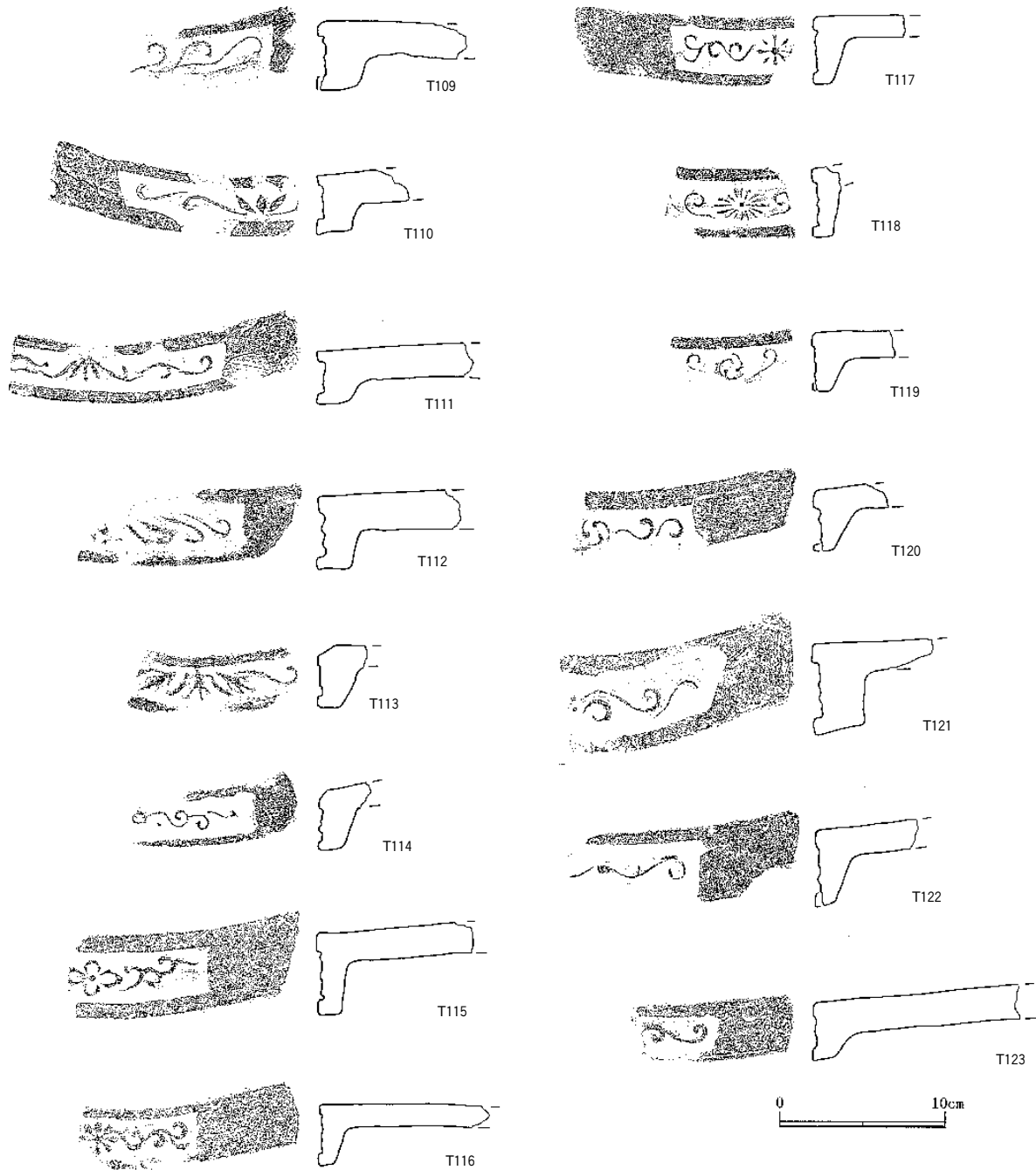
T 110・T 144 は木の葉状の三葉文を陽刻で表現し、左右に唐草を2回反転させるものである。唐草は細く輪郭線を持つ。いずれも瓦当部は顎張り付け技法で、T 110 は丁寧な横ナデ調整で仕上げる。T 144 の凹面は横方向のナデ調整で、凸面は粗いナデ調整によって仕上げる。

T 111 は下向きの三葉文から唐草が左右にのび、3回反転するものである。歴博1182と同文である。瓦当部は顎張り付け技法で、丁寧な横方向のナデ調整によって仕上げ、平瓦部の凹面はナデ調整、凸面は粗いナデ調整によって仕上げる。

T 112 と T 148 は中心飾りが明瞭ではないが、下向きの三葉文で、左右に唐草が斜め方向に3つ配置され、下、下、上の順で反転する。瓦当部は丁寧な横方向のナデ調整が施され、平瓦部は凹面をナデ調整、凸面を粗いナデ調整で仕上げる。T 148 は非常に筈抜けが非常に悪い。瓦当部は顎貼り付け技法で、調整は表面摩滅のため詳細は不明である。

T 113 は棘状の輪郭の三葉で、中心葉の横に楓状の葉が配置され、その横から唐草が1回反転する。佐藤分類Ⅳ-21である。瓦当部は顎張り付け技法で、強い横方向のナデ調整が二回施される。

T 124 は中心が小さく、両側が長く大きな三葉文で、左右に展開する唐草は上下に二回反転する。佐藤分類Ⅴ-19に近い文様構成である。瓦当顎部は横方向のナデ調整によって仕上げる。平瓦部

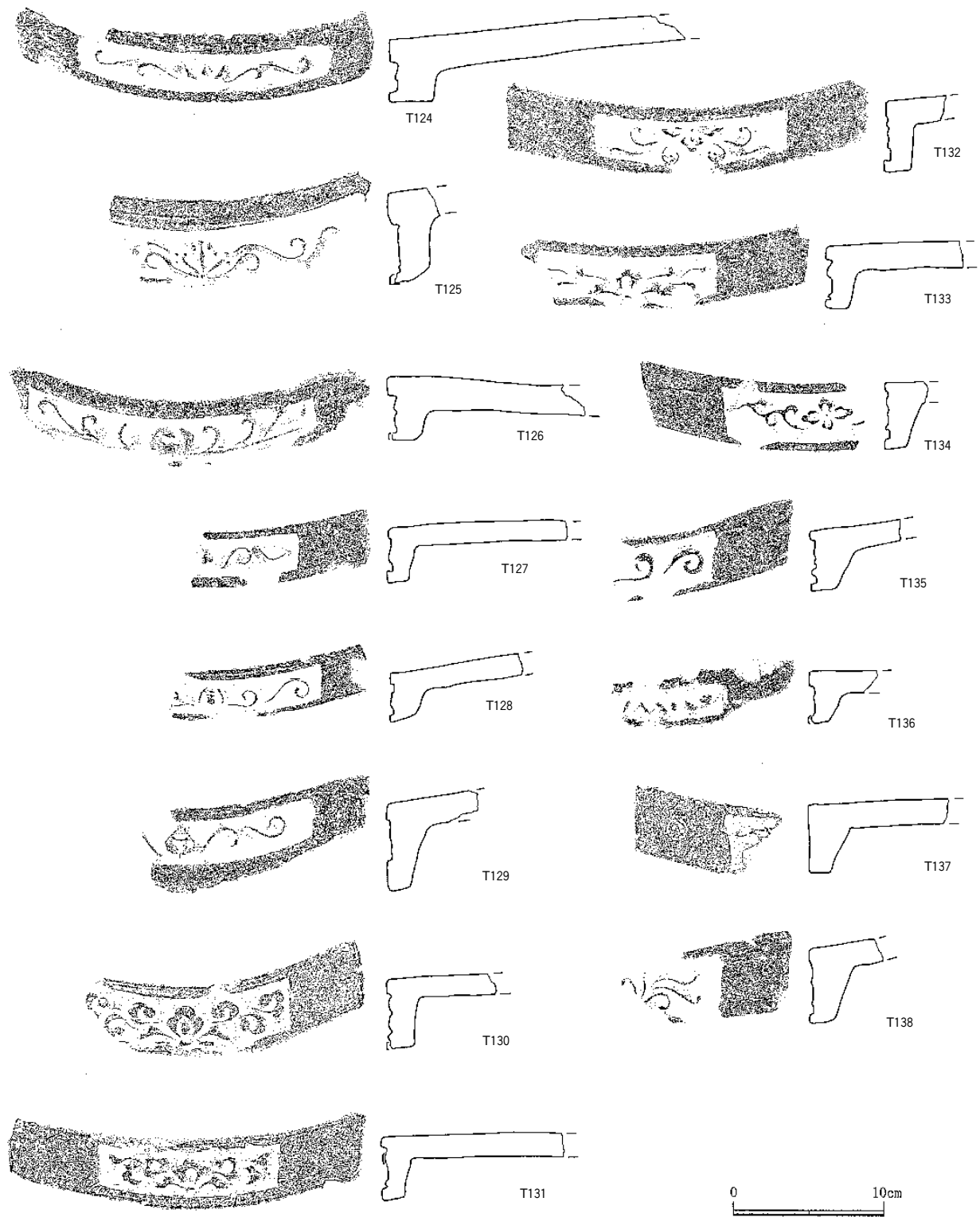


第59図 地下1階上層出土軒平瓦実測図(1)

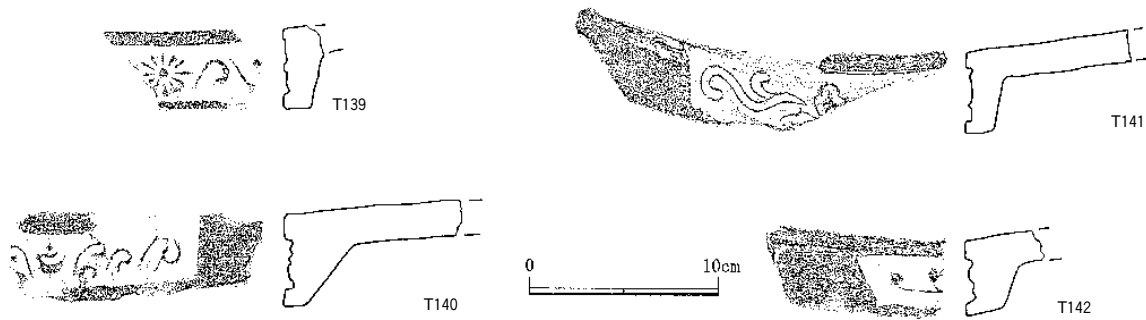
の凹面は丁寧なナデ調整によって仕上げ、凸面は粗い縦方向のナデ調整によって仕上げる。燻されていない。

T 125 は三葉文の各葉の上部に3つの点を配置するもので、左右に展開する唐草は下、上、下と3回反転する。歴博539に近い文様構成である。上縁部が太く、顎も大きく、丁寧な横方向のナデ調整によって仕上げる。平瓦部の凹面は丁寧なナデ調整によって仕上げる。

T 143 は中央に珠文を配する二葉文もしくは中央部が珠文状を呈する三葉文で、先端部を珠文状に肥厚させる。いずれも珠文状に肥厚する先端部をもち、左右に真直ぐに伸びた唐草から子葉が上に向かって展開する。佐藤分類V-8・9に類似する文様構成である。瓦当部は顎貼り付け



第60図 地下1階中層出土軒平瓦実測図(1)



第61図 地下1階下層出土軒平瓦実測図(1)

技法で、凹面は摩滅しており不明であるが、凸面は粗い横方向のナデ調整で仕上げる。

T 145 は三葉文に唐草が密着して展開するもので、下、上の順序で2回反転する。瓦当上縁部が幅広い。瓦当部は顎貼り付け技法である。

T 146 は花卉の先端に花蕾を配するものと考えられ、左右に上、下と2回反転する唐草文が展開する。佐藤分類V -14に類似するものと考えられる。全体に漆喰が付着しており、不明瞭であるが、顎部および凹面を丁寧なナデ調整で仕上げ、凸面を粗いナデ調整によって仕上げる。

T 147 は下向きの三葉文で、唐草が左右に下、上と2回反転するものである。上下が逆であるが、文様構成としては佐藤分類V -19に類似する。顎部および凹面を丁寧な横方向のナデ調整で仕上げ、凸面は粗いナデ調整で仕上げる。

T 149 は下向きの三葉文で、唐草が左右に下、上と2回反転するもので、やや不明瞭なため、不確実であるが、T 147と同文である可能性がある。佐藤分類V -19と同文である。左外縁部に円形の刻印がある。

T 150 は輪郭線を陽刻で表現した上向の三葉文を中心飾とするもので、左右に下、上という順序で巻の強い唐草文が2回反転する。瓦当部は顎張り付け技法で、丁寧な横方向のナデ調整によって整形する。

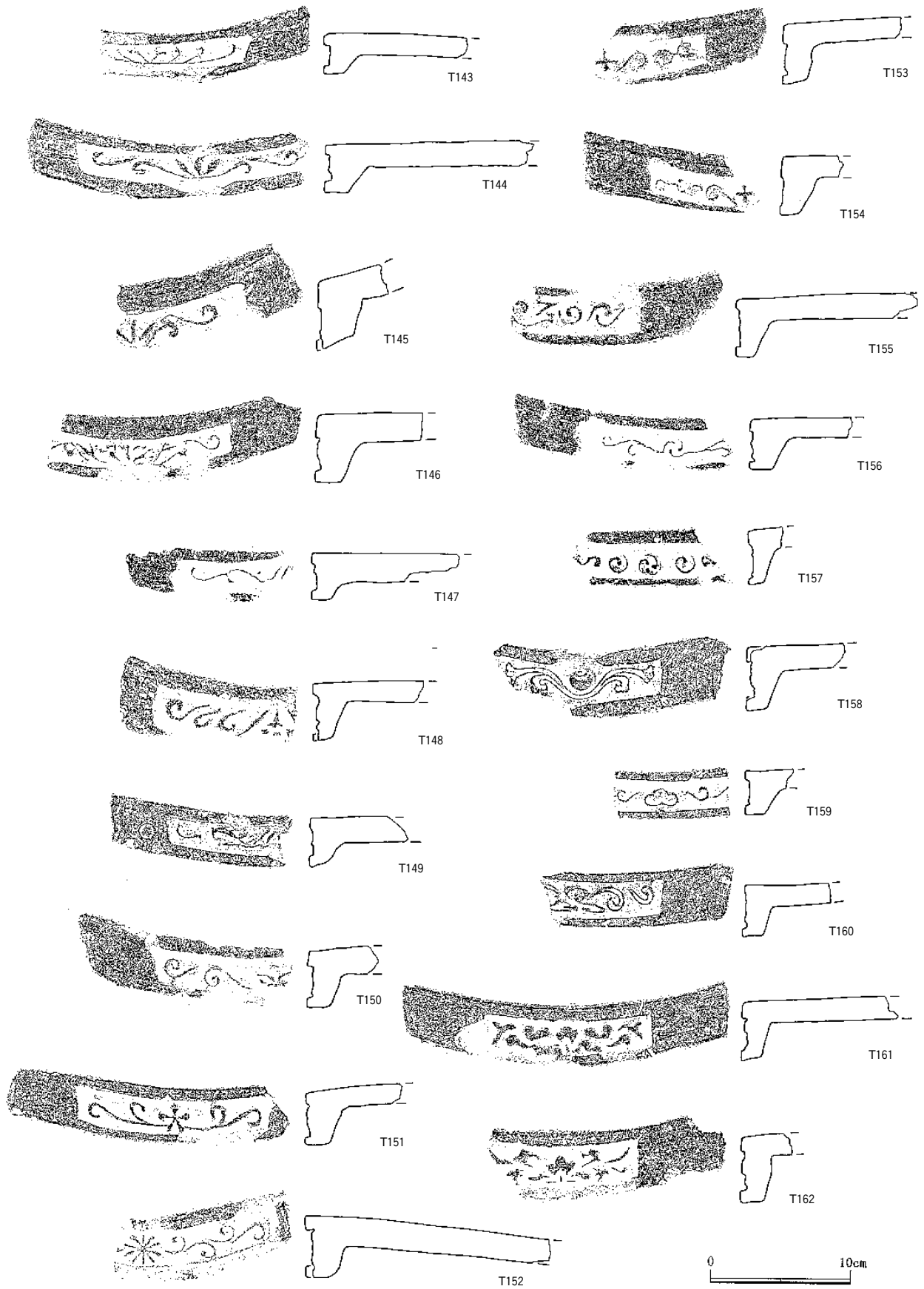
T 168 は破片のため詳細は不明であるが、残存部からT 113と類似文様で、唐草の巻が強い。瓦当部は、顎張り付け技法で、丁寧な横方向のナデ調整で仕上げる。平瓦部の凹凸面は丁寧なナデ調整である。

T 170 は破片のため、詳細は不明であるが、唐草文の特徴から2と同文と考えられ、三葉文を中心飾とするものである。瓦当部は顎張り付け技法で、丁寧なナデ調整によって仕上げる。

T 115, T 134 は4つの花卉で表現された花文を中心飾りとする。

T 115 は中房を小さな陽刻で表現し、4つの花卉の輪郭を陽刻で表現する中心飾りとする。唐草は上下に3回反転し、最後の反転の途中から下へと子葉が展開する。剥離材としてキラ粉を使用する。瓦当部は顎張り付け技法で、丁寧な横方向のナデ調整によって仕上げ、平瓦部の凹面はナデ調整、凸面は粗いナデ調整によって仕上げる。

T 134 は中房を小さな陽刻で表現し、4つの花卉の輪郭を陽刻で表現する中心飾りとする。唐草は上下に3回反転し、最後の反転の途中から下へと子葉が展開するものであるが、一連の表現



第 62 図 玉藻廟基礎部出土軒平瓦実測図 (1)

となっている。剥離材としてキラ粉を使用する。

T 116～T 118, T 139, T 151～T 152 は菊花文を中心飾りとする。

T 116・T 117 は陽刻の8枚の花弁によって表現される菊花文で、唐草が上下に3回反転する。最後の反転から子葉が斜め下へと伸びる。T 116 は太い線, T 117 は細い線で表現される。佐藤分類XI -35・36 に該当する。剥離材としてキラ粉を使用し、瓦当部は横方向のナデ調整によって仕上げる。平瓦部は凹面をナデ調整, 凸面を粗いナデ調整によって仕上げる。

T 118 は陽刻の16枚の花弁によって表現される菊花文で、残存部で、唐草が左右に1回反転する。佐藤分類XI -38 に該当する。瓦当部は横方向の丁寧なナデ調整である。

T 139 は陽刻の12枚の花弁によって表現される菊花文で、三葉文系の唐草文に類似し、下, 上, 下と3回反転するものと考えられる。瓦当裏面は横方向のナデ調整仕上げる。

T 151 は陽刻の5枚の花弁によって表現される菊花文を中心飾りとし、左右に上, 下と唐草が2回反転し、非常に立体的である。佐藤分類XI -42 と同文である。顎部および凹面は丁寧なナデ調整によって仕上げる。

T 152 は陽刻の10枚の花弁によって表現される菊花文を中心飾りとし、左右に上, 下, 上, 下と唐草が4回反転する。金雲母, 石英, 長石を多量に含む非常に粗く特徴的な褐色を呈する胎土である。表面が剥落しており、調整の詳細は不明である。

T 119～T 120, T 156～T 157 は三巴文を中心飾りとする

T 119 は右巻で巴頭が肥厚し、細く短い尾部がやや広がりながら展開する三巴文を中心飾りとし、残存部で唐草が斜め上方向に1回反転する。佐藤分類の軒平瓦XIX -57, 58 である。瓦当部は顎張り付け技法で、丁寧なナデ調整によって仕上げる。

T 120 は右巻で巴頭が肥厚し、細く短い尾部の三巴文を中心飾りとし、唐草が2回反転する。佐藤分類XIX -60 の逆巻に該当する。瓦当部は顎張り付け技法で丁寧なナデ調整で仕上げる。

T 156 は左巻で、巴頭が肥厚し、尾部が短い巴文を中心飾りとし、左右に下, 上と2回反転する唐草を配置する。佐藤分類XIX -65 と同文である。燻されていない。

T 157 は左巻で、巴頭が肥厚し、尾部の短い巴文を中心飾りとし、その左右に同じ巻きの一つ巴文を配置する。さらにその左右には巻が中心飾り対向する唐草を配置する。燻されていない。瓦当部は顎貼り付け技法で、丁寧なナデ調整によって整形する。

T 114, T 126～T 129, T 140, T 158 は宝珠文を中心飾りとする軒平瓦である。

T 114 は陽刻線で輪郭を表現する小さな宝珠文を中心飾りとするものである。唐草文は大きく上下に2回反転した後、上にやや小さく反転する。中心飾りの右下に円天を施す。歴博538 と同文である。瓦当部は顎張り付け技法である。

T 126 は火焰宝珠の突端を切り離した形状のもので、左右に展開する唐草は側縁部まで伸びる真直ぐな枝から伸びて上, 上, 下という順序で3回反転する。歴博534・535 と同文である。雲母を多量に含む非常に特徴的な胎土である。瓦当顎部は丁寧なナデ調整によって整形する。平瓦部の凹面は横方向の丁寧なナデ調整によって仕上げる。凸面は粗いナデ調整によって仕

上げる。

T 127 は水滴状の小さな宝珠文と中心飾とし、宝珠下半から大きく巻き込んで1回反転する唐草を伴う。さらに外側にV字状に子葉が展開する。佐藤分類XX-98と類似する文様構成である。瓦当顎部は丁寧なナデ調整によって整形する。平瓦部の凹面は横方向の丁寧なナデ調整によって仕上げる。凸面は粗いナデ調整によって仕上げる。

T 128 は陽刻線で、輪郭を表現し、レリーフ状に宝珠を表現するタイプである。唐草は上、下の順序で2回反転させ、2転目は大きく巻き込む。佐藤分類XX-104と類似した文様構成である。瓦当顎部は丁寧なナデ調整によって整形する。平瓦部の凹面は横方向の丁寧なナデ調整によって仕上げる。凸面は粗いナデ調整によって仕上げる。

T 129 は玉葱形を呈する宝珠文の輪郭線を陽刻で表現する。唐草は下、上の順序で2回反転する。瓦当顎部は丁寧なナデ調整によって整形する。磨滅が著しく、調整は不明。燻されていない。

T 140 は宝珠の上半分を陰刻で表現するタイプ。左右に展開する唐草文は、反転せずに、上から下へと延びる。太い唐草の輪郭を陽刻で表現する。歴博 1033～1036の類似文様である。瓦当裏面は横方向のナデ調整で仕上げ、平瓦部の凹面はナデ調整で仕上げ、凸面は粗いナデ調整によって仕上げる。

T 158 は円形を呈する宝珠で、上半を2重線で表現するもので、陽刻輪郭線で表現された唐草は宝珠文の下から左右一連に展開し、下、上と2回反転する。唐草の先端が広がるものである。歴博 1555に該当するものである。瓦当部は顎貼り付け技法で、剥離材としてキラ粉を使用する。瓦当面および凹面は丁寧なナデ調整によって仕上げ、凸面は未調整もしくは粗いナデ調整によって仕上げる。

T 130～T 133, T 141, T 160～T 166 は半截花菱文を中心飾りとする軒平瓦で、上向きのものは近世後半に高松城で盛行する文様（佐藤 2003）である。

T 130 は花卉に軸線を伴う花菱文で、唐草は花卉状にデフォルメされ、上、下、上という順序で3回反転する。剥離材としてキラ粉を使用する。瓦当顎部は丁寧なナデ調整によって整形する。平瓦部凹面は丁寧な横方向のナデ調整によって仕上げ、凸面は粗いナデ調整によって仕上げる。

T 131 は花卉に軸線を伴わない花菱文で、唐草は花卉状にデフォルメされ、上、下という順序で2回反転する。2転目はやや巻が甘い。2転目から子葉が伸びる。佐藤分類XXIII-137と同文である。剥離材にキラ粉を使用する。瓦当顎部は丁寧な横方向のナデ調整によって整形する。平瓦部の凹面は丁寧なナデ調整によって仕上げ、固定材としての漆喰が中央部に付着している。凸面は丁寧な横方向のナデ調整によって仕上げる。

T 132 は下向きの半截花菱文で、花卉輪郭付近が分厚く、中心部や子葉を太い陽刻で表現する。唐草は上下に反転し、2つ目の上へと反転する唐草に伴って子葉が外へと延びる。剥離材にキラ粉を使用する。瓦当部は横方向のナデ調整によって仕上げ、平瓦部凹面はナデ調整、凸面は粗いナデ調整で仕上げる。

T 133 は軸線を表現しないタイプのもので、花卉等の輪郭付近が分厚い。巻の弱い唐草が花菱

文から派生するように3方向に展開する。剥離材としてキラ粉を使用する。瓦当部は横方向のナデ調整によって仕上げ、平瓦部凹面はナデ調整、凸面は粗いナデ調整で仕上げる。

T 141 は上向きの半截花菱文で、花卉輪郭付近が分厚く、中心部や子葉を太い陽刻で表現する。唐草は2本の陽刻線で輪郭を表現し、中心飾のほぼ中央から伸び、途中一度くねらせた後、下方向に反転し、この軸となる唐草から上方向に派生して展開する。佐藤分類XXII-119である。瓦当裏面調整は丁寧な横方向のナデ調整で仕上げ、平瓦部の凹面は丁寧な横方向のナデ調整で、凸面は縦方向の粗いナデ調整で仕上げる。

T 160 は花卉に軸線を伴う花菱文で、唐草は2重の陽刻の輪郭線で表現し、下、上と2回反転する。佐藤分類XXII-120・121に類似するものである。剥離材としてキラ粉を使用し、瓦当部および凹凸面は非常に丁寧なナデ調整によって仕上げている。

T 161 は花卉に軸線を伴わない花菱文で、唐草は花卉状に非常にデフォルメされ、上、下という順序で2回反転する。2転目から子葉が伸びる。佐藤分類XXII-134に該当する。瓦当部は顎貼り付け技法で、剥離材としてキラ粉を使用している。凹面および瓦当面は非常に丁寧な仕上げで、凸面は未調整もしくは粗いナデ調整による仕上げである。

T 162 は花卉に軸線を伴う花菱文で、花文の上側がかなり強調され、唐草は花卉状にデフォルメされ、上、下、上という順序で3回反転する。佐藤分類XXII-136に該当する。瓦当部は顎貼り付け技法で、剥離材としてキラ粉を使用している。

T 163 はT 131と類似文様で花卉に軸線を伴わない花菱文で、唐草は花卉状にデフォルメされ、上、下という順序で2回反転する。2転目から子葉が伸びる。佐藤分類XXII-137と同文である。剥離材にキラ粉を使用する。瓦当厚4.3cm、瓦当面径24.0cm、文様面幅12.0cmである。瓦当面の剥離剤にキラ粉を用いる。凹面は固定材の痕跡が残る。丁寧なナデ調整で、凸面は粗いナデ調整で仕上げる。

T 164 は中軸線を陽刻で表現する半截花菱文で、左右に展開する唐草文は下、上という順序で2回反転する。佐藤分類XXII-145である。瓦当部は顎張り付け技法で、剥離材にキラ粉を使用する。丁寧な横方向のナデ調整で仕上げる。

T 165 は中軸線をもつ半截花菱文で、かなりデフォルメされた唐草が左右に展開する。基本構成はT 131、T 163と同じであるが、幅の狭い瓦当面に凝縮されている。剥離材としてキラ粉を使用する。瓦当部を丁寧なナデ調整で仕上げる。

T 166 は陽刻で平面的に半截花文を表現するもので、左右に上、下、上という順序で3回反転する唐草を配置する。剥離材としてキラ粉を使用し、瓦当部は横方向のナデ調整で仕上げる。

T 153～T 154 は陽刻で十文字を中心飾りとするもので、唐草の左右で表現が異なるもので、右は下、下、上で、左は下、上、下と反転させる。いずれも破片であるが、2つで本来は一つの文様構成している。歴博165に対応する。瓦当部は顎貼り付け技法で、瓦当部および凹凸面も丁寧なナデ調整によって仕上げる。

T 121～T 123、T 135～T 138、T 142、T 155、T 159、T 167、T 169、T 171はその他

の文様である。

T 121 は中心飾の横に「:」を配置し、左右に唐草が3回反転するものである。瓦当部は丁寧な横ナデ調整によって仕上げる。

T 122 は陽刻で表現された唐草が3回反転するものである。瓦当部は丁寧な横方向のナデ調整で仕上げる。

T 123 は陽刻で表現された唐草が残存部で2回反転するものである。唐草文の特徴から3と同文であるの可能性がある。瓦当部は丁寧な横方向のナデ調整で仕上げる。平瓦部はナデ調整、凸部は粗いナデ調整で仕上げる。瓦当部に○に縦線を施す刻印がある。

T 135 は唐草が上下に2回反転するものである。

T 136 は破片のため詳細は不明であるが、一番外側に上を向き反転する唐草が配置されている。磨滅が著しく詳細は不明であるが、平瓦部の凹凸面に多量に砂が付着している。

T 137 の文様構成は不明であるが、花菱系の文様となる可能性がある。「○」の中に「八」の字が配置された刻印が側縁部にある。剥離材としてキラ粉を使用している。瓦当部は丁寧なナデ調整によって整形する。平瓦部の凹面は丁寧なナデ調整によって仕上げる。凸面は粗いナデ調整によって仕上げる。

T 138 は破片のため詳細は不明であるが、上下に2回反転した唐草の間から子葉が伸び、さらに外側に子葉が2本伸びるものである。瓦当幅が高く、瓦当部を丁寧な横方向のナデ調整で仕上げる。平瓦部凹面はナデ調整、凸面は粗いナデ調整で仕上げる。燻されていない。

T 142 は唐草文のみが残存し、残存部で上に2回反転する。瓦当裏面は丁寧な横方向のナデ調整である。下端部が広い。

T 155 は中心飾に「A」字を意匠とするものと考えられ、唐草のみが残存している。唐草は対向する唐草文の間に逆「く」の字を配し、さらにそれらの外側に2巴文を配置するタイプである。唐草の形状が異なるが、佐藤分類ⅩⅢ-46に類似する文様である。瓦当部は顎貼り付け技法で、瓦当および凹凸面ともに丁寧なナデ調整によって仕上げる。

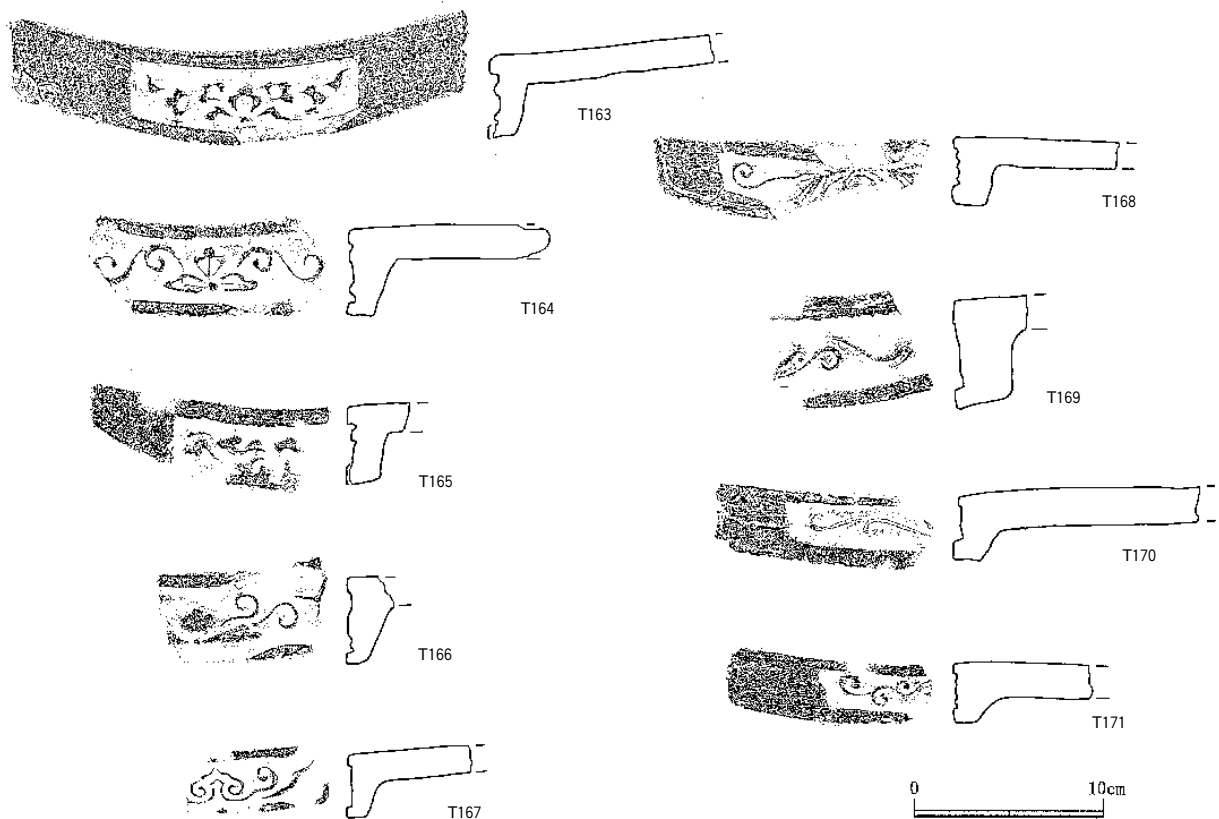
T 159 は輪郭線を陽刻で表現するクローバ状の中心飾をもつもので、左右に唐草文が展開する。佐藤分類ⅩⅢ-114と同文である。燻されていない。非常に丁寧な作りである。

T 167 は歴博 1364・1365と同文で、対向する唐草が宝珠形に繋がる中心飾とするものである。瓦当部は顎張り付け技法で、丁寧なナデ調整によって仕上げる。

T 169 は破片のため詳細が不明であるが、三葉文を中心瓦当部は顎張り付け技法で、丁寧なナデ調整によって仕上げる。

T 171 の詳細は不明であるが、佐藤分類ⅩⅢ-31の類似文様と考えられる。瓦当部は顎張り付け技法で、丁寧なナデ調整によって仕上げる。

以上の軒平瓦のうち、T 109, T 116, T 152は、文様構成は異なるものの、胎土／焼成が同じであることから、同時期のものであると考えられる。滴水瓦の中には同様な胎土のものは含まれていなかった。



第 63 図 玉藻廟基礎部出土軒平瓦実測図 (2)

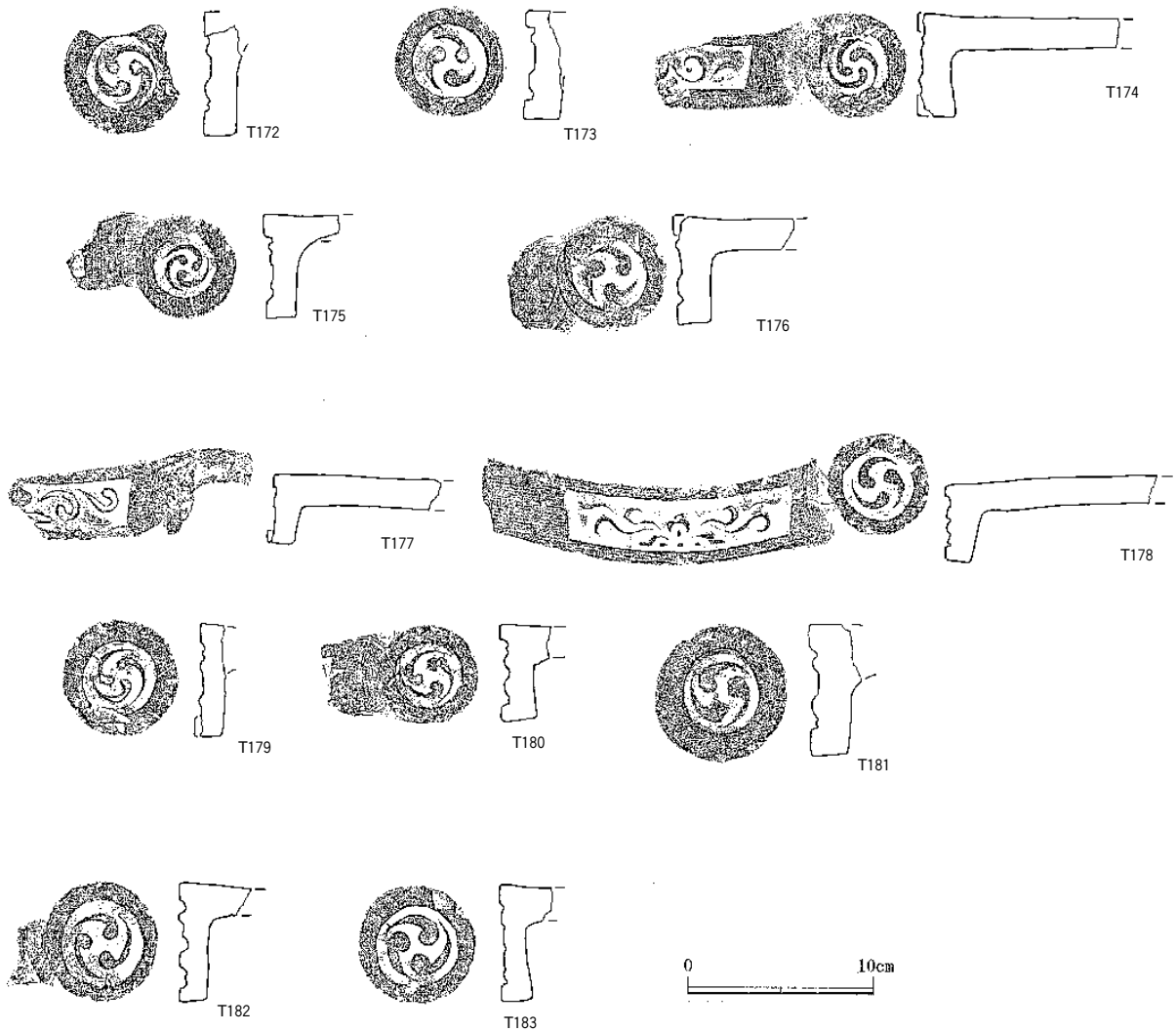
(ウ) 軒棧瓦 (第 64・65 図)

軒棧瓦は小丸瓦当部に三巴文，軒平瓦部は菊花文や半截花菱文を中心飾りとする文様構成をとり，土塀瓦とも共通する。小丸瓦当部径は 5.1～7.4 cm で，大きさおよび三巴文の表現にヴァリエーションが認められる。ただし，棧は正面からみて左側に配置される場合が通常であるが，高松城跡出土軒棧瓦は右側に配置され，左瓦が主体を占める。

三巴文は右巻き (T 172, T 174, T 178～T 181, T 188, T 193)，左巻き (T 173, T 175, T 176, T 182～T 184, T 186, T 187, T 189～T 192, T 194) が認められ，巴頭部が円形を呈するもの (T 174, T 175, T 178, T 179, T 184, T 187, T 188) と丸く肥厚するもの (T 172, T 173, T 176, T 180～T 183, T 186, T 189～T 192) であり，巴尾部の長さは概ね対応関係にあり，前者が長く，後者が短くなるが個体差が著しい。T 172, T 173, T 175, T 176, T 179～T 183, T 189～T 194 は軒丸瓦部のみが残存するものである。

T 193, T 194 の三巴文の巴頭部はいずれも大きく肥厚する円形を呈し，巴尾部は隣り合う巴頭まで及ぶ。巴文周辺にいずれも 12 個の珠文を配置する。

T 177, T 178, T 185～T 188 は軒平瓦部に半截花菱文を中心飾りとするものである。半截花菱文の形状および表現によって 5 種類に分類できるが，左右に展開する唐草文の形状もこれに対応する。T 177 は佐藤分類 3 と同文と考えられる。小丸瓦部の巴頭部はいずれも不整形な円形を呈するが，巴尾部は太く短いもの (T 178, T 186)，太く長い，末端が細くなるもの (T 188)，細く長いもの (T 187) がある。



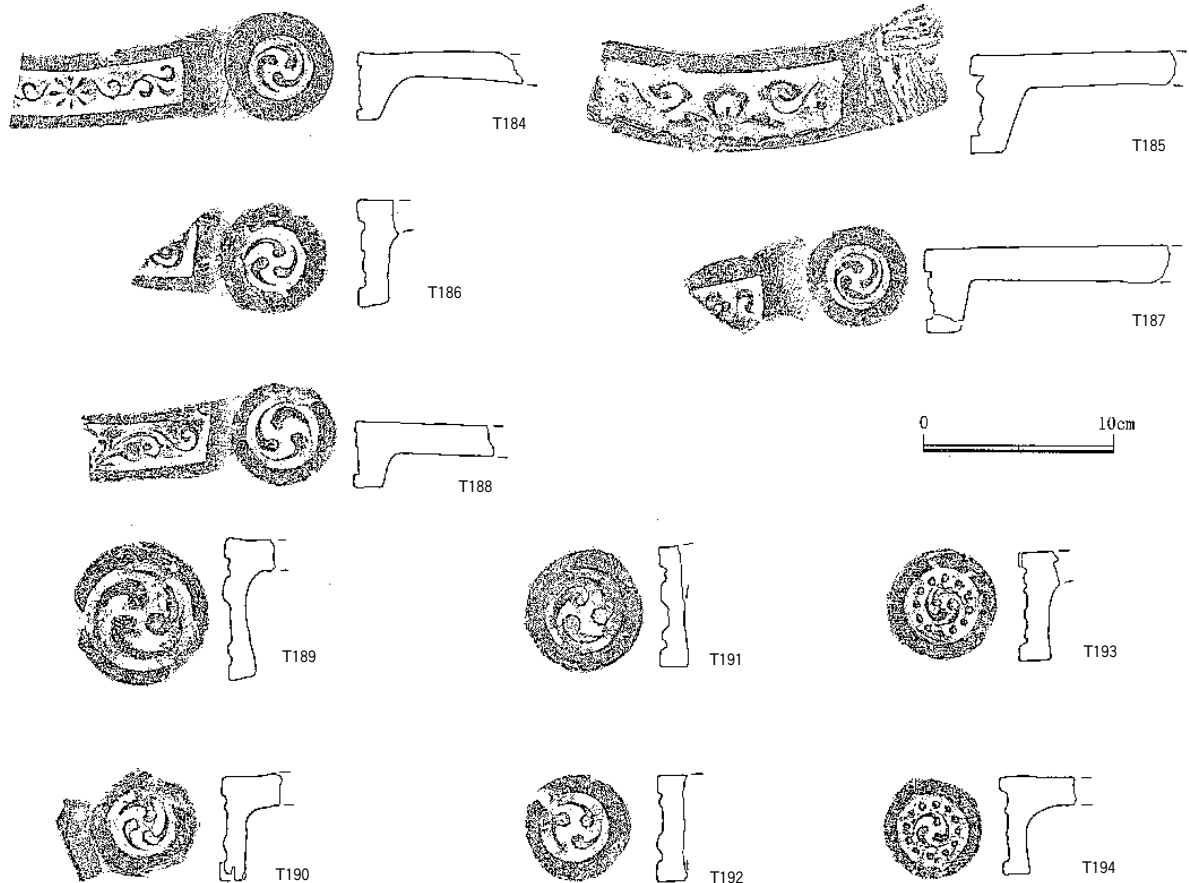
第64図 軒棧瓦実測図(48)

T 184 は軒平瓦部に菊花文を中心飾とするものである。T 174 は中心飾が欠損しているが、唐草文様から中心飾は菊花文と考えられる。小丸瓦部の巴頭部は、T 174 は不整形な円形、T 184 は円形を呈する。巴尾部は、いずれも太く長いが、末端が細くなる。いずれも凹面側を丁寧なナデ調整に仕上げ、凸面側を粗いナデによって仕上げる傾向が認められる。

いずれの個体も瓦当接合方法は不明瞭で詳細は不明である。剥離材としてキラ粉を使用している。瓦当周辺はナデ調整で、瓦当裏面は、平瓦部は丁寧なナデ調整、丸瓦部は粗いナデ調整によって整形している。いずれも凹面は平瓦部を丁寧なナデ調整、棧部はやや粗い縦方向の板状工具のナデ調整である。凸面はいずれも未調整もしくは粗いナデ調整によって仕上げる。

(エ) 土塀瓦 (第66図)

土塀瓦も瓦当文様などの基本構成は軒棧瓦と同じである。軒平瓦部は半截花菱文、菊花文、半截菊花文を中心飾りとし、角棧部に菊花文を施す文様構成をとる。平瓦部の文様構成は通常の軒平瓦と共通する。角棧部の菊花文との組み合わせにヴァリエーションが認められる。軒棧瓦同様、角棧部が正面からみて左側に配置される (T 199, T 202, T 207) ものが通常であるが、高松



第65図 玉藻廟基礎部出土軒棧瓦実測図

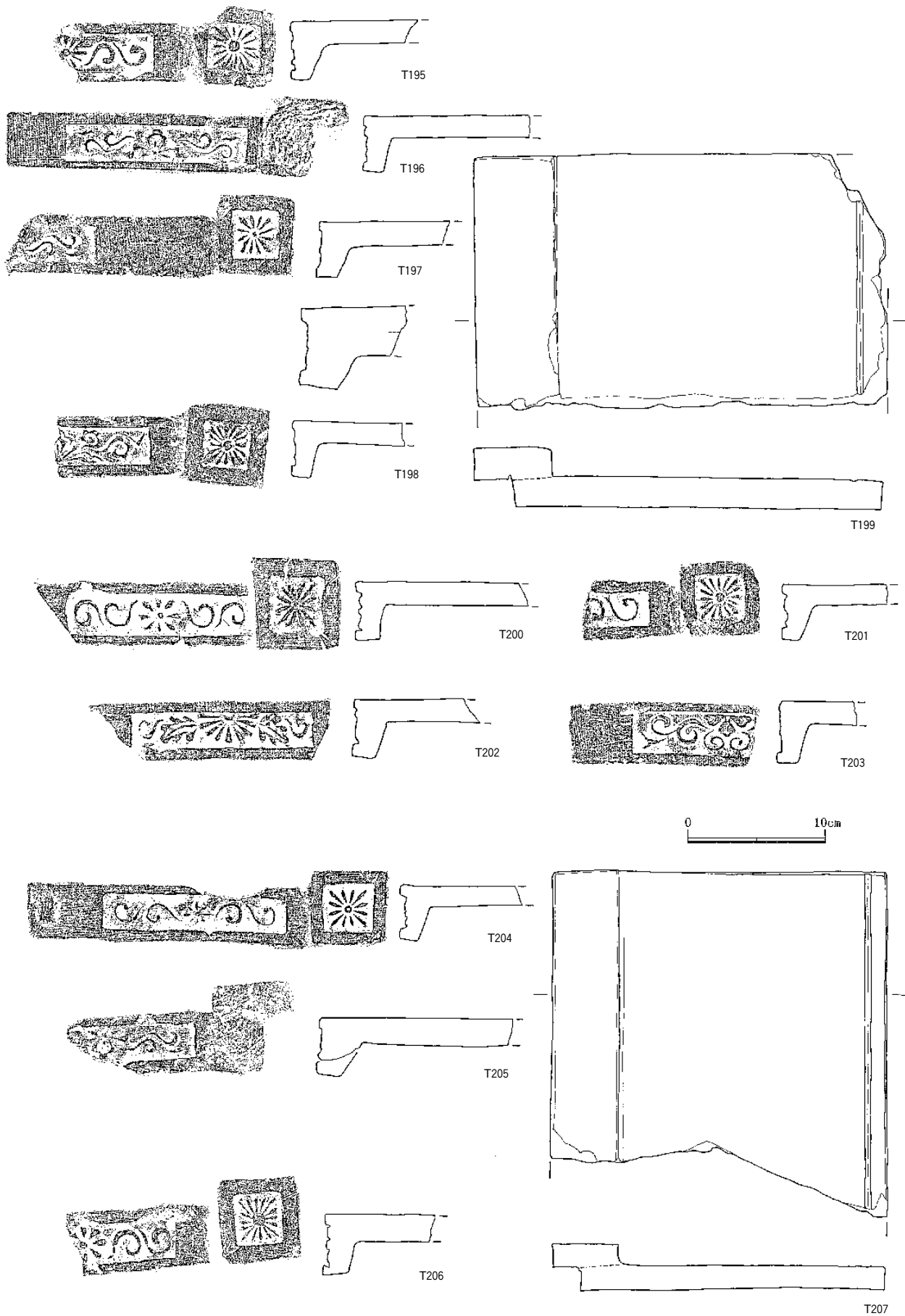
城跡で出土しているものの多くは右側にくる左瓦が主体を占める。

T 195, T 200, T 201, T 204, T 206 は軒平瓦部に菊花文を中心飾りとするもので、T 204 以外は佐藤分類1と同文と考えられる。平瓦部の菊花文および左右に2つ展開する蕨手の形状、角棧部の菊花文の形状が異なり、ヴァリエーションに富む。中房の大きさには対応関係がみられるものの、花卉の表現および数には一定の関係性は認められない。一部で確認できるが、瓦当接合技法は顎貼り付け技法で、基本的に剥離材としてキラ粉を使用する。瓦当部および凹面は丁寧なナデ調整によって仕上げる。漆喰が付着するものも認められる。

T 202 は軒平瓦部に半截菊花文を中心飾りとするものである。中心飾の左右には大きな葉が配置され、その外側に蕨手が1つ配置される文様構成をとる。凹面側は丁寧なナデ調整で仕上げ、凸面は粗いナデ調整で仕上げる。瓦当接合技法は顎貼り付け技法で、剥離材にキラ粉を使用する。

T 196～T 198, T 203, T 205 は軒平瓦部に半截花菱文を中心飾りとするもので、T 197 は佐藤分類2と同文と考えられる。半截花菱文の形状および表現によって3種類に分類でき、左右に展開する唐草文の形状もこれに対応する。T 196, T 197, T 205 は同文で、上下が逆である。いずれも瓦当接合技法は顎貼り付け技法と考えられ、瓦当面の剥離材にキラ粉を使用する。いずれも凹面側は丁寧なナデ調整で仕上げ、凸面は粗いナデ調整で仕上げる。

T 199, T 207 は瓦当面が残存していないもので、軒部をもつものか角棧切落土（／板）塀瓦となるかは不明である。T 199 は、長さは欠損のため不明、幅 30.0 cm, 角棧部幅 5.8 cm, 平瓦



第 66 図 土塀瓦実測図

部 26.6 cm, 厚みはいずれも約 2.3 cm。上面には固定用と考えられる凹線が施され、ナデ調整で仕上げる。下面は粗いナデ調整によって仕上げる。T 207 は、長さは欠損のため不明, 幅 24.6 cm, 角棧部幅 4.8 cm, 平瓦部 22.2 cm, 厚みはいずれも約 1.8 cm。上面には固定用と考えられる凹線が施され、ナデおよび磨き調整で仕上げる。下面は粗いナデ調整によって仕上げる。

(オ) 鳥衾瓦 (第 67・68 図)

断面形状, 特に瓦丸瓦部の瓦当との接続位置, 瓦当上部の釘穴の形状において個体差が著しく, 文様の古新と連動している状況を現状では確認できない。詳細な検討が必要であるが, 葺かれた場所 (棟) によって異なるものと現状では考えておきたい。瓦当面径は大中小の 3 つに分類でき, 鳥休から伏間部までの長さもそれに依りて異なる可能性があり, これらの属性は棟の大きさに対応するものと考えておきたい。

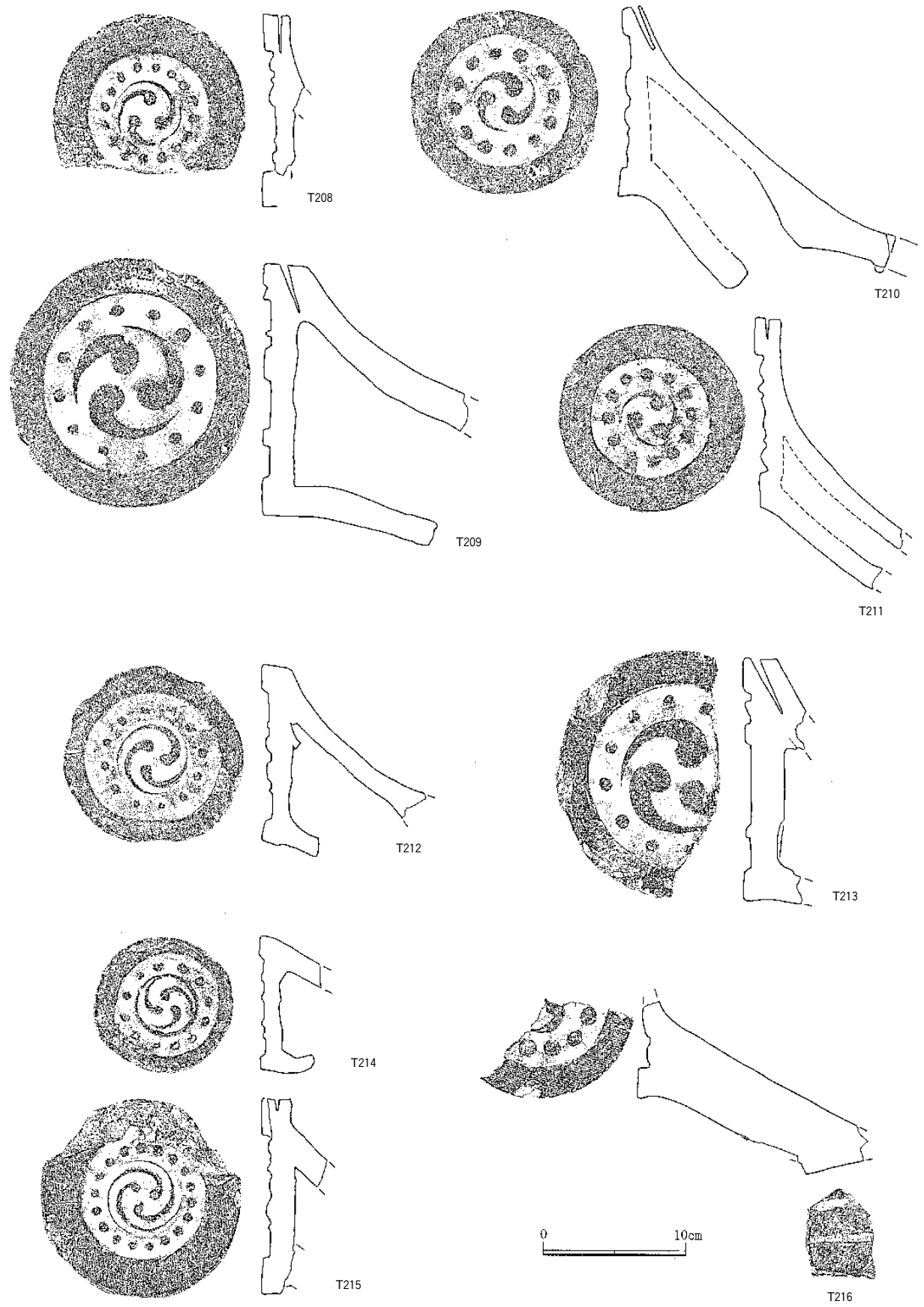
T 208 は瓦当下から 3 分の 2 の位置に丸瓦部が接続し, 瓦当上部の釘穴は平面形が四角形を呈し, 3 か所確認でき, 外縁に平行して約 2.7 cm の深さである。巴頭は定型化した円形を呈し, 尾部は円形を呈し, 細く長く伸び, 隣の巴の長さの 2 分の 1 まで至る。珠文はやや不整形な円形で 16 個。瓦当面径 13.5 cm, 外縁幅 2.5 cm である。剥離材はキラ粉。瓦当側面, 丸瓦接合部外面は非常に丁寧なナデ調整, 内面には接合時の刻み痕跡および粗いナデ調整を施す。

T 209 は大型品で, 瓦当面全体に丸瓦部が接続し, 瓦当上部 3 か所に大きな釘穴が丸瓦方向に約 3.5 cm 施す。巴頭は整った円形を呈し, 尾部は太く短く, 隣の巴頭で留まる。巴文および珠文は平坦かつ立体的である。珠文はやや不整形な円形を呈し, 12 個配置するが, やや筈抜けが悪い。瓦当面径 17.7 cm, 外縁幅 2.5 cm である。巴文および珠文ともに立体的である。瓦当面の剥離材としてキラ粉を使用する。丸瓦部外面は非常に丁寧なナデ調整で, 内面は接合及び成形に伴う粗いナデ調整である。

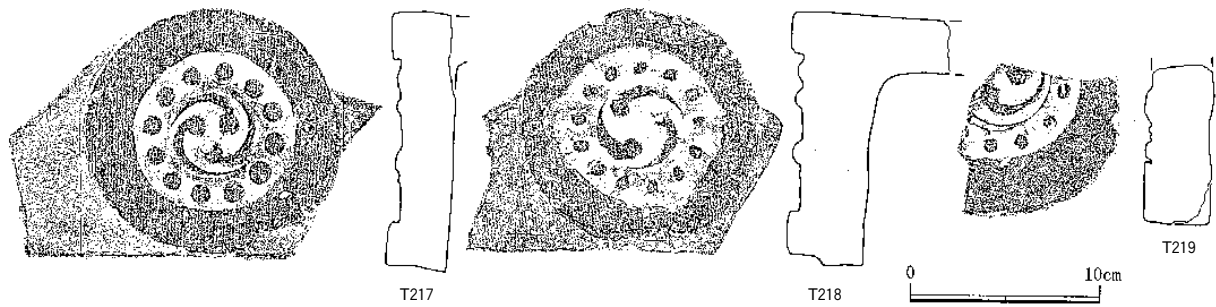
T 210 は瓦当面の下から 4 分の 3 の位置に丸瓦部が接続し, 瓦当上部から外縁の 3 か所に釘穴を約 1.4 cm 施す。巴頭は整った円形を呈し, 尾部は細く短く, 隣の巴頭で留まる。珠文は 12 個。瓦当面径 13.3 cm, 外縁幅 2.5 cm である。丸瓦部外面はナデ調整で, 内面は粗いナデもしくは未調整で, 雁振瓦との接続部にあたる部分には布目が残し, コビキ B である。丸瓦部外面は接合に伴う縦方向のナデ調整後, 瓦当側面に意識的にナデ調整を行う。内面は接合時の粗いナデが認められ, 瓦当裏面には接合用の刻み痕跡が残る。また, 固定用の釘穴があり, その周辺には漆喰が認められる。

T 211 は瓦当面の下半部に丸瓦部が接続し, 瓦当上部から丸瓦方向に釘穴を 3 か所に約 3.3 cm 施す。巴頭は整った円形を呈し, 尾部は細く短く, 隣の巴頭で留まる。珠文は大きく 12 個。いずれも立体的である。瓦当面径 17.7 cm, 外縁幅 2.5 cm である。剥離材はキラ粉と考えられる。丸瓦部は断面扁平な楕円形を呈し, 中空である。外面は非常に丁寧なナデ調整で, 内面は接合に伴う粗いナデ調整である。

T 212 は瓦当面全体に丸瓦部が接続し, 上端部の釘穴はない。巴頭はやや不整形な円形を呈し,



第 67 図 鳥衾瓦実測図 (1)



第68図 鳥衾瓦実測図(2)

尾部は細く長く、隣の巴尾の3分の1まで及ぶ。珠文は小さく、12個。瓦当面径12.3 cm、外縁幅1.8 cmである。剥離材はハナレ砂である。丸瓦部外面は接合に伴う縦方向のナデ調整後、瓦当側面に意識的にナデ調整を行う。内面はいわゆるゴザ目状の痕跡とコビキBが認められる。瓦当裏面には接合時の粗いナデが認められ、接合用の刻み痕跡が残る。

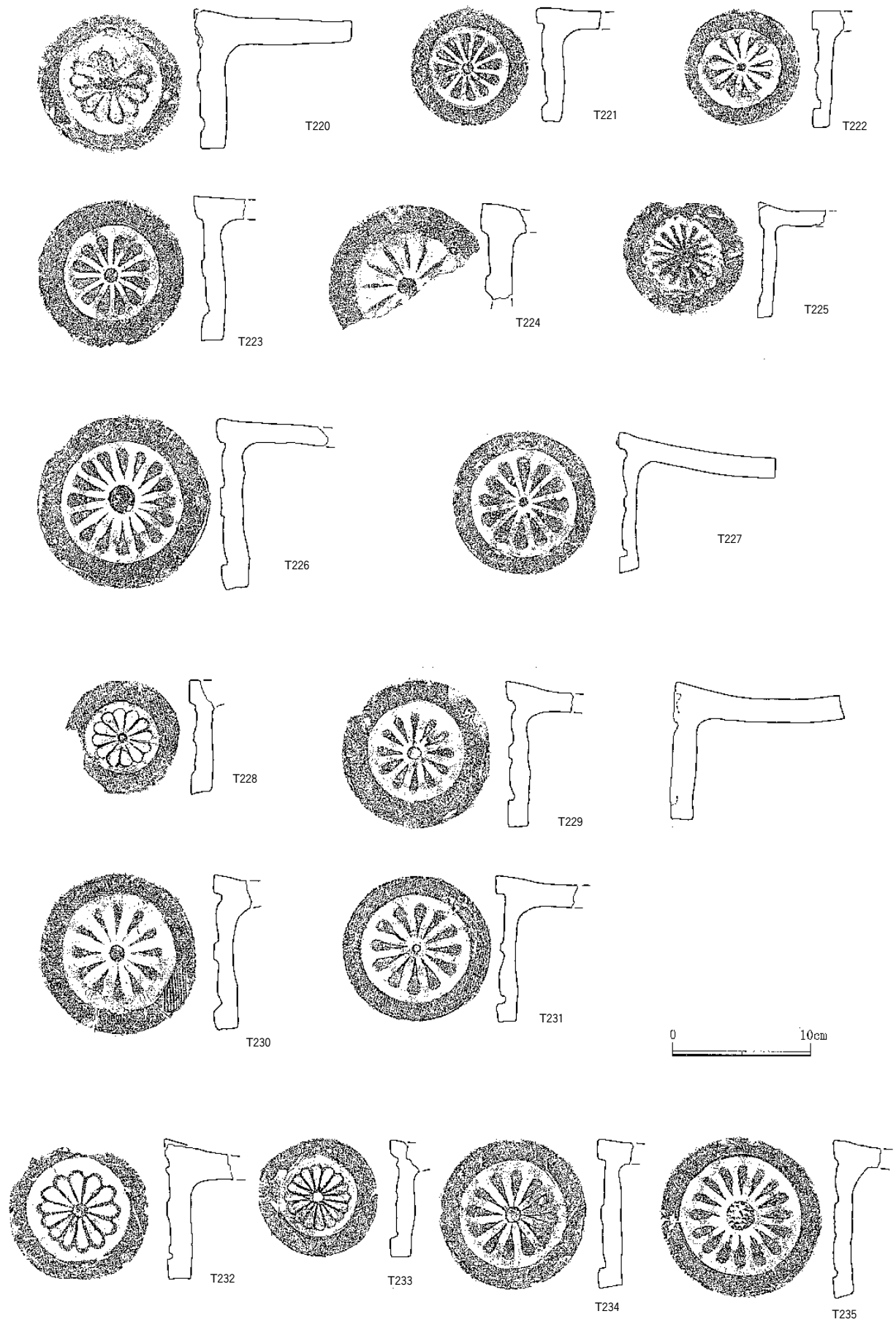
T 213はT 209と同文である。瓦当面の下から4分の3の位置に丸瓦部が接続し、瓦当上部3か所に釘穴を約4.5 cm施す。巴頭は整った円形を呈し、尾部は太く短く、隣の巴頭で留まる。巴文および珠文は平坦かつ立体的である。珠文はやや不整形な円形を呈し、12個配置するが、やや範抜けが悪い。瓦当面径17.7 cm、外縁幅2.5 cmである。丸瓦部外面は丁寧なナデ調整で、内面は布目が認められる。

T 214は瓦当面全体に丸瓦部が接続し、釘穴はない。巴の周辺に界線を施し、巴頭は小さな整った円形を呈し、尾部は細く短く、隣の巴頭で留まる。珠文は小さく、12個。瓦当面径9.5 cm、外縁幅1.4 cmである。剥離材はハナレ砂である。丸瓦部外面は丁寧なナデ調整で、内面は接合に伴う粗いナデ調整である。

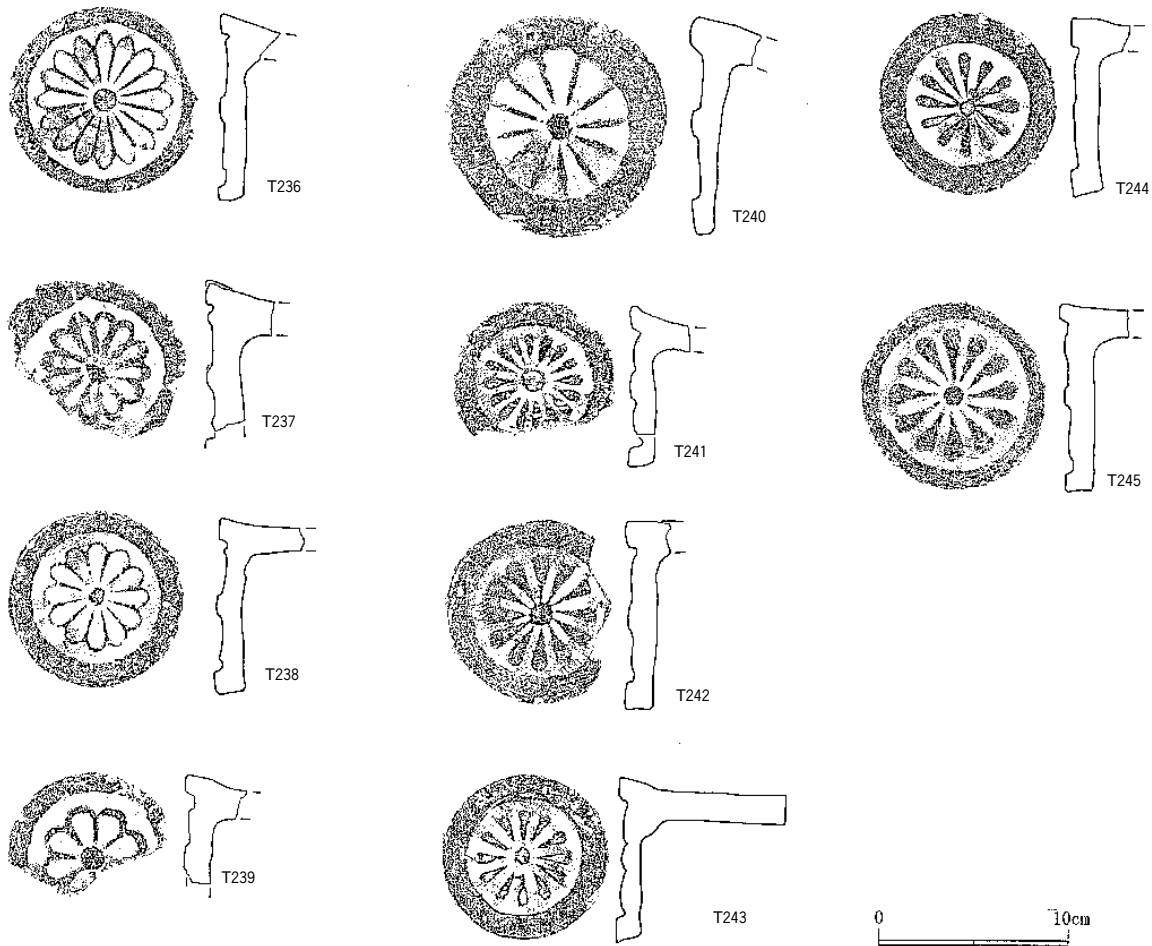
T 215はほぼ瓦当面全体に丸瓦部が接続し、瓦当上部の釘穴は現状で1か所確認でき、外縁に平行して約0.7 cm施す。巴頭は整った小さな円形を呈し、尾部は細く長く、隣の尾頭の2分の1まで及ぶ。珠文は小さく、18個。瓦当面径13.6 cm、外縁幅2.5 cmである。丸瓦部外面はナデ調整で、内面は粗いナデである。剥離材はキラ粉。瓦当側面、丸瓦接合部外面は非常に丁寧なナデ調整、内面には接合時の刻み痕跡および粗いナデ調整を施す。

T 216は破片のため、丸瓦部の接続状況および刺突などは不明。巴頭は整った円形を呈し、尾部は太く短く、隣の尾頭で留まる。巴および珠文ともに立体的である。外縁幅2.0 cmである。丸瓦部にあたる部分は中実で棒状を呈する。外面は丁寧な磨き調整を施し、キラ粉状の痕跡が残る。棟に設置する箇所は粗い削り状のナデ調整を施し、細い棒状の圧痕が一定間隔で残る。

T 217～T 219はいずれも鳥衾瓦と考えられるが、既述のものとは形状が異なるため、別に取り上げている。瓦当面背面に粘土板を張り付け、平面的に構造になっている。いずれも内面を丁寧なナデ調整によって仕上げている。T 217・T 218ともに珠文および巴文ともに立体的である。T 217は巴文の巴頭が丸く、巴尾は細く、やや長い。珠文は12個で、大きく平坦である。剥離材としてキラ粉を使用。T 218は巴頭がやや不整形の円形で、尾部は太く短い。珠文は14個。



第 69 図 地下 1 階出土菊丸瓦実測図



第70図 玉藻廟基礎部出土菊丸瓦実測図

剥離材としてキラ粉を使用。

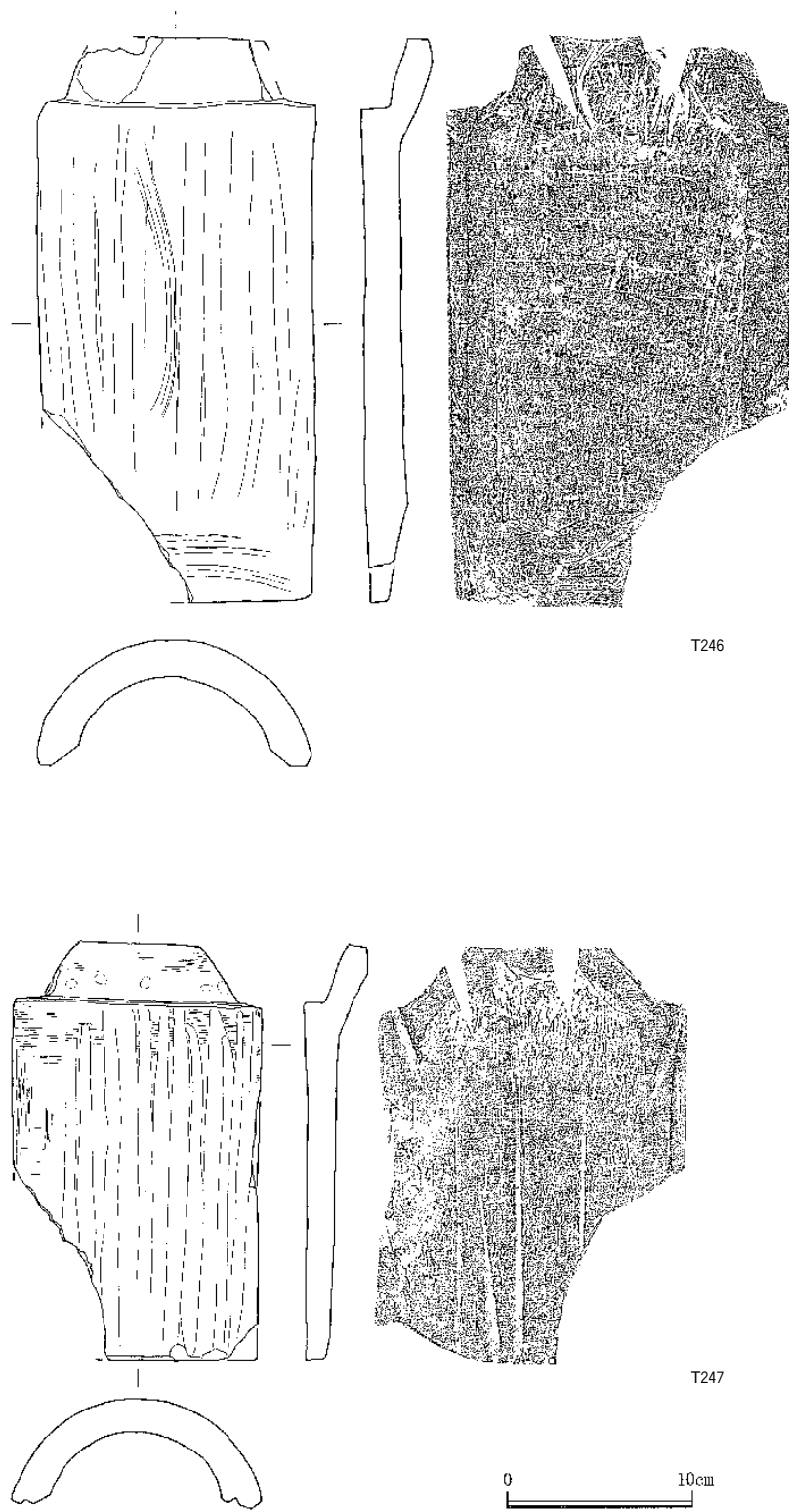
(カ) 菊丸瓦 (第69・70)

菊丸瓦は菊花文の表現方法によって下記のとおり分類できる。

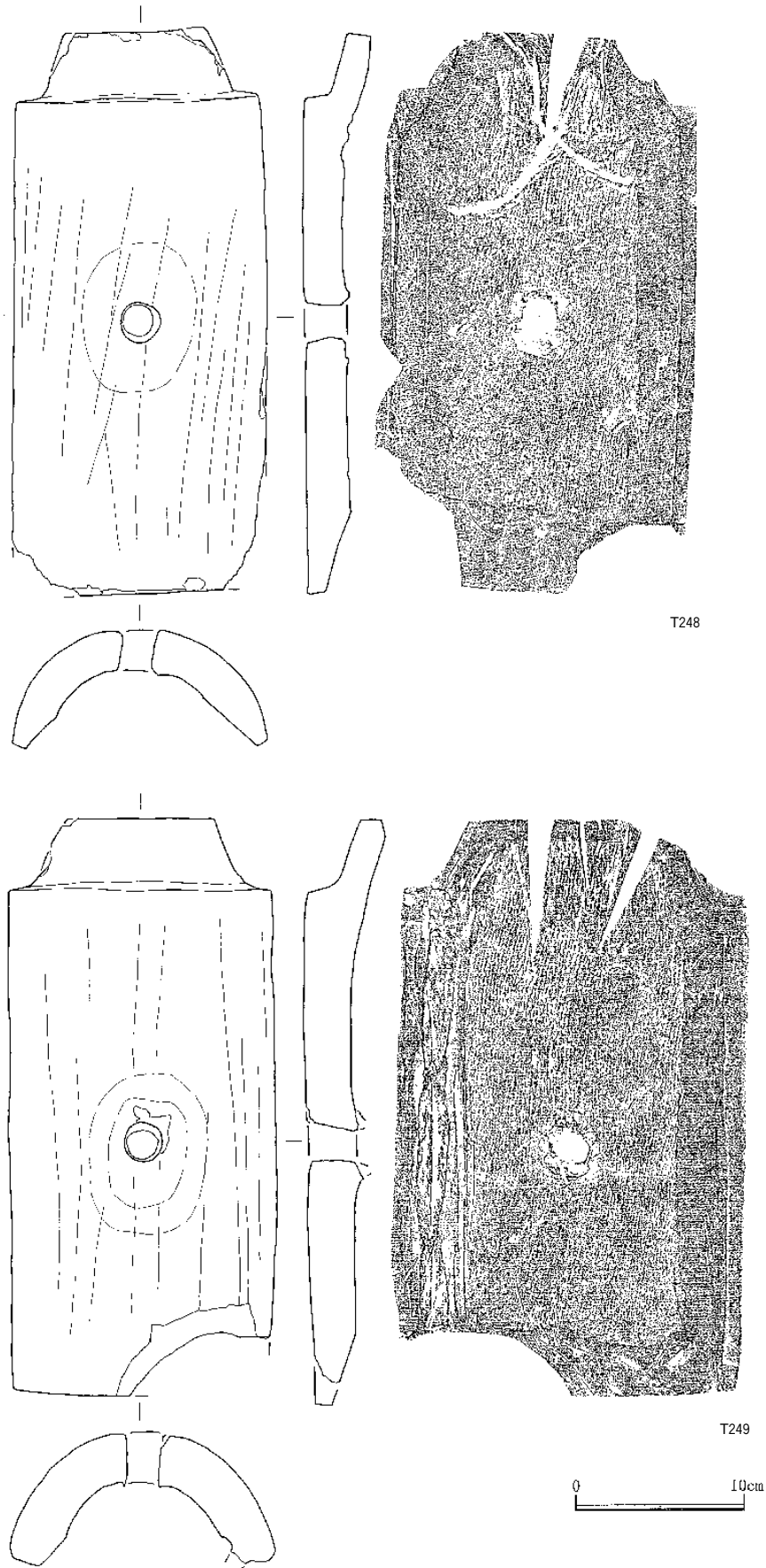
- ① 菊花の花弁の輪郭を表現するタイプ (T 220, T 228, T 232, T 233, T 236～T 240 : 佐藤分類Ⅰ)
- ② 房および花弁を陽刻で表現するタイプ
(T 221～T 223, T 226, T 227, T 229～T 231, T 234, T 235, T 241～T 245 : 佐藤分類Ⅲ～Ⅴ)
- ③ 花弁が細くなり、陽刻が細く間弁状になり、陰刻文となるタイプ
(T 224, T 225, T 246 : 佐藤分類Ⅱ)

①は中房を陽刻で表現するもの (T 220, T 232, T 236～T 239) と輪郭のみで表現するもの (T 228) に分類でき、さらに花弁の形状、数、輪郭線の太さ、瓦当面径にヴァリエーションが認められ、范が各個体で異なる。剥離材としてキラ粉を用いるものは少ない。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

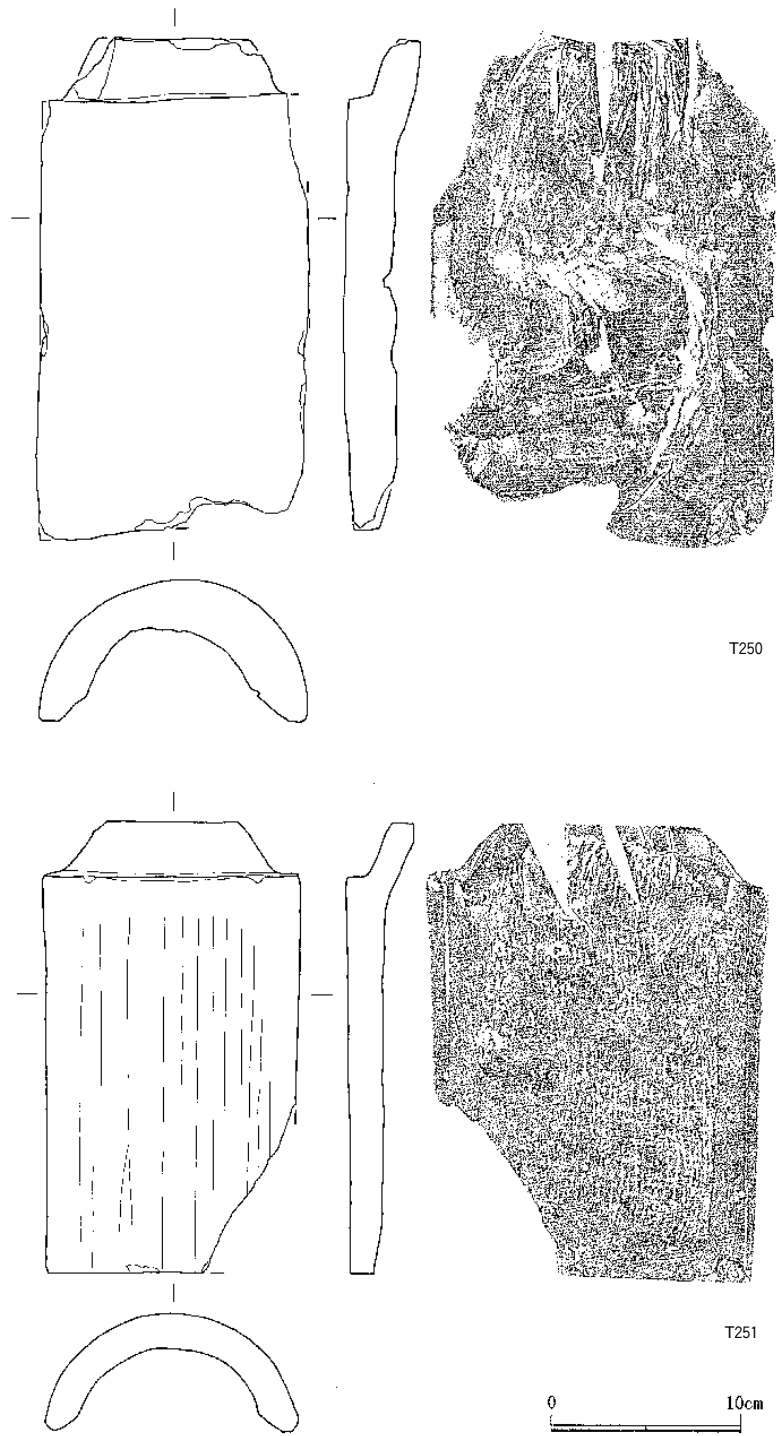
②は花弁の数、形状、中房の大きさ、瓦当の面径に個体差が認められるが、連動した属性は見



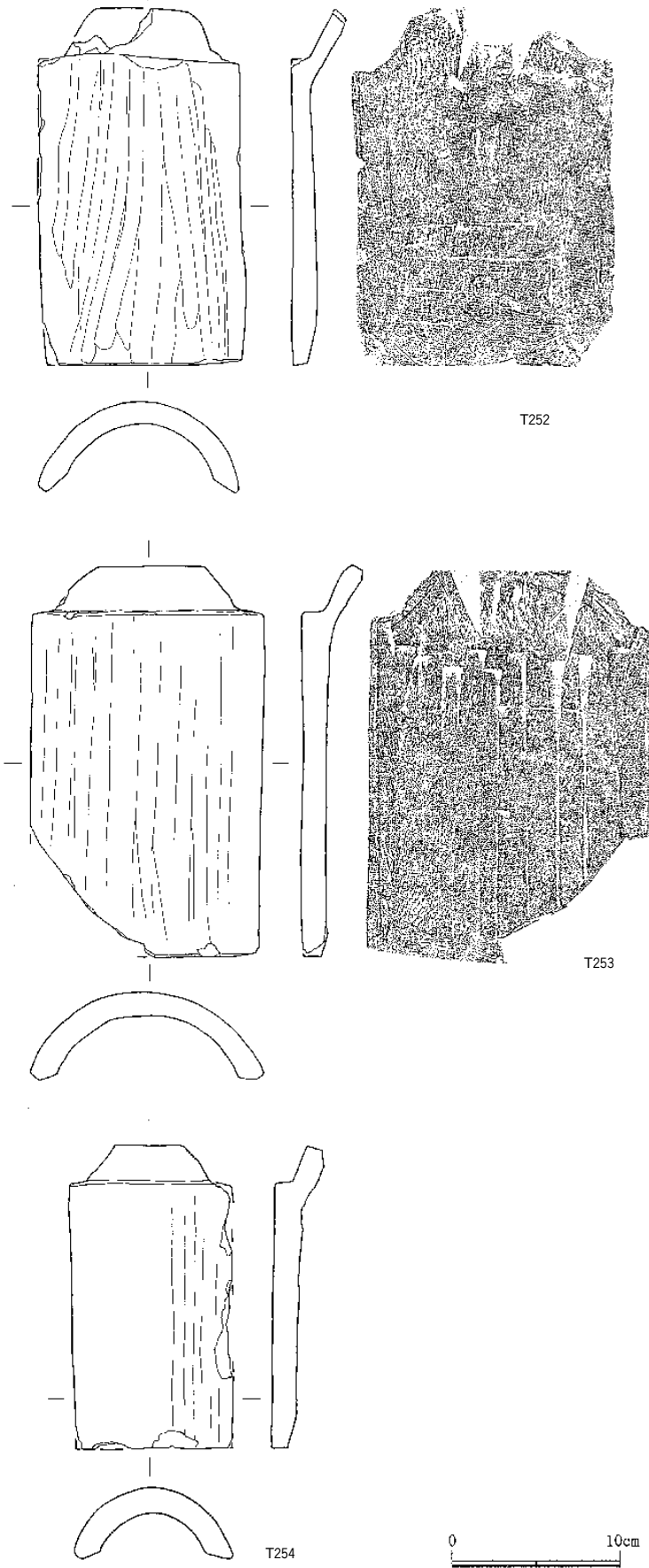
第71図 地下1階上層出土丸瓦実測図



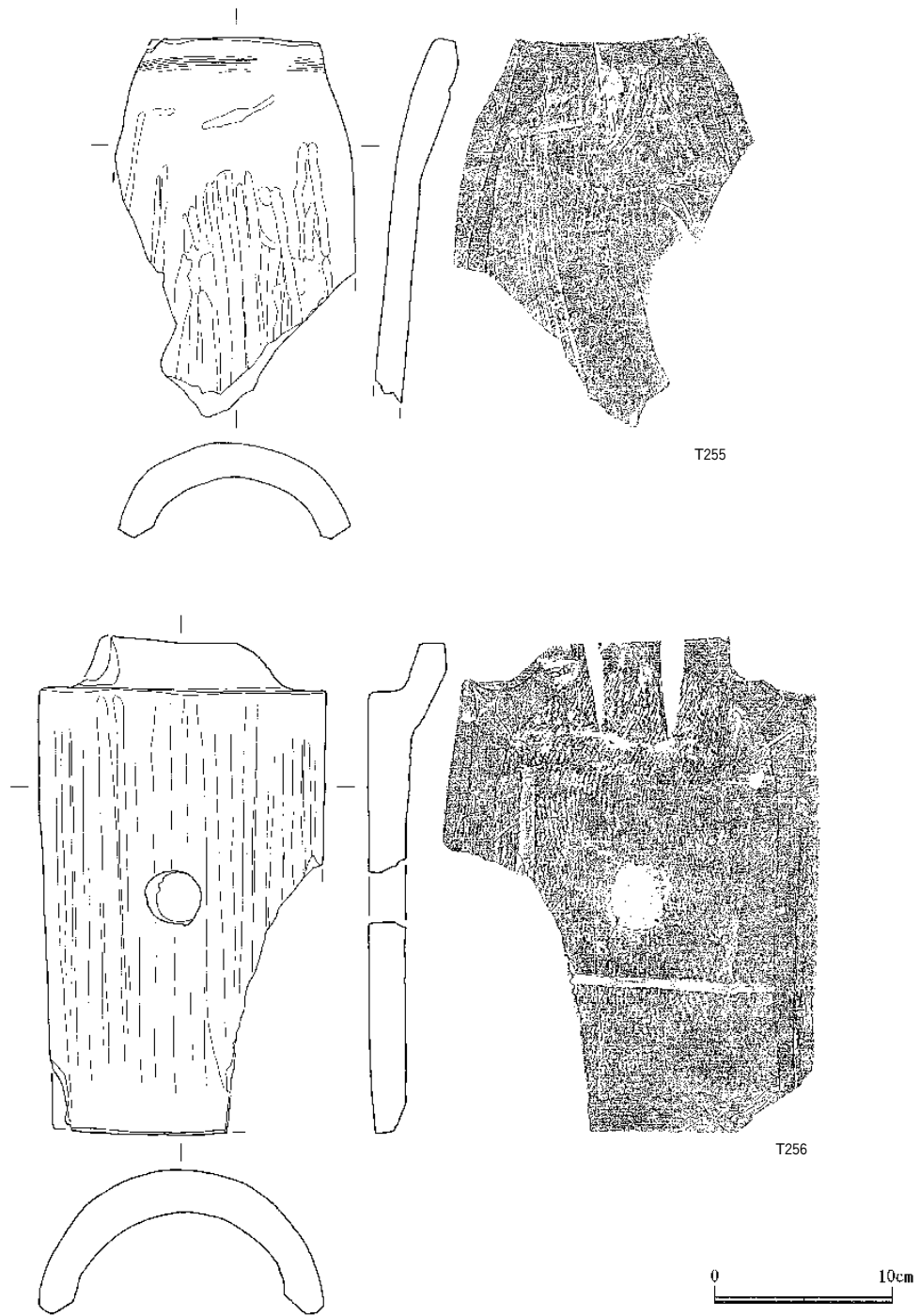
第72図 地下1階中層出土丸瓦実測図(1)



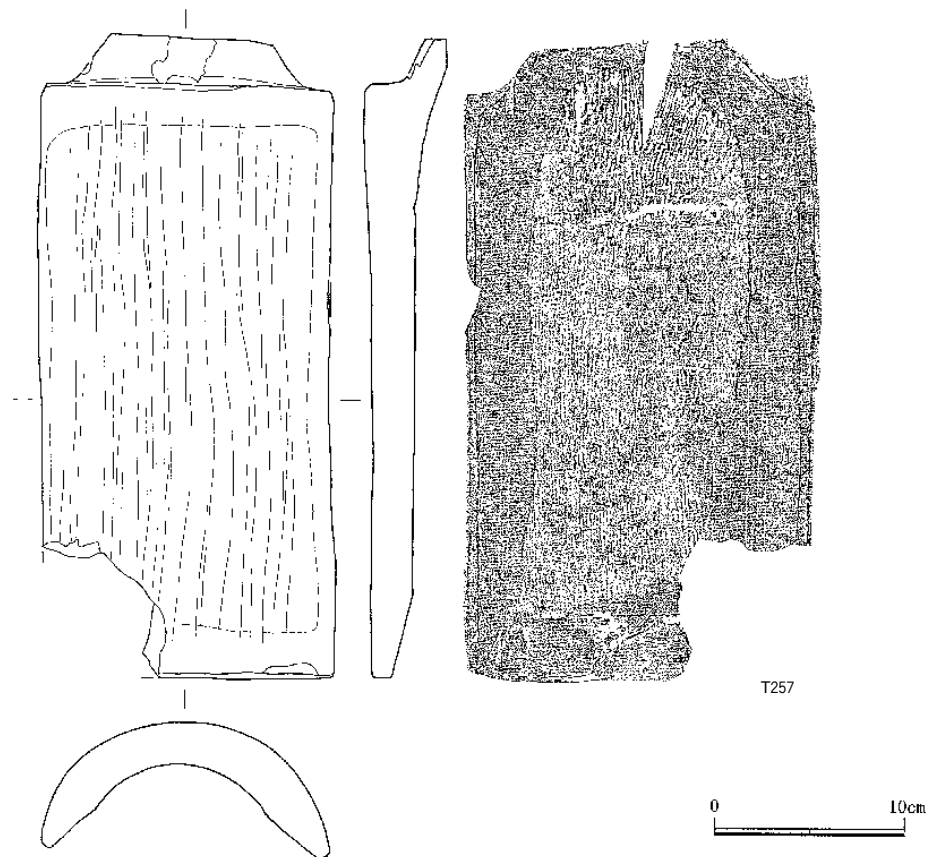
第73図 地下1階中層出土丸瓦実測図（2）



第74図 地下1階中層出土丸瓦実測図(3)



第75図 地下1階下層出土丸瓦実測図（1）



第76図 地下1階下層出土丸瓦実測図(2)

いだせない。仕上りの見た目として上面が平坦面をもつものと、丸くなるものの両者がある。T 235 のみは花卉の表現が異なり、中房も大きく、蓮子がある。剥離材としてキラ粉を使用するものが他より多い。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

③は花卉の数、形状、中房の大きさ、瓦当の面径に個体差が認められ、連動した属性は見いだせない。剥離材としてキラ粉を使用するものは確認できない。瓦当裏面調整は佐川分類Cである。

いずれも漆喰が付着しているが、②がもっともその比率が高い。

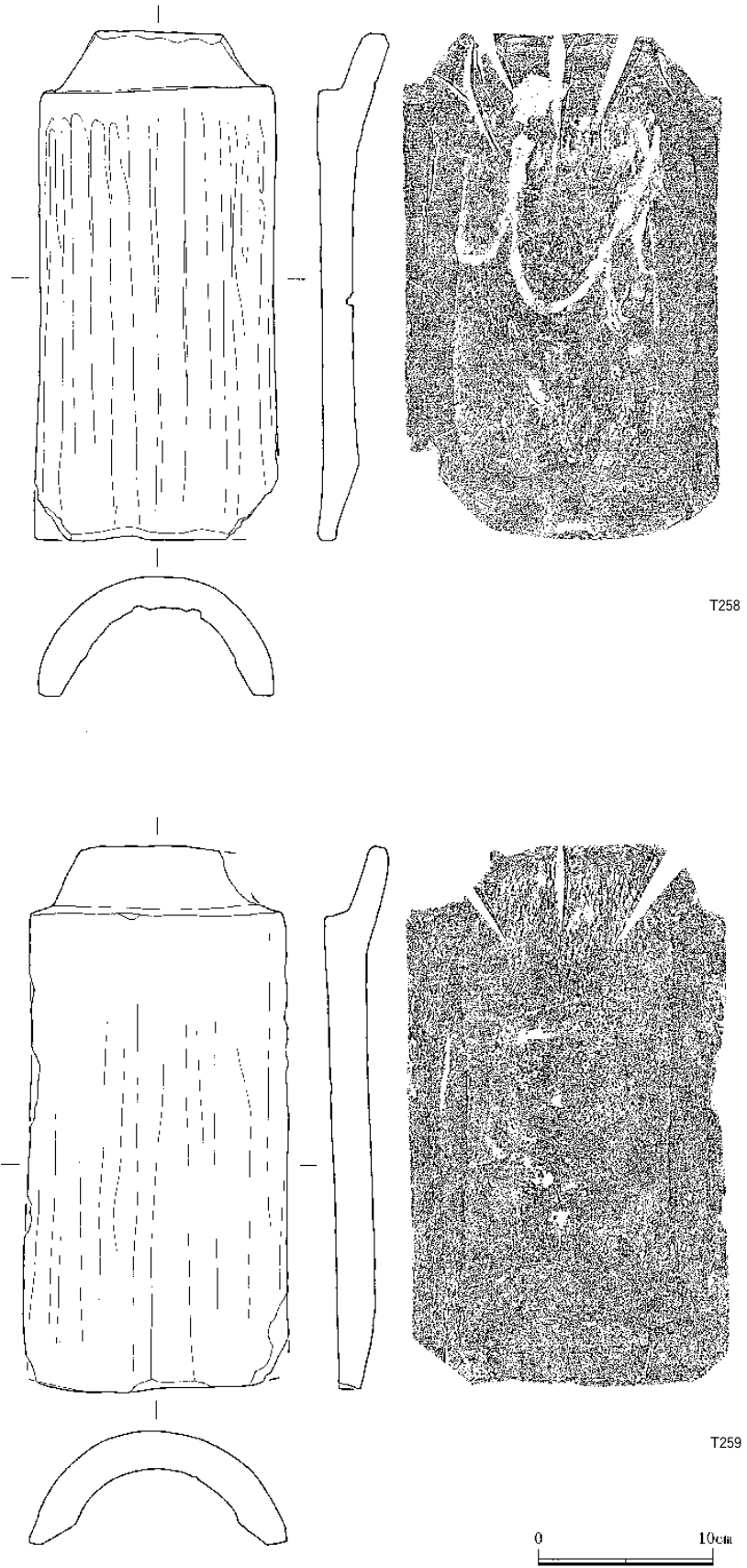
ウ 丸瓦 (第71～81図)

丸瓦はT 255 のみが行基式で、それ以外は玉縁式である。玉縁式は、成形具形状を示す属性である法量(筒部長、筒部幅、玉縁長)、玉縁形態等から記述を行い、加えて凹面の布目、コビキ等の属性についても記述を行う。以下個別に記述を行う。

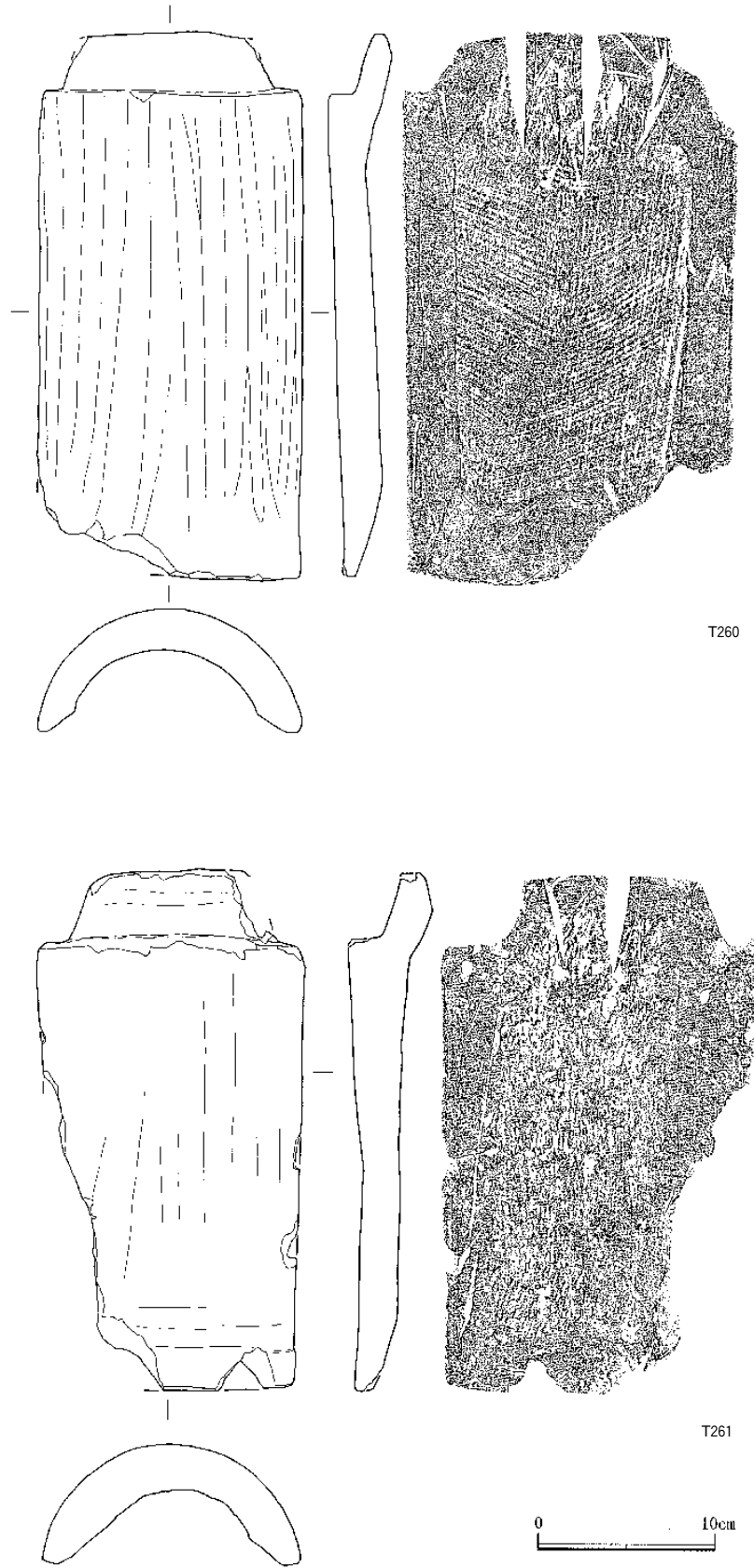
T 246 は筒部長 26.7 cm、筒部幅 15.0 cm、玉縁長 3.8 cmで、玉縁部は直線的に開く扁平な台形られる。釘穴があり、周囲には漆喰が残る。

かな縦方向の磨きによって仕上げる。凹面はいわゆるゴザ目で、佐川分類吊り紐痕跡C型が認められる。釘穴があり、周囲には漆喰が残る。

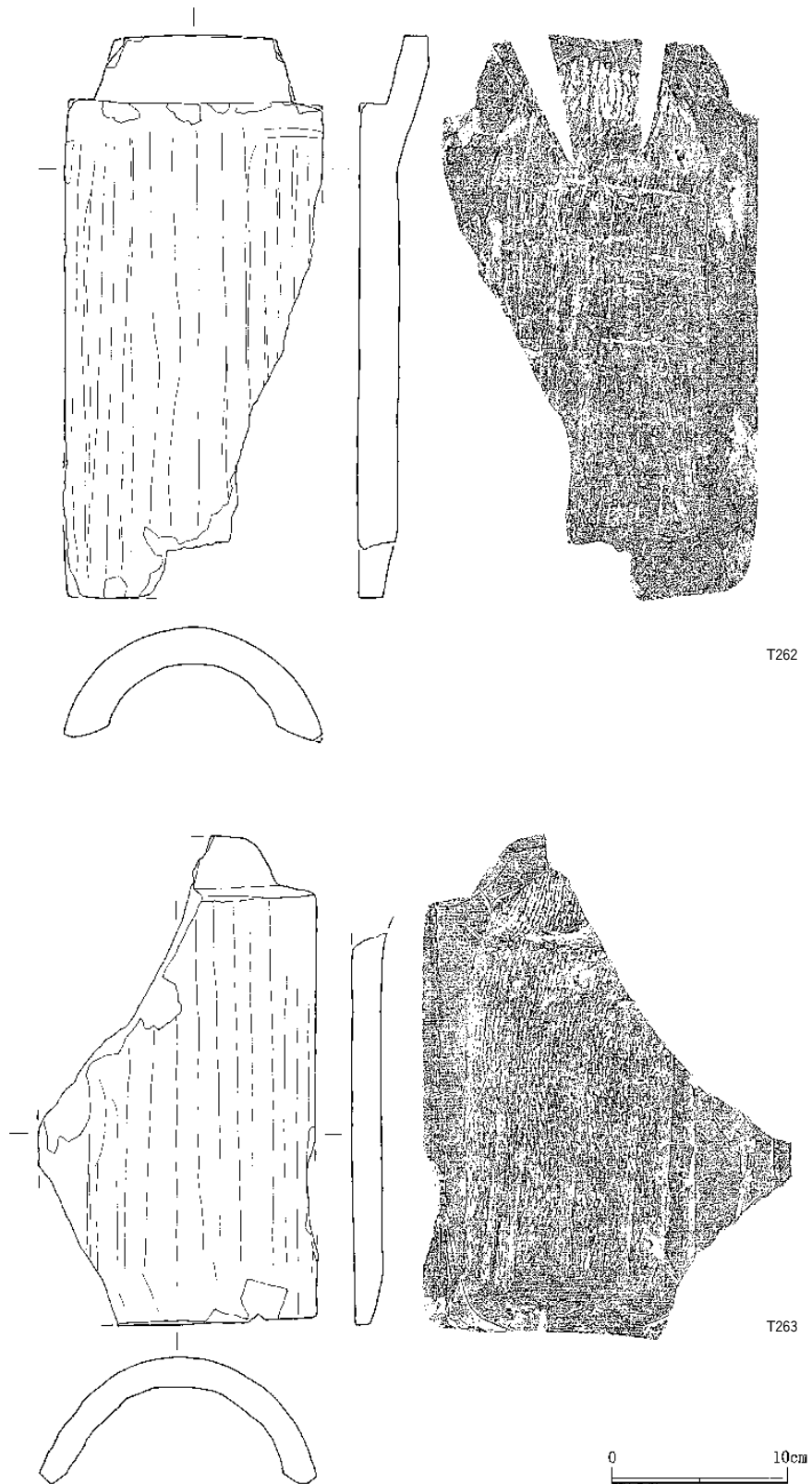
T 247 は筒部長 19.1 cm、筒部幅 13.4 cm、玉縁長 3.3 cmで、玉縁部は直線的に開く台形を呈する。凸面は細かな縦方向の丁寧なナデ調整によって仕上げる。凹面は布目で、縫い紐もしくは綴じ紐の痕跡が認められる。コビキBである。



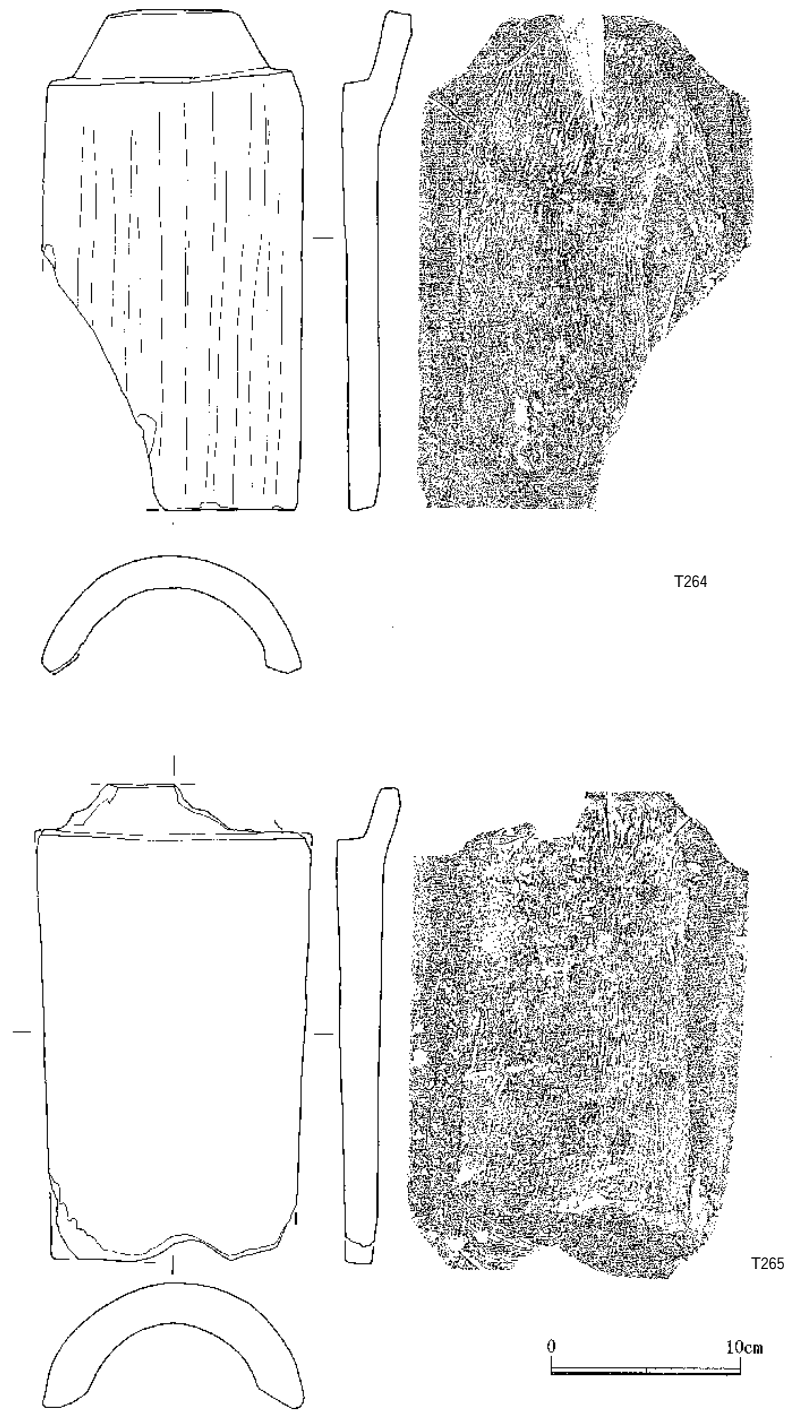
第77図 玉藻廟基礎部出土丸瓦実測図(1)



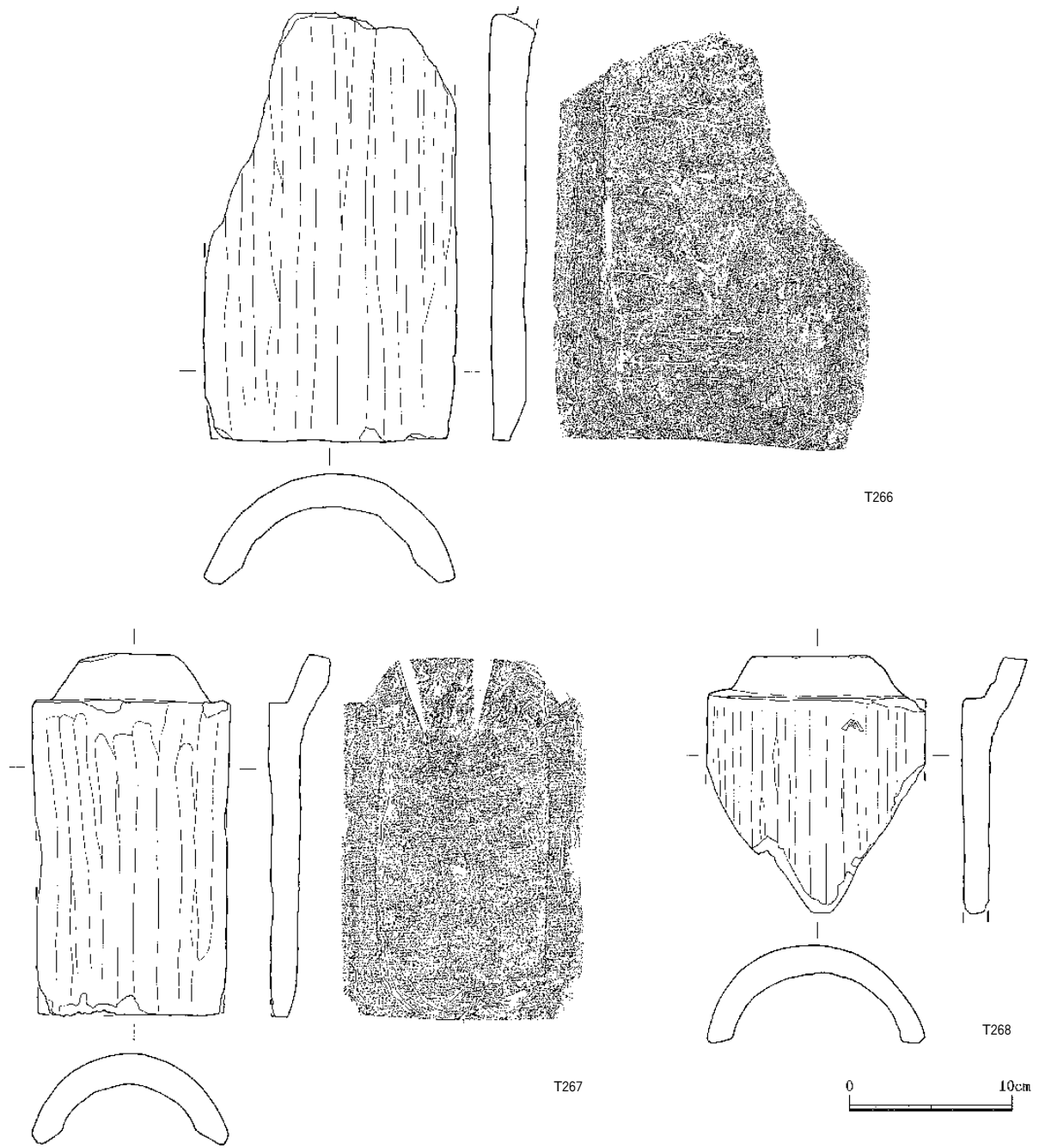
第78図 玉藻廟基礎部出土丸瓦実測図（2）



第 79 図 玉藻廟基礎部出土丸瓦実測図（3）



第80図 玉藻廟基礎部出土丸瓦実測図（4）



第81図 玉藻廟基礎部出土丸瓦実測図(5)

T 248 は筒部長 29.3 cm, 筒部幅 15.1 cm, 玉縁長 4.0 cm で, 玉縁部は台形を呈する。凸面は細かな縦方向の磨きによって仕上げる。凹面はいわゆるゴザ目で, 佐川分類吊り紐痕跡 C 型が認められる。釘穴があり, 周囲には漆喰が残る。

T 249 は筒部長 30.0 cm, 筒部幅 15.9 cm, 玉縁長 4.3 cm で, 玉縁部は台形を呈する。凸面は縦方向のナデ調整および磨き調整によって仕上げる。凹面はいわゆるゴザ目で, コビキ B である。釘穴がある。

T 250 は筒部長 23.6 cm, 筒部幅 14.5 cm, 玉縁長 3.2 cm で, 玉縁部は台形を呈する。凸面は細かな縦方向の磨きによって仕上げる。非常に分厚い。凹面は布目で, 筒部のなかほどに残る圧痕は非常に判別がしづらいが, 布を引っ張り上げた痕跡などから, 佐川分類吊り紐痕跡 C 型の修理の痕跡と考えられる圧痕が認められる。コビキ B である。

T 251 は筒部長 20.5 cm, 筒部幅 13.5 cm, 玉縁長 3.1 cm で, 玉縁部は扁平な台形を呈する。凸面は細かな縦方向の磨きによって仕上げる。凹面は布目で, コビキ B である。8 と同じ側縁部調整である。

T 252 は筒部長 18.5 cm, 筒部幅 12.1 cm, 玉縁長 2.8 cm である。凸面は細かな縦方向の磨きによって仕上げる。凹面はいわゆるゴザ目で, コビキ B である。

T 253 は筒部長 20.4 cm, 筒部幅 13.2 cm, 玉縁長 2.9 cm で, 玉縁部は扁平な台形を呈する。凸面は細かな縦方向の磨きによって仕上げる。凹面は布目で, 棒状工具による補足叩きが施される。コビキ B である。

T 254 は小型品で, 筒部長 15.8 cm, 筒部幅 9.5 cm, 玉縁長 2.3 cm で, 玉縁部はやや内湾しながらハの字状に開く台形を呈する。凸面は細かな縦方向の磨きによって仕上げる。凹面は漆喰の付着によって詳細は不明である。

T 255 は行基式で, 残存長 21.2 cm, 厚み 1.9 cm である。凸面は狭端部付近に横方向の板状工具によるナデ調整, それ以外は細かな縦方向の磨きによって仕上げる。凹面は布目で, 糸切りが認められる。

T 256 は筒部長 24.7 cm, 筒部幅 16.0 cm, 玉縁長 3.0 cm で, 玉縁部は扁平な台形を呈する。凸面は細かな縦方向の磨きによって仕上げる。凹面はいわゆるゴザ目で, 広端部側に紐状痕跡が認められる。コビキ B である。筒部中央に釘穴がある。少量漆喰が付着する。

T 257 は筒部長 31.1 cm, 筒部幅 15.2 cm, 玉縁長 2.8 cm で, 玉縁部は扁平な台形である。凸面は細かな縦方向の磨きによって仕上げる。凹面はいわゆるゴザ目で, 筒部上半に綴じ紐状の圧痕が残る。コビキ B である。凹凸面に漆喰が残る。

T 258 は筒部長 25.8 cm, 筒部幅 13.9 cm, 玉縁長 3.3 cm で, 玉縁部は台形を呈する。凸面は丁寧な縦方向の板状工具によるナデ調整によって仕上げる。凹面は布目で, 綴じ紐痕跡が認められる。佐川分類の吊り紐痕跡 C 型が認められる。

T 259 は筒部長 27.0 cm, 筒部幅 14.9 cm, 玉縁長 3.4 cm で, 玉縁部は台形を呈する。凸面は丁寧な板状工具による縦方向のナデ調整によって仕上げる。凹面は布目である。石英長石, 角閃石

を含む粗い胎土である。

T 260 は筒部長 27.0 cm, 筒部幅 15.2 cm, 玉縁長 4.1 cm で, 玉縁部は台形を呈する。凸面は細かな縦方向の磨きによって仕上げる。凹面は目の細かな布目で, 糸切りが残る。

T 261 は筒部長 25.5 cm, 筒部幅 15.2 cm, 玉縁長 4.0 cm で, 玉縁部は台形を呈する。凸面は丁寧な縦方向のナデ調整によって仕上げる。凹面は布目である。

T 262 は筒部長 28.3 cm, 筒部幅 14.7 cm, 玉縁長 3.9 cm で, 玉縁部は台形を呈する。凸面は細かな縦方向の磨きによって仕上げる。凹面は布目で, コビキ B である。

T 263 は筒部長 24.4 cm, 筒部幅 15.8 cm, 玉縁長 3.4 cm である。凸面は細かな縦方向の磨きによって仕上げる。凹面はいわゆるゴザ目で, 棒状工具による補足叩きが認められる。コビキ B である。漆喰の付着が認められる。

T 264 は筒部長 22.5 cm, 筒部幅 13.7 cm, 玉縁長 3.9 cm で, 玉縁部は台形を呈する。凸面は細かな縦方向の磨きによって仕上げる。凹面はいわゆるゴザ目で, コビキ B である。

T 265 は筒部長 22.2 cm, 筒部幅 14.5 cm, 玉縁長 2.9 cm である。凸面は剥離が著しい。凹面は布目である。

T 266 は筒部長, 玉縁長とも不明, 筒部幅 15.5 cm である。凸面は板状工具による縦方向の丁寧なナデ調整によって仕上げる。凹面は布目で, コビキ B である。

T 267 は筒部長 19.1 cm, 筒部幅 12.0 cm, 玉縁長 3.0 cm で, 玉縁部は角が丸みをもつ扁平な台形を呈する。凸面は細かな縦方向の磨きによって仕上げる。凹面は布目で, コビキ B である。

T 268 は筒部長不明で, 筒部幅 13.4 cm, 玉縁長 2.7 cm で, 玉縁部は扁平な台形を呈する。凸面は細かな縦方向の磨きによって仕上げ, 「山」の字型の刻印がある。凹面はいわゆるゴザ目で, コビキ B ある。

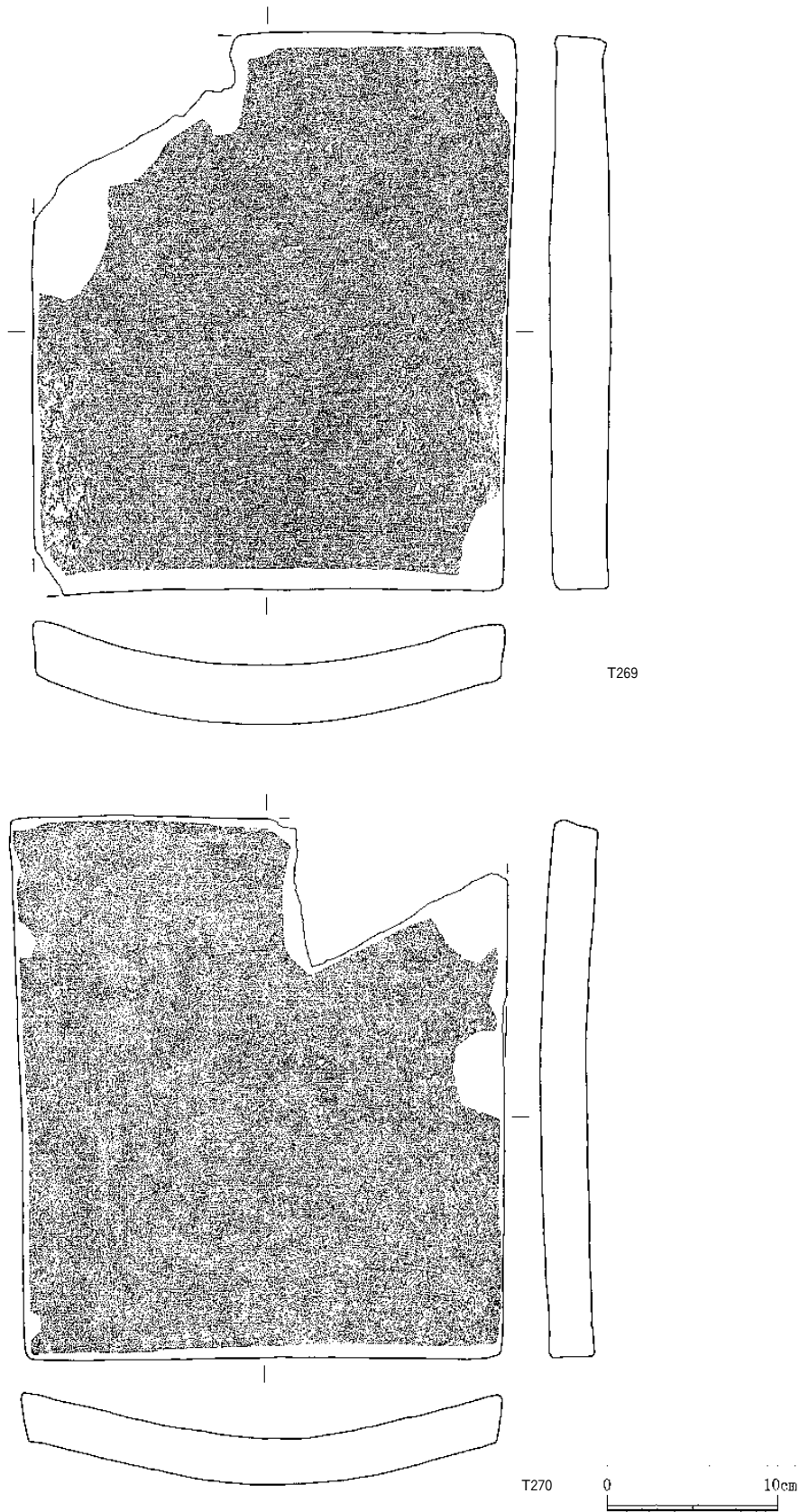
エ 平瓦 (第 82 ~ 88 図)

平瓦は成形具形状や使用粘土量を示す属性である法量 (広狭端幅, 長さ, 厚み) に加えて凹凸面の調整等の属性について記述を行う。以下個別に記述を行う。

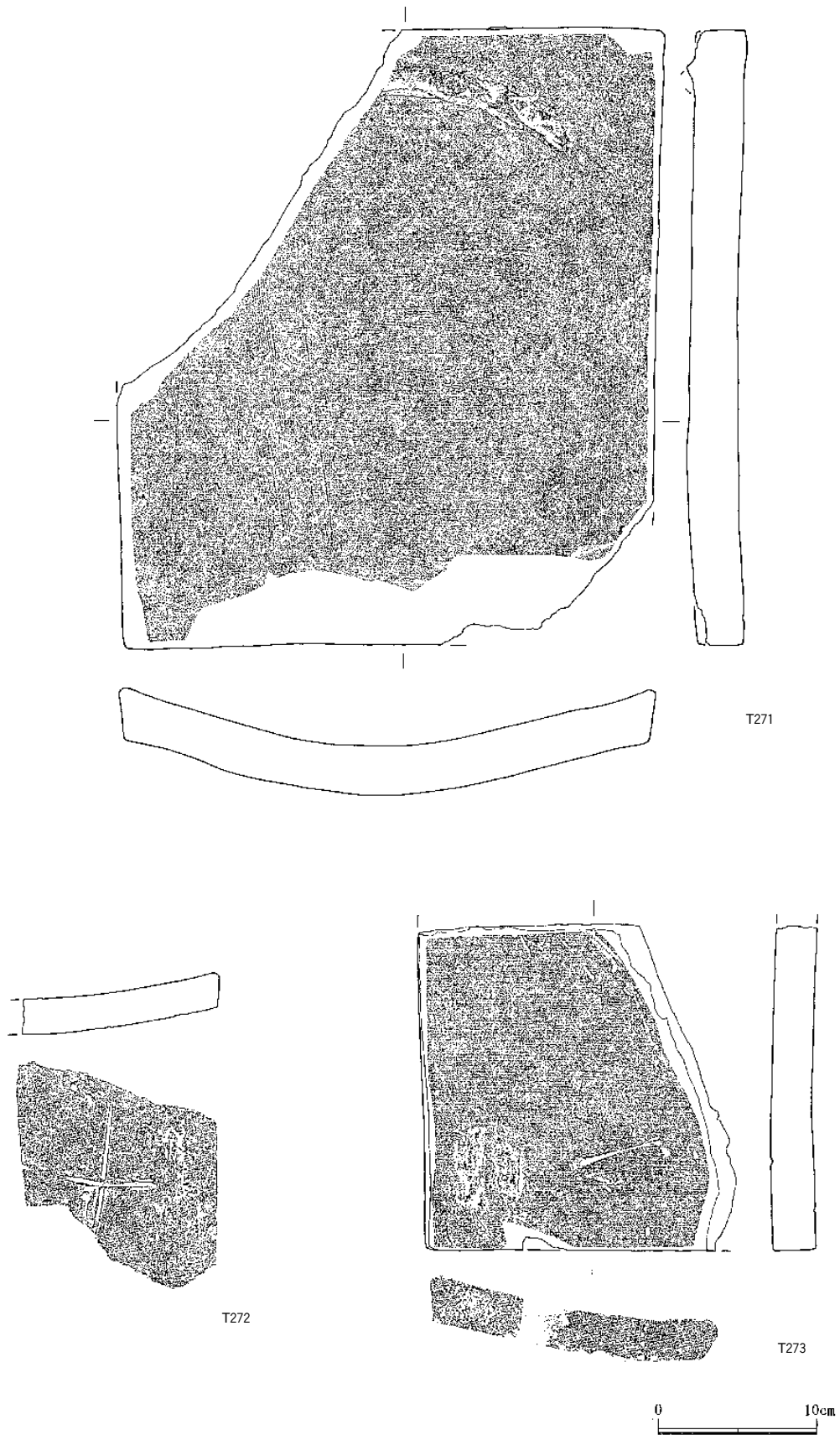
T 269 は広端幅, 狭端幅ともに不明, 全長 32.5 cm で, 厚み 3.5 cm である。凸面は縦方向のナデ調整で, 凹面は丁寧な横方向のナデ調整後, 側縁側を縦方向にナデ調整を施す。凹面の中央から狭端部の中央部分に葺土/漆喰の痕跡が残る。

T 270 は広端幅が不明, 狭端幅 27.7 cm, 全長 31.8 cm で, 厚み 2.7 cm である。凸面は横方向のやや粗いナデ調整で, 凹面は横方向の丁寧なナデ調整後, 側縁側を縦方向にナデ調整を施す。凹面の中央から狭端部の中央部分に葺土の痕跡が残る。凸面の狭端部側に円弧状の圧痕が残る。

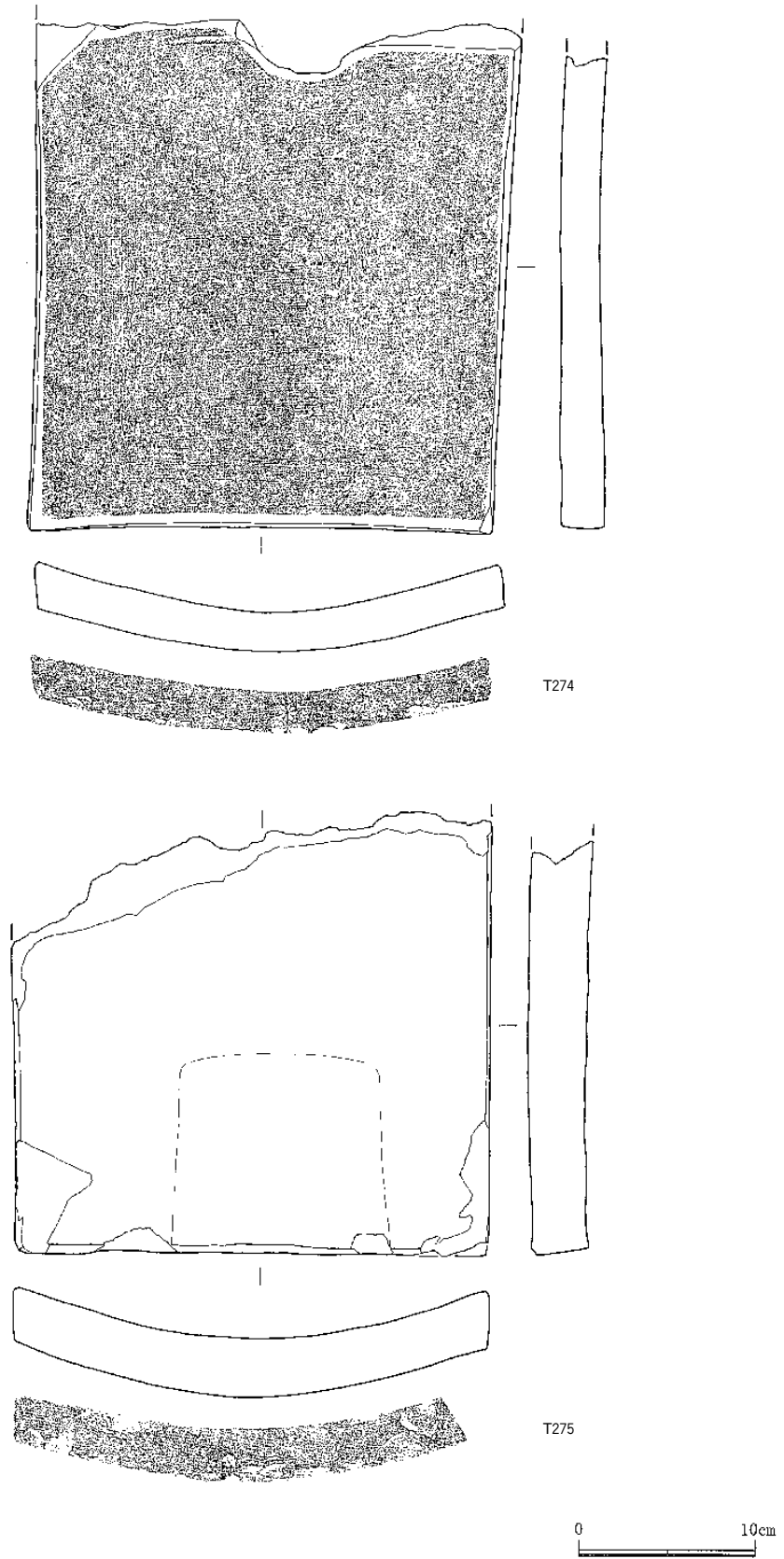
T 271 は広端幅, 狭端幅ともに不明, 全長 38.6 cm で, 厚み 3.05 cm である。凸面はやや粗いナデ調整で, 凹面は横方向の丁寧なナデ調整後, 側縁側を縦方向にナデ調整を施す。凹面の広端部側に引掛突起があり, 狭端部には中央から狭端部の中央部分にかけて葺土の痕跡が残る。凸面の狭端面側に円弧状の圧痕が残り, 凹面の葺土痕跡に対応して漆喰が認められる。



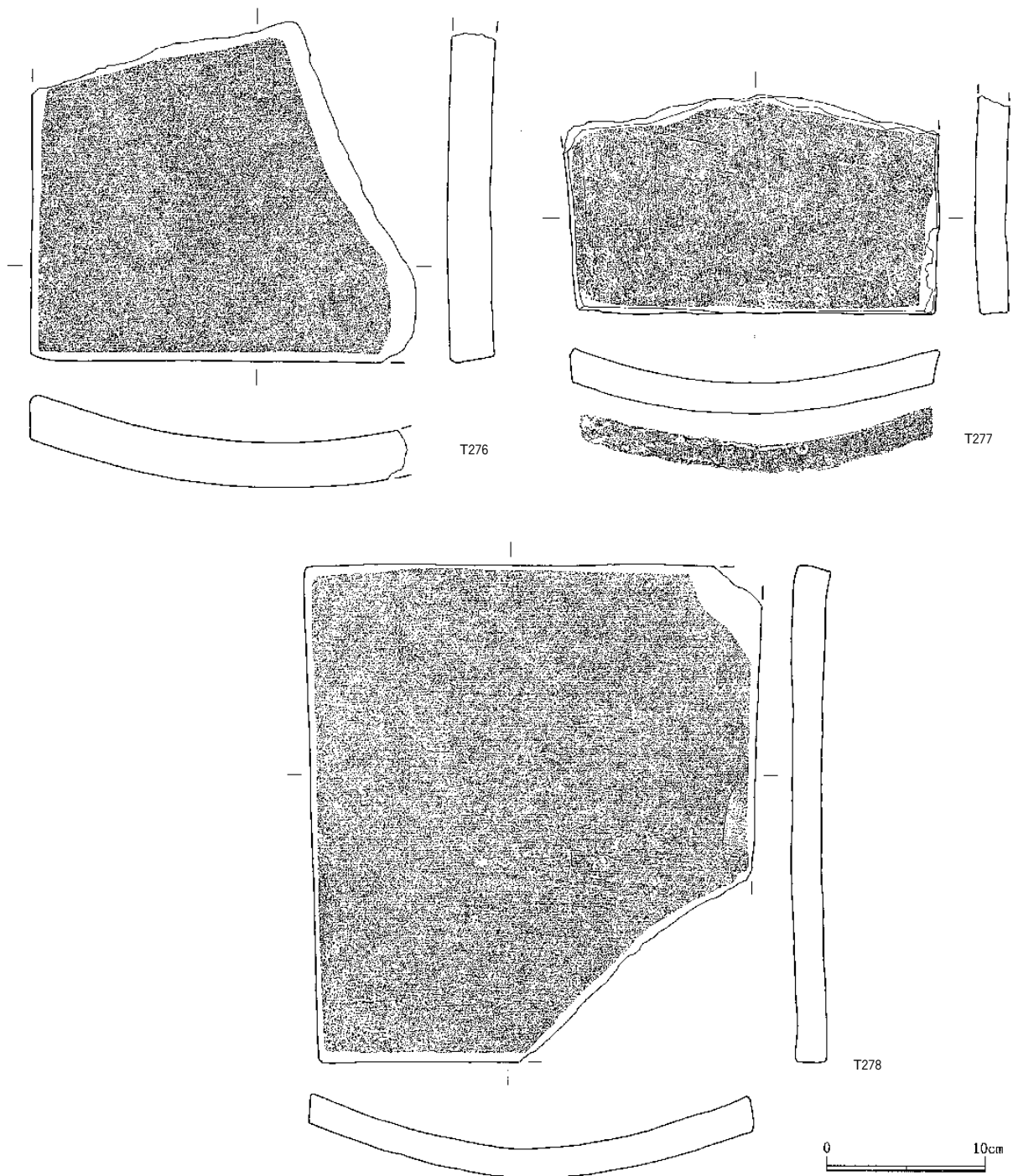
第82図 地下1階上層出土平瓦実測図(1)



第83図 地下1階上層出土平瓦実測図(2)



第84図 地下1階中層出土平瓦実測図(1)

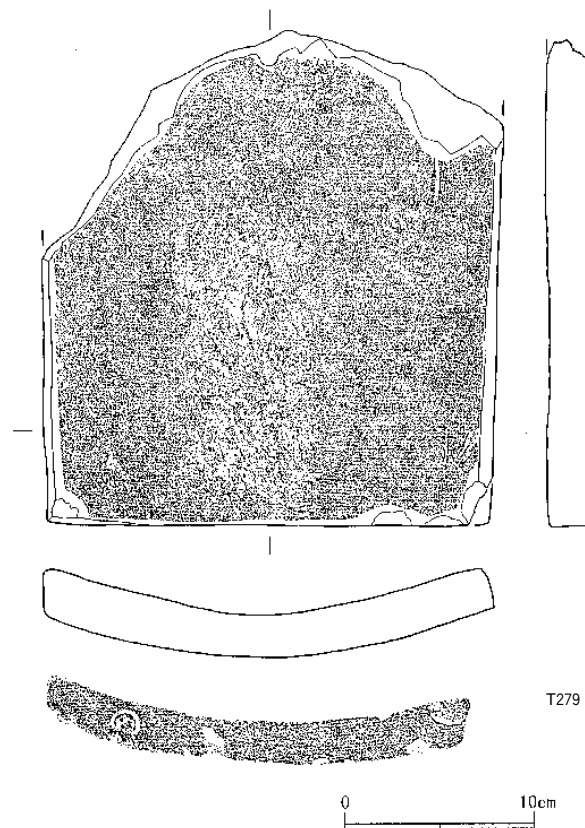


第85図 地下1階中層出土平瓦実測図(2)

T 272 は広端幅，狭端幅とも不明，残存長 11.0 cm で，厚み 2.2 cm である。凸面は縦方向のナデ調整で，凹面はナデ調整および磨き調整を施す。側縁部は凹面側を面取りする。凸面に「×」のヘラ状工具によって施される。

T 273 は広端幅，狭端幅とも不明，残存長 20.8 cm で，厚みは 2.5 cm である。凹凸面ともにナデ調整で，凹面は丁寧に仕上げている。凸面に円弧状の圧痕が認められる。狭端面に5つの点を配置した菊花文状の刻印がある。

T 274 は広端部が欠損，狭端幅 26.3 cm，残存長 28.8 cm で，厚み 2.3 cm である。凸面は粗いナ



第86図 地下1階出土層位不明平瓦実測図

デ調整で、凹面は横方向のナデ調整後、側縁側を縦方向にナデ調整を施す。狭端面に菊花文の刻印があり、凸面の狭端面側に円弧状の圧痕が残る。凹面の中央から狭端部の中央部分に葺土／漆喰の痕跡が残る。

T 275 は広端部が欠損、狭端幅 27.7 cm、残存長 25.0 cm で、厚み 3.3 cm のナデ調整で、凹面は横方向のナデ調整後、側縁側を縦方向にナデ調整を施す。狭端面にキノコ状の刻印があり、凸面の狭端面側に円弧状の圧痕が残る。凹面の中央から狭端部の中央部分に葺土の痕跡が残る。

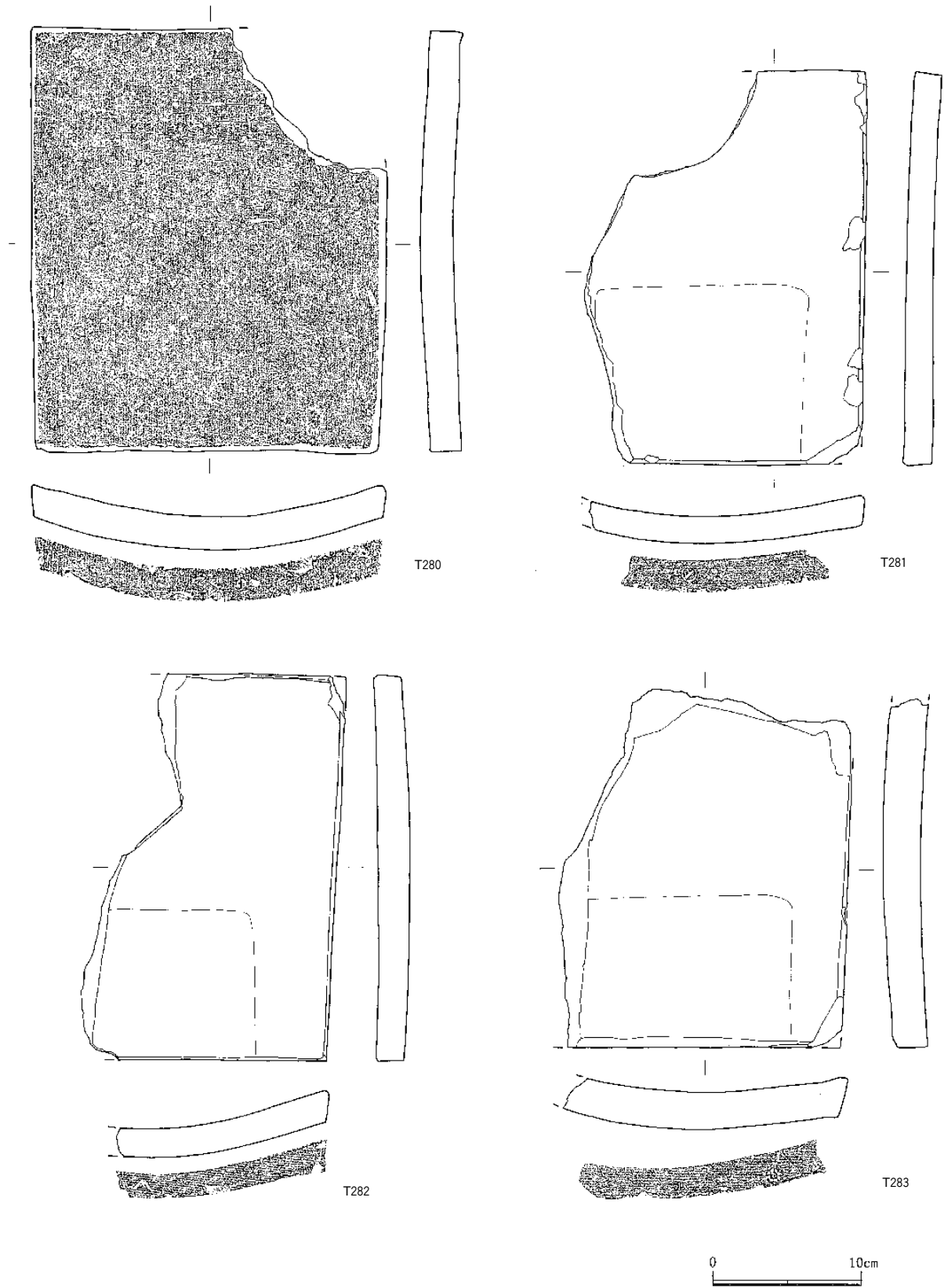
T 276 は広端幅、狭端幅とも不明、残存長 21.2 cm で、厚み 2.8 cm である。凸面は横方向のナデ調整で、円弧上の圧痕が残る。凹面はナデ調整および磨き調整を施し、線画が施される。描かれている内容については非常に不鮮明のため詳細は不明である。

T 277 は広端部が欠損、狭端幅 22.6 cm、残存長 13.7 cm で、厚み 1.9 cm である。凸面は縦方向の粗いナデ調整で、凹面は横方向のナデ調整後、側縁側を縦方向にナデ調整を施す。漆喰が認められる。狭端面に波引車状の刻印があり、凸面の狭端面側に円弧状の圧痕が残る。

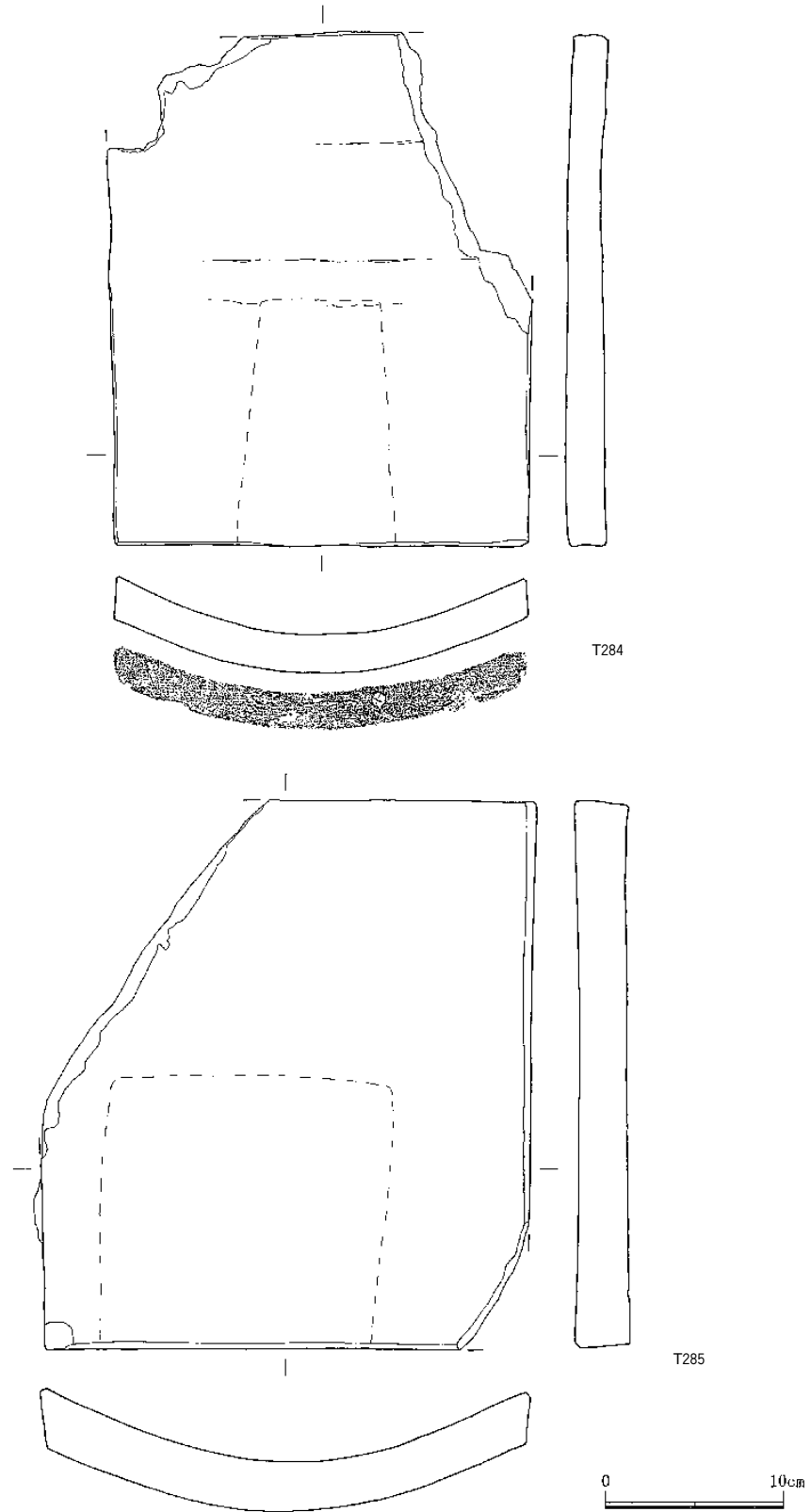
T 278 は広端幅、狭端幅とも不明、全長 31.2 cm で、厚み 1.8 cm である。凸面はハナレ砂が残り、ナデ調整で、凹面は横方向のナデ調整後、側縁側を縦方向にナデ調整を施す。

T 279 は広端幅が不明、狭端幅 23.4 cm、残存長 24.3 cm で、厚み 2.3 cm である。狭端面に生駒家の家紋である波引車の刻印がある。凸面にはハナレ砂が残り、凹面成形台の使用を示す。ナデ調整で、凹面は丁寧なナデ調整で仕上げている。茶褐色の砂粒を含むやや特徴的な胎土である。

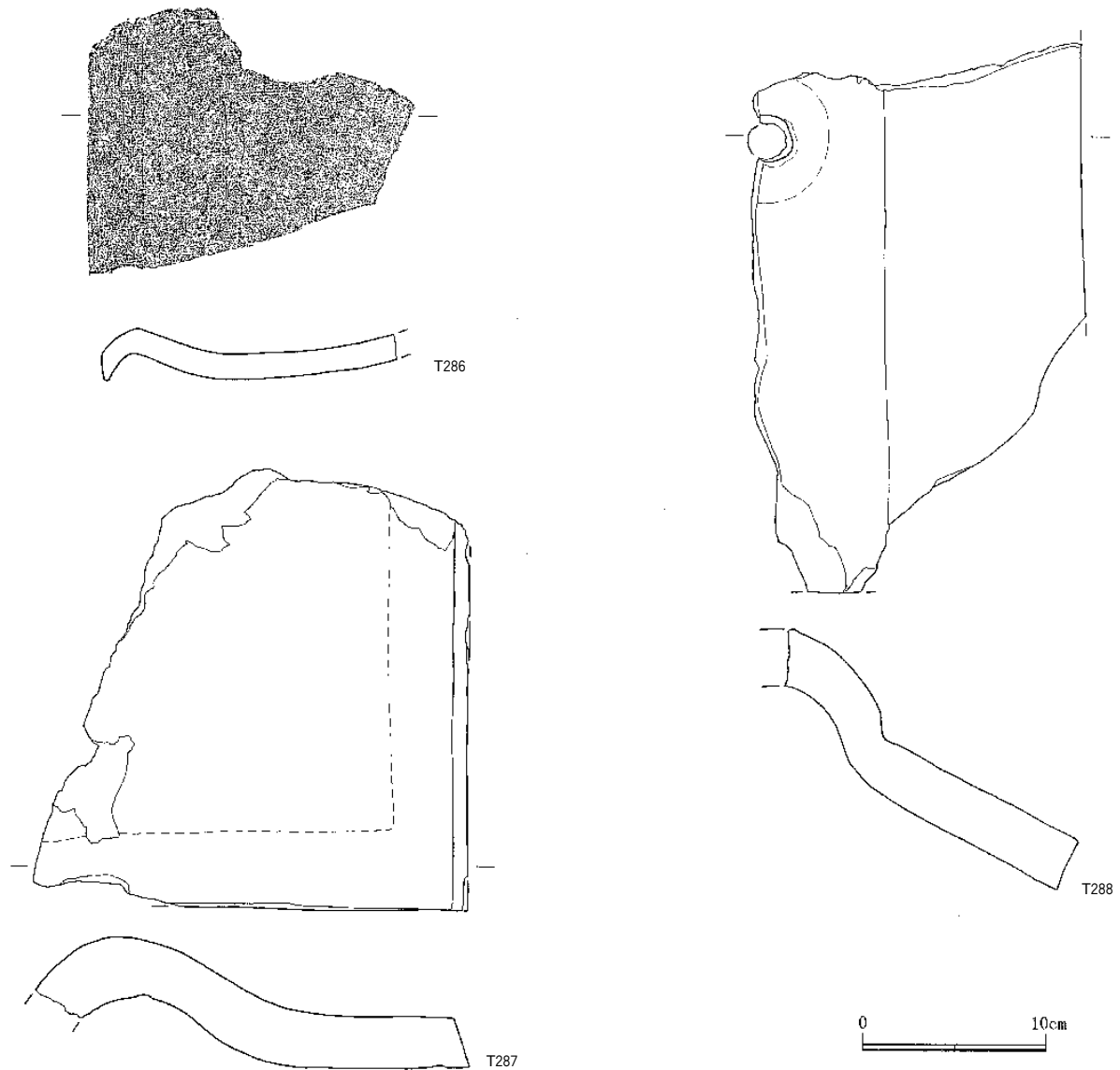
T 280 は広端幅が不明、狭端幅 22.9 cm、全長 28.5 cm で、厚みは 2.2 cm である。凸面はハナレ



第 87 図 玉藻廟基礎部出土平瓦実測図 (1)



第88図 玉藻廟基礎部出土平瓦実測図(2)



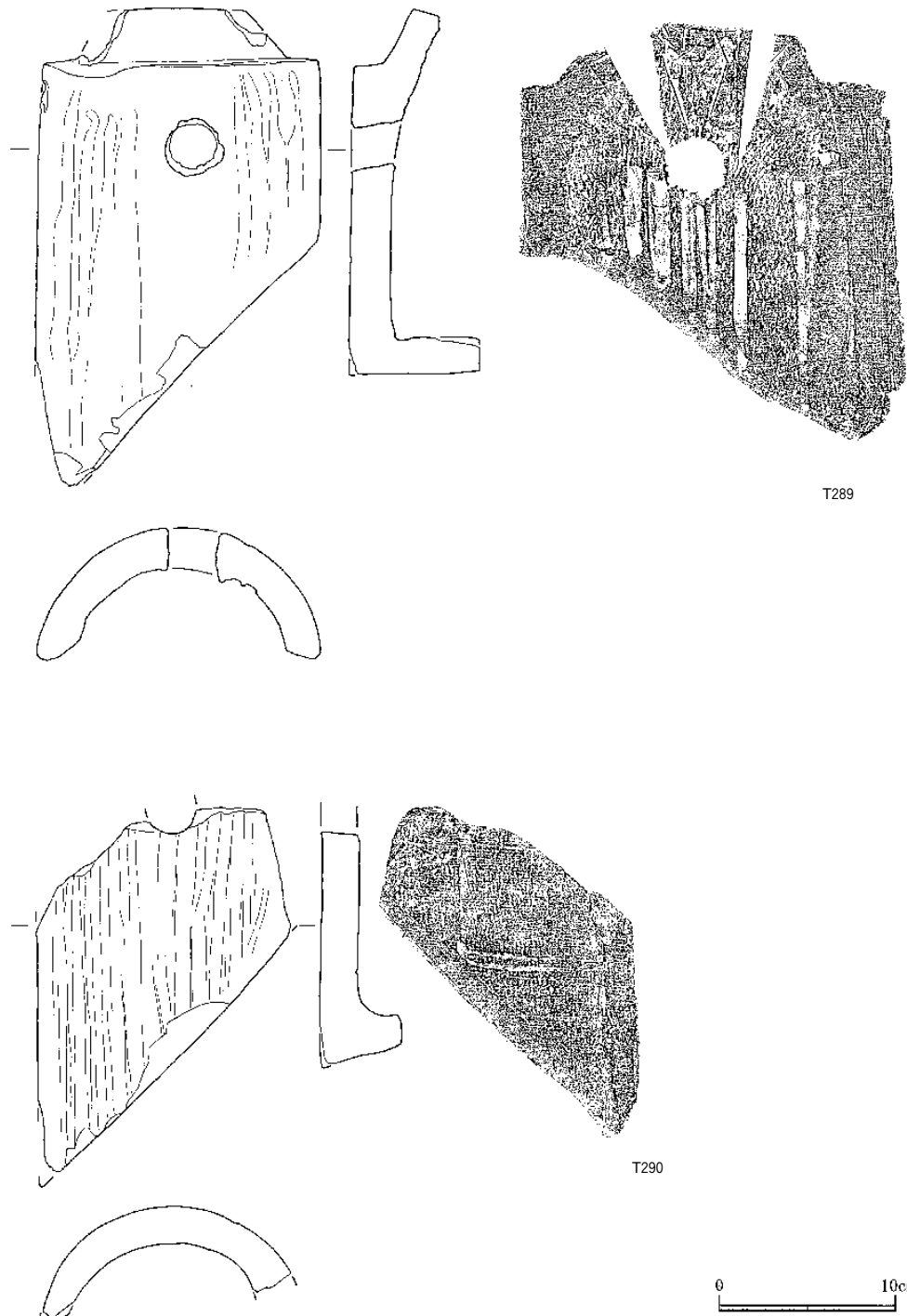
第 89 図 地下 1 階出土棧瓦実測図

砂が残り、粗いナデ調整で、凹面は横方向のナデ調整、細かな磨き調整の後、両側縁部を縦方向のナデ調整で仕上げている。狭端面に円中に「木」の字状文様を配置した刻印がある。

T 281 は広端幅、狭端幅とも不明、全長 26.5 cm で、厚み 1.9 cm である。凸面はハナレ砂が残り、ナデ調整で、凹面はナデ調整および磨きで仕上げている。凹面の中央から狭端部の中央部分に葺土の痕跡が残る。狭端面及び側縁部の凹面側を面取りする。狭端面に円中に「/」の字状文様を配置した刻印がある。

T 282 は広端幅、狭端幅とも不明、全長 26.0 cm で、厚み 2.0 cm である。凸面は横方向の粗いナデ調整で、凹面はナデ調整で仕上げている。狭端面に山形の刻印がある。凹面の中央から狭端部の中央部分に葺土の痕跡が残る。狭端面及び側縁部の凹面側を面取りする。

T 283 は広端部、狭端部とも不明、残存長 24.15 cm で、厚み 2.5 cm である。縦方向の粗いナデ調整で、凹面はナデ調整および磨き調整で仕上げている。また、凹面の中央から狭端部の中央部分に葺土／漆喰の痕跡が残る。狭端面に菊花文状の刻印がある。狭端面及び側縁部の凹面側を面



第90図 隅切丸瓦実測図

取りする。

T 284 は広端部が欠損，狭端幅 23.0 cm，全長 28.5 cm で，厚み 2.1 cm である。凸面は縦方向の粗いナデ調整で，凹面は丁寧なナデ調整で仕上げている。凹面の中央から狭端部の中央部分に台形状に葺土の痕跡が残る。

T 285 は広端幅，狭端幅とも不明，全長 30.5 cm で，厚み 2.8 cm である。凸面は粗いナデ調整で，凹面は丁寧なナデ調整で仕上げている。凹面の中央から狭端部の中央部分に台形状に葺土／漆喰の痕跡が残る。凸面の狭端面側に円弧状の圧痕が残る。

オ 棧瓦／雁振瓦 (第 89 図)

T 286 は棧瓦で、棧の幅は 2.5 cm、残存幅 17.3 cm、残存長 14.9 cm で、厚み 1.4 cm である。棧の反りがきつく、短い。凸面は縦方向の粗いナデ調整で、凹面は横方向のナデ調整後、側縁部周辺を縦方向のナデ調整で仕上げる。

T 287・T 288 は雁振（伏間）瓦である。T 287 は丸瓦部が明確でないが、T 288 は丸瓦部に釘穴が残り、側縁および狭端部に固定材の漆喰の痕跡が筋状に認められる。T 287 は、側縁部が内傾する。凸面は横方向の跡、側縁部に沿ったナデ調整で仕上げる。凹面は無作為なやや粗いナデ調整で仕上げる。また、凸面縁辺部に葺く際に用いられた漆喰が残る。T 288 は側縁部を直に切落す。凹凸面ともに、非常に丁寧なナデ調整および磨き調整で仕上げているが、図面の下端にあたる凹面側に削りを施す箇所がある。凹面にはキラ粉が認められ、剥離材として使用されていたと考えられる。

カ 隅切丸瓦 (第 90 図)

T 289 は右切隅で、筒部残存長 17.0 cm、筒部幅 16.0 cm、玉縁長 3.0 cm で、玉縁部は扁平な台形を呈する。凸面は縦方向の磨きによって仕上げ、垂れ部も丁寧なナデ調整もしくは磨き調整によって仕上げる。凹面はいわゆるゴザ目で、凹面は棒状工具による補足の叩きが施される。コビキ B である。玉縁近くに釘穴がある。側縁は凸面側を面取りしている。筒部の側面と玉縁部側面を同時に削る。

T 290 は右切隅で、筒部長、筒部幅、玉縁長ともに不明で、玉縁部は欠損しているが T 289 と同様な形態と考えられる。凸面は縦方向の磨きによって仕上げ、垂れ部も丁寧なナデ調整もしくは磨き調整によって仕上げる。凹面はいわゆるゴザ目で、凹面は棒状工具による補足の叩きが施される。コビキ B である。釘穴が玉縁近くにある。側縁は凸面側を面取りしている。燻しが強い。

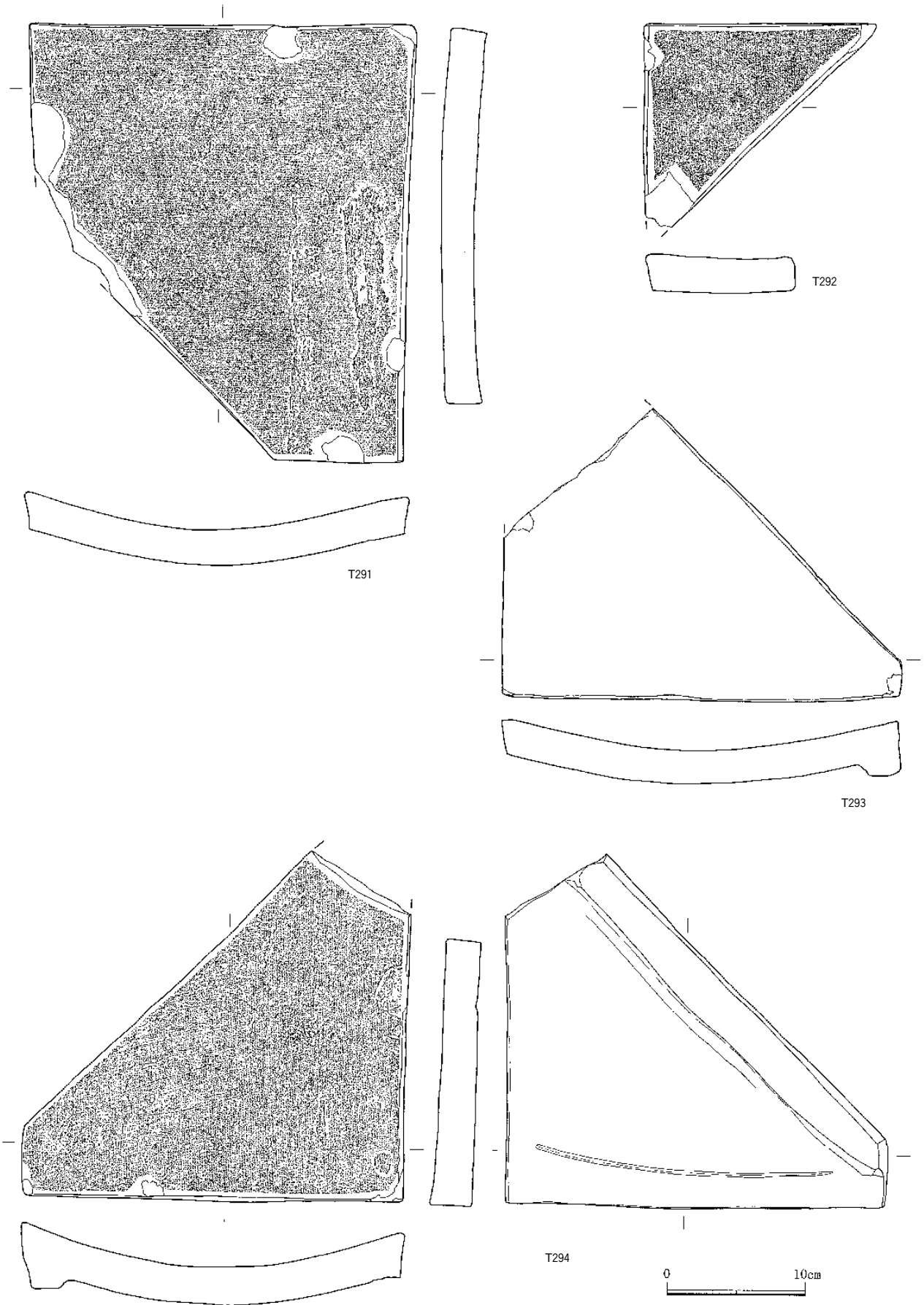
キ 隅切平瓦 (第 91 図)

T 291 は左切隅である。広端幅 28.0 cm、狭端幅 9.3 cm、長さ 31.6 cm で、厚みは 2.6 cm である。台形状を呈する。凸面は縦方向を基調とする粗いナデ調整で、凹面は横方向のナデ調整後、側縁部付近は丁寧なナデ調整で仕上げている。また、凹凸面ともに固定材である漆喰が残る。

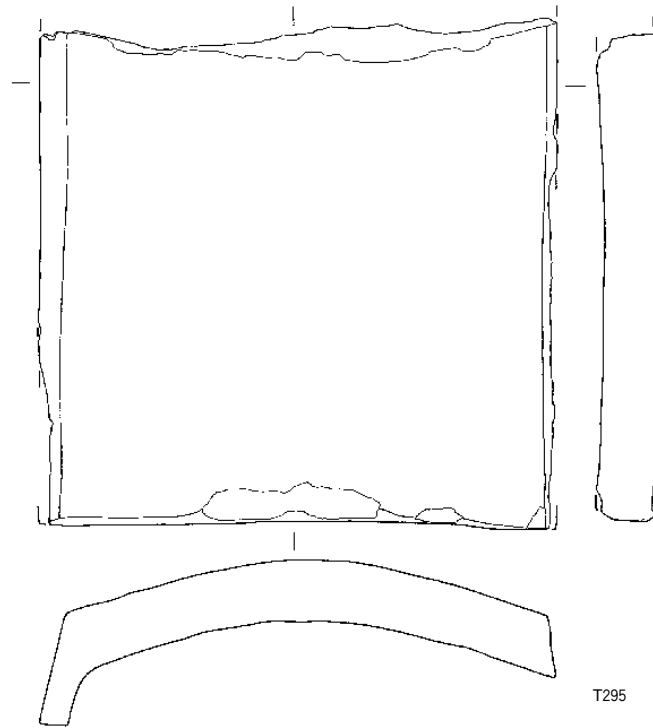
T 292 は右切隅である。広端幅 16.8 cm、狭端側が尖り、三角形を呈する。残存長 14.7 cm で、厚み 2.4 cm である。凸面は横方向の後無作為な粗いナデ調整、凹面も横方向の後無作為なナデ調整によって仕上げている。

T 293 は右切隅で、凸面側の切隅の隅部を突出させ、その間はやや凸帯状に盛り上がる。広端幅 28.3 cm、狭端部は欠損、残存長 21.1 cm で、厚み 2.4 cm である。台形状を呈する。凸面は無作為な粗いナデ調整後、切隅部のみ丁寧なナデ調整を施す。凹面は横方向のナデ調整を施した両側を側縁に平行してナデ調整で仕上げる。一部磨き調整のようである。

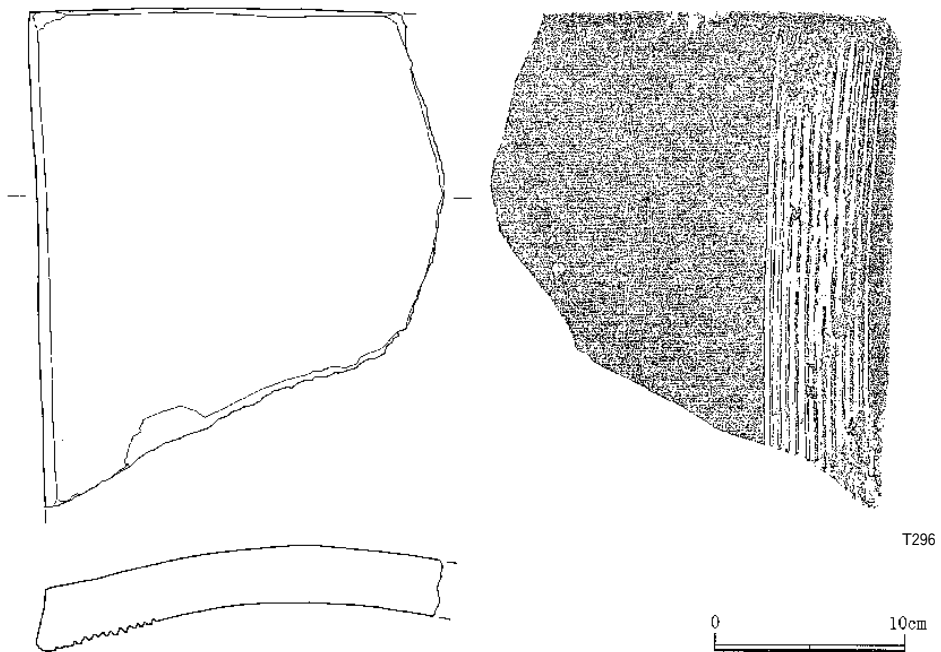
T 294 は左切隅で、凸面側の切隅の隅部を突出させ、その間はやや凸帯状に盛り上がる。広端



第91図 隅切平瓦実測図



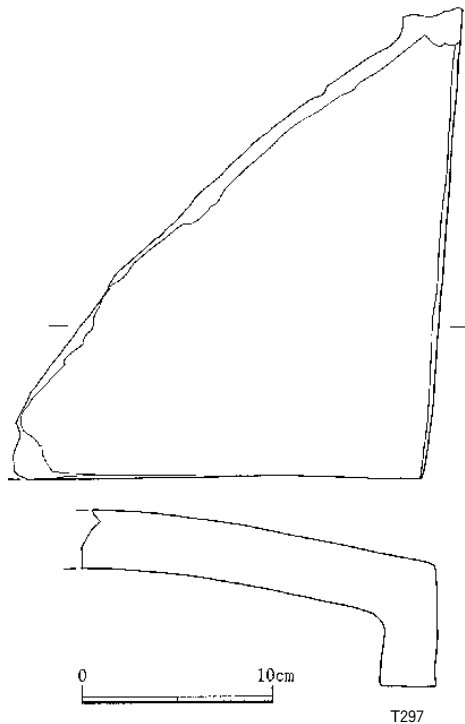
T295



T296

0 10cm

第92図 地下1階中層出土熨斗瓦実測図



第93図 玉藻廟基礎部出土熨斗瓦実測図

部側に円弧状の沈線が施される。広端幅 27.6 cm，狭端幅は欠損，残存長は 25.4 cm で，厚みは 2.8 cm である。台形状を呈する。凸面は横方向の粗いナデ調整で切隅部は丁寧なナデ調整を施し，凹面は横方向のナデ調整を施し，両側を縦方向のナデ調整で仕上げる。

熨斗瓦 (第 92・93 図)

T 295 は片付熨斗瓦で幅 27.4 cm，残存長 27.1 cm で，厚みは 3.2 cm である。凸面は粗いナデ調整で，凹面はナデおよび磨き調整で仕上げている。

T 296 は残存幅 21.5 cm，残存長 26.4 cm で，厚みは 3.0 cm である。凹面の側縁部側に 12 条の櫛挽きが施されている。凸面は丁寧なナデ調整で，凹面はナデおよび磨き調整で仕上げている。

T 297 は片付熨斗瓦で残存幅 23.6 cm，残存長 24.8 cm で，厚み 3.1 cm である。凸面は縦方向のナ調整で，凹面は縦方向のナデ調整で仕上げている。いずれも漆喰の付着が著しい。

ケ 輪違い (第 94～97 図)

狭端部側が行基式を呈するものがほとんどで，玉縁式になるものは T 305 のみである。行基式を呈するものの中には，凹凸面ともにナデ調整で仕上げるものと，凹面に布目およびコビキ B が残るものがある。後者には縦断面が狭端側でくの字に折れるものと直線的なものと両方がある。以上のような基本的な特徴があるものの，形態差が大きいため，これらの属性に加え，法量も重要な属性と考えられる。そのため，個別に記述することとした。

T 298 は狭端幅 4.2 cm，広端幅不明，長さ 8.5 cm で，厚み 1.5 cm である。側縁部がやや外反しながら八の字状に開く形態である。凹凸面ともにナデ調整によって仕上げ，凸面には叩き調整が認められる。

T 299 は狭端幅 4.2 cm，広端幅不明，長さ 11.0 cm で，厚み 1.3 cm である。側縁部が直線的に八の字状に開く形態である。凹凸面ともに丁寧なナデ調整によって仕上げる。凸面には刷毛目状に板状工具によるナデ調整の痕跡が残る。

T 300 は狭端幅 6.2 cm，広端幅は不明，長さ 13.1 cm で，厚み 1.35 cm である。直線的に八の字状に開く形態である。凹凸面ともにナデ調整によって仕上げる。広端部側に漆喰が付着する。

T 301 は狭端幅 5.0 cm，広端幅 12.1 cm，長さ 10.9 cm で，厚み 1.5 cm である。両側縁がやや内湾しながら開く形態である。凸面はナデ調整によって仕上げ，側縁部周辺にはハケ目状に板状工具によるナデ調整が認められる。凹面もナデ調整によって仕上げる。

T 302 は狭端幅、広端幅ともに不明、長さ 15.0 cm で、厚み 2.7 cm である。やや外反しながら八の字状に開く形態である。凸面はナデ調整によって仕上げる。凹面は布目が残し、コビキ B と考えられる。

T 303 は狭端幅 5.1 cm、広端幅 12.4 cm、長さ 11.9 cm で、厚み 1.7 cm である。両側縁が直線的にハの字状に開き、狭端部が肥厚する。凸面はナデ調整によって仕上げ、凹面は布目で、縫い紐痕跡が残る。

T 304 は狭端幅、広端幅ともに不明、長さ 13.4 cm で、厚み 2.2 cm である。両側縁が直線的にハの字状に開く。凸面はナデ調整によって仕上げ、凹面はいわゆるゴザ目で、コビキ B である。

T 305 は玉縁式の狭端幅 9.8 cm、広端幅 12.0 cm、長さ 14.1 cm で、厚み 1.7 cm である。筒部がやや台形を呈する。凸面は丁寧なナデ調整で仕上げ、凹面は布目が残し、両側縁を面取りする。コビキ B である。

T 306 は狭端幅 5.5 cm、広端幅 12.7 cm、長さ 12.2 cm で、厚み 2.0 cm である。直線的にハの字状に開く形態で、狭端部は平坦である。凹凸面ともにナデ調整によって仕上げる。

T 307 は狭端幅、広端幅ともに不明、長さ 13.8 cm で、厚み 1.6 cm である。両側縁が丸みをもって開く形態である。凸面はナデ調整によって仕上げる。凹面は布目で、一部に綴じ紐痕跡が認められる。コビキ B である。

T 308 は狭端幅、広端幅ともに不明、長さ 15.7 cm で、厚み 1.9 cm である。両側縁がやや内湾する台形を呈する。凸面は横方向のナデ調整によって仕上げる。凹面は布目で、コビキ B である。

T 309 は狭端幅 10.7 cm、広端幅は不明、長さ 14.8 cm で、厚み 1.9 cm である。両側縁部がやや内湾する台形を呈する。凸面はナデ調整および磨き調整によって仕上げる。凹面は布目で、コビキ B である。狭端面は砂粒が多量に付着している。

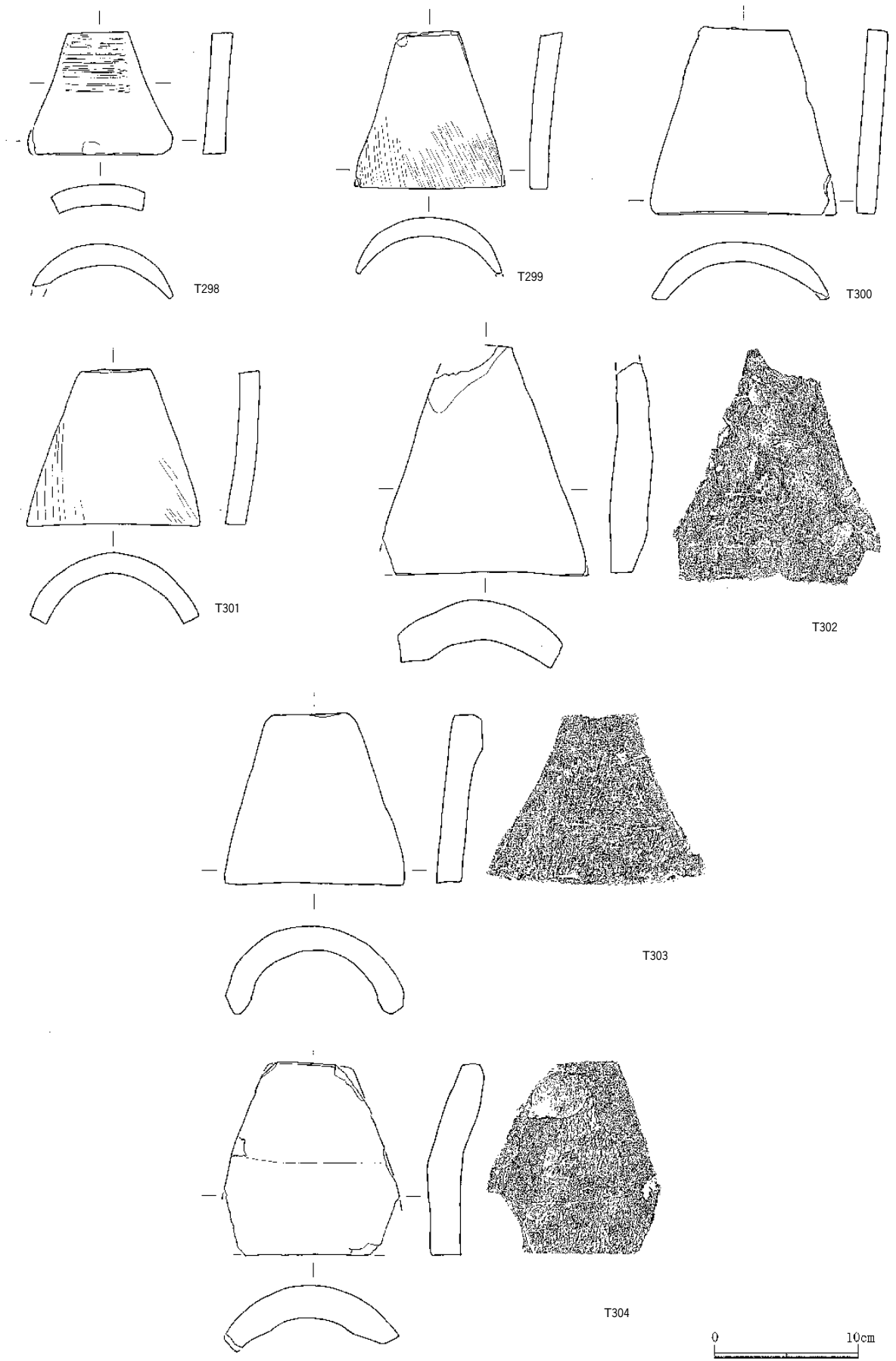
T 310 は狭端幅 4.5 cm、広端幅 12.1 cm、長さ 13.0 cm で、厚み 1.6 cm である。両側縁が丸みをもって開く形態である。凸面はナデ調整によって仕上げる。凹面は布目で、コビキ B である。

T 311 は狭端幅 6.6 cm、広端幅不明、長さ 14.0 cm で、厚み 1.8 cm である。側縁部が直線的にハの字状に開く形態で、狭端部が平坦になる。凸面は横方向の丁寧なナデ調整によって、凹面はナデ調整で仕上げる。凸面にヘラによる刻印が認められる。

T 312 は狭端幅、広端幅ともに不明、残存長 14.8 cm で、厚み 2.8 cm である。側縁部が直線的に開く形状である。凸面はナデ調整によって仕上げる。凹面は布目で、コビキ B である。

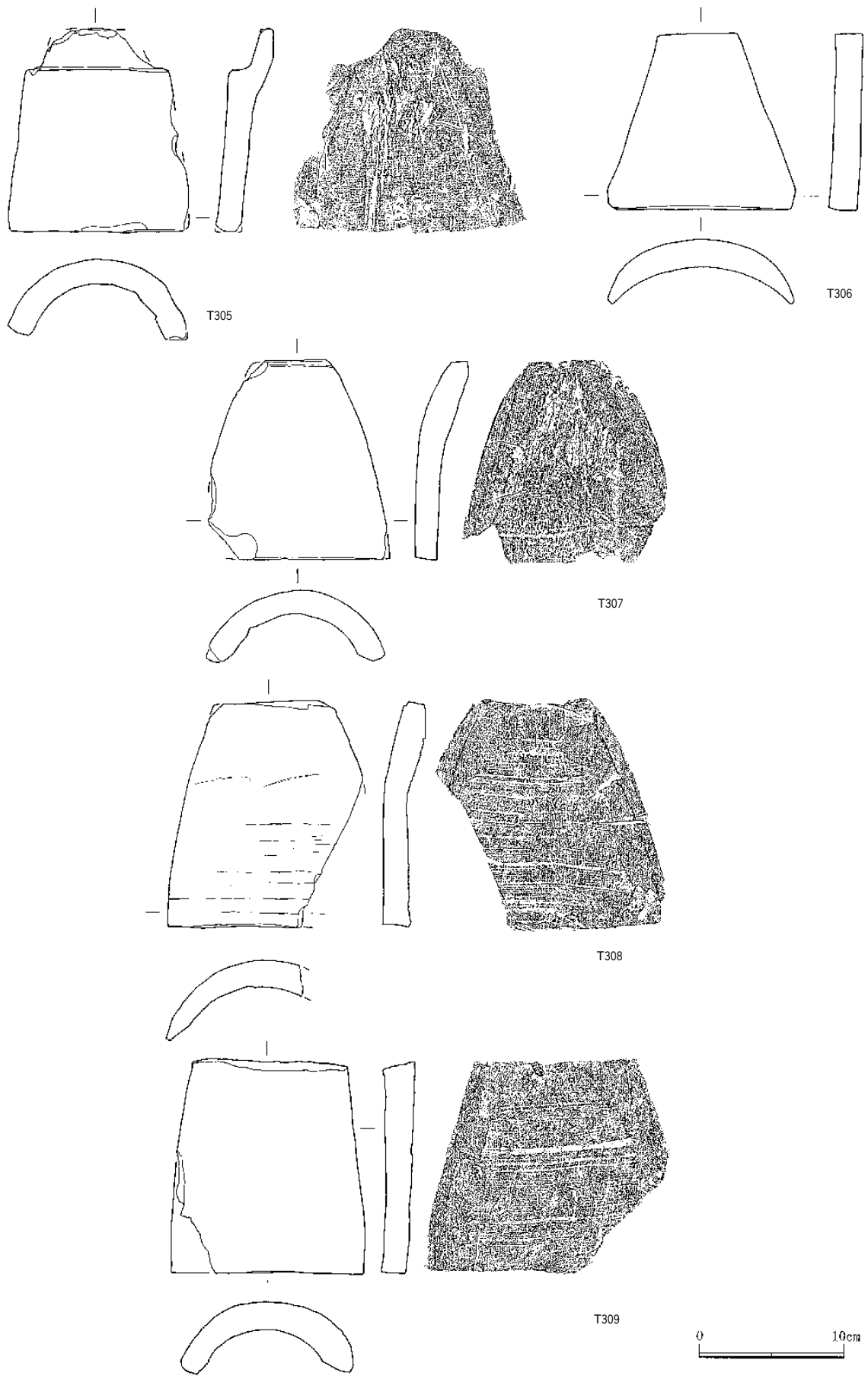
T 313 は狭端幅、広端幅とも不明、長さ 13.5 cm で、厚み 1.5 cm である。側縁部がやや内湾気味に開く台形を呈する。凸面は細かなナデ調整によって仕上げる。凹面はいわゆるゴザ目で、コビキ B である。

T 314 の狭端幅は不明、広端幅 13.1 cm、長さ 14.3 cm で、厚み 1.9 cm である。側縁部が直線的にハの字状に開く台形を呈する。凸面は細かな縦方向のナデ調整によって仕上げる。凹面は布目がわずかに残り、コビキ B である。

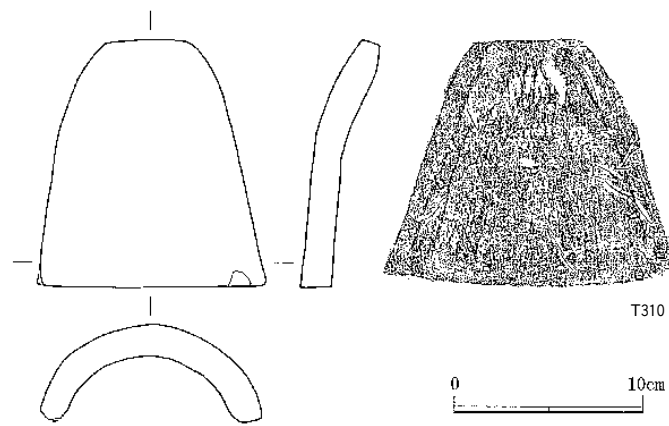


0 10cm

第94図 地下1階上層出土輪違い瓦実測図



第95図 地下1階中・下層出土輪違い瓦実測図



第96図 地下1階出土層位不明輪違い瓦実測図

コ 鬼瓦 (第98～104図)

T 318～T 324, T 332, T 334, T 342～T 344は「風」字を呈する鬼瓦の破片である。基本的に裏無し型である。文様構成などからT 322, T 323, T 332, T 344, T 345とT 321, T 324とT 318, T 319, T 334, T 342の4つに分類ができ、いずれも大型品がある。

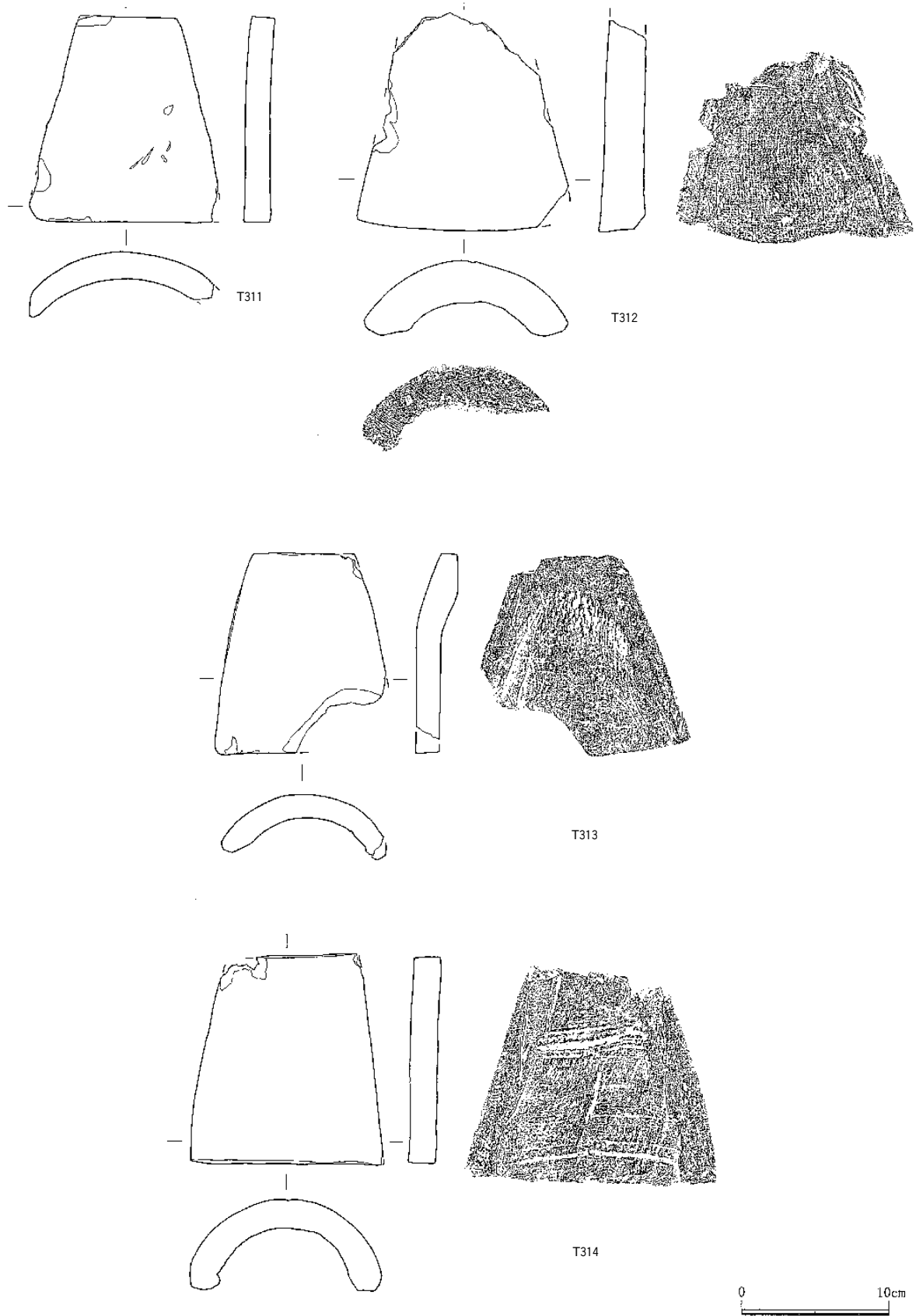
T 322, T 323は左右逆の同様な部位である。T 333は大型品である。裏無し型で、ナデ調整のほかに接合部に櫛挽き状痕跡が認められる。側面は丁寧なナデ調整によって仕上げ、外面付近を意図的に縁どるようにナデを施している。剥離材にキラ粉を使用。T 343は裏無し型で、龍頭が認められる。内外面ともに丁寧な作りで、胎土も非常に精良である。燻しは甘い。T 344は范抜けがよく、側面は丁寧なナデ調整で仕上げるが、裏面は粗い仕上げである。胎土は非常に精良である。T 322, T 323はいずれも剥離材としてキラ粉を使用。

T 318, T 319, T 334は同文の鬼瓦で、垂れの部分にハート型の陰刻が施されている。いずれも裏無し型である。T 318, T 334は大型の鬼瓦で、4は剥離材としてキラ粉を使用。4, 5は固定材としての漆喰が残っている。いずれも外面は丁寧なナデ調整による仕上げであるが、内面は粗いナデ調整による仕上げである。

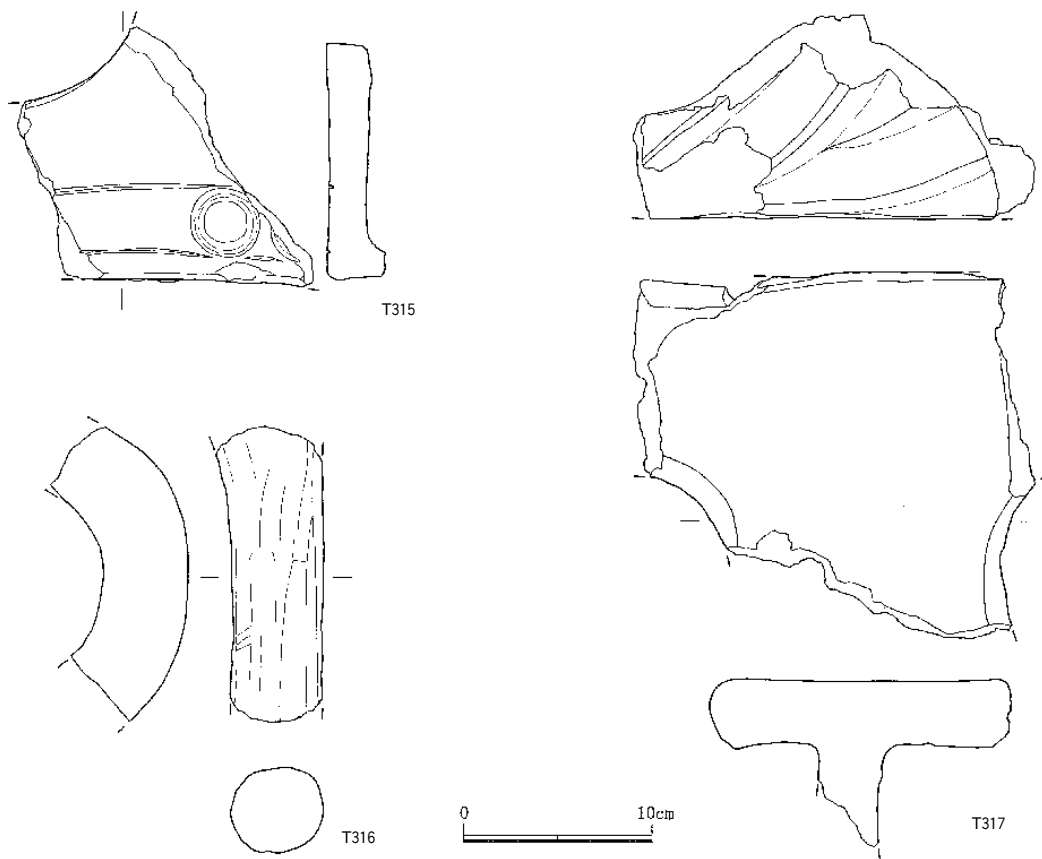
T 342は中央に松平家家紋「葵紋」を配置するものである。燻しが甘い。裏無し型で内面は非常に粗い仕上げである。側面には固定用に使用された漆喰が付着している。

この他に、T 315, T 317, T 320, T 325, T 327, T 328, T 330, T 331, T 333, T 345, T 346, T 349も同様な風字形を呈する鬼瓦正面側の破片である。

T 315は沈線と竹管文による文様構成で、剥離材としてキラ粉が使用されている。内面はハケ目状の痕跡が残る。明確ではないが、T 317も後述するT 327などと同文の可能性はある。剥離材としてキラ粉を使用している。T 325は足の部分の大型品で、大棟用と考えられる。裏無し型で、外面を丁寧に仕上げ、内面は非常に粗い仕上げである。T 320は燻しが甘く、灰黄褐色を呈する。細かな石英、長石を多量に含むが胎土は精良である。T 327, T 328, T 329, T 333は同文で、T 327, T 328, T 329は大型品である。T 333の内面は接合用の櫛挽き状の痕跡が多数認められる。T 330, T 331, T 345, T 346, T 349の詳細は不明であるが、いずれも細かい長石、石英を含む。T 331は外面に三巴文の圧痕が微かに残る。T 345は内面には調整を施さない。T 346の内面は



第97図 玉藻廟基礎部出土輪違い瓦実測図



第98図 地下1階上層出土鬼瓦実測図

粗いナデ調整で、剥離材としてキラ粉を使用している。T 349 は剥離材としてキラ粉を使用し、内面はナデ調整のほかに、引っ掻き傷状の痕跡が認められ、赤色顔料が塗られたような痕跡が認められる。34 の凹面側は丁寧なナデ調整による仕上げで、凸面側は削り状を呈する粗い板ナデによって仕上げる。胎土は粗く、石英を多量に含む。

T 350 の外面は非常に丁寧な仕上げで、面取りを行う。内面は粗いナデ調整による仕上げである。胎土は精良である。

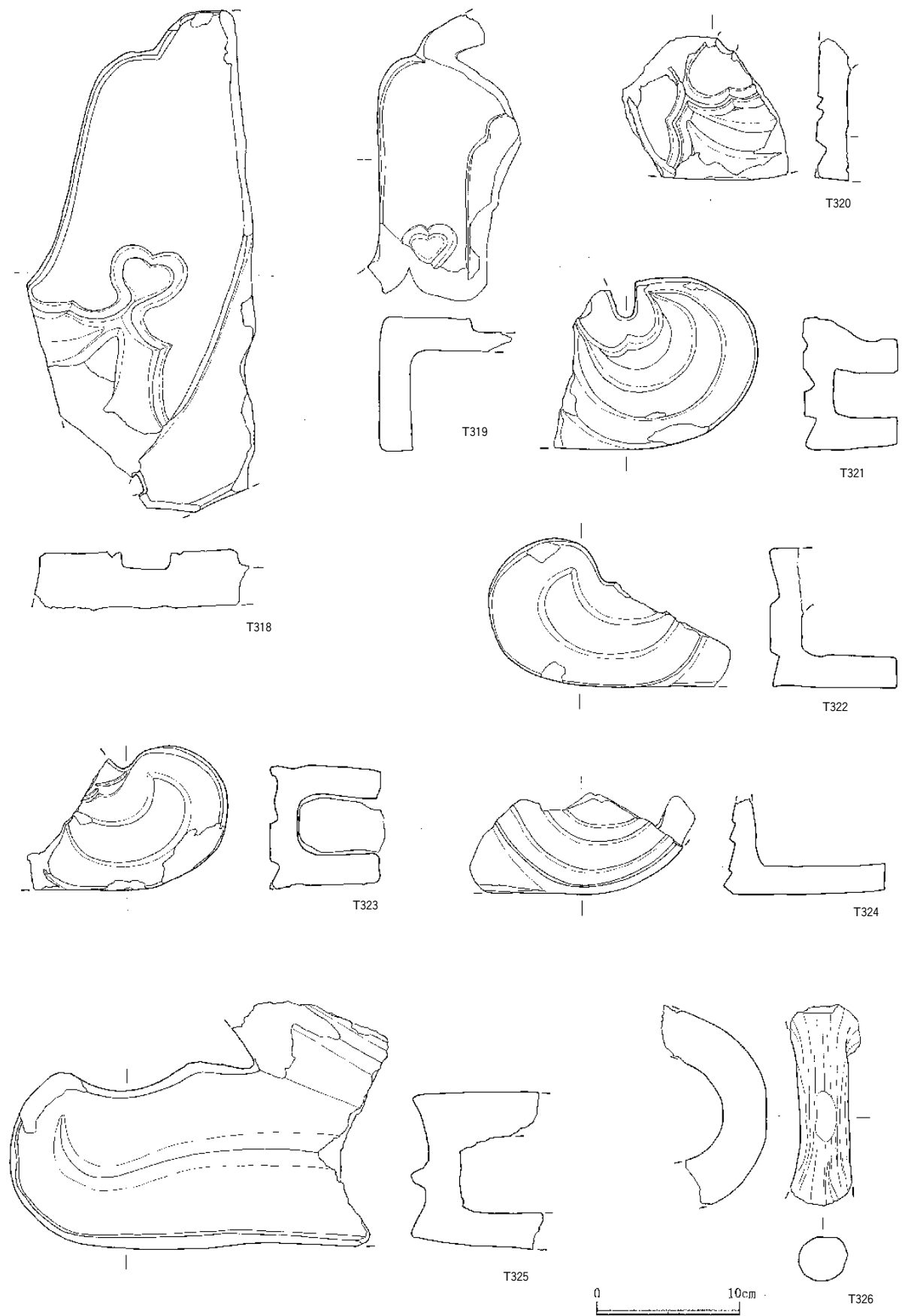
T 316, T 326, T 348 は取手状を呈するもので、鬼瓦背面の龍頭と考えられる。T 316, T 326 は丁寧なナデ調整によって仕上げる。T 348 の外面はナデ調整によって仕上げ、内面側は一部削りが認められる。胎土は粗く、石英および長石を多量に含む。

T 335 ～T 342 は様々な文様をもつもので、T 335 は鬼面文鬼瓦、T 339 ～T 342 は松平家家紋である葵紋が施されたもので、葵紋の表現も各々で異なる。

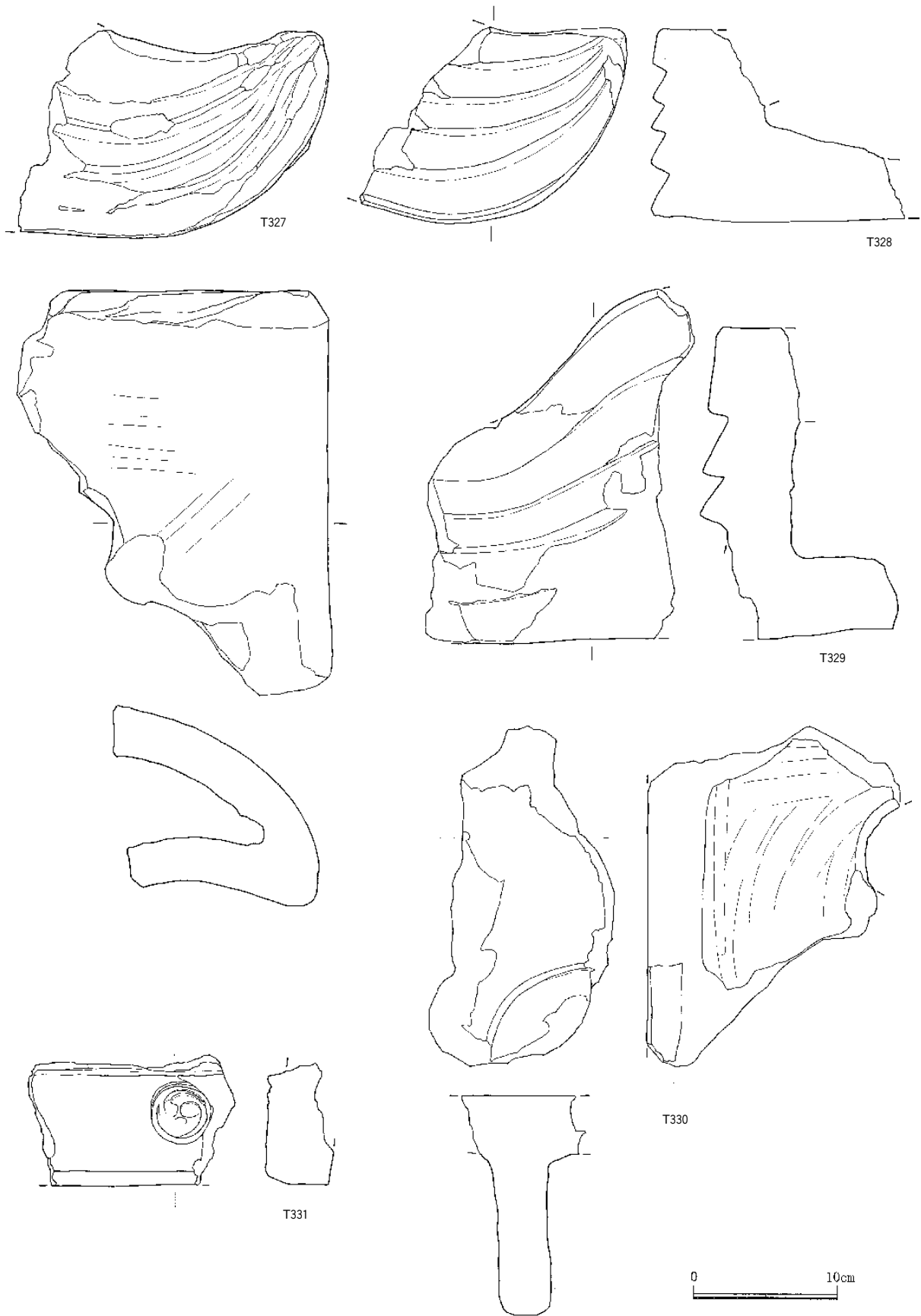
T 335 は一部欠損しているが、鬼面の表情を確認できることができ、范型ではなく、彫り込まれたものと考えられる。内面もナデ調整によって仕上げる。T 337 は表面の剥離が著しいが、鱗状の文様が施されており、鯨を模倣した瓦と考えられる。T 336 は両面ともに表面となるタイプである。

T 338 は「瓦作捨七」とヘラで彫り込まれた文字瓦である。内外面ともに丁寧なナデ調整によって仕上げる。

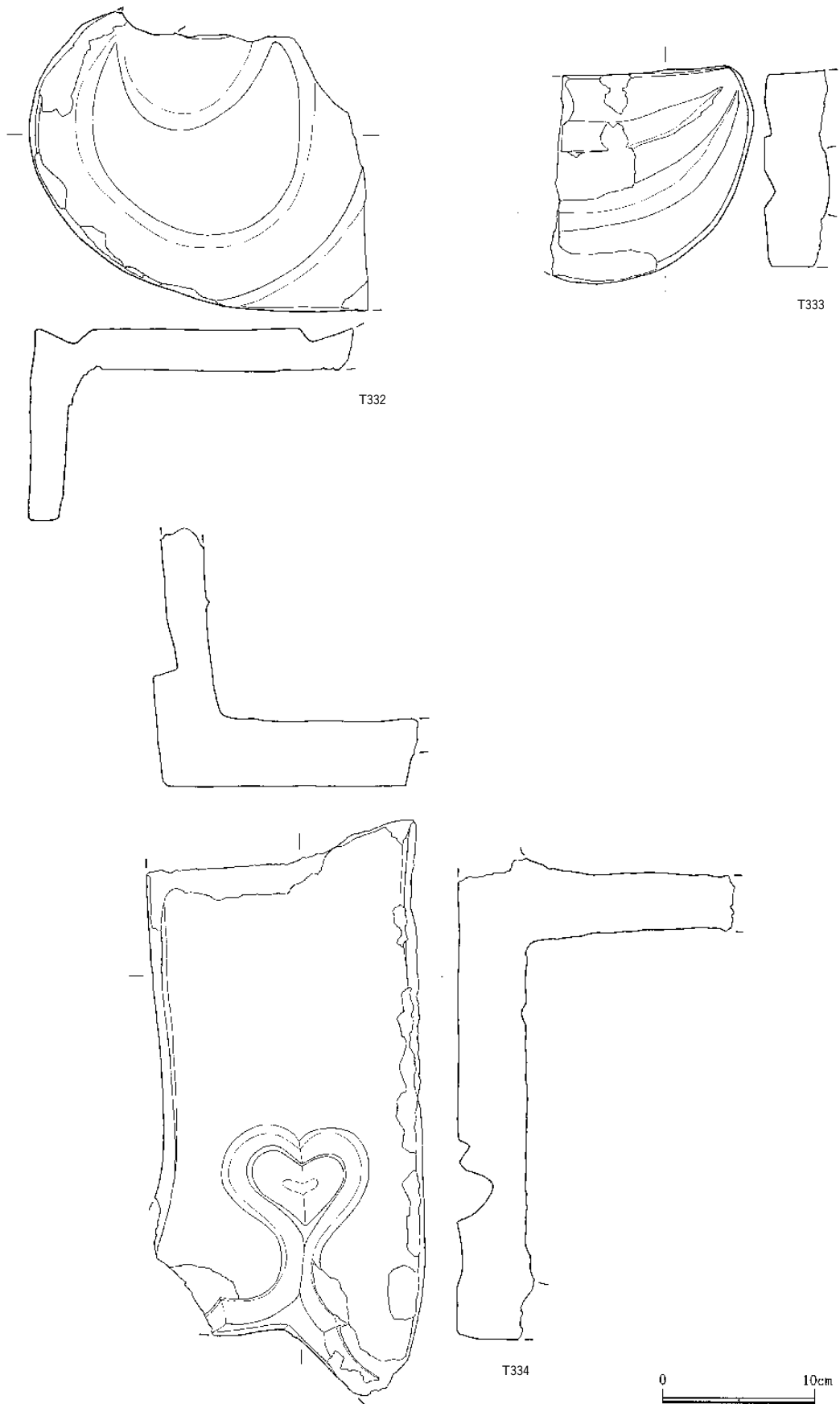
T 339, T 340, T 342 はいずれも三つ葉葵を施したものである。T 342 は陽刻による三葉葵である。裏面には取手状のものがある。



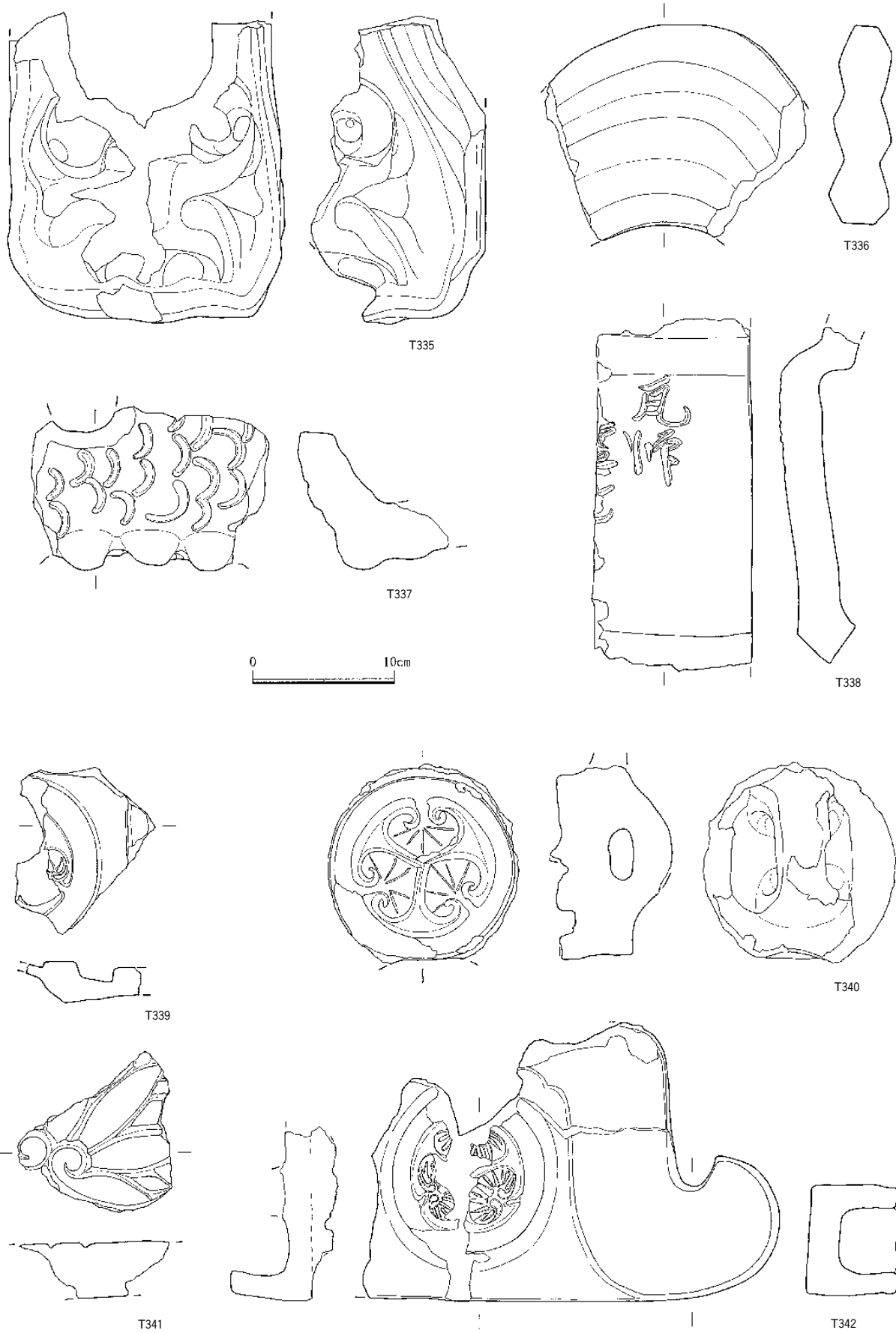
第99図 地下1階中層出土鬼瓦実測図(1)



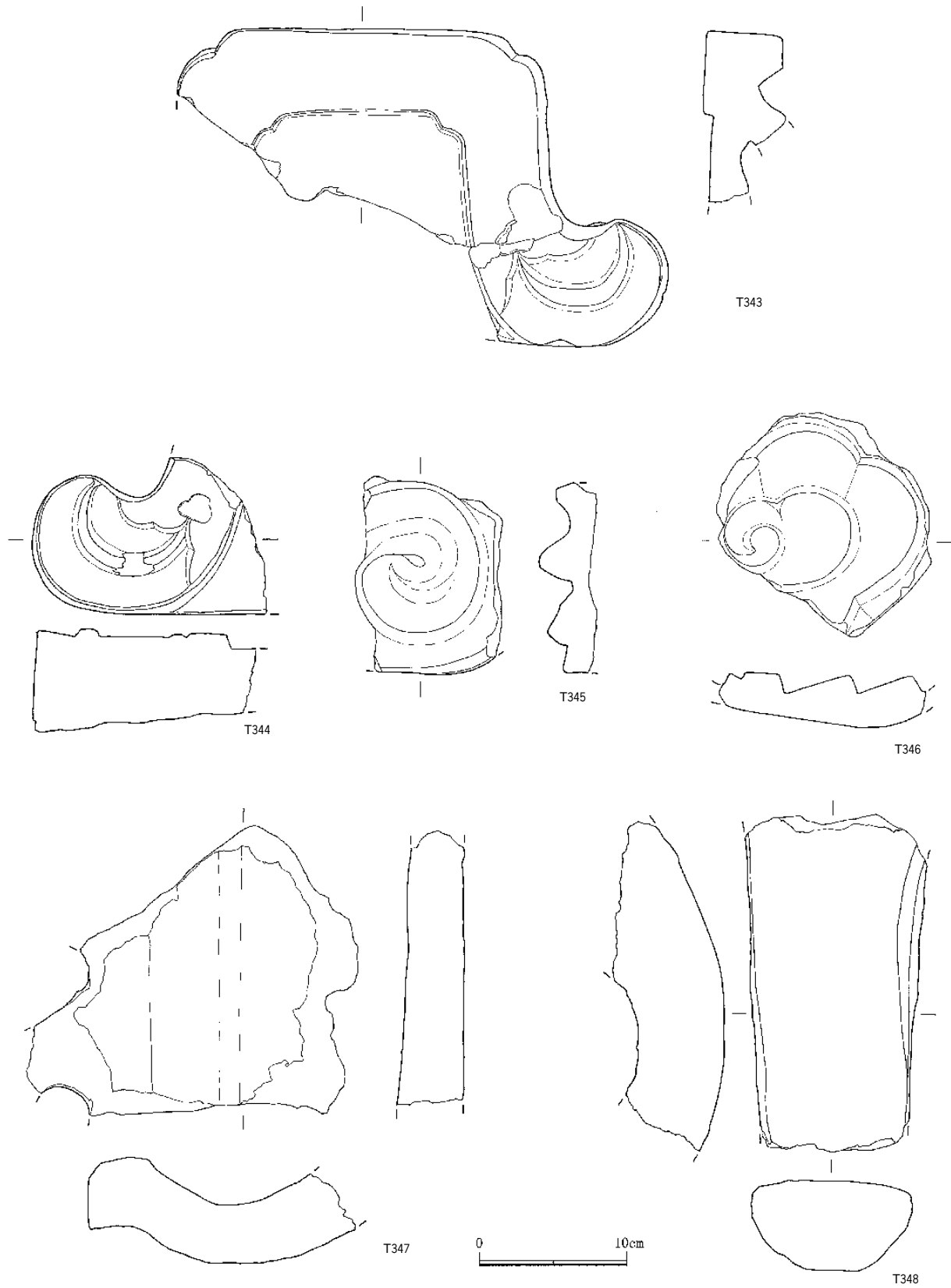
第100図 地下1階中層出土鬼瓦実測図(2)



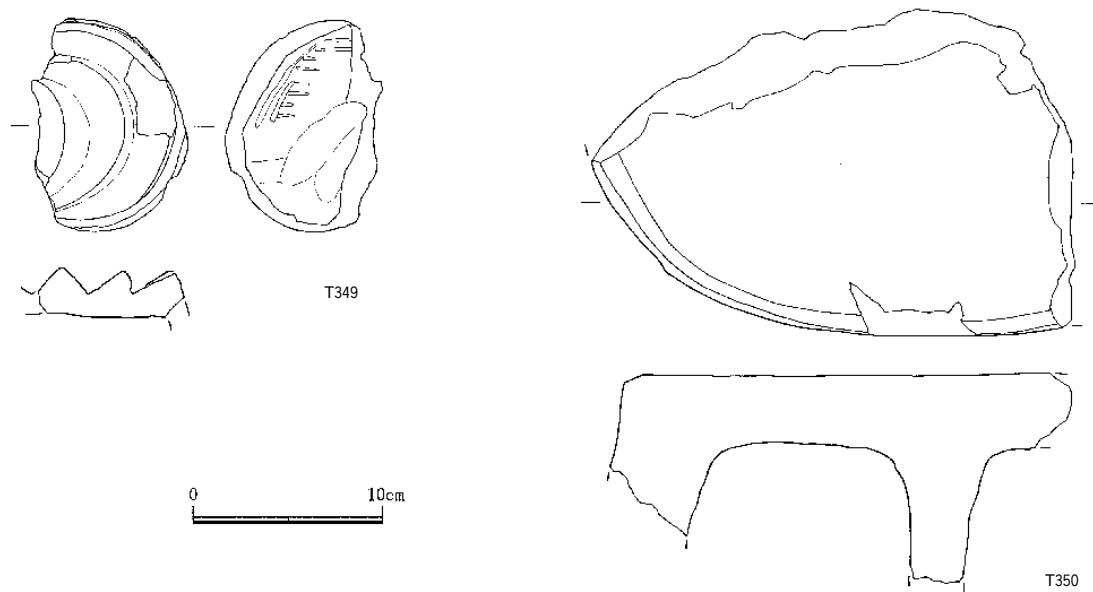
第101図 地下1階下層出土鬼瓦実測図



第102図 地下1階出土層位不明鬼瓦鬼実測図



第103図 玉藻廟基礎部出土鬼瓦実測図(1)



第104図 玉藻廟基礎部出土鬼瓦実測図(2)

サ 小結

廃棄の一括性は担保できるものの、廃棄された瓦は造営から修造までの約300年間の累積の結果によるものであり、編年の基準資料としては適当ではない。ただし、玉藻廟の造営に際して天守台を埋戻す際に天守閣に葺かれていたものをまさに瓦礫をして使用したことは、大型の瓦や多様な棟瓦が多数認められることから首肯できるものである。それゆえ、基本的には天守閣に葺かれていた瓦の総体を反映するものと考えおきたい。

個別事象としても、生駒家の家紋である波引車と考えられる刻印をもつ平瓦、滴水瓦と平瓦に共通する刻印等が確認されたほか、近世初期の軒平瓦と考えられる特徴的な粗い胎土の軒平瓦が出土するなど、近世における造瓦体制等を考える上で非常に興味深い資料と言える。今後、これまでの調査によって周辺施設で出土した瓦類を比較検討し、総括する必要があるだろう。

【参考文献】

井上新太郎 1974 『本瓦葺の技術』 彰国社

香川県教育委員会 1999 『高松城跡』

小林謙一・佐川正敏 1989 「平安時代～近世の軒丸瓦」 『伊珂留我』 法隆寺昭和資材帳編纂所編集
小学館

佐藤竜馬 2003 「瓦」 『高松城跡（西の丸町地区）』 香川県教育委員会

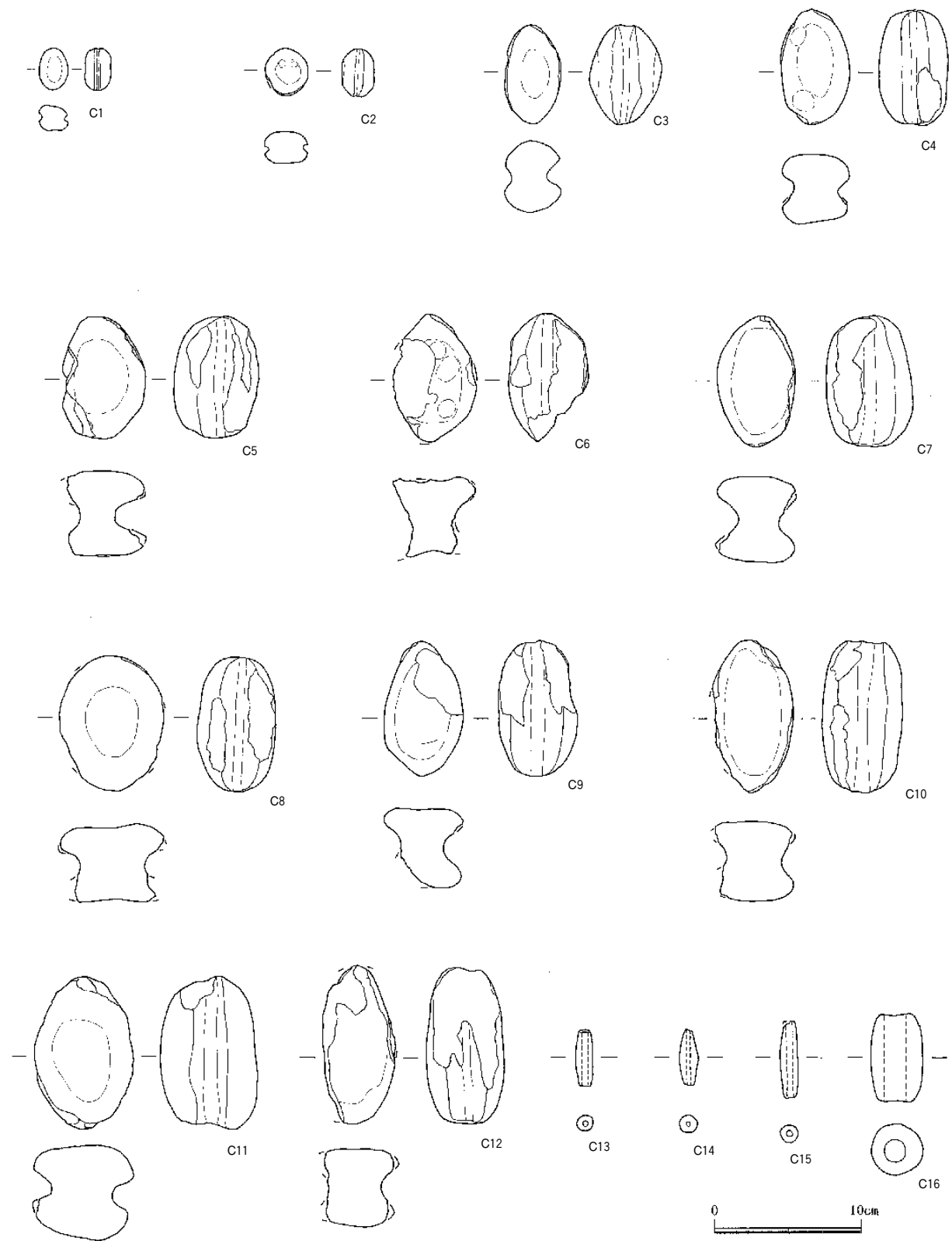
高松市教育委員会 1999 『作事丸』

坪井利弘 1976 『日本の瓦屋根』 理工学社

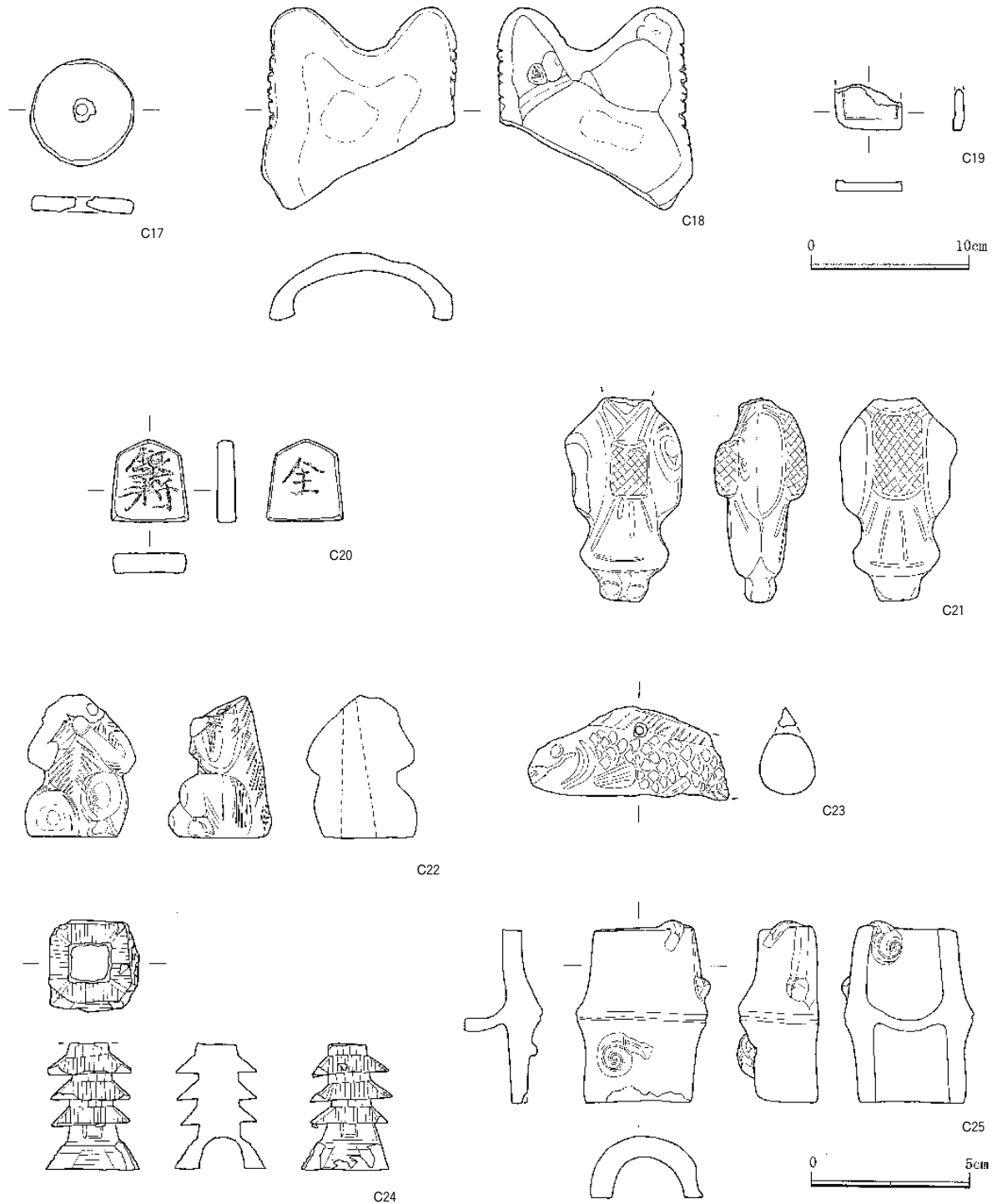
坪井利弘 1977 『図鑑瓦屋根』 理工学社

法隆寺 1992 『法隆寺昭和資材帳』 小学館

真鍋昌宏 1987 「瓦」 『高松城跡東ノ丸跡発掘調査報告書』 香川県教育委員会



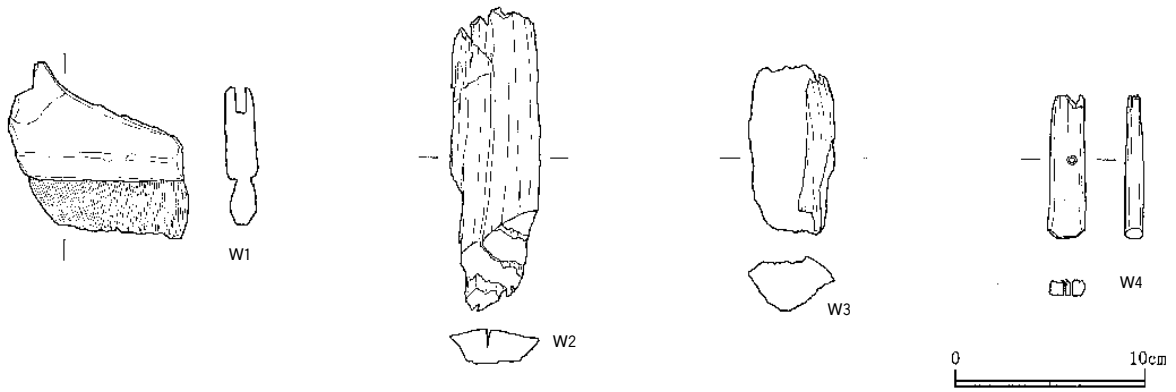
第105図 土製品実測図(1)



第106図 土製品実測図(2)

(4) 土製品 (第105・106図)

C 2, C 4, C 9, C 11, C 12, C 14, C 15, C 17, C 18, C 21, C 22, C 24, C 25は玉藻廟基礎部出土, C 7, C 10, C 20は地下1階上層出土, C 3, C 8, C 16, C 19, C 23は地下1階中層, C 5は地下1階中～下層出土, C 1は出土層不明である。



第107図 木製品実測図

C 1～C 12は有溝土錘である。C 1は全長2.8cmで重量10.6g，C 2は全長3.2cmで重量21.0gの小型の土錘であり，その他の土錘は全長6.7～10.7cmで重量96.9～377.6gを測る一般的な大きさの土錘である。C 13～C 16は管状土錘である。C 13～C 15は全長3.8～5.3cm，径1.2cm，重量4.5～6.9gの小型であり，C 16は全長6.1cm，径3.5cm，重量67.2gの大型の土錘である。

C 17は焼塩壺の蓋を再利用した紡錘車であり，中央に両面から打ち欠いて孔を開ける。表面調整はナデ，裏面は布目である。

C 18は用途不明の土製品であり，面状の形態をなす。

C 19は土製の硯であり，幅4.3cm，厚さ0.7cmである。

C 20は磁器製の将棋の銀将であり，全面に施釉されている。

C 21～C 25は土人形である。C 21は頭部を欠損するが虚無僧であり，C 22は頭部と右手を欠損するが猿と思われ，中央に孔が貫く。C 23は魚であり，背鰭に小さな孔がある。C 24は城の天守であり，3重4階が残る。C 25は用途不明の土製品であり，半截された竹に2匹のカタツムリが這っている。

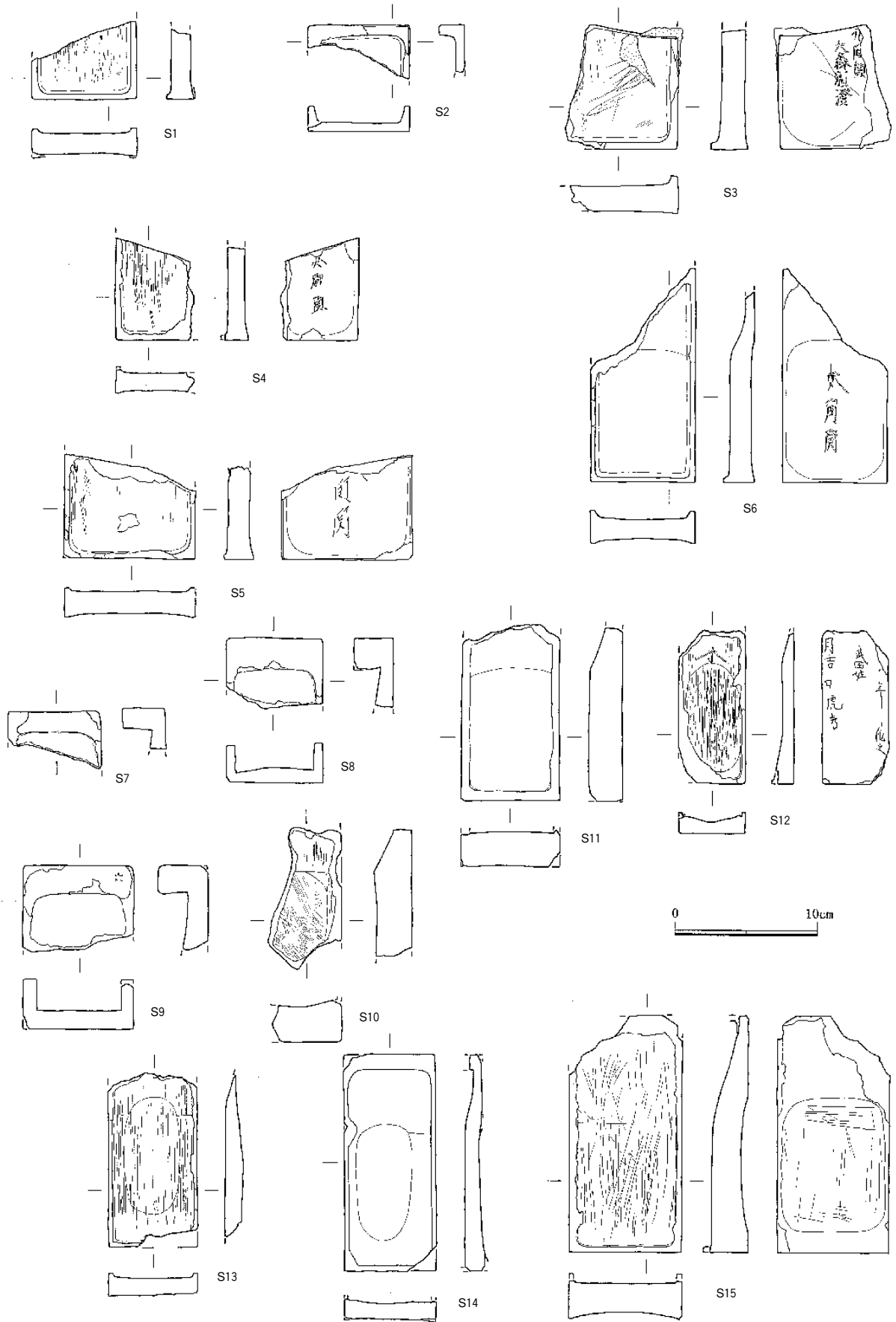
(5) 木製品 (第107図)

W 1は地下1階下層出土の刷毛であり，柄を欠損する。毛の部分の幅は8.2cm，長さは3.0cmであり，木の部分には赤色塗料が残存する。

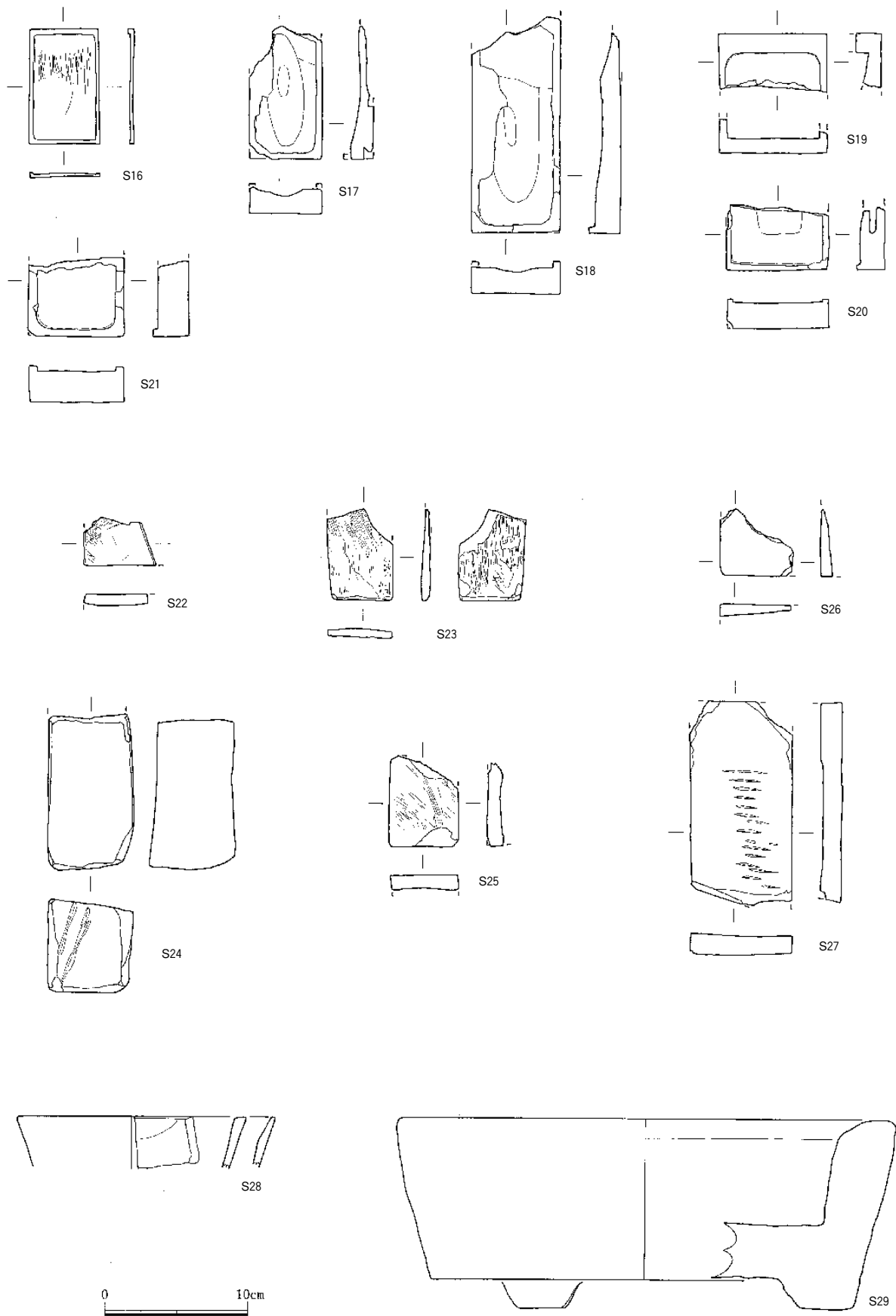
W 2・W 3・W 4は地下1階床面直上出土の加工木であり，W 2とW 3はミカン割りで，W 3には横からの加工が残る。W 4は端部を3方向から加工され，小孔がある。

(6) 石製品 (第108～110図)

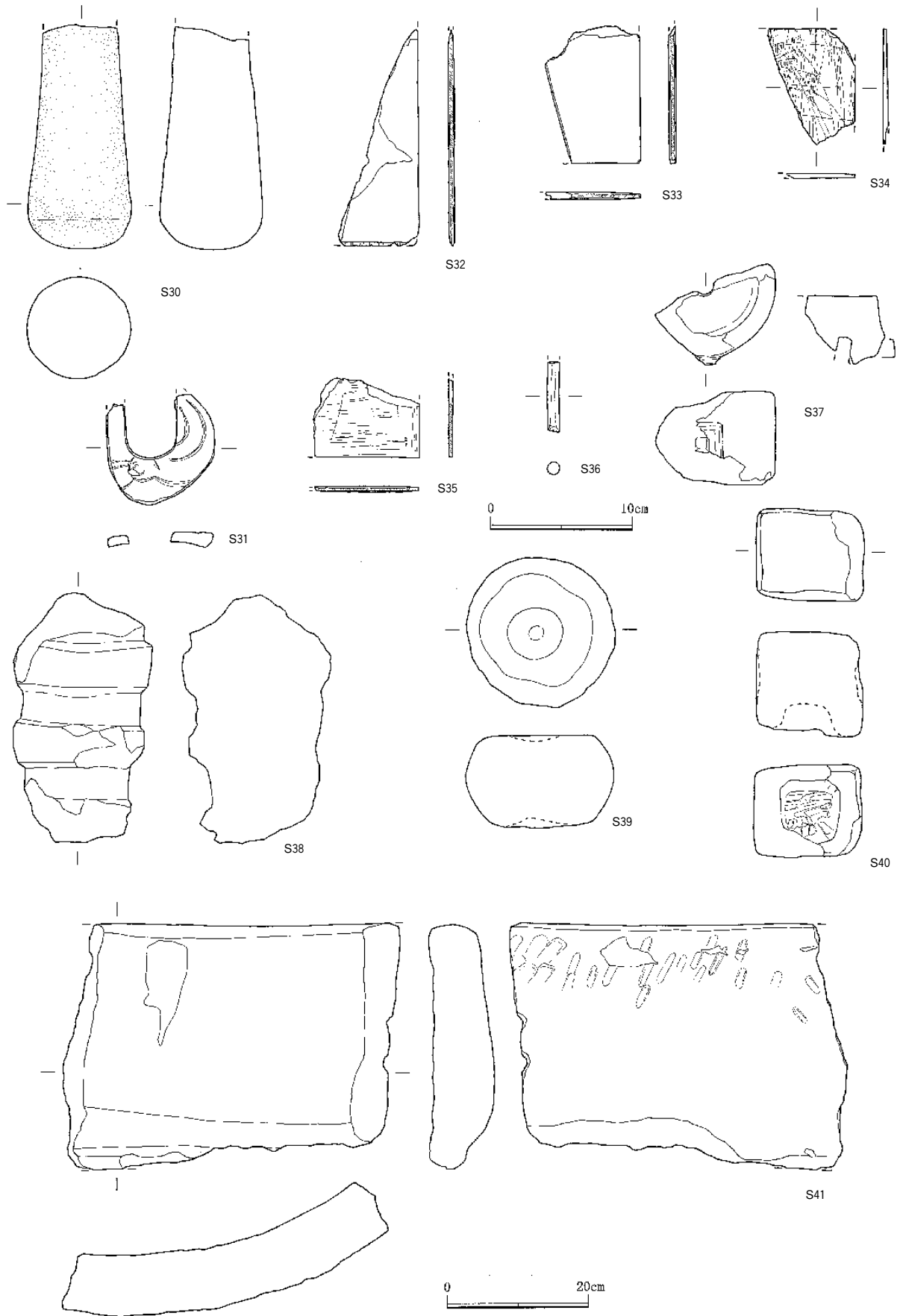
S 1～S 3，S 6，S 12，S 13，S 15，S 16，S 19～S 22，S 27～S 30，S 34～S 36，S 40，S 41は玉藻廟基礎部出土，S 5，S 7，S 8，S 17，S 37は地下1階層位不明，S 18，S 24，S 26，S 39は地下1階上層出土，S 23，S 25，S 31～S 33，S 38は地下1階中層出土，S 4，S 9，S 14は地下1階下層出土である。S 1～S 6は赤間岩製の硯である。S 1は墨堂部であり，硯縁は低い。S 2は墨池部である。S 3は墨堂部であり，裏面に「赤間関大森頼澄」の刻印がある。S 4，S 5は低い硯縁の墨堂の破片であり，裏面に「赤間関」の刻印



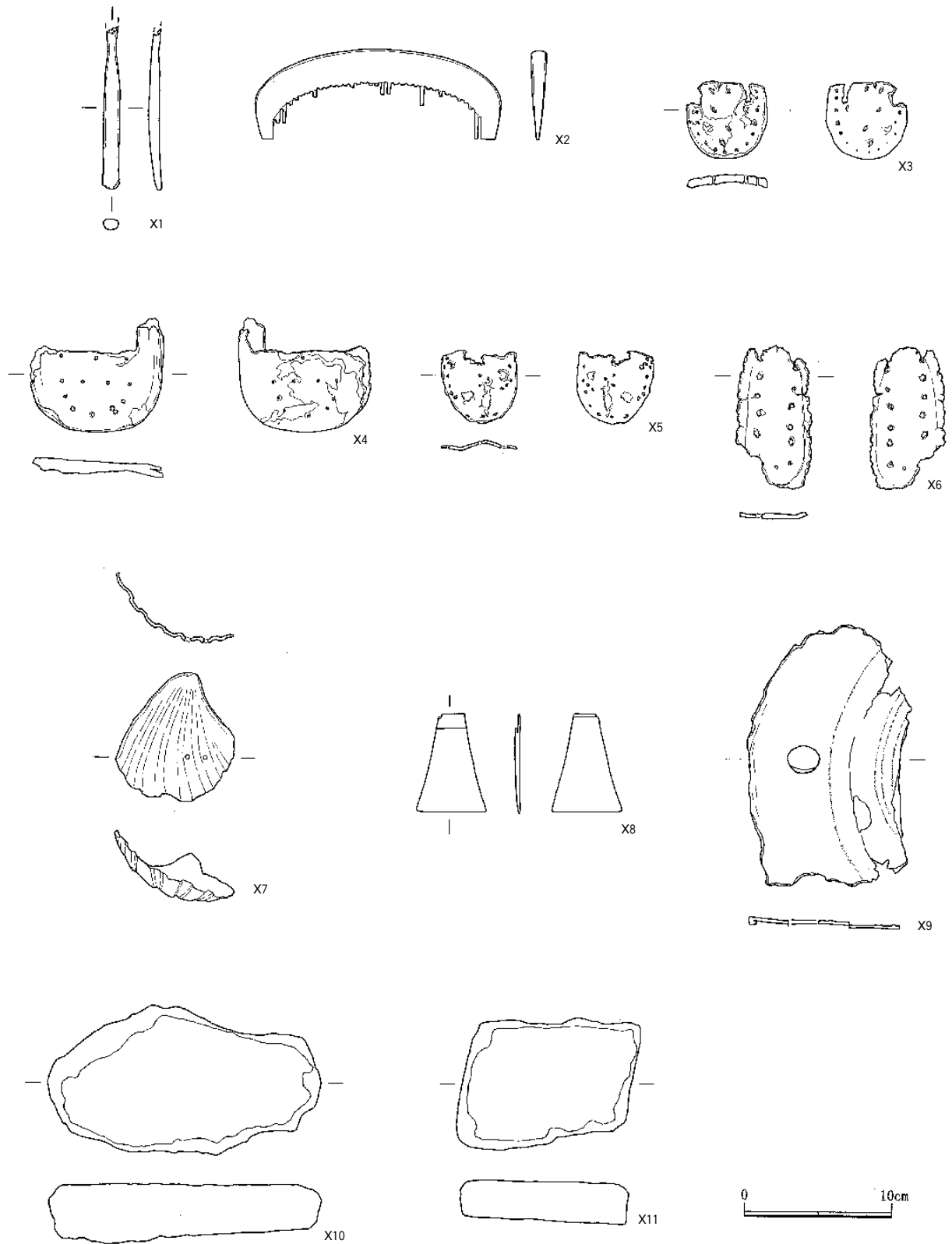
第108図 石製品実測図(1)



第109図 石製品実測図(2)



第110図 石製品実測図(3)



第111図 その他遺物実測図(4)

がある。S 6は墨池の一部を欠損し、裏面に「赤間関」の刻印がある。S 7～S 15は花崗岩製の硯である。S 7～S 9は墨池のみ残存し、S 9は硯縁に「六」の刻印がある。S 10は落潮付近のみ残存する。S 11は硯縁を欠損する。S 12～S 15は緑泥片岩製の硯である。S 12は墨堂の中央が大きく凹んでおり、落潮に「木」の刻印、裏面に「□年□之 武田姓 □月吉日虎秀」の刻印がある。S 13は硯池と裏面を欠損する。S 14は硯縁を欠損し墨堂の角が斜めになる。S 15は硯縁を欠損し、落潮から墨池が広く、裏面はやや凹む。S 16は玄武岩製の硯であり、墨池がなく平坦である。S 17はチャート製の硯であり、墨池と硯縁を欠損し、墨堂の中央が大きく凹む。S 18は安山岩製の硯であり、墨池と硯縁を欠損し、墨堂の中央が僅かに凹む。S 19は玄武岩製の硯の墨池部であり、S 20は軽石製の硯、S 21は凝灰岩製の硯である。

S 22～S 24は砂岩製の砥石であり、S 23は非常に薄く、2面を使用する。S 24は正方形の断面で1面のみを使用する。S 25、S 26は花崗岩製の砥石である。S 27は赤間岩製の砥石であり、角を面取りする。

S 28はチャート製の片口石鍋であり、口径16.0cmを測る。

S 29は凝灰岩製の火鉢であり、低い脚を3個持つと復元できる。

S 30は花崗岩製の磨石であり、端部は非常に滑らかな半球形をなす。

S 31は用途不明であり、石材は安山岩で表面に削痕を有する。

S 32～S 35は粘板岩製の石板であり、表面と裏面と側面には丁寧な擦痕が残る。S 36は蠟石製の石筆である。

S 37は石臼の上石であり、石材は砂岩である。挽き木孔の周囲は3段で高くなっている。

S 38は層塔の相輪部分であり、石材は凝灰岩である。S 39は五輪塔の水輪であり、石材は天霧系の凝灰岩である。上面と下面は窪む。S 40は五輪塔の地輪であり、石材は豊島石である。上面は平坦、下面は中央に明瞭な鑿跡の残る大きく窪みがある。

S 41は円形の井戸杵であり、石材は豊島石である。外面の上端部には鑿跡が多数残る。

(7) その他遺物 (第111図・写真図版90)

X 1～3、X 5、X 6は玉藻廟基礎部出土、X 10、X 11は地下1階上層出土、X 7は地下1階中層出土、X 4は地下1階中～下層出土、X 12は地下1階下層出土、X 8、X 9は地下1階出土層位不明である。

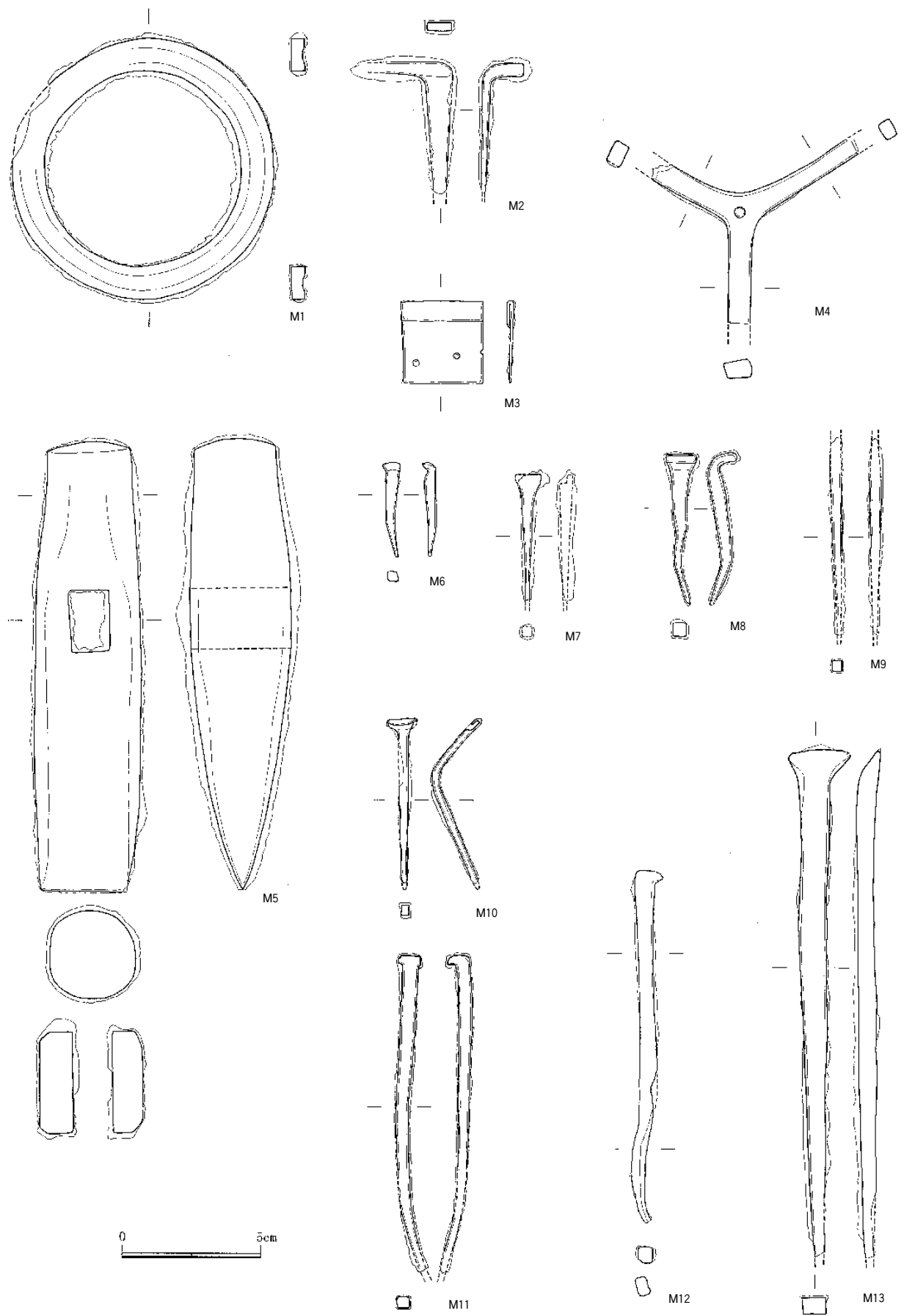
X 1は歯ブラシの柄であり、角製である。柄はやや反り気味であり、先端部にはブラシを装着する穴がある。

X 2は象牙でできた櫛であり、僅かだが歯が残る。

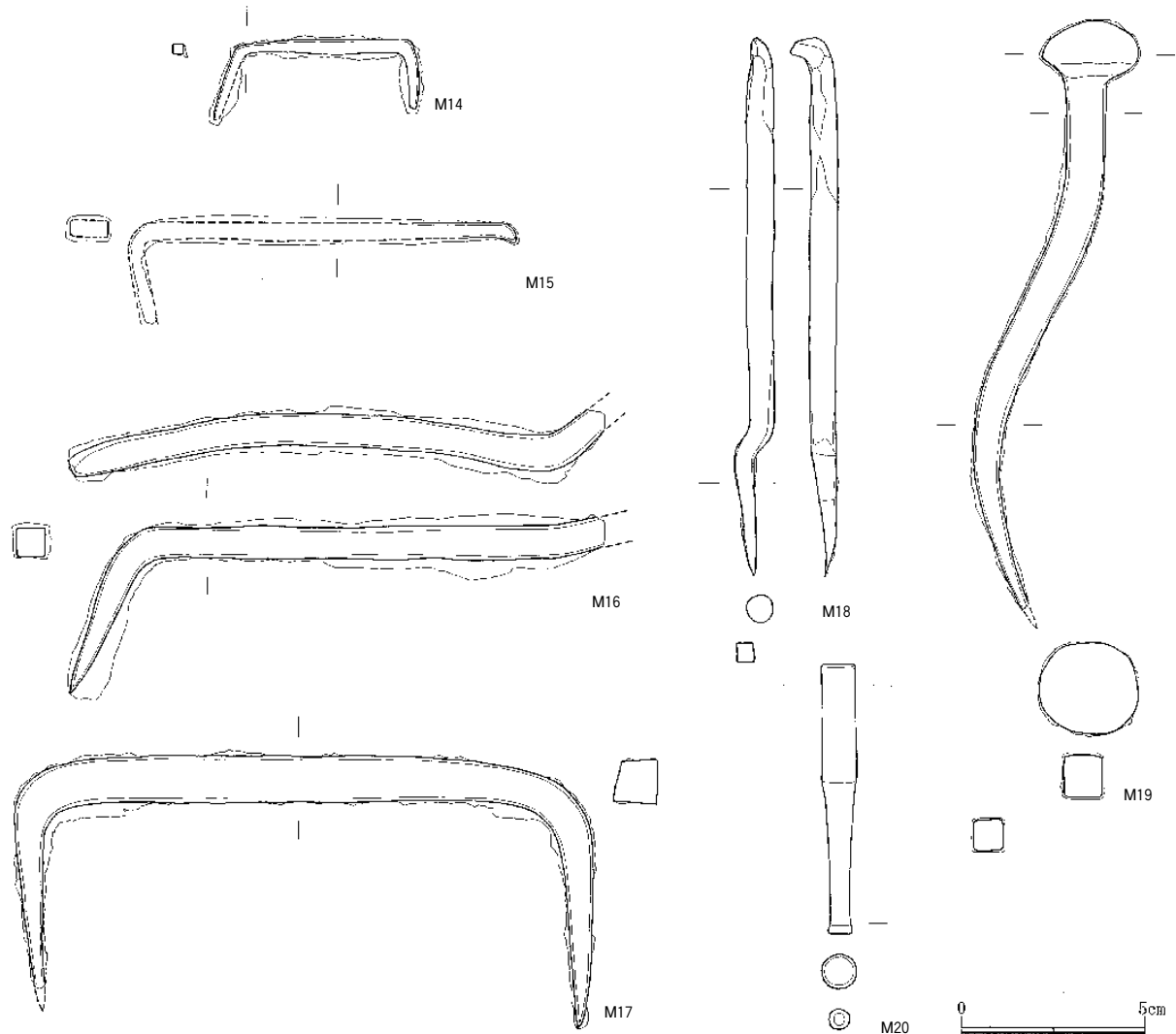
X 3～X 6は革製品の靴底であり、革を留めていた鋌の痕跡が残る。

X 7は貝杓子であり、木製の柄を留める2個の小穴がある。

X 8は象牙でできた三味線のバチである。上端は差し込み式に加工する。



第112図 地下1階上層出土金属器実測図(1)



第113図 地下1階上層出土金属器実測図(2)

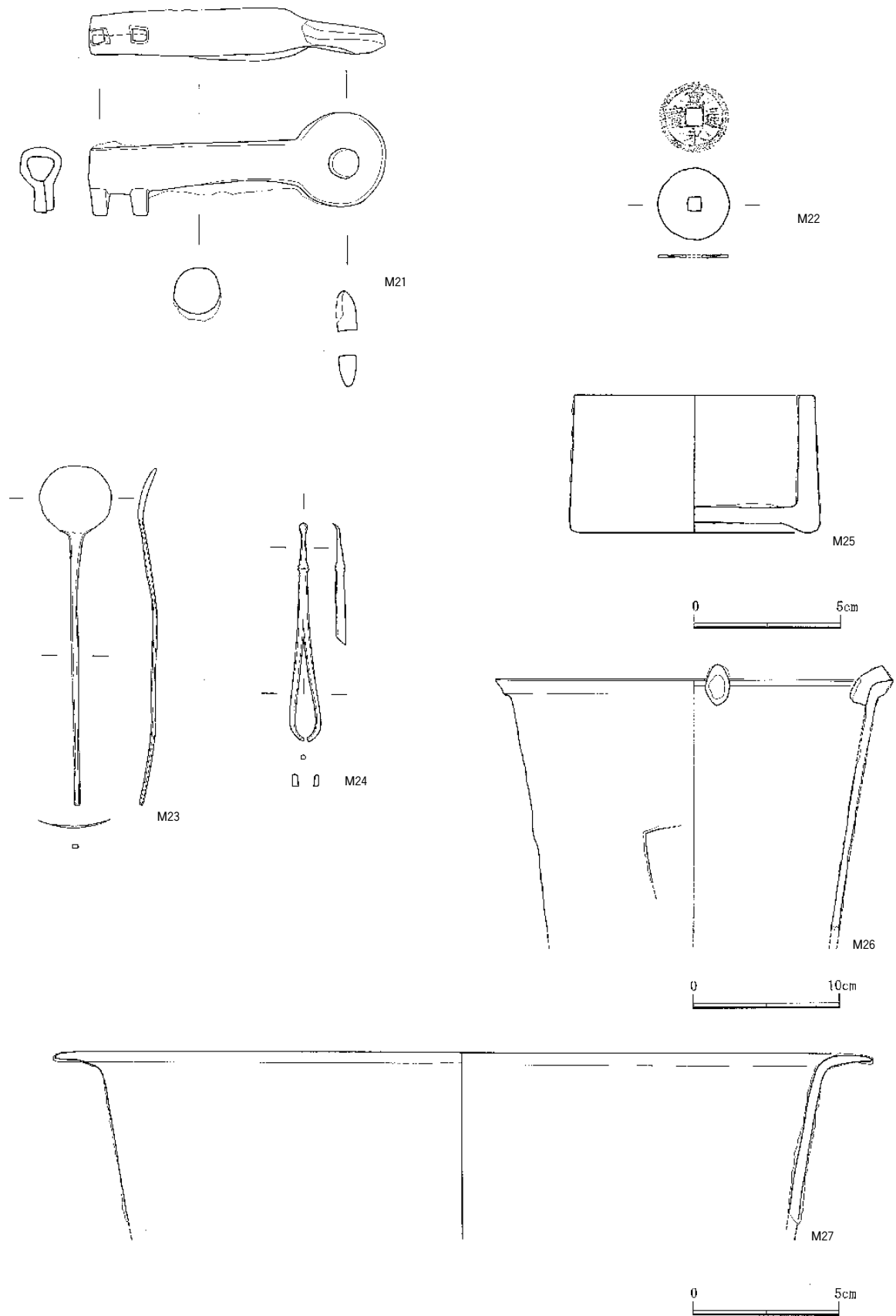
X 9は紙製品である。

X 10, X 11は壁の破片であると考えられる。X 12(写真図版90)は漆喰の塊であり、長さ46cm、幅30cm、厚さ18cmであり、全面にかますの痕が明瞭に残っており、中央が急に細くなっている。この漆喰はかますに入っており、真中を縄で縛られていたと考えられる。

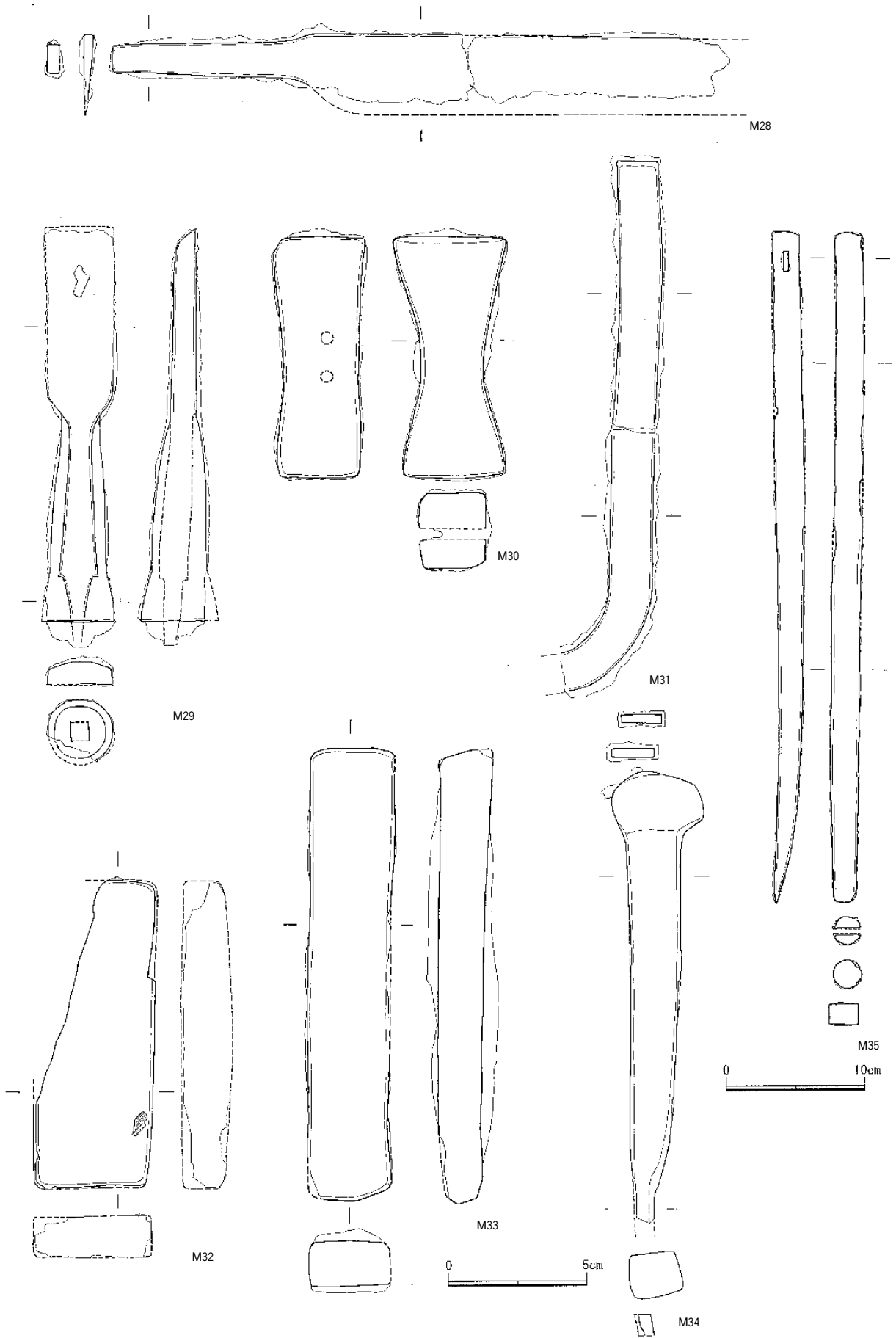
(8) 金属器 (第112～121図)

金属器も土器・瓦と同様の取り上げ区分に準じて報告することとする。M 1～M 20は地下1階上層のなかでも、表層に近い位置(第8図1層～2層)で出土した遺物である。M 23, M 25, M 30, M 31, M 39, M 40, M 46は地下1階上層, M 24, M 27, M 32～M 34, M 38, M 41～M 44, M 47, M 48, M 51～M 53は地下1階中層, M 45は地下1階下層, M 21, M 22, M 36, M 49は最下層で床面の直上, M 26, M 28, M 29, M 35, M 37, M 50は出土層位不明, M 54～M 87は玉藻廟基礎部出土である。

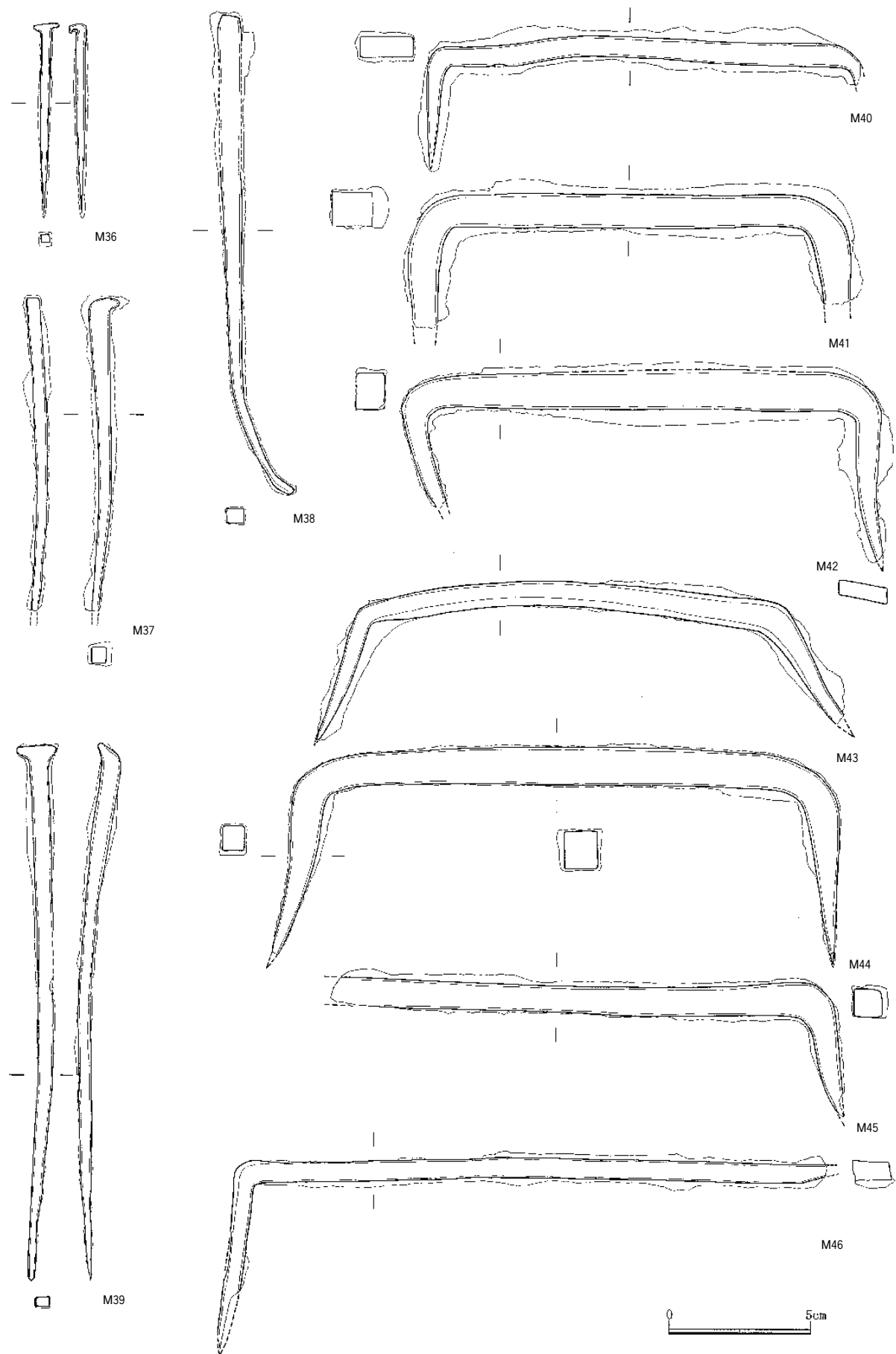
M 1～M 19, M 21, M 22, M 25～M 53, M 61～M 83は鉄製品, M 20, M 23, M 24, M 55～M



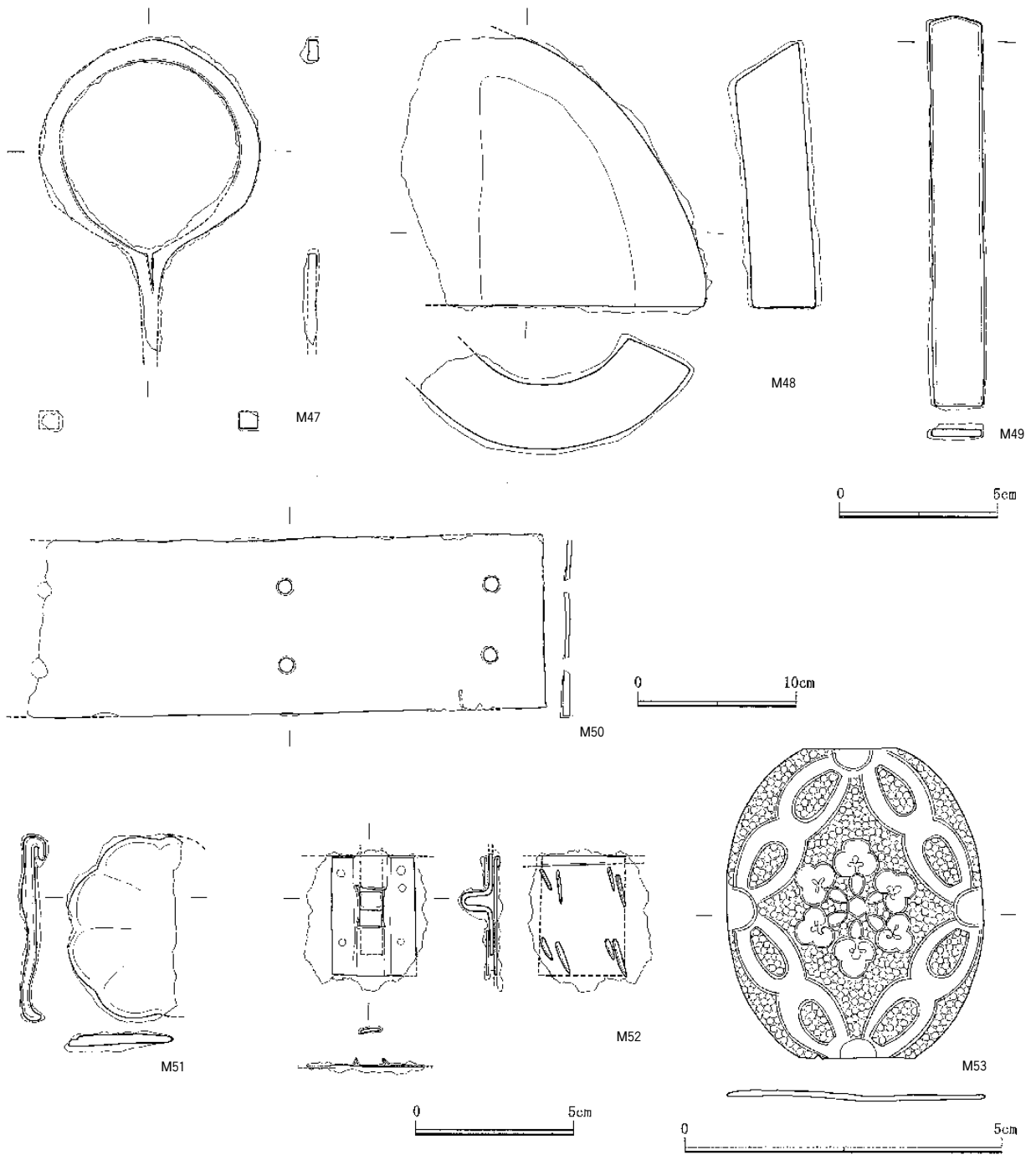
第114図 地下1階出土金属器実測図(1)



第115図 地下1階出土金属器実測図(2)



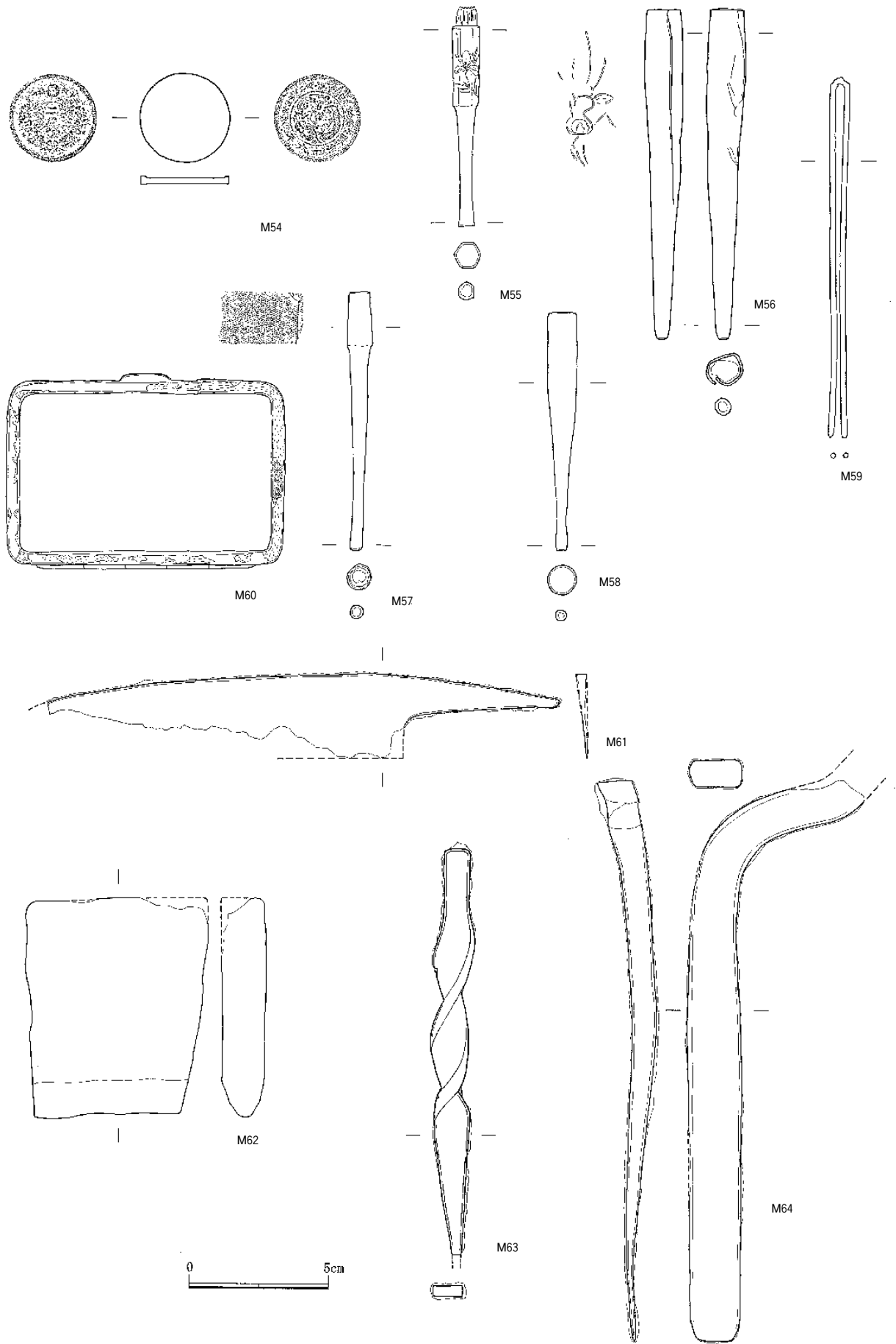
第116図 地下1階出土金属器実測図(3)



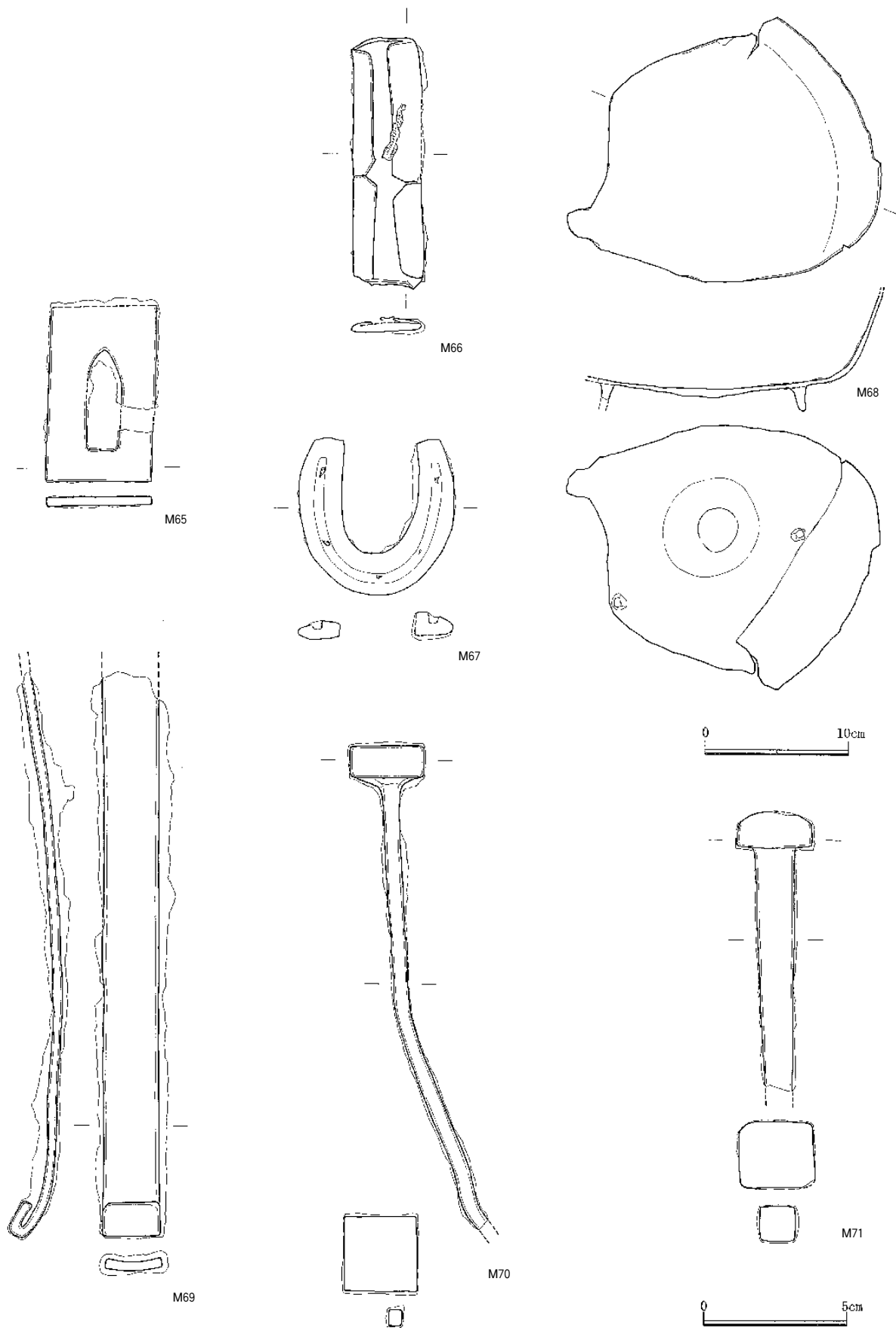
第117図 地下1階出土金属器実測図(4)

59, M 84 ~ M 87 は青銅製品。M 60 は真鍮製品か。

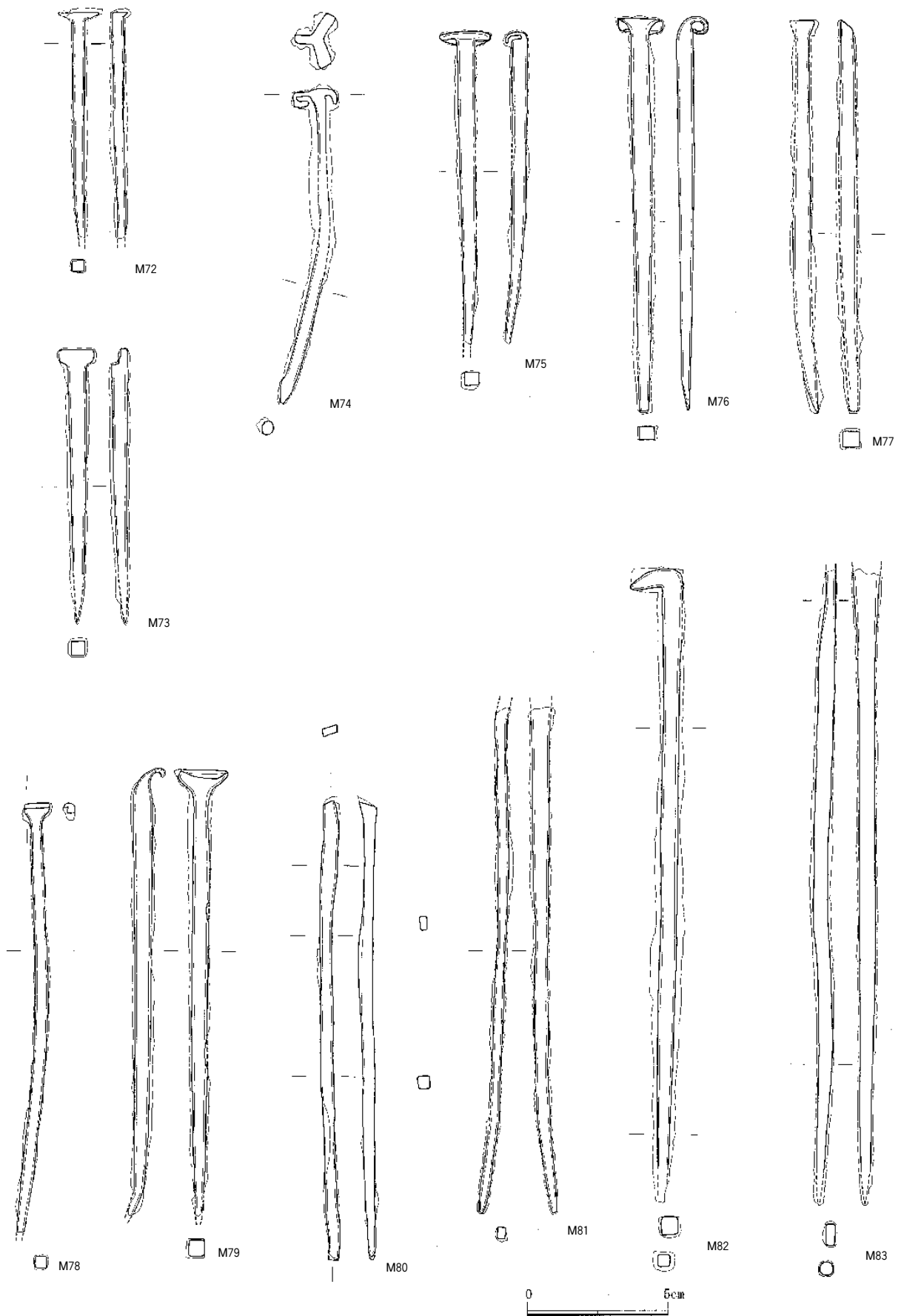
M 1 は環状の不明鉄製品。環部の断面は一部が凹んだ方形を呈す。M 2 はL字の不明鉄製品。図中下部が細くなるため、釘状の用途の可能性。M 3 は飾り金具。薄い板状の部材の一端を折り曲げる。中央に釘孔と見られる円孔を2箇所穿つ。M 4 は不明三叉形鉄製品。中央に円孔を穿つ。M 5 はげんのう。一極に刃部、対極に鋸部を有す。中央には方形の柄の差込み孔をもつ。M 6 ~ M 13, M 18 は釘。M 6 ~ M 10 は小型。M 6 ~ M 8 は頭部が屈曲するものの簡便な屈曲。M 18 はやや大型で、体部が断面円形を呈す。頭部は鍛打で成形する。M 11 ~ M 13 も鍛打で頭部を作り出す。M 14 ~ M 17 は鋸。M 14 は小型, M 19 は大型の釘。頭は球形に仕上げ、刃部は断面方形を呈す。鑄造によるものか。M 20 は円筒形の煙管。M 21 は鍵。環頭形の頭部に、筒型の差込み部。もとは1枚の鉄板から鍛打成形しており、棒状の素材の両端を平板にたたき出し、折り曲げて成形する。特に差込み部は突起部分も鉄板の両端を叩き合わせた痕跡が見える。M 22 は寛永通宝。「永」字の右方に范傷。裏面は無文。M 23 は簪。円形状の頭部は非常に薄く、鍛打による成形か。M 24 は毛抜き。頭部は匙状を呈す。M 25 は椀形の鉄製品。M 26 は不明鉄製品。突起部が10箇所以上あり、火鉢状にして用いていたと推測される。体部中央には方形の孔。M 27 は鉄鍋。M 28 は刀子。M 29 はノミ。関部を有する刃部の部材と、それを覆う袋状の部材とでなる。M 30 は鋸。重厚なつくりで、中央に2欠の円孔を穿つ。M 31 は「J」字状に屈曲する板状鉄製品。M 32 は不明板状鉄製品。鑿の可能性あり。表面に木質が付着。M 33 はノミか。刃部は潰れて鋭利ではない。M 34 は大型の釘。M 19 と同形か。M 35 はパール。頭部は断面円形で、先端にむかって断面方形を呈すように鍛打で仕上げられる。頭部には方形の孔を穿つ。M 36 ~ M 39 は釘。頭部は鍛打で成形する。M 40 ~ M 46 は鋸。M 47 は環状の不明鉄製品。棒状の部材を折り曲げて環状に成形し、一部突起として残す。M 48 は不明鉄製品。半裁した筒形を呈す。M 49 は不明板状鉄製品。薄く、建築部材の一部か。M 50 は板状鉄製品。10cm おきに2孔ずつ、合わせて6孔が残る。M 51 は花卉状の飾り金具。M 52 はスイッチ状の部材。地板、覆板と突起状の部材の3枚を重ね合わせる。裏面には釘痕が8箇所で見え、壁等に固定するためのものであると考えられる。M 53 は飾り金具。薄い平板の表面に、直径1mm以下の敲打による円形文を一面に施し、その後「8」字状の文様を押し、最後に中央の花卉部を押圧する。裏面には施文はないが、表面の押圧の痕跡が確認できる。M 54 は明治16年の二銭硬貨。表面には「五十枚換一圓」「二銭」、裏面には「大日本・明治十六年・NES 2」の銘。M 55 は六角形の煙管。筒部に花卉状の陰刻。先端に木質部材が一部残存している。M 56 は筒部に花卉状の刻印を施した煙管。板状の部材を折り曲げて筒部を成形。内面には木質が残存する。M 57 は筒部に梨地に斜格子文を施した煙管。筒部は板状の部材を折り曲げて成形。内面に有機質が残存している。M 58 は無文の煙管。M 59 は「つ」字状に屈曲した簪。表面に塗銀の痕跡。M 60 はがま口の部材か。複数の部材を組み合わせて作られる。図中右側には研磨痕が見られる。研磨後に木材を貼り付け、使用したようであり、木質が残存する。図中下半には、開閉用の蝶番が確認できる。M 61 は庖丁。刃部が大きく欠損する。M 62 は鑿。にぶい刃部をもち、方形を呈す。M 63 は捻じりのついた棒状鉄製品。M 64 はバー



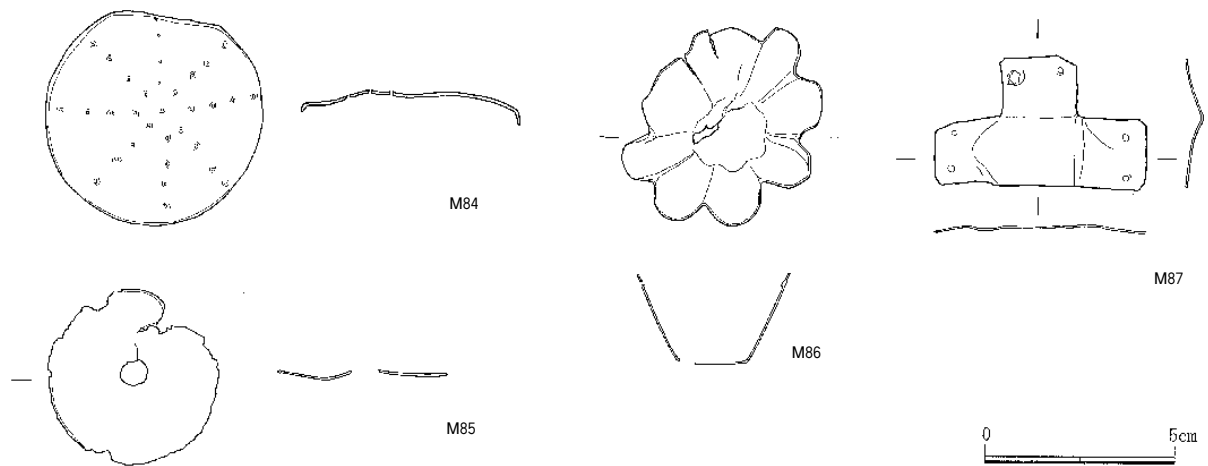
第118図 玉藻廟基礎部出土金属器実測図(1)



第119図 玉藻廟基礎部出土金属器実測図（2）



第120図 玉藻廟基礎部出土金属器実測図（3）



第121図 玉藻廟基礎部出土金属器実測図（4）

ル状工具の先端か。先端に向かい鋭利になる。体部中位の屈曲が本来の形状かどうかは不明。M 65 は不明板状鉄製品。中央に砲弾形の孔を有す。M 66 は不明板状鉄製品。板状の素材を中央に向かい折り曲げる。一部木質が付着。折り曲げ部は薄く延ばし、板状の素材の縁辺部を鍛打で薄く叩き延ばしたものと考えられる。M 67 はU字の不明鉄製品。外方に向かって先端が鋭利になるため、工具の可能性も考えられる。M 68 は鉄鍋の底部。2箇所脚が残存しており、本来は3脚で支える構造であると考えられる。M 69 は不明板状鉄製品。薄く、先端が巻き込むように屈曲する。一部釘の可能性が観察できるため、建築部材の一部か。M 70・M 71 は大型の釘。頭部・刃部ともに断面方形を呈す。M 72～M 83 は釘。頭部は基本的に鍛打による折り曲げにより成形する。薄く鍛打し、折り曲げるものと、棒状のまま厚く折り曲げるものが認められる。M 74 は頭部が三叉状に分かれた釘である。

M 84 は円形の飾り金具か。円を8等分するように小さな円孔を直線的に配置する。円孔は図中の下面から上面に向かって穿たれる。M 85 は円形の飾り金具か。中央に円孔。M 86 は花卉形の椀状を呈する飾り金具。2箇所に釘孔の痕跡があり、うち1箇所は未貫通である。M 87 は凸字状の飾り金具である。立方体の部材を包むように用いられたと考えられる。各突出部に2箇所ずつの円孔を穿つ。

(9) 貝殻 (写真図版 85)

天守地下1階から多量の貝殻が出土したが、発掘調査の時点で任意に遺存状態の良い10点のみ抽出した。出土層位は不明である。K 1, K 2 はアカニシ, K 3 はサザエ, K 5 はナガニシ, K 6 はカキ, K 7, K 8 はアサリ, K 9 はハマグリ, K 10 はハイガイである。K 1～K 3 は殻口に対してほぼ反対側に破壊された痕跡がみられ、これらは壺焼きされたと考えられる。

K 1 は殻径 11.8cm, 殻高 14.4cm を測る大型のアカニシであり、殻口に対してほぼ反対側に2箇所の打割痕がみられる。K 2 は殻径 4.7cm, 殻高 5.9cm を測る小型のアカニシであり、殻口に対してほぼ反対側に打割痕がみられる。

K 3 は残存殻径 5.9cm, 残存殻高 6.2cm を測り、殻口に対してほぼ反対側に打割痕がみられる。

K 4は残存殻径 6.7cm, 殻高 11.7cm を測り, 明確な加工痕はみられない。

K 5は殻径 3.8cm, 殻高 7.7cm を測り, 明確な加工痕はみられない。

K 6は殻高 9.7cm, 殻長 8.4cm を測る下殻であり, 明確な加工痕はみられない。

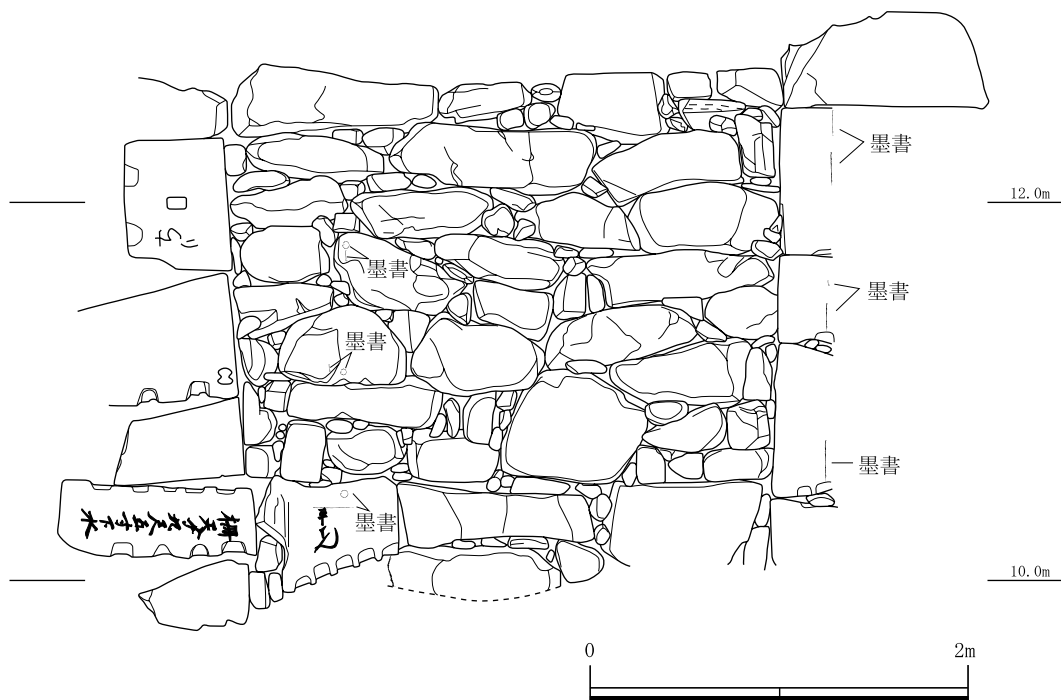
K 7は殻高 6.2cm, 殻長 7.0cm, 殻幅 3.8cm を測る大型のアサリの左殻であり, 明確な加工痕はみられない。K 8は殻高 3.1cm, 殻長 3.6cm, 殻幅 1.8cm を測る小型のアサリの右殻であり, 明確な加工痕はみられない。

K 9は小型のハマグリ of 右殻であり, 殻高 3.4cm, 殻長 3.3cm, 殻幅 2.2cm を測り, 明確な加工痕はみられない。

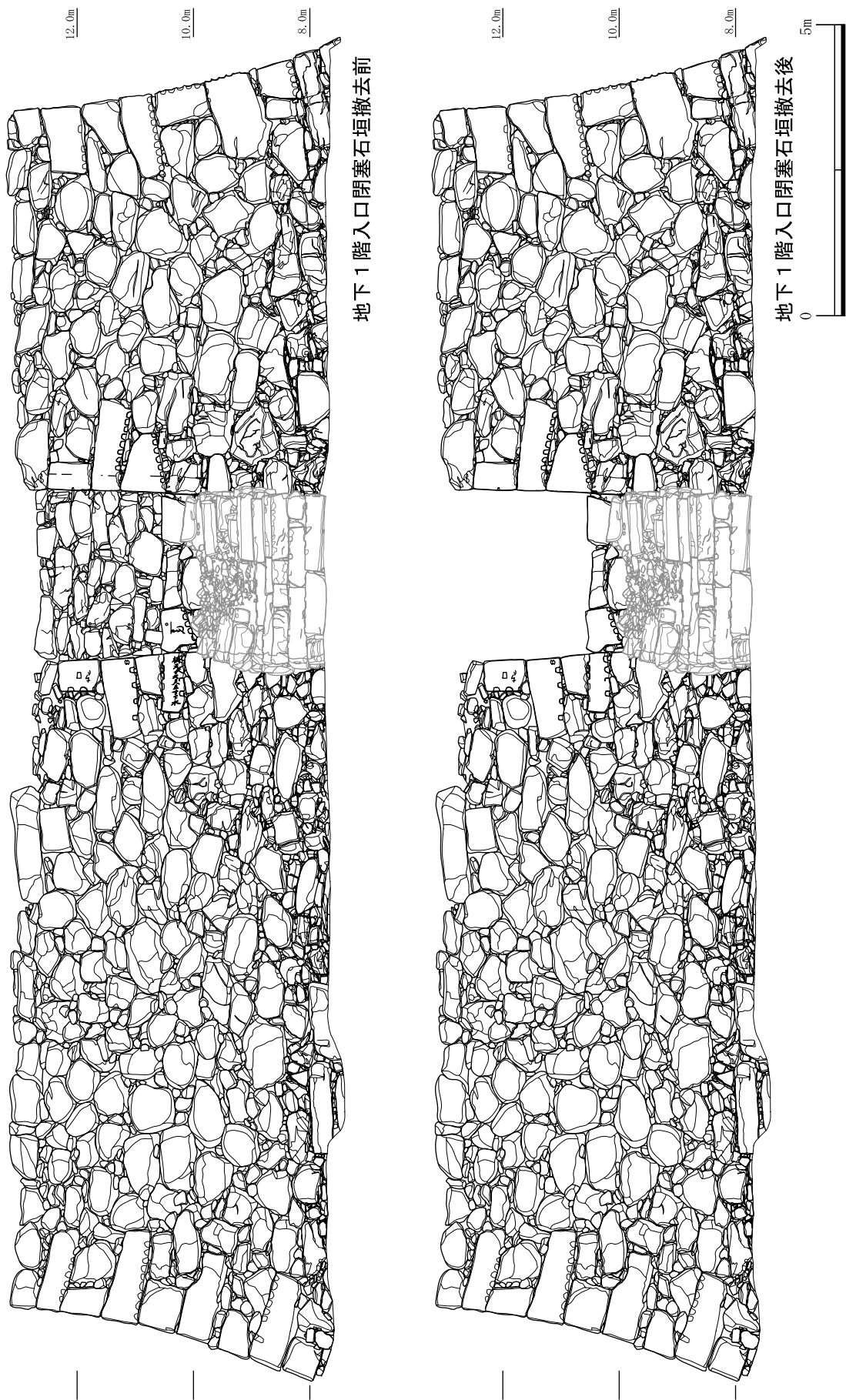
K 10はハイガイの右殻であり, 殻高 3.3cm, 殻長 2.8cm, 殻幅 3.2cm を測る。明確な加工痕はみられない。

3 地下1階入口の閉塞石垣 (第122・123図)

玉藻廟建設に伴い天守地下1階を埋立てる際に天守の入口を塞いだ石垣である。入口は天守台の西側石垣の中央南寄りに開口しており, 入口中央は南端上部より約 8.30 m 北側に位置する。上端部の幅は 2.95 m, 下端幅は 2.80 m, 高さ約 2.20 m を測る。勾配は天守台の西側石垣の上部と同一の 82 度である。石の積み方は花崗岩・安山岩の野面石を用いた布積みであり, 積んだ段数は 7 段である。築石の石材は方形で角張ったものが多い, 最も大きい石は 1.10 m を測り, 規模はやや大振りのものが多い。間詰石は花崗岩・安山岩の丸みのある小石を用いる。裏込めの石はなく, 裏側は天守地下1階と同様に土砂で埋立てている。



第122図 天守地下1階入口の閉塞石垣立面図



第123図 天守G面入口閉塞石垣立面図

この石垣と入口北側と南側石垣と入口礎石には墨書の文字や記号が見られた。上から4段目の左側から2石目の築石, 5段目の左側から2石目の築石には縦方向の一直線上に「○」と「-」の墨書が書かれていた。また, 入口左袖下部にある花崗岩の築石には「柵天守九尺五寸下水」の墨書による文字が書かれていた。さらに入口北側の礎石にある「○」の5cm下に水平方向の直線が22cmの長さに書かれ, その下に「平基」の墨書による文字が書かれていた。入口南側石垣の上から2~4石目の築石には縦方向の直線がみられる。これらの「○」や直線や文字は, この石垣が完成してから玉藻廟に登る階段が設置されるまでの間に書かれており, 玉藻廟建設に伴う何らかの基準線である可能性が考えられる。

4 ピット・土坑 (第124~128図)

玉藻廟基礎である石垣を取り除いた天守地下1階の床面において18基の小規模なピットと4基の土坑を検出した。検出面である床面の標高は10.20~10.30mである。これらの遺構は天守入口部分を除いた地下1階の全域で検出しているが, 特に北東側に集中する。これらの遺構は礎石や掘立柱跡などの天守の内部構造を解明する上で重要な遺構と同一の天守地下1階の床面を掘り込んでいるが, 遺構の切り合いや出土遺物から判断すると, これらの遺構は天守が取り壊された明治17年から玉藻廟が建設された明治35年の間に掘り込まれた遺構であると考えられる。

SP1 (第124図)

北東隅において検出したピットであり, 規模は直径0.24mを測る不整な円形を呈する。深さは0.10mである。埋土は黄灰色細砂である。遺物は出土していない。

SP2 (第124・128図)

北東隅において検出したピットであり, 規模は0.59×0.25mを測る不整な三角形を呈する。深さは0.08mである。埋土は黄灰色細砂である。

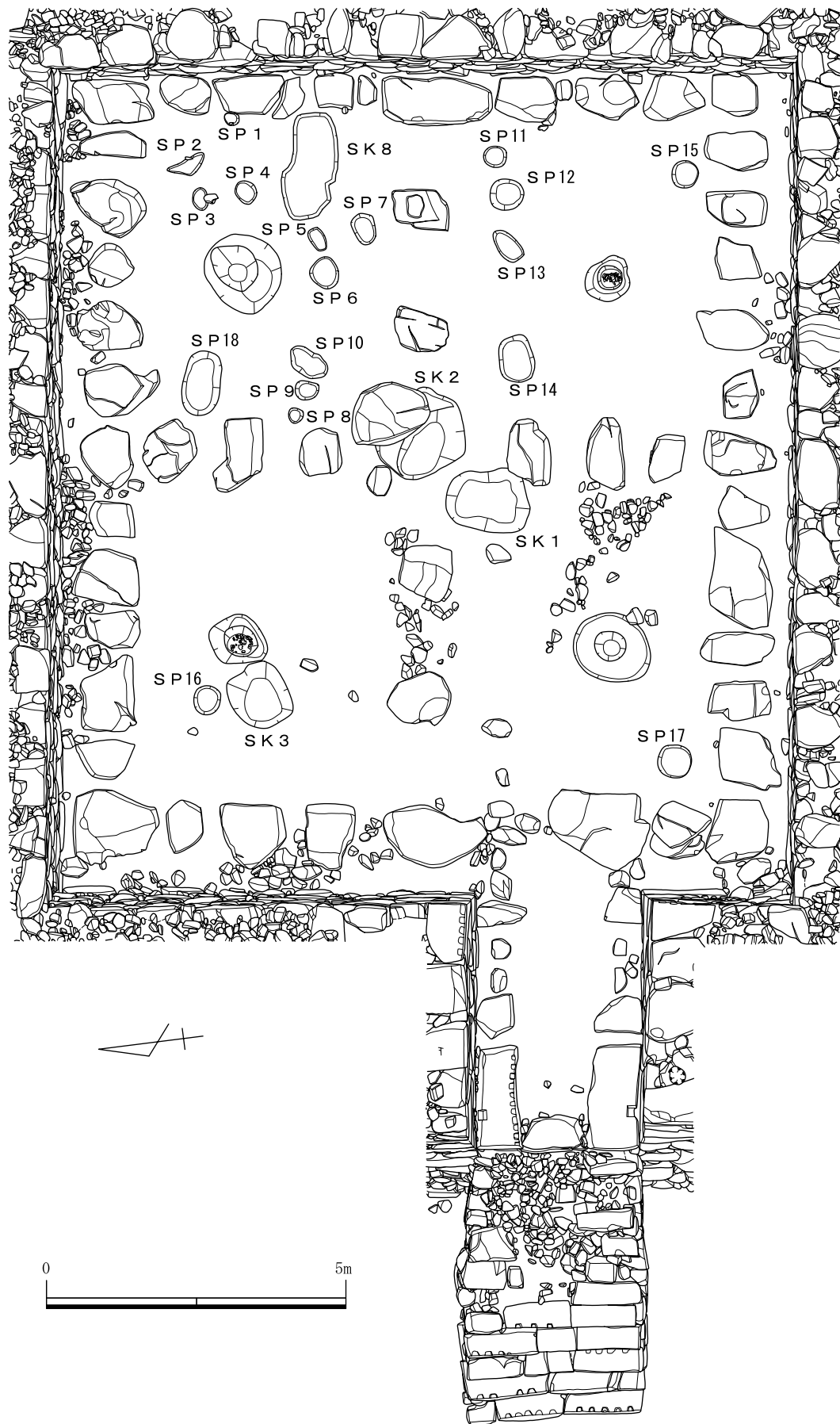
遺物は管状土錘(C26)である。

SP3 (第124図)

北東隅において検出したピットであり, 規模は0.33×0.25mを測る楕円形を呈する。深さは0.04mである。埋土は黄灰色細砂・褐灰色細砂である。遺物は出土していない。

SP4 (第124図)

北東隅において検出したピットであり, 規模は直径0.33mを測る不整な円形を呈する。深さは0.07mである。埋土は褐灰色細砂である。遺物は出土していない。



第124図 天守地下1階遺構検出(近代以降)

SP5 (第124図)

北東隅付近において検出したピットであり、規模は0.46×0.24 mを測る楕円形を呈する。深さは0.03 mである。埋土は黄灰色細砂である。遺物は出土していない。

SP6 (第124・128図)

北東隅付近において検出したピットであり、規模は0.55×0.42 mを測る楕円形を呈する。深さは0.10 mである。埋土は黄褐色細砂・浅黄色細砂である。

遺物は土師質土器杯(478)、黒色土器椀(479)、である。

498は口縁部の破片であり、口縁端部はやや細くなる。479は高台を有する底部であり、内面のみ黒色処理する。

SP7 (第124図)

北東隅付近において検出したピットであり、規模は0.74×0.40 mを測る楕円形を呈する。深さは0.04 mである。埋土は黄褐色細砂・浅黄色細砂である。遺物は出土していない。

SP8 (第124図)

中央やや北東側において検出したピットであり、規模は直径0.22 mを測る不整な円形を呈する。深さは0.10 mである。埋土は黄褐色細砂・浅黄色細砂である。遺物は出土していない。

SP9 (第124図)

中央やや北東側において検出したピットであり、規模は0.34×0.24 mを測る不整な円形を呈する。深さは0.02 mである。埋土は淡黄色シルト質極細砂である。遺物は出土していない。

SP10 (第124図)

中央やや北東側において検出したピットであり、規模は0.68×0.42 mを測る円形を呈する。深さは0.12 mである。埋土は黄褐色細砂・浅黄色細砂である。遺物は出土していない。

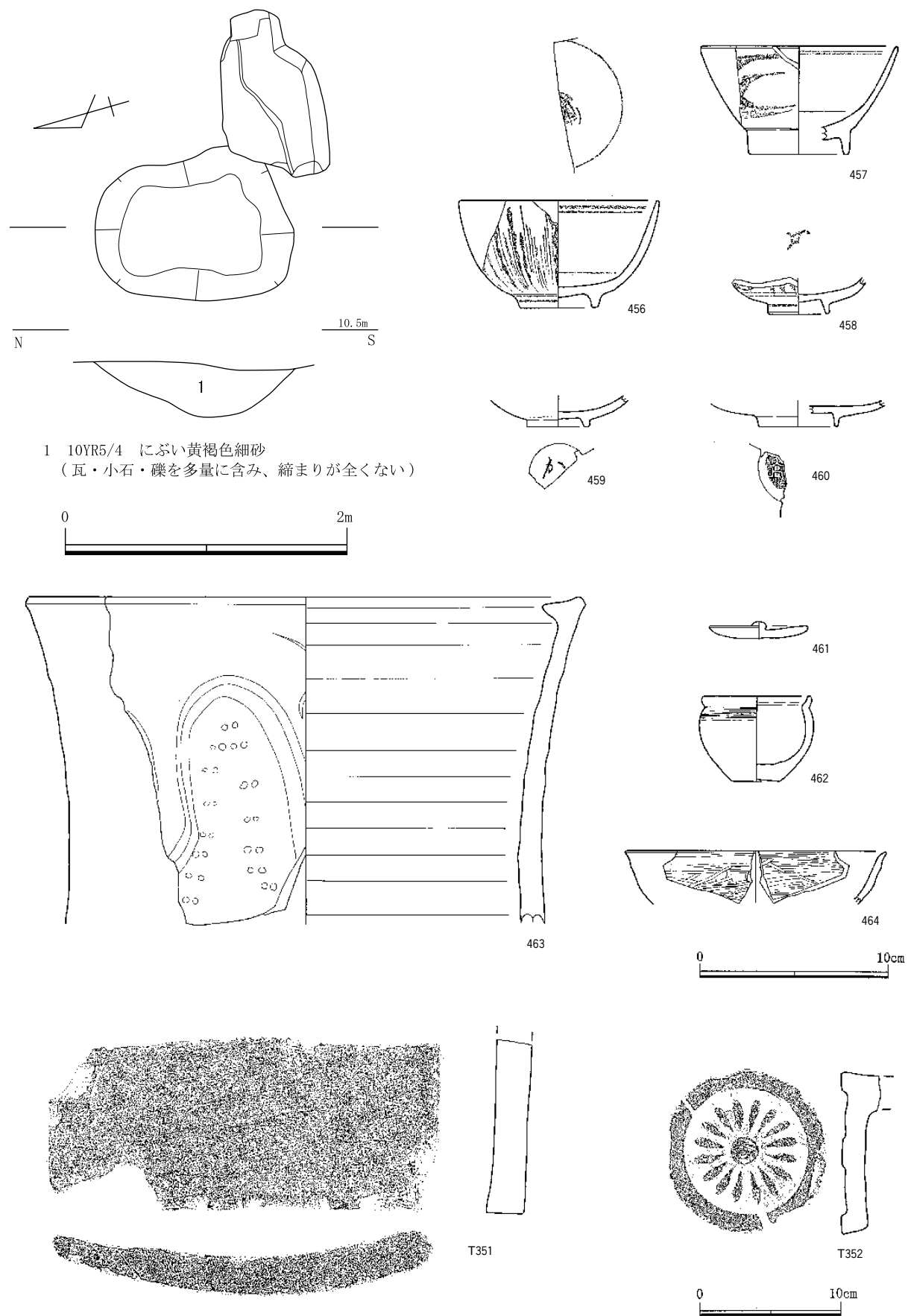
SP11 (第124・128図)

南東隅付近において検出したピットであり、規模は0.37×0.32 mを測る円形を呈する。深さは0.09 mである。埋土は褐灰色細砂である。

遺物は陶器播鉢(480)である。480は備前系陶器で、4本ないし5本単位の卸目を放射状に施す。

SP12 (第124図)

南東隅付近において検出したピットであり、規模は直径0.58 mを測る不整な円形を呈する。深さは0.06 mである。埋土は褐灰色細砂・浅黄色細砂である。遺物は出土していない。



第125図 天守地下1階SK 1平・断面図及び出土遺物実測図

S P 13 (第 124 図)

南東隅付近において検出したピットであり、規模は 0.60×0.35 mを測る不整な楕円形を呈する。深さは0.03 mである。埋土はにぶい黄褐色細砂である。遺物は出土していない。

S P 14 (第 124・128 図)

中央やや南東寄りにおいて検出したピットであり、規模は直径 0.80×0.58 mを測る楕円形を呈する。深さは0.25 mである。埋土は上層が褐灰色細砂・浅黄色細砂、下層が暗灰黄色細砂・浅黄色細砂である。

遺物は土師質土器杯(481, 482)、同皿(483)、須恵質土器杯(484)である。

481は口径10.4cmの杯で、器高は低い。482は口径14.4cmを測り、器高は高い。483は口縁端部に面を持ち、底部はナデを施す。484は内面にヘラミガキを施し、重ね焼き痕が認められる。

S P 15 (第 124 図)

南東隅において検出したピットであり、規模は直径0.45 mを測る円形を呈する。深さは0.10 mである。埋土は漆喰を含むにぶい黄色シルト質細砂である。遺物は出土していない。

S P 16 (第 124 図)

北西隅において検出したピットであり、規模は直径 0.50×0.45 mを測る不整な円形を呈する。深さは0.06 mである。埋土は灰黄色細砂である。遺物は出土していない。

S P 17 (第 124 図)

南西隅において検出したピットであり、規模は直径0.55 mを測る円形を呈する。深さは0.09 mである。埋土は漆喰を含むにぶい淡黄色シルト質細砂・浅黄色細砂である。遺物は出土していない。

S P 18 (第 124・128 図)

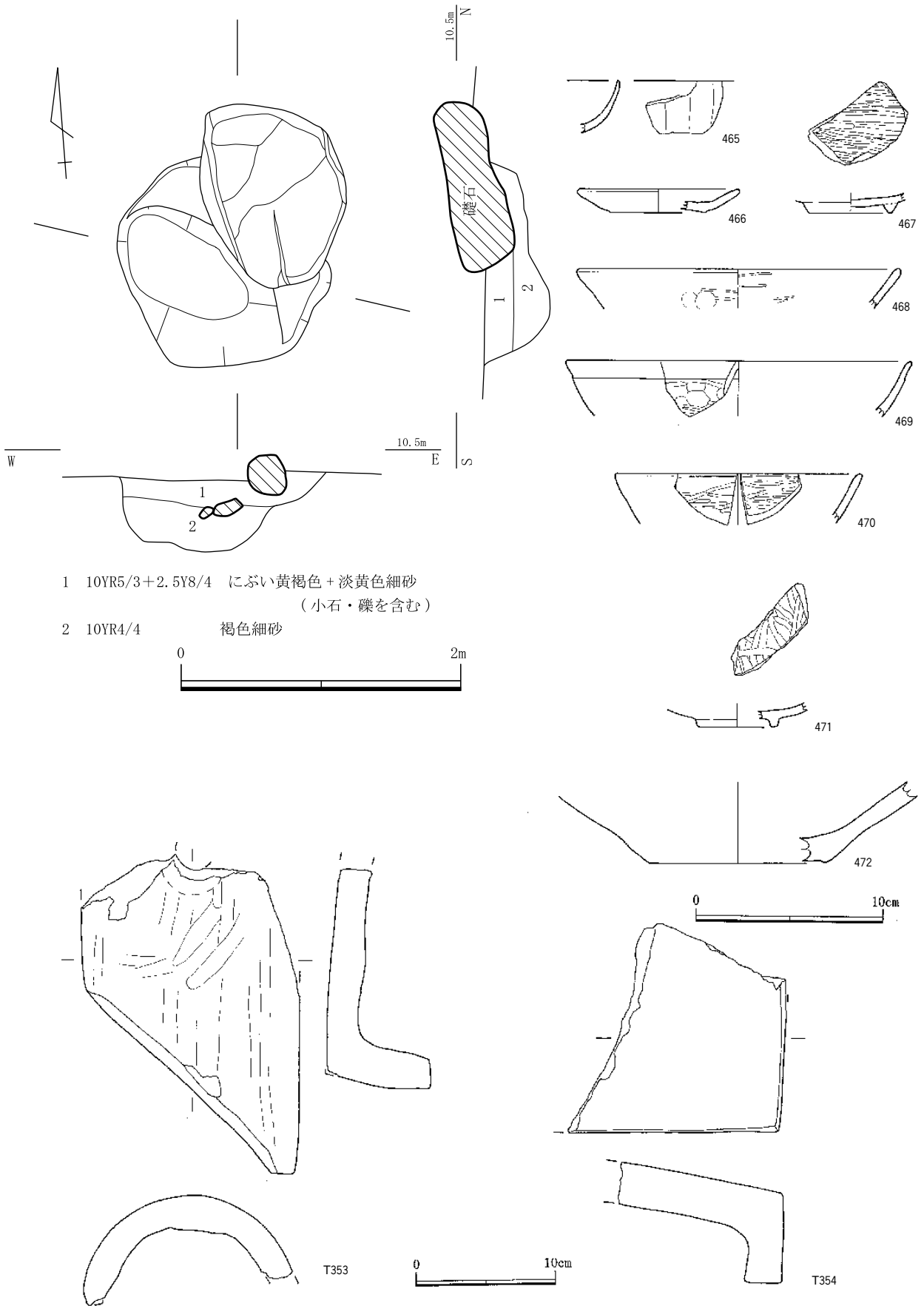
北東隅において検出したピットであり、規模は直径 1.18×0.62 mを測る楕円形を呈する。深さは0.26 mである。埋土は漆喰を含むにぶい黄色細砂である。

遺物は土師質土器杯(485, 486, 487, 489)、瓦器皿(488)、軒丸瓦(T 355)である。

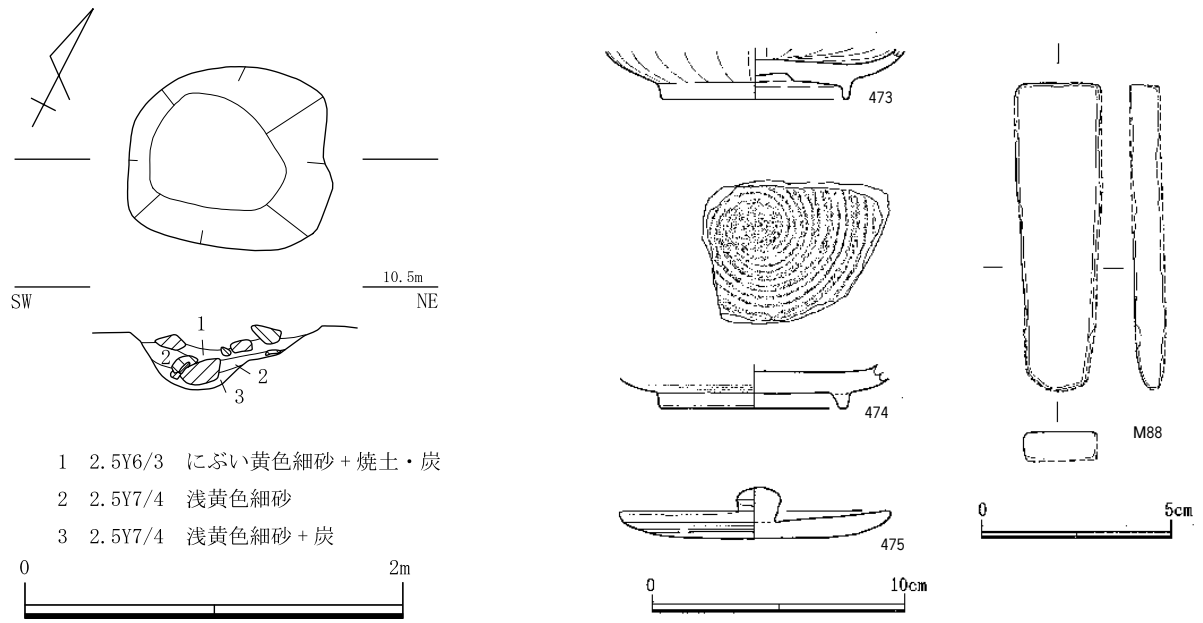
485は口径12.2cm、器高2.3cmを測る。486は底部に回転糸切り痕が認められる。487の器高は低く2.9cmを測る。488は内外面にヘラミガキを施す。489は非常に緩やかな傾斜の体部で、外面に指頭圧、内面にヘラミガキが施される。

S K 1 (第 125 図)

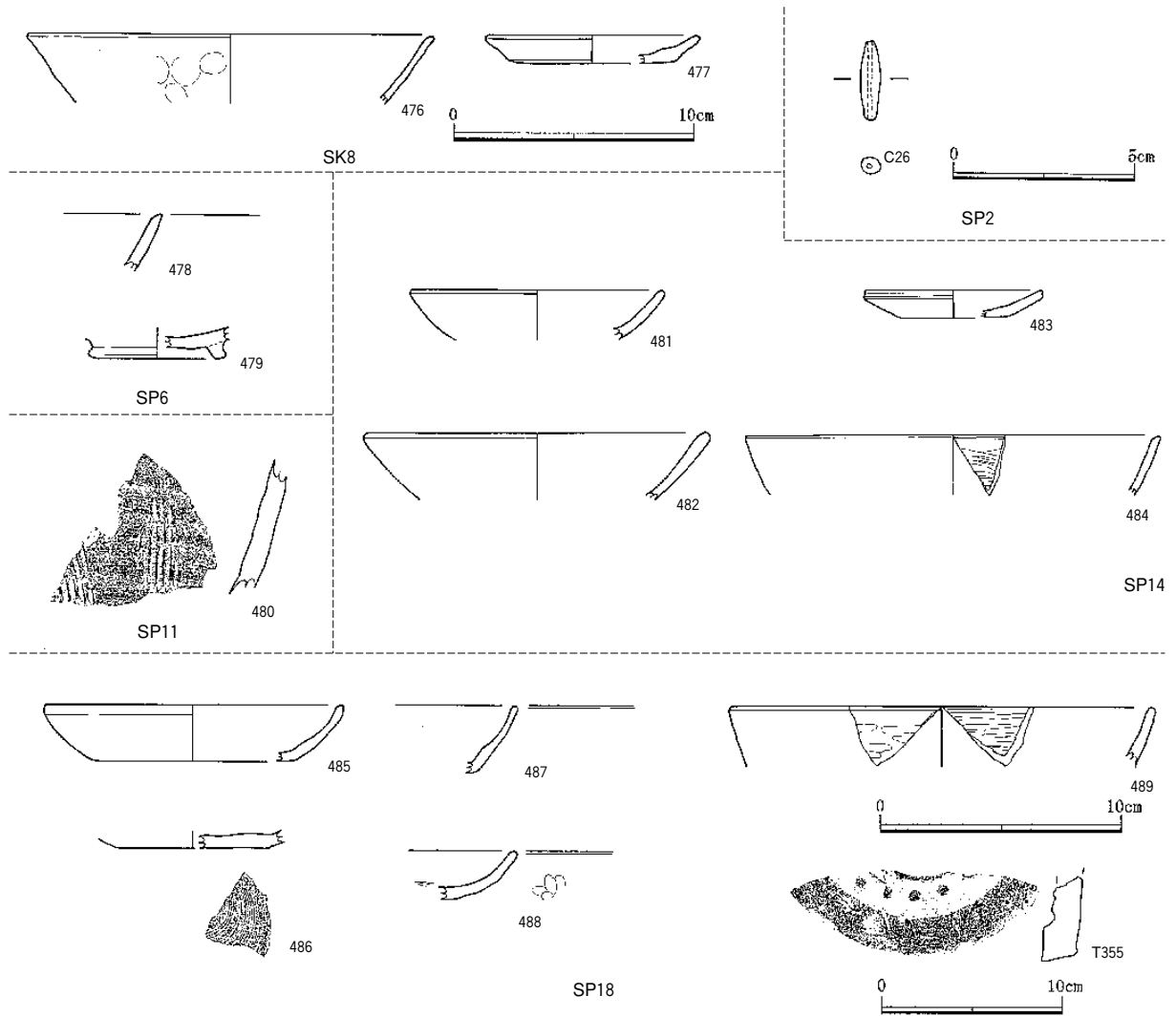
天守地下1階の床面の中央部にあるS K 2の南西側において検出した土坑であり、その位置は



第126図 天守地下1階SK2平・断面図及び出土遺物実測図



第127図 天守地下1階SK3平・断面図及び出土遺物実測図



第128図 天守地下1階SK8・SP2・6・11・14・18出土遺物実測図

玉藻廟基礎である石垣が東西方向に長軸を有する長方形に囲んだ内側の中央やや西寄りであり、A-1-13の石垣の下にあたる。平面形は楕円形を呈し、その規模は1.35×1.00 m、深さは0.40 mである。断面は船底形であり、掘り込みは緩やかな傾斜である。埋土はにぶい黄褐色細砂で、瓦・礫・小石を多量に含む。底面の最深部に蓋(461)とセットになる状態で備前焼の小壺(462)が出土した。小壺の内部には若干の砂が入っているのみであった。祭司的な性格を有する遺構であり、玉藻廟建設に際しての地鎮祭に伴う土坑と考えられる。

遺物は磁器碗(456, 457, 458)、陶器碗(459, 460)、同小壺(462)、同蓋(461)、同水鉢(463)、瓦器碗(464)、平瓦(T 351)、菊瓦(T 352)である。

456は外面に条線文、内面に圈線、見込みに昆虫文が描かれる。457はほぼ直線的な体部で、外面に草文の染付を施す。458は細長い高台を持ち、外面に朱・緑・黒色の染付があり、見込みに朱色の文を描く。

459, 460は理平焼である。459は内外面に灰白色の釉を施し、底面に「か」の墨書がある。460は細長い高台を持ち、淡黄色の釉を施し、底部に「高」の刻印がある。461は備前焼蓋の完形であり、口径は5.2cmを測る。内面に回転ヘラナデが施され無釉である。462は備前焼小壺の完形であり、口径5.8cm、器高2.5cmを測る。体部に短い口縁が付く。肩部に6条の沈線が巡る。463は瀬戸美濃系の水鉢であり、外面に流水陰刻文が施される。464は外面に指頭圧後ヘラミガキ、内面に丁寧なヘラミガキが施される。

T 351は凸面に粗いナデが施され、下端に「○」の刻印がある。T 352は、房および花卉を陽刻で表現する。

SK2 (第126図)

天守地下1階の床面において「田」の字形に配置された礎石の中央にある礎石と重なる位置にある土坑である。この礎石はやや中心から位置がずれ、他の礎石に比べ上面の高さが高く、水平になっていないことから、この礎石は本来中心にあったが天守解体後に移動されたと考えられる。SK2はこの礎石の抜き取り痕である。平面形は不整な円形を呈し、規模は1.55×1.50 m、深さは0.53 mを測る。掘り込みは東側と北側に段を有する。土坑の最深部は掘り込みの西側に片寄っており、この位置に中心の礎石が置かれていたと考えられる。埋土は上下2層に分層でき、上層は小石・礫を含むにぶい黄褐色細砂・淡黄色細砂、下層は褐色細砂で、共に全く締まっていない。

遺物は磁器皿(465)、土師質土器小皿(466)、同碗(467～469)、瓦器碗(470, 471)須恵質土器甕(472)、隅切丸瓦(T 353)、熨斗瓦(T 354)である。

465は型打成形の輪花皿である。466は口径8.5cmの小皿で、底部はナデが施される。467, 468は内面黒色の碗であり、467は断面三角形の高台を持ち内面にヘラミガキが施される。468は直線的な体部で、外面に指頭圧後にヘラミガキ、内面にナデ後にヘラミガキが施される。469は体部と口縁部の境に若干の稜を持ち、外面に指頭圧後にヘラミガキ、内面に丁寧なヘラミガキが施される。470は内外面にヘラミガキが施され、471は断面四角形の高台で内面にヘラミガキが施

される。472は底径9.4cmの甕であり、外面に回転ナデ、内面にナデが施される。

T 353は釘穴が1個残る隅切丸瓦であり、凸面はヘラナデ、ミガキ、凹面はゴザ目、ヘラナデが残存する。T 354は熨斗瓦の一部であり、非常に厚い。全面にナデが施される。

SK3 (第127図)

北西隅において検出した土坑で、天守の内部構造を解明する重要な遺構である掘立柱跡の1を切り込んでいる。平面形は楕円形を呈し、規模は1.10×0.90m、深さは0.36mを測り、底面は掘り込みの西側に片寄っている。土坑の上層では大小の石が密集した状態で検出され、石の周囲では焼土や炭が出土した。この土坑は天守解体後に掘り込まれた遺構であり、焼土や炭があることからカマドとして使用されたと考えられる。

遺物は磁器皿(473)、陶器椀(474)、同蓋(475)、楔(M 88)である。

473は型打成形の輪花皿であり、蛇の目凹形高台である。474は肥前系椀であり、高い高台を持ち体部内外面には褐色釉の地に白土による渦巻状の装飾を施す。475は備前系の蓋であり、中央に宝珠状の摘みを有する。外面は暗赤褐色の釉がかかり、内面は回転ナデと回転ヘラケズリが施される。

M 88は全長8.1cm、最大幅2.2cm、厚さ0.7cmを測る。

SK8 (第124・128図)

北東隅付近において検出した土坑であり、平面形は不整な長方形を呈する。規模は長辺1.79m、短辺0.75mを測り、深さは非常に浅く2～5cmである。平面形や規模から土坑とするには根拠が弱い、土器の出土があることから土坑とする。埋土は木材の破片を含む黄灰色細砂である。

遺物は瓦器椀(476)、土師質土器小皿(477)である。476はほぼ直線的な体部であり、外面に指頭圧、内面にヘラミガキが施される。477は短い体部で、底部はナデが施される。

18基の小規模なピットの平面形は円形、不整な円形、楕円形、不整な三角形であり、直径は0.22～1.18mを測り、深さが0.25mであるSP 14・18を除くその他の柱穴は非常に浅く2～12cmの深さである。これらの穴は平面形や規模が不統一であり、検出された位置に規則性は見当たらず、柱穴としては考えにくくその性格は不明である。

SK1は備前焼の小壺を出土しており、玉藻廟建設に際しての地鎮祭に伴う土坑であると考えられる。SK2は天守地下1階の床面において「田」の字形に配置された礎石の中央にある礎石と重なる位置にある土坑であり、この礎石の抜き取り痕である。SK3は天守解体後に掘り込まれた遺構であり、大小の石が密集した状態で検出され、石の周囲には焼土や炭があることからカマドとして使用されたと考えられる。

これらの穴・土坑は、天守が取り壊された明治17年から玉藻廟が建設された明治35年の間に掘り込まれた遺構であると考えられる。